

# 尻並遺跡

—那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査—

2003年(平成15) 3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

# 例　言

- 1 本報告書は、那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴い平成13年度に実施した、尻並遺跡の埋蔵文化財発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2 発掘調査および資料整理は、沖縄総合事務局より依頼を受け沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 出土遺物の同定及び資料整理にあたってのご指導は下記の諸先生方によるものであります。記して深謝いたします。

陶磁器 ..... 手塚 直樹（青山学院大学教授）  
〃〃 ..... 大橋 康二（佐賀県立九州陶磁文化館副館長）  
石器・石製品 ..... 神谷 厚昭（沖縄県立真和志高等学校教諭）  
鍛冶関連遺物 ..... 大澤 正巳 ((株)九州テクノリサーチ・TAC センター顧問)  
脊椎動物遺体 ..... 金子 浩昌（東京国立博物館研究員）  
貝類 ..... 名和 純（湯の生態史研究会会員）  
人骨 ..... 土肥 直美（琉球大学助教授）、譜久嶺忠彦（琉球大学文部科学技官）
- 4 本書に掲載した地図は、国土地理院の1/25,000と1/2,500地形図を使用した。
- 5 遺構・遺物実測の縮尺は、基本的に1/40・1/3に統一した。
- 6 掲載した裁判所の古写真は、司法大臣官房会計課発行の『裁判所構成法実施五十年記念 司法省及び裁判所廳舍寫眞帖』1929年から転載させていただいた。また裁判所の間取り図は、司法大臣官房会計課発行の『裁判所構成法実施五十年記念 司法省及び裁判所平面圖集』1931年に掲載された間取り図を修正・トレースしたものである。両資料は沖縄県立公文書館に保管されている。
- 7 遺物の色調については、基本的に『新版標準色帳24版』（小山忠史、竹原秀雄 2002年）によった。
- 8 本報告書の編集は伊集ゆきの他の協力を得て羽方誠が行った。各節の執筆は以下のとおりである。

羽方 誠 ..... 第I章、第II章、第III章、第IV章、第V章第2節、第5節、第6節、第9節  
第10節、第11節、第13~18節、第21~23節、第25~28節、第29節-1、第VI章  
山本 正昭 ..... 第V章第1節、第3節、第4節、第7節、第8節、第24節  
瀬戸 哲也 ..... 第V章第12節、第19節、第20節  
金子 浩昌 ..... 第V章第29節-2  
譜久嶺忠彦 ..... 第V章第30節
- 9 本書に掲載された出土遺物の写真撮影は宮崎典子・光嶋香が行った。
- 10 発掘調査で得られた出土品、図面・写真等の記録は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

# 目 次

卷首図版

序

例言

報告書抄録

第Ⅰ章 調査に至る経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第Ⅱ章 位置と環境	4
第Ⅲ章 調査経過	4
第Ⅳ章 層序と遺構	8
第1節 層序	8
第2節 遺構	8
第Ⅴ章 遺物	17
第1節 青磁	17
第2節 白磁	21
第3節 染付	22
第4節 鉄釉染付	26
第5節 瑠璃釉	26
第6節 翡翠釉・三彩	26
第7節 宜興窯	26
第8節 色絵	26
第9節 黒釉陶器	26
第10節 褐釉陶器	28
1. 中国産褐釉陶器	28
2. タイ産褐釉陶器	28
3. ミャンマー産褐釉陶器	28
第11節 タイ産炻器	28
第12節 本土産陶磁器	33
第13節 沖縄産施釉陶器	40
第14節 沖縄産無釉陶器	51
第15節 陶質土器	60
第16節 瓦質土器	64
第17節 カムイヤキ	64
第18節 土器	64
第19節 土製品	81
第20節 円盤状製品	82
第21節 煙管	84
第22節 骨製品	85
第23節 簪	86
第24節 金属製品	87
第25節 石器・石製品	89
第26節 瓦	91
第27節 塚	91
第28節 鍛冶関連遺物	94
1. 羽口	94
2. 燒土	94
3. 埋堀	94
4. 用途不明	94
5. 鉄滓	94
6. 鉄鍋等	94
第29節 自然遺物	101
1. 貝類	101
2. 脊椎動物遺体	103
第30節 人骨	116
第VI章 結語	125

## 図 目 次

第 1 図	沖縄本島の位置	2
第 2 図	尻並遺跡の位置	3
第 3 図	土層図	5
第 4 図	平面図	6
第 5 図	初代那覇地方裁判所平良支部間取図	7
第 6 図	初代那覇地方裁判所平良支部遺構図	7
第 7 図	土坑墓1・2	9
第 8 図	SK-1・2	10
第 9 図	SK-4・5	12
第 10 図	SK-14~17、SP-11・14・16~18・20・21	13
第 11 図	SW-1	14
第 12 図	青磁（1）	19
第 13 図	青磁（2）	20
第 14 図	白磁	22
第 15 図	染付（1）	24
第 16 図	染付（2）	25
第 17 図	鉄釉染付・瑠璃釉・翡翠釉・三彩・宜興窯・色絵・黒釉陶器	27
第 18 図	褐釉陶器1（中国産）	31
第 19 図	褐釉陶器2（中国・タイ・ミャンマー産）・タイ産炻器	32
第 20 図	本土産陶磁器（1）	36
第 21 図	本土産陶磁器（2）	37
第 22 図	本土産陶磁器（3）	38
第 23 図	本土産陶磁器（4）	39
第 24 図	沖縄産施釉陶器（1）	45
第 25 図	沖縄産施釉陶器（2）	46
第 26 図	沖縄産施釉陶器（3）	47
第 27 図	沖縄産施釉陶器（4）	48
第 28 図	沖縄産施釉陶器（5）	49
第 29 図	沖縄産施釉陶器（6）	50
第 30 図	沖縄産無釉陶器（1）	55
第 31 図	沖縄産無釉陶器（2）	56
第 32 図	沖縄産無釉陶器（3）	57
第 33 図	沖縄産無釉陶器（4）	58
第 34 図	沖縄産無釉陶器（5）	59
第 35 図	沖縄産無釉陶器（6）	60
第 36 図	陶質土器（1）	62
第 37 図	陶質土器（2）・瓦質土器・カムイヤキ	63
第 38 図	土器（1）	71
第 39 図	土器（2）	72
第 40 図	土器（3）	73
第 41 図	土器（4）	74
第 42 図	土器（5）	75
第 43 図	土器（6）	76
第 44 図	土器（7）	77
第 45 図	土器（8）	78
第 46 図	土器（9）	79
第 47 図	土器（10）	80
第 48 図	土製品	81
第 49 図	円盤状製品	83
第 50 図	煙管	84
第 51 図	骨製品	85
第 52 図	簪	86
第 53 図	金属製品	88
第 54 図	石器・石製品（1）	89
第 55 図	石器・石製品（2）	90
第 56 図	瓦（1）	92
第 57 図	瓦（2）・塼	93
第 58 図	鍛冶関連遺物1（羽口・埴堀・焼土）	97
第 59 図	鍛冶関連遺物2（焼土・用途不明）	98
第 60 図	鍛冶関連遺物3（鉄滓）	99
第 61 図	鍛冶関連遺物4（鉄鍋等）	100
第 62 図	切痕をもつ骨	115
第 63 図	遺存部位（全身・永久歯）	117
第 64 図	正中後頭弧長/正中頭頂弧長	117
第 65 図	西南日本人を基準とした偏差折線（上肢骨）	119
第 66 図	推定身長の比較	120
第 67 図	西南日本人を基準とした偏差折線（下肢骨）	120

## 表 目 次

第 1 表	遺構一覧	15
第 2 表	遺物出土状況	16
第 3 表	青磁出土状況	17
第 4 表	青磁観察一覧	17
第 5 表	白磁出土状況	21
第 6 表	白磁観察一覧	21
第 7 表	染付出土状況	22
第 8 表	染付観察一覧	23
第 9 表	鉄釉染付・瑠璃釉・翡翠釉・三彩・宜興窯・色絵観察一覧	26
第 10 表	褐釉陶器出土状況	29
第 11 表	褐釉陶器観察一覧	29
第 12 表	本土産陶磁器出土状況	34
第 13 表	本土産陶磁器観察一覧	35
第 14 表	沖縄産施釉陶器観察一覧	40
第 15 表	沖縄産施釉陶器出土状況	44
第 16 表	沖縄産無釉陶器観察一覧	51
第 17 表	沖縄産無釉陶器出土状況	54
第 18 表	陶質土器出土状況	60
第 19 表	陶質土器観察一覧	61
第 20 表	カムイヤキ出土状況	64
第 21 表	土器観察一覧	65
第 22 表	土器出土状況	70
第 23 表	円盤状製品出土状況	82
第 24 表	円盤状製品観察一覧	82
第 25 表	煙管出土状況	84
第 26 表	煙管観察一覧	84
第 27 表	骨製品観察一覧	85
第 28 表	簪出土状況	86

第 29 表	簪観察一覧	86
第 30 表	鉄釘出土状況	87
第 31 表	石器・石製品出土状況	89
第 32 表	石器・石製品観察一覧	89
第 33 表	瓦・埠出土状況	91
第 34 表	瓦観察一覧	91
第 35 表	鍛冶関連遺物出土状況	94
第 36 表	鍛冶関連遺物観察一覧1・2	95
第 37 表	貝類出土状況（1）巻貝	102
第 38 表	貝類出土状況（2）二枚貝	102
第 39 表	カニ出土一覧	109
第 40 表	魚類出土量	109
第 41 表	カエル出土一覧	109
第 42 表	リクガメ出土一覧	109
第 43 表	ウミガメ出土一覧	109
第 44 表	アホウドリ出土一覧	109
第 45 表	ミズナギドリ類出土一覧	109
第 46 表	トリ出土一覧	109
第 47 表	ネズミ出土一覧	109
第 48 表	ジュゴン出土一覧	109
第 49 表	ニワトリ出土量	110
第 50 表	イヌ出土量	110
第 51 表	ウシ出土量	113
第 52 表	ウシ歯出土一覧	113
第 53 表	ブタ出土量	114
第 54 表	ブタ歯出土一覧	114
第 55 表	ウマ出土一覧	111
第 56 表	ネコ出土一覧	111
第 57 表	イヌ歯出土一覧	111
第 58 表	ウシ or ウマ出土一覧	111
第 59 表	ヤギ出土一覧	111
第 60 表	ウマ計測一覧	112
第 61 表	ウシ計測一覧	112
第 62 表	ブタ計測一覧	112
第 63 表	出土人骨の構成	116
第 64 表	年齢区分	116
第 65 表	比較集団	116
第 66 表	頭蓋骨計測値	117
第 67 表	上肢骨計測値	118
第 68 表	下肢骨計測値	119
図版 11	褐釉陶器 2 (中国・タイ・ミャンマー産)・ タイ産炻器	135
図版 12	本土産陶磁器 (1)	136
図版 13	本土産陶磁器 (2)	137
図版 14	本土産陶磁器 (3)	138
図版 15	本土産陶磁器 (4)	139
図版 16	沖縄産施釉陶器 (1)	140
図版 17	沖縄産施釉陶器 (2)	141
図版 18	沖縄産施釉陶器 (3)	142
図版 19	沖縄産施釉陶器 (4)	143
図版 20	沖縄産施釉陶器 (5)	144
図版 21	沖縄産施釉陶器 (6)	145
図版 22	沖縄産無釉陶器 (1)	146
図版 23	沖縄産無釉陶器 (2)	147
図版 24	沖縄産無釉陶器 (3)	148
図版 25	沖縄産無釉陶器 (4)	149
図版 26	陶質土器	150
図版 27	瓦質土器	150
図版 28	土器 (1)	151
図版 29	土器 (2)	152
図版 30	土器 (3)	153
図版 31	土器 (4)	154
図版 32	土器 (5)	155
図版 33	土製品	156
図版 34	骨製品	156
図版 35	円盤状製品	157
図版 36	煙管	158
図版 37	カムィヤキ	158
図版 38	簪	158
図版 39	金属製品	159
図版 40	石器・石製品	160
図版 41	瓦・埠	161
図版 42	鍛冶関連遺物 1 (羽口・坩堝・焼土)	162
図版 43	鍛冶関連遺物 2 (焼土・用途不明)	163
図版 44	鍛冶関連遺物 3 (鉄滓・鉄鍋等)	164
図版 45	貝 (1) 巷貝	165
図版 46	貝 (2) 上: 巷貝 下: 二枚貝	166
図版 47	貝 (3) 二枚貝	167
図版 48	骨 (1) サカナ・ウミガメ・ミズナギドリ類・ アホウドリ・ニワトリ	168
図版 49	骨 (2) イヌ	169
図版 50	骨 (3) ネコ・ジュゴン	170
図版 51	骨 (4) ウマ	171
図版 52	骨 (5) ウシ	172
図版 53	骨 (6) ウシ	173
図版 54	骨 (7) ヤギ・ブタ	174
図版 55	骨 (8) ブタ	175
図版 56	骨 (9) ブタ	176
図版 57	切痕をもつ骨	177
図版 58	土坑墓 1 成年男性 (頭蓋)	122
図版 59	土坑墓 1 成年男性 (体肢)	123
図版 60	土坑墓 2 幼児	124
図版 61	外耳道骨腫	124

## 図版目次

図版 1	裁判所、調査区遠景、遺構検出状況	126
図版 2	遺構検出状況 (1)	127
図版 3	遺構検出状況 (2)	128
図版 4	遺構検出状況 (3)	129
図版 5	青磁 (1)	130
図版 6	青磁 (2)	131
図版 7	白磁	131
図版 8	染付	132
図版 9	鉄釉染付・瑠璃釉・翡翠釉・三彩・宜興窯・ 色絵・黒釉陶器	133
図版 10	褐釉陶器 1 (中国産)	134

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しなんいせき							
書 名	尻並遺跡							
副 書 名	那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査							
卷 次								
シ リ 一 ズ 名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シ リ 一 ズ 番 号	第15集							
編 著 者 名	羽方誠、山本正昭、瀬戸哲也、金子浩昌、譜久嶺忠彦							
発 行 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所 在 地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193番地の7							
発 行 年 月 日	2003年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	°	'	°	'			
しなんいせき 尻並遺跡	おきなわけん ひららし 沖縄県 平良市 あざにしづと 字西里345	47206		24° 48' 04"	125° 17' 01"	平成13年 8月1日 ～ 平成13年 11月16日	500m <sup>2</sup>	那覇地方裁判 所平良支部建 て替え
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
尻並遺跡	集落跡	近世 近代	土坑墓 炉跡 柱跡 土坑 石組み遺構	青磁、白磁、染付、色絵、瑠璃釉、翡翠釉、 褐釉陶器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、 土器、陶質・瓦質土器、石製品、金属製品、 簪、煙管、骨製品、土製品、貝製品、貝類、 脊椎動物遺体、円盤状製品、瓦、壇、人骨、 鍛冶関連遺物	炉跡・鉄滓・羽 口・鉄鍋などの 鍛冶関連遺構・ 遺物			

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯

## 第1節 調査に至る経緯

今回の発掘調査は那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴うものである。平成13年6月に沖縄県教育委員会が行った試掘調査で、遺跡が存在することがわかり、建物建て替え工事の前に発掘調査が必要であると判断された。そこで沖縄開発庁総合事務局からの委託を受けた沖縄県教育委員会が主体となり、平成13年8月1日より発掘調査を開始することとなった。

## 第2節 調査体制

発掘調査は平成13年度に、資料整理は平成14年度に沖縄県立埋蔵文化財センターが行った。その体制は以下の通りである（職名等は当時）。

### 平成13年度（発掘調査・資料整理）

事業主体者	沖縄県教育委員会	教 育 長	津嘉山朝祥
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所 長	知念 勇
事業総括	同 上	副所長兼庶務課長	知念 廣義
事業事務	同 上	副所長兼庶務課長	知念 廣義
	同 上	庶務課 主事	城間 千賀
	同 上	庶務課 主事	上原 浩
事業実施	同 上	調 査 課 長	島袋 洋
	同 上	調査課 専門員	羽方 誠
	同 上	調査課 嘴託員	藤崎 京

### 発掘調査作業員

伊良皆安雄、奥浜元弘、国仲照子、下地キヨ、下地恵喜、下地玄忠、下地美代、下地ヨシ、砂川長孝、砂川春、武島真規子、仲原光雄、前里芳雄

### 資料整理作業員

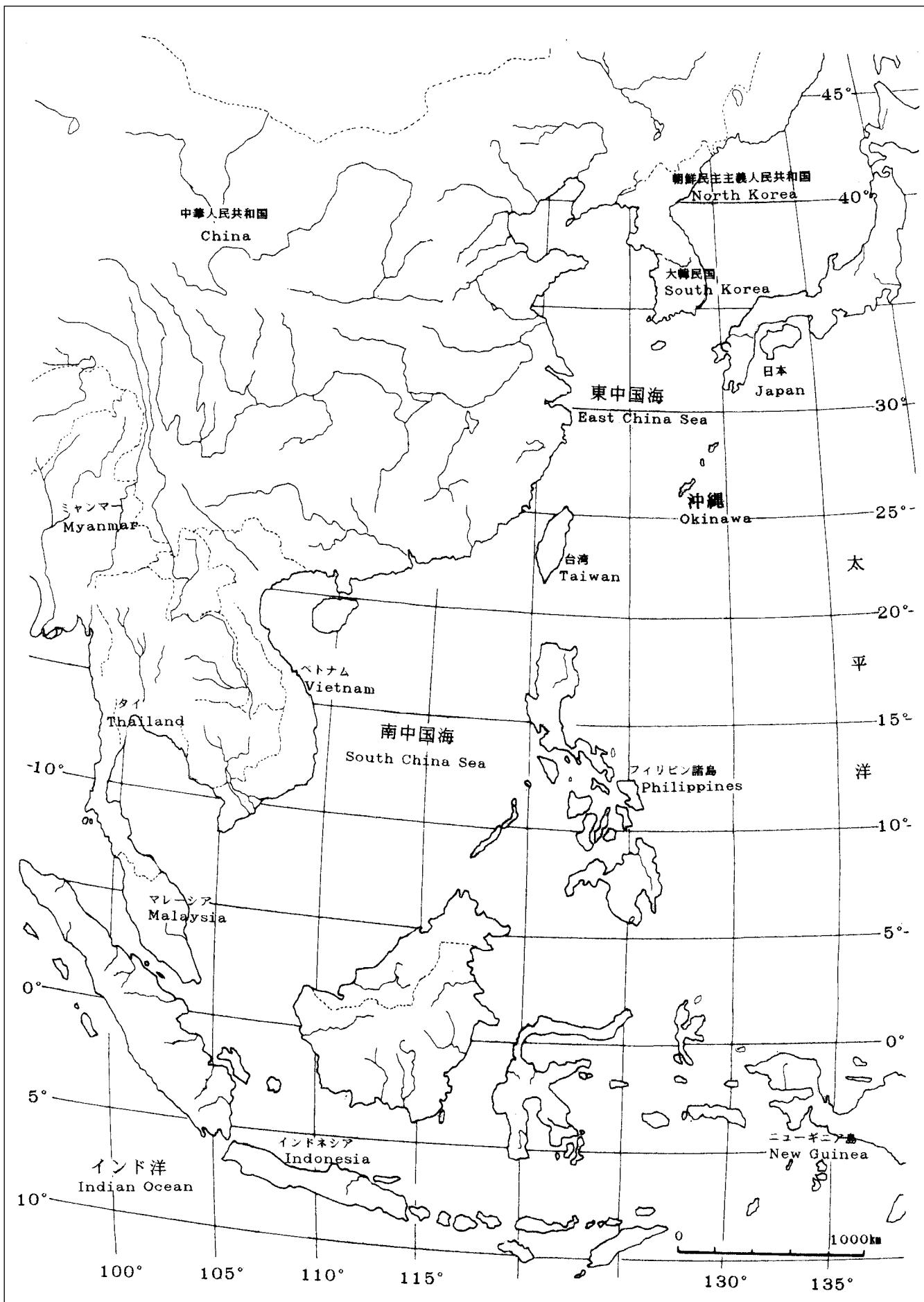
瑞慶覧尚美、平良貴子、高良三千代

### 発掘調査協力（職名等は当時のもの）

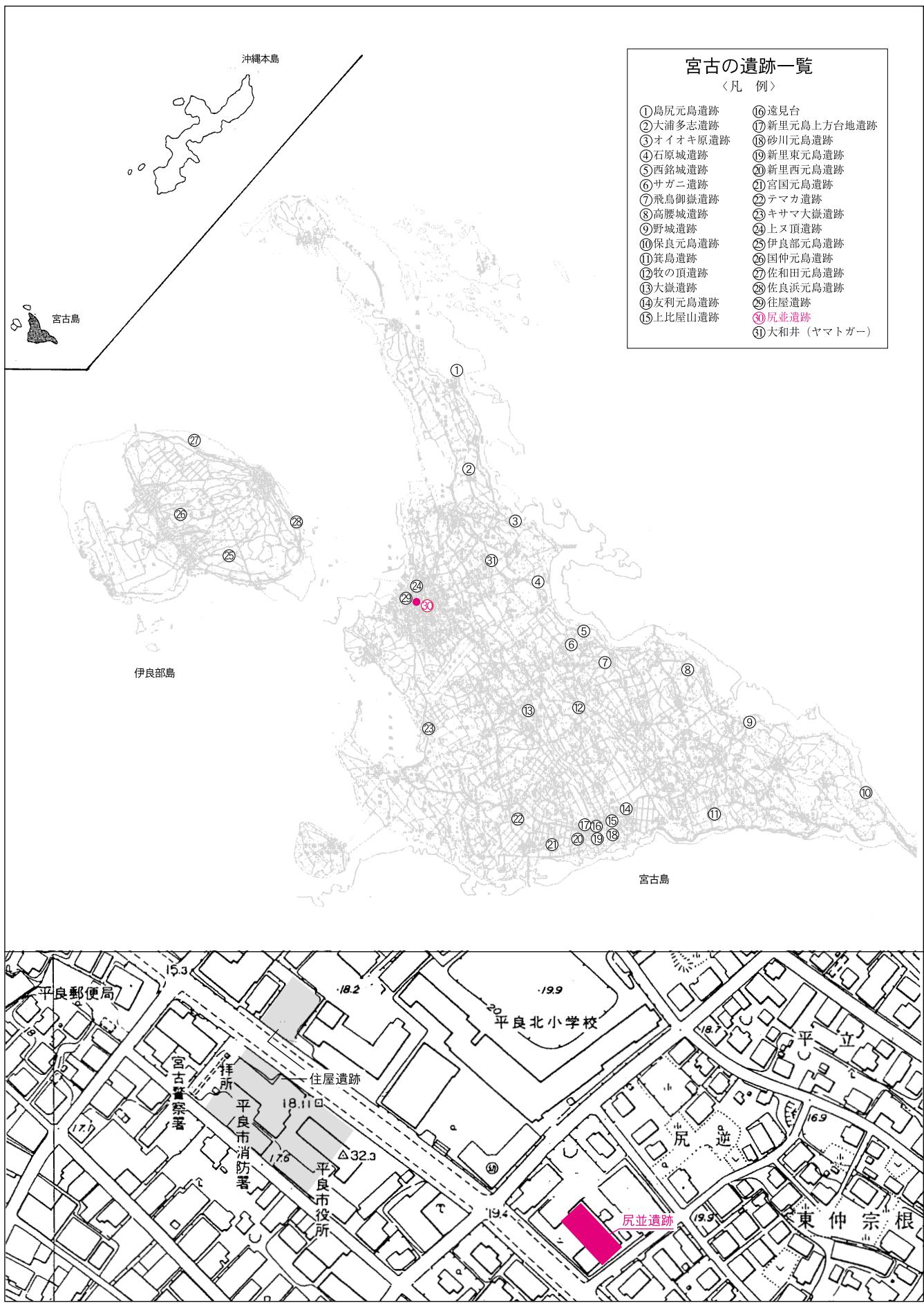
小渡義雄	（宮古拘置支所長）	友利勝人	（株式会社翔南建設）
佐久間和也	（那覇地方裁判所平良支部）	玉城清行	（那覇地方裁判所）
喜納泰興	（平良市教育委員会）	高江洲恵伝	（上野村教育委員会）
和田拓也	（平良市教育委員会）		
宮城ゆりか	（平良市教育委員会）		

### 平成14年度（資料整理）

事業主体者	沖縄県教育委員会	教 育 長	津嘉山朝祥
事業所管	沖縄県立埋蔵文化財センター	所 長	安里 瞬淳
事業総括	同 上	副所長兼庶務課長	安富祖英紀
事業事務	同 上	副所長兼庶務課長	安富祖英紀
	同 上	庶務課主事	城間 千賀
	同 上	庶務課主任	西江 幸枝
事業実施	同 上	調 査 課 長	盛本 熱
	同 上	充指導主事	西銘 章



第1図 沖縄本島の位置



第2図 尻並遺跡の位置

事業実施	沖縄県立埋蔵文化財センター	専門員	羽方 誠
同上		同上	山本 正昭
同上		同上	瀬戸 哲也
同上		嘱託員	玉城 照美
同上		嘱託員	仲間 留美

#### 資料整理作業員・協力者

新垣利津代、池原直美、伊集ゆきの、上原美穂子、大村由美子、我那覇悠子、金武綾子、金城恵子、金城敬子、久保田有美、光嶋香、国場のりえ、米須あさみ、崎原美智子、瑞慶覧尚美、高良三千代、玉城恵美利、玉城照美、平良貴子、玉寄智恵子、友利映子、仲宗根めぐみ、鳩間玲奈、比嘉公子、比嘉孝子、比嘉登美子、比嘉優子、又吉純子、松浦美果、宮崎典子、赤嶺雅子、譜久村泰子、石嶺敏子

#### 調査指導（役職名は当時のもの。）

砂辺和正（平良市教育委員会）	嵩原建二（沖縄県立博物館）	金城亀信（沖縄県教育庁文化課）
新里孝和（琉球大学教授）	桃原茂夫（沖縄県立博物館）	當眞嗣一（沖縄県立博物館長）
仲座久宜（沖縄県立博物館）	宮城勉（沖縄県立博物館）	四本延宏（伊仙町教育委員会）

## 第Ⅱ章 位置と環境

尻並遺跡は沖縄県平良市字西里 345 番地にある。平良市がある宮古島は沖縄本島から南西に約 300 km のところにあり、面積は 159 km<sup>2</sup> である。周辺には池間島・大神島・来間島・伊良部島・下地島、やや離れて多良間島がある。

宮古島はほとんどが隆起珊瑚礁の琉球石灰岩からなり、砂岩と粘板岩が重なり合って地層を形成している。地形は平坦で、標高 108m の野原岳以外に山地はないが、北西—南東方向に走る微高地が数本ある。

尻並遺跡は平良港の南東約 500m、標高約 20m の国道 390 号線沿いにある。周囲には平良市役所・北小学校等があり、人・車の往来が多い所である。この一帯の地形は琉球石灰岩で形成され、その上を赤土が覆っている。

尻並遺跡のすぐ北東には 15 世紀以降に栄えた住屋遺跡がある。ここには 1629 年に在番仮屋が建てられ、1879 年の廃藩置県までの 250 年間、宮古の中心的な地域であった。住屋遺跡からは竪穴式住居跡・墓・炉跡や国内・外産の陶磁器・獸骨等の膨大な量の出土品があり、中心的な土地であったことを裏付けている。

尻並遺跡からも住屋遺跡と同じく多くの出土品があり、住屋遺跡とともに栄えた遺跡であったと考えられる。ここには 1911 (明治 32) 年 11 月に那覇地方裁判所平良支部が設置された。戦後の 1946 (昭和 21) 年に 2 代目の裁判所が建てられ、その後は周囲に検察庁・拘置所等が設置され現在に至っている。

## 第Ⅲ章 調査経過

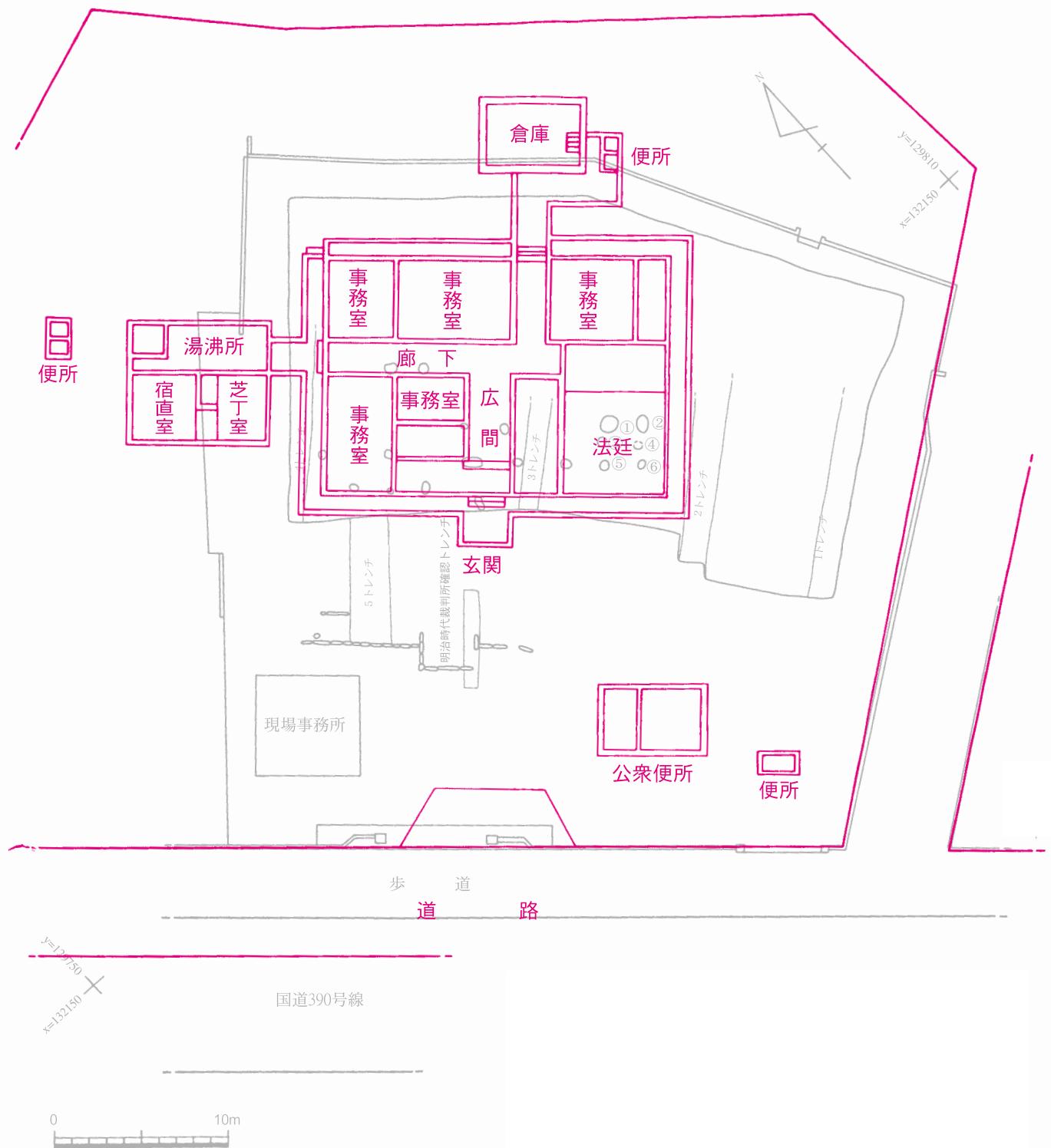
尻並遺跡の調査は平成 13 年 8 月 1 日から開始し、平成 13 年 11 月 16 日に終了した。総面積約 500 m<sup>2</sup> である。

調査区のグリットは一辺が 5m の正方形で、調査区北隅を起点に南西に向かってひらがなの 50 音、北東に向かって算用数字を割り当てた。

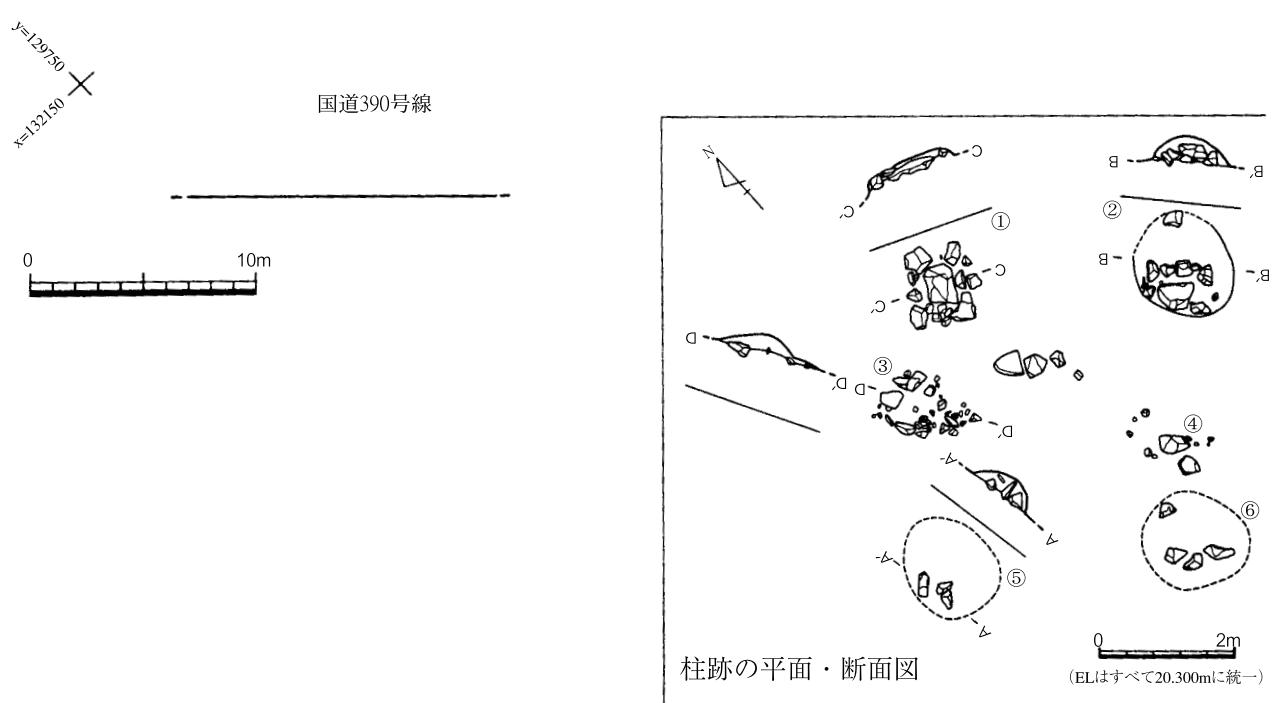
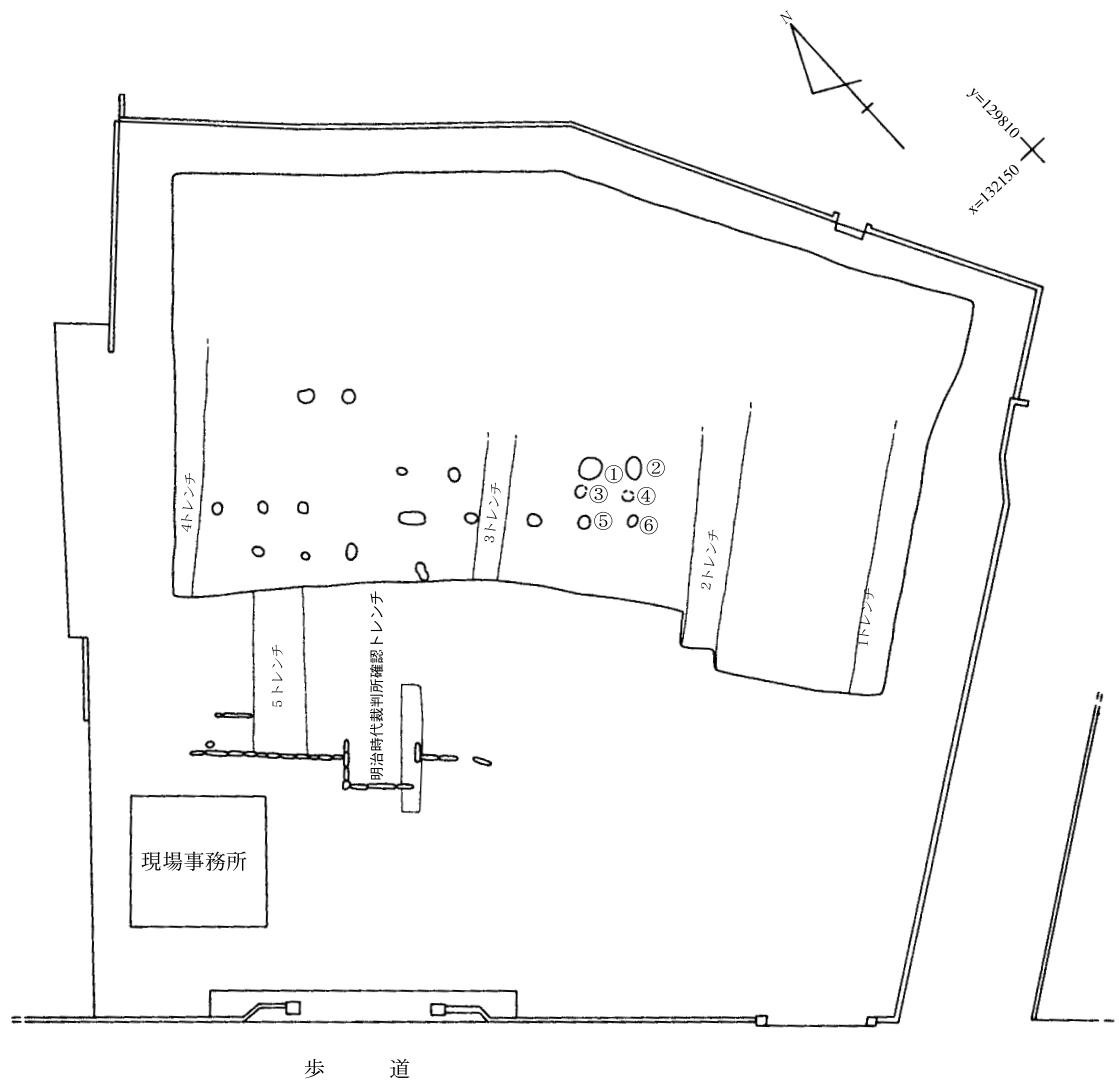
調査区一帯は旧裁判所建物を取り壊した後、土が入れられ平坦にならされていた。そこでまず、バックホウでこの土を除去することから開始した。土を除去した後、赤瓦および 40 cm 前後の琉球石灰岩を大量に含む黒い土が現れた。この赤瓦は明治 32 年 11 月に建てられた、初代裁判所の屋根に葺かれていた瓦と考えられた。また大量の石灰岩は、昭和 21 年 3 月に 2 代目裁判所を建てるときの造成の跡と考えられた。この赤瓦・石灰岩を含んだ土をバックホウで除去しつつ、初代裁判所の柱跡検出をおこなった。

初代裁判所遺構調査の後、赤瓦・石灰岩を含まない黒色土を人力で掘り下げ、地山面で遺構の検出作業をおこなった。

発掘調査で得た遺物・図面等は調査終了後に沖縄県立埋蔵文化財センターに持ち帰り、平成 14 年度から本格的な資料整理を実施した。調査で得られた遺物は遺物収納コンテナに換算して 195 箱に及んだ。遺物の洗浄・ナン



第5図 初代那霸地方裁判所平良支部間取図



第6図 初代那覇地方裁判所平良支部遺構図

バーリング・分類・集計・実測・撮影・トレース・版組等を行いこの報告書を刊行した。

## 第IV章 層序と遺構

### 第1節 層序

尻並遺跡で確認できた層序は、大きく分けてI層、II層、III層、地山の合計4層である。(第3図参照)

I層とは、初代(明治32年)・2代目(昭和21年)の裁判所を造った時及び取り壊した時の造成層や客土である。浅い所で10cm、北東側の深いところは1.2mである。主に赤土混じりの黒褐色土からなり、地山の赤土や砂・コンクリート片・赤瓦・40cm前後の琉球石灰岩などが多く混じっている。

II層は主に黒褐色土から成り、遺物を多量に含む。

III層は主に黒褐色土から成り、地山の赤土・遺物を少量含む。第2トレンチ周辺で、II層の最下層に貝殻を多く含んだ層を面的に検出したため、この貝層より下をIII層とした。

地山は橙色の粘土からなり、一部では石灰岩の岩盤も現れた。地山中には石灰岩の小礫を少し含む以外に、褐鉄鉱を含むことがわかった。この一帯の赤土に鉄分が多く含まれていることから、自然に出来た鉱物である。地山の中に厚さ2cm前後の褐鉄鉱の層が、不規則に波打ったような状態で検出できた。

### 第2節 遺構

尻並遺跡で検出した遺構は、明治時代の裁判所遺構・土坑墓・土坑・ピット・石組み土坑・溝状遺構である。裁判所遺構はI層掘り下げ中に、その他はII・III層を掘り下げて検出した遺構がほとんどである。地山が北東に向けて傾斜しており、後世の搅乱を受ける割合が少なかったためか、北東側の遺構の密度が高い。以下主な遺構について説明し、その他は第1表遺構一覧を参照していただきたい。なお各遺構の( )内の50音と数字はグリット番号である。

#### 1 初代那霸地方裁判所平良支部の遺構(第6図、図版1・2)

今回検出した玄関・柱跡の遺構配置図に、初代那霸地方裁判所平良支部の間取り図を重ねたところほぼ一致したため、裁判所建物の遺構と判断した。

玄関部分は、発掘調査開始前からほとんど地表に露出していた。この部分は元々調査の範囲外であったため、試掘トレンチを入れるにとどめた。玄関にはコンクリートが敷かれ、その周りを長さ50~100cm、幅20cm、高さ15cm程度の側石が囲んでいた。側石は玄関から両サイドに延びており、建物の規模を示していると考えられる。

柱跡は19個確認できた。直径20~50cmほどで、内部には石灰岩を充填しているものが多い。柱が沈まないよう地固めを行ったと考えられる。

初代那霸地方裁判所平良支部は、明治32年に完成し、木造瓦葺きの平屋建て(倉庫は二階建て)であった。2代目の裁判所より敷地が広いのは、現在のように周りに検察庁や拘置所がなく、裁判所の前を通る道(現在の国道390号線)がまだ拡幅されていなかったからである。

#### 2 土坑墓(第7図、巻首図版2、図版2)

合計2基検出した。

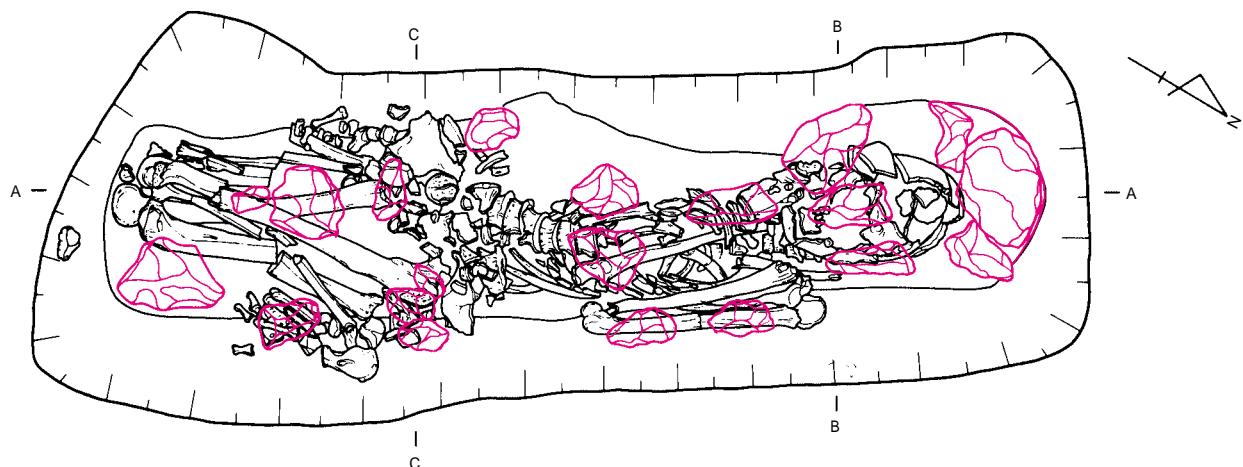
土坑墓1(うー3)は、長さ1.30m、幅69cmの不正楕円形で、深さは17cmである。地山を掘り下げ、10~30cm前後の石灰岩を20個置いた後、成年男性の遺体を納めている。両手・両足を折り曲げ、窮屈な状態で出土した。

土坑墓2(あー5)は、長さ69cm、幅47cmの楕円形である。人骨の残りは大変悪く、幼児のものと考えられる頭蓋骨と部位不明の骨片が出土した。その他に沖縄産無釉陶器・褐釉陶器・土器・獸骨が少量出土した。

土坑墓1・2出土の人骨についての細かな分析は第30節にある。

#### 3 SK(土坑)(第8~10図、図版3・4)

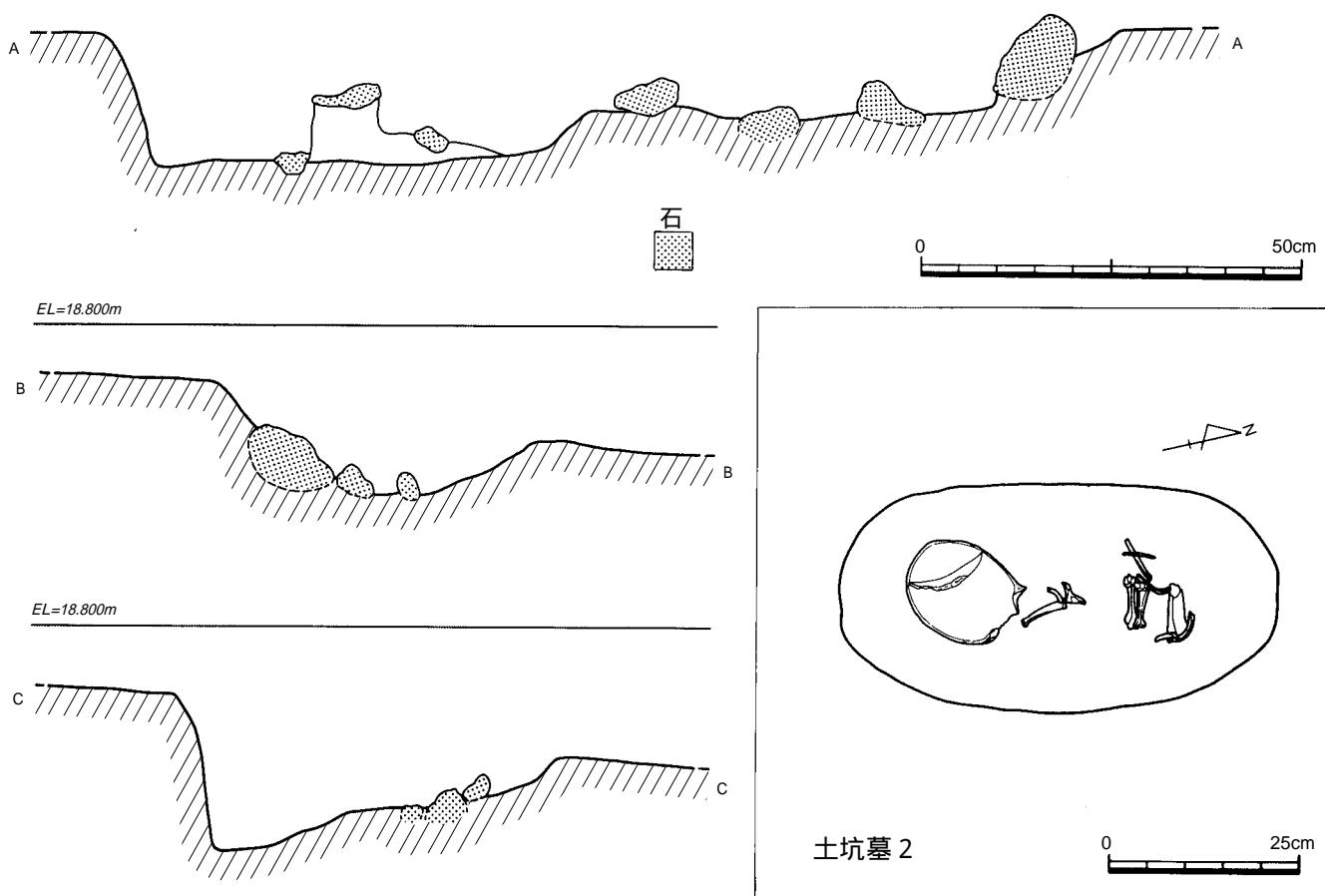
合計25基検出した。用途不明のものがほとんどである。



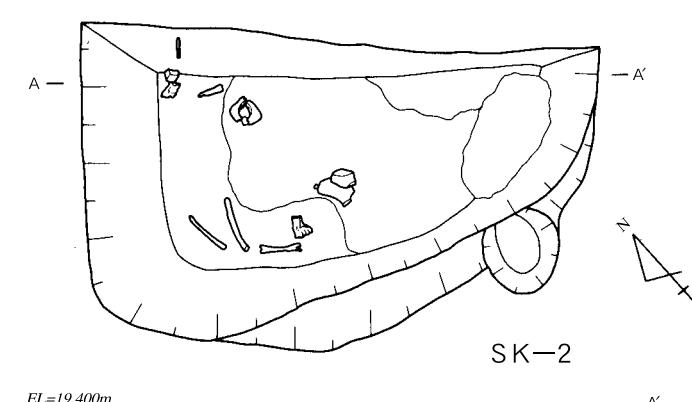
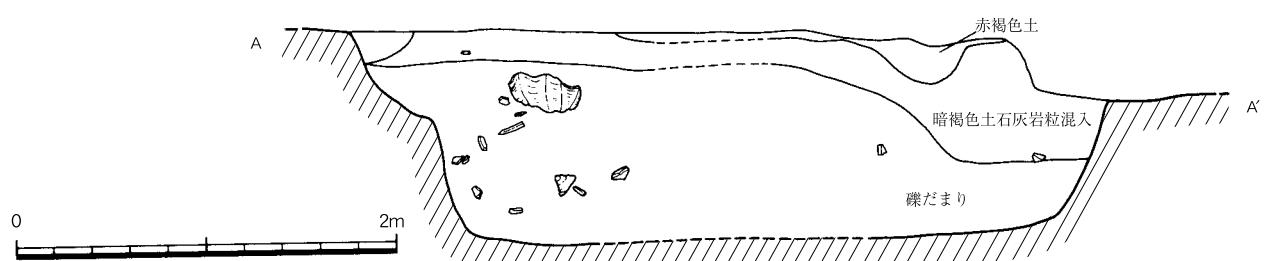
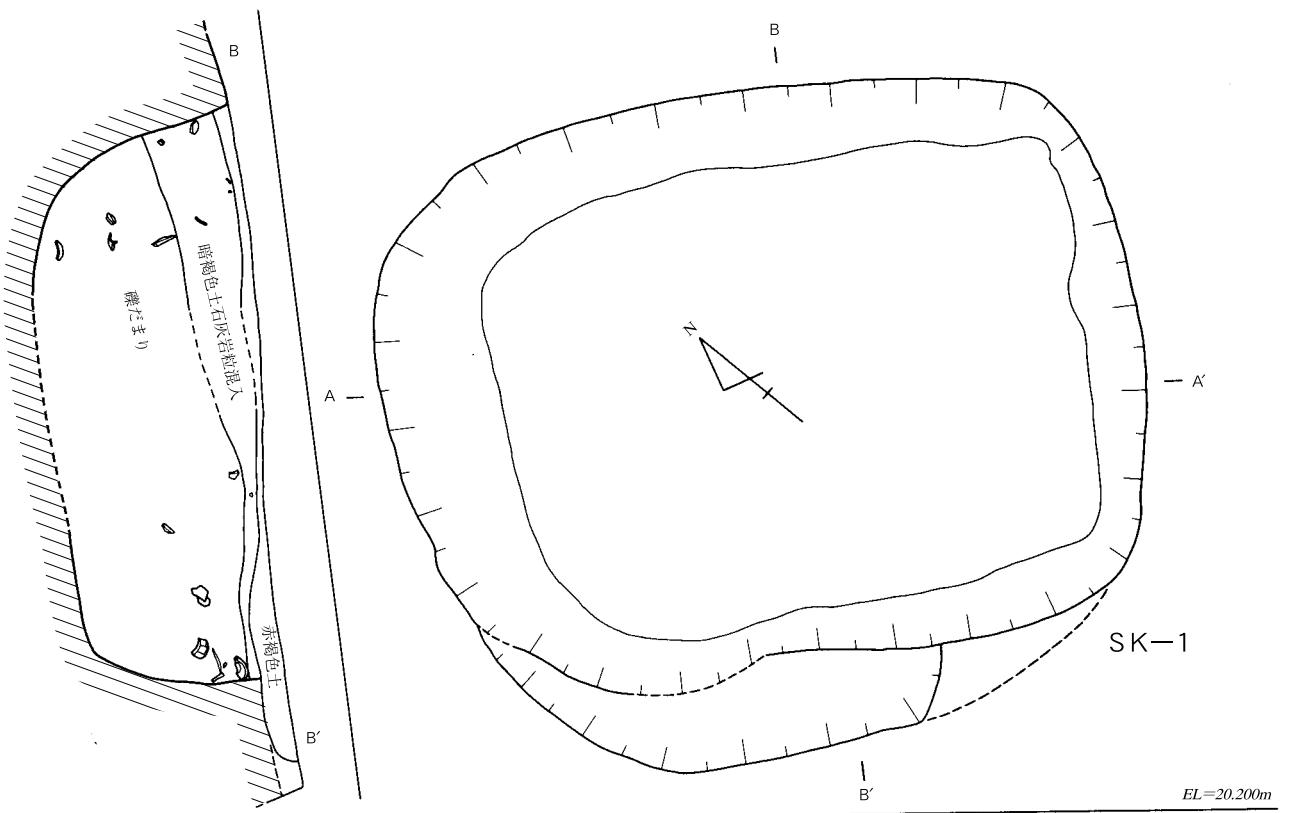
土坑墓 1

断面見通し図

EL=18.600m

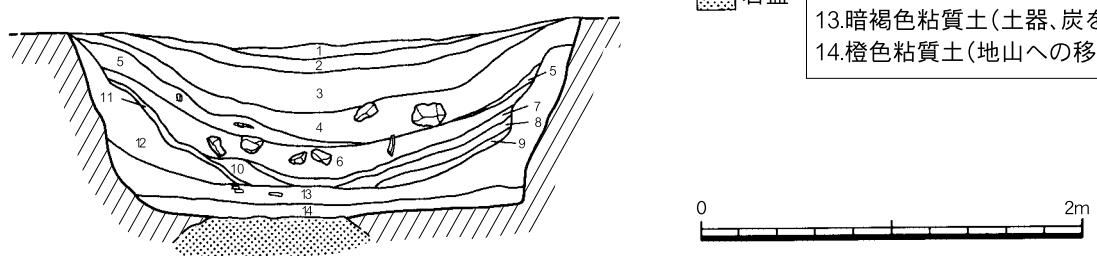


第7図 土坑墓 1・2



〈SK-2 土層名称〉	
1.	橙褐色砂質土
2.	暗褐色粘質土(Ⅲ層より暗い)
3.	暗褐色粘質土(貝殻、石灰岩礫を含む)
4.	暗褐色粘質土(石灰岩礫を含む)
5.	暗灰色粘質土(土器を含む)
6.	暗橙褐色粘質土(土器、石灰岩礫を含む)
7.	黒褐色粘質土(炭を含む)
8.	暗灰色粘質土(炭を含む)
9.	黒褐色粘質土(炭を含む)
10.	暗褐色粘質土
11.	暗褐色粘質土(炭を含む)
12.	暗褐色粘質土(地山の赤土を含む)
13.	暗褐色粘質土(土器、炭を含む)
14.	橙色粘質土(地山への移行層)

■ 岩盤



第8図 SK-1・2

合計 25 基検出した。用途不明のものがほとんどである。

S K - 1 (う・え-6) は、隅丸長方形の大型土坑で、長さ 3.63m、幅 2.60m、深さ 1.18m である。上層には赤土・暗褐色土があり、その下には 30cm 前後の石灰岩が大量に堆積していた。土坑内からは土器・沖縄産陶器・屋根瓦・褐釉陶器・貝殻など大量の遺物が出土した。昭和時代の搅乱土坑と考えられる。

S K - 2 (あ-1) は北側が調査区外に伸びているため全形は不明である。土坑内には暗褐色土が幾重にもレンズ状に堆積し、その間に炭を含んだ黒っぽい土が 3 層ほどある。沖縄産陶器・褐釉陶器・青磁・白磁・獸骨(主にウシ・ブタ)・鍛冶関連遺物などが出土したほか、土器が 500 点ほど出土した。土器のほとんどが今回「第 18 節 土器」で分類した A 類である。土坑の底部付近で、ブタ・ウシの骨がほぼ同一レベルで出土した。1 個体分のブタの下顎骨が 2 つ並んでいるように出土したが、実はどちらも右下顎骨、つまり 2 個体分の下顎骨である。意図的に並べて置いたのか、自然に並んだのかは今回明らかにできなかった。また同一レベルで出土したウシの骨については、同一個体かどうかを明らかにすることはできなかった。

S K - 4 (い-2) は、長さ 2.83m、幅 2.20m の楕円形の土坑で、深さは 81 cm である。埋土はほとんどが黒褐色であり、レンズ状に堆積している。埋土中には炭や、焼土と考えられる橙色土が少量混入している。埋土の 2・3・5 層から出土した土器が互いに接合する例(第 38 図 7、第 45 図 96) があることから、土坑が使用されなくなつてから短期間に埋まった可能性がある。また 2 層から出土した土器が S K - 2 出土の土器と接合した例(第 40 図 25) がある。土器以外には獸骨(主にウシ・ブタ)・褐釉陶器・青磁・焼土などが出土した。沖縄産陶器はわずか 7 点のみ出土した。18 世紀以降の遺物も少量あるが、主体は 17 世紀頃である。

S K - 5 (い-1) は、長さ 3.56m、幅 2.55m の不正方形で、深さは 55 cm である。北東部は S K - 4 と切り合っているようだが、先後関係は明らかにできなかった。埋土は黒褐色粘質土で、土器・炭・石灰岩小礫を少し含む。

S K - 14 (あ-4) は、北東側が調査区外に伸びているため全形は不明である。埋土は主に暗褐色土で、上層から丹波産の甕の底部が、水平に置かれたような状態で出土した。この場所は、明治 32 年に建てられた初代裁判所の便所があった所であることから、この甕は便槽として使われた可能性が高い。この他に土器・沖縄産陶器・褐釉陶器などが出土した。

S K - 15 (い-2) は、長さ 1.50m、幅 1.01m の不正長方形で、深さ 40 cm の土坑である。埋土は暗褐色粘質土だが、上層には黄褐色土をまばらに含み、下層には炭を少量含むことから、炉跡の可能性がある。土器・沖縄産陶器等が少量出土した。

S K - 16 (い-2) は、長さ 1.45m、幅 70 cm の隅丸長方形で、深さ 19 cm の土坑である。S K - 15 の南西に接しており、平面形、大きさはほぼ同じだが、S K - 15 に比べ浅い。両者の新旧関係は、土層から判断して S K - 16 の方が古いと考えられる。土器・沖縄産陶器・褐釉陶器が少量出土した。

S K - 17 (あ-3) は、長さ 1.60m、幅 1.30m、深さ 25 cm の土坑である。土坑内の上層には黄褐色土(10 cm 前後の赤褐色土をまばらに含む)、下層には黒褐色土(小礫混じり)がそれぞれレンズ状に堆積していた。遺構検出の際、平面形のラインに沿って、焼土と思われる赤褐色土を検出したので、炉もしくは竈の可能性がある。土器・褐釉陶器・沖縄産陶器・青磁などが少量出土した。

#### 4 SP (ピット)(第 10 図、図版 4)

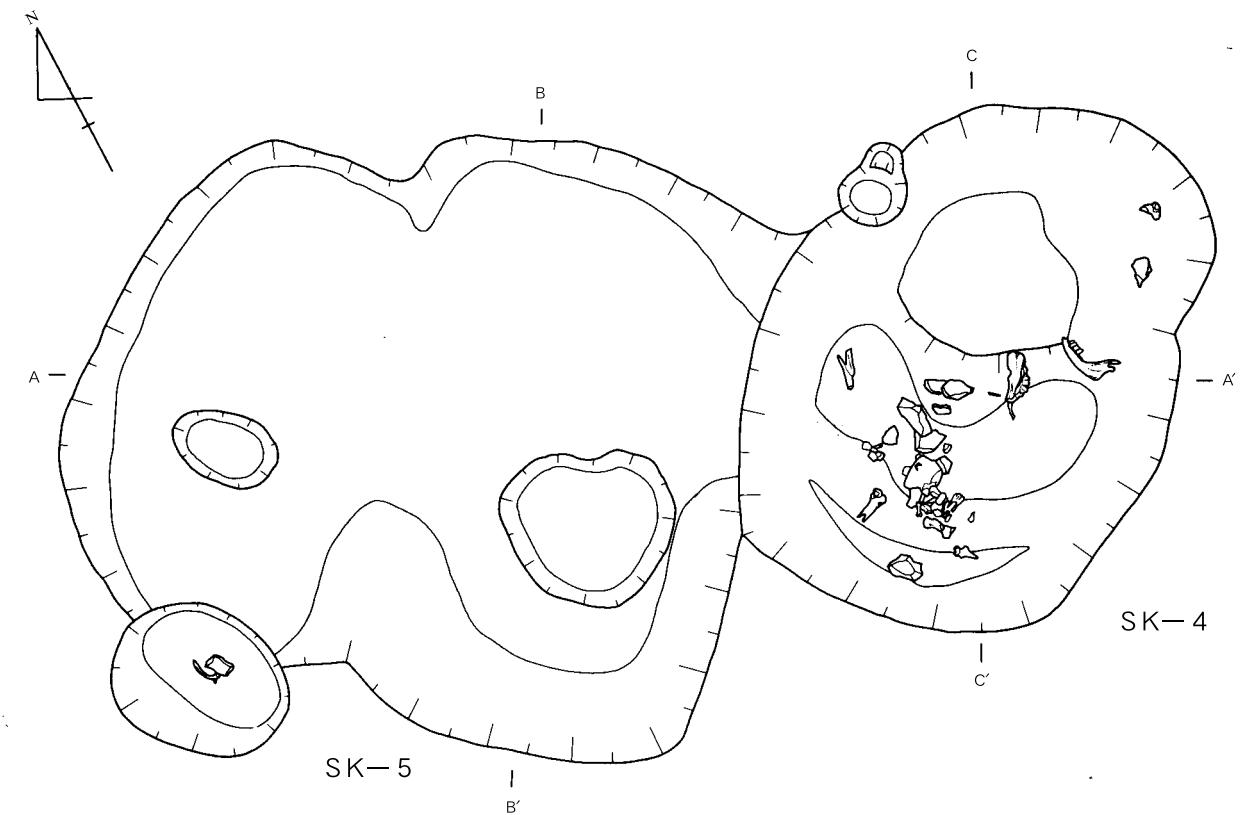
S K より直径が小さい穴を S P とした。合計 212 基検出した。炉跡・柱穴と考えられるものが少しあるが、ほとんどが用途不明である。

S P - 11 (い-5) は、長さ 1.15m、幅 75 cm の楕円形で、深さ 37 cm のピットである。ピット内中心付近には 10 cm 前後の石灰岩、その周りには暗褐色土が充填されている。中心部には、石灰岩に囲まれた長径 30 cm ほどの穴がある。柱穴と考えられる。ピット内からは沖縄産陶器・土器・褐釉陶器などが少量出土した。褐釉陶器は図上で底部～肩部まで復元できた(第 18 図 13)。

S P - 14 (あ-4) は、直径約 90 cm、深さ 8 cm である。土器・褐釉陶器が出土した。S P - 18 を切っている。

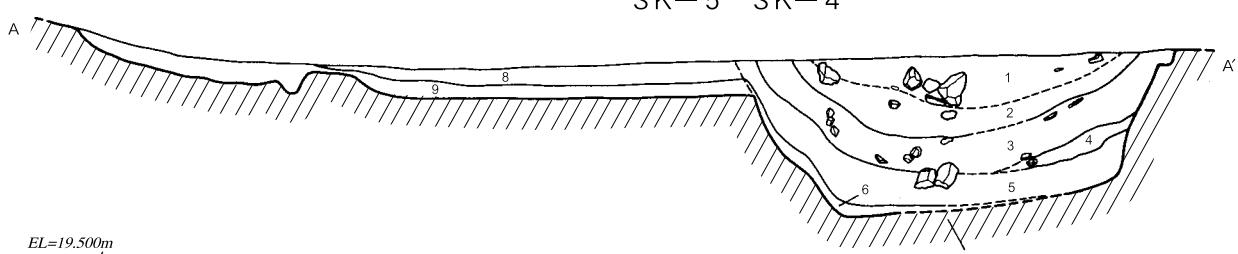
S P - 16 (い-4) は、直径約 60 cm、深さ 10 cm のピットである。ピット内壁面の土(厚さ約 1 cm)が赤く焼けており、底部には炭が混入していることから炉跡と考えられる。獸骨・貝殻がわずかに出土したのみである。S P - 17 を切っている。

S P - 17 (い-4) は直径約 60 cm、深さ 7 cm である。壁面は焼けていないが、底面には炭がたまっていることから、炉跡の可能性がある。土器・青磁等がわずかに出土した。

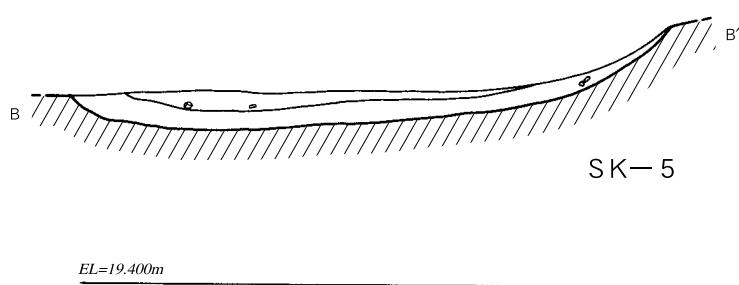


EL=19.500m

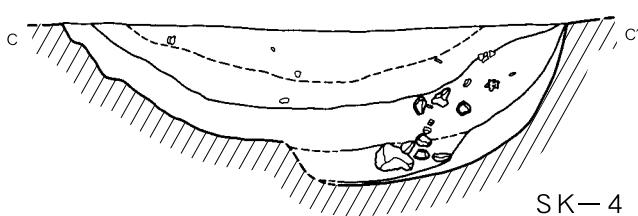
SK-5 SK-4



EL=19.500m



EL=19.400m

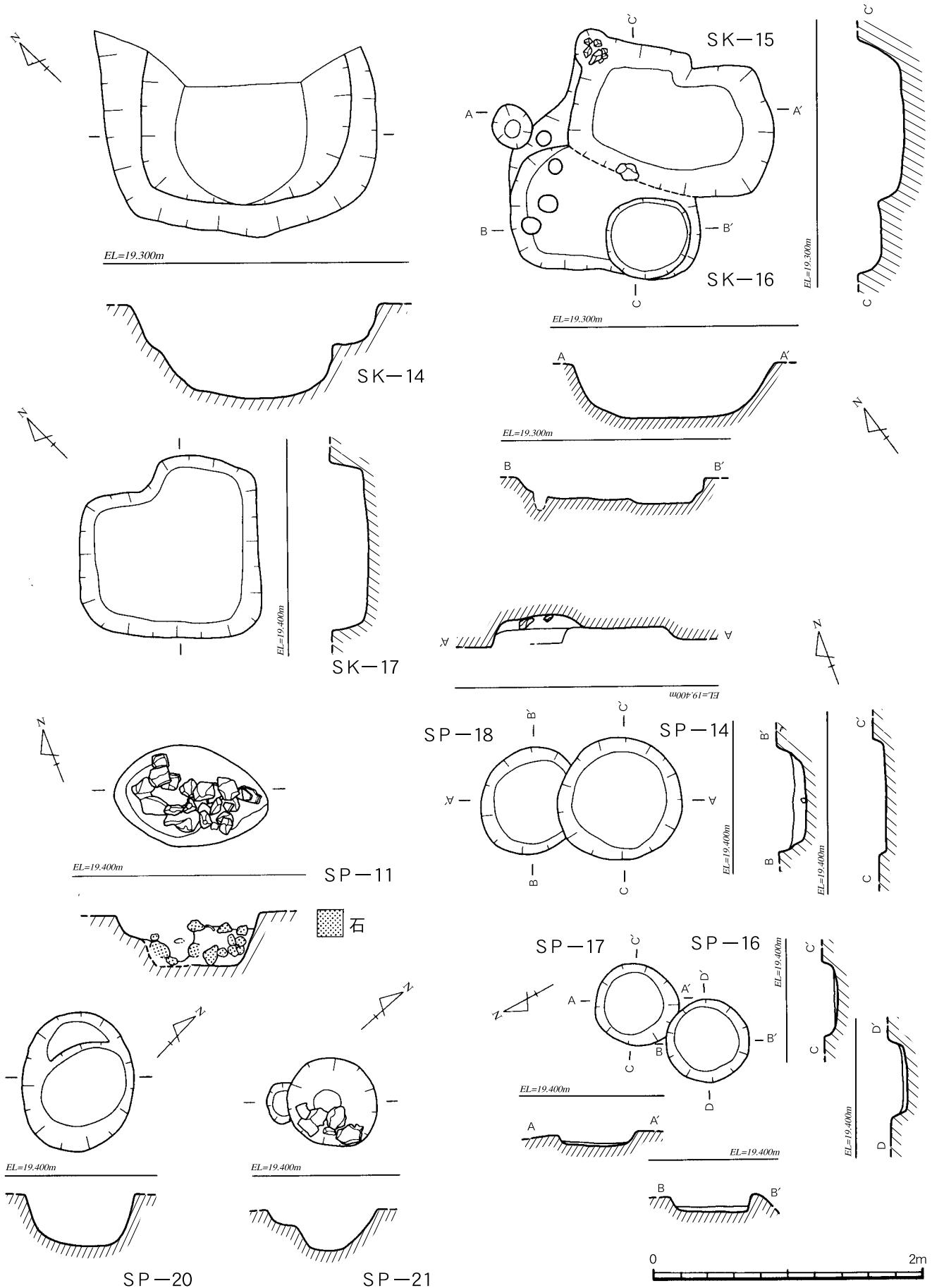


0 2m

#### 〈SK-4・SK-5 土層名称〉

- 1 黒褐色粘質土(石灰岩礫、土器を含み、炭も僅かに含む)
- 2 黒褐色粘質土(1層より少し赤味を帶び、石灰岩礫、炭も僅かに含む。土器も含む)
- 3 黒褐色粘質土(炭、石灰岩礫を少し含み、獸骨、貝、土器を含む)
- 4 黒色粘質土
- 5 黒褐色粘質土(地山の明赤褐色粘土を1cm前後のブロック状に含み、大きな石灰岩礫や土器を含み、炭も少し含まれる)
- 6 赤褐色粘質土
- 7 明赤褐色粘土(混入物がなく、堅くしまる地山)
- 8 黑褐色粘質土(土器、炭、石灰岩小礫を含む)
- 9 黑褐色粘質土(地山の明赤褐色粘土を小ブロック状に含み、石灰岩小礫を少し含む)

第9図 SK-4・5



第10図 SK-14~17、SP-11・14・16~18・20・21

S P - 18 (い-4) は直径約 83 cm の円形ピットになると考えられ、深さは 21 cm である。壁面は焼けていないが、底面に炭がたまっていることから炉跡の可能性がある。土器等が少量出土した。

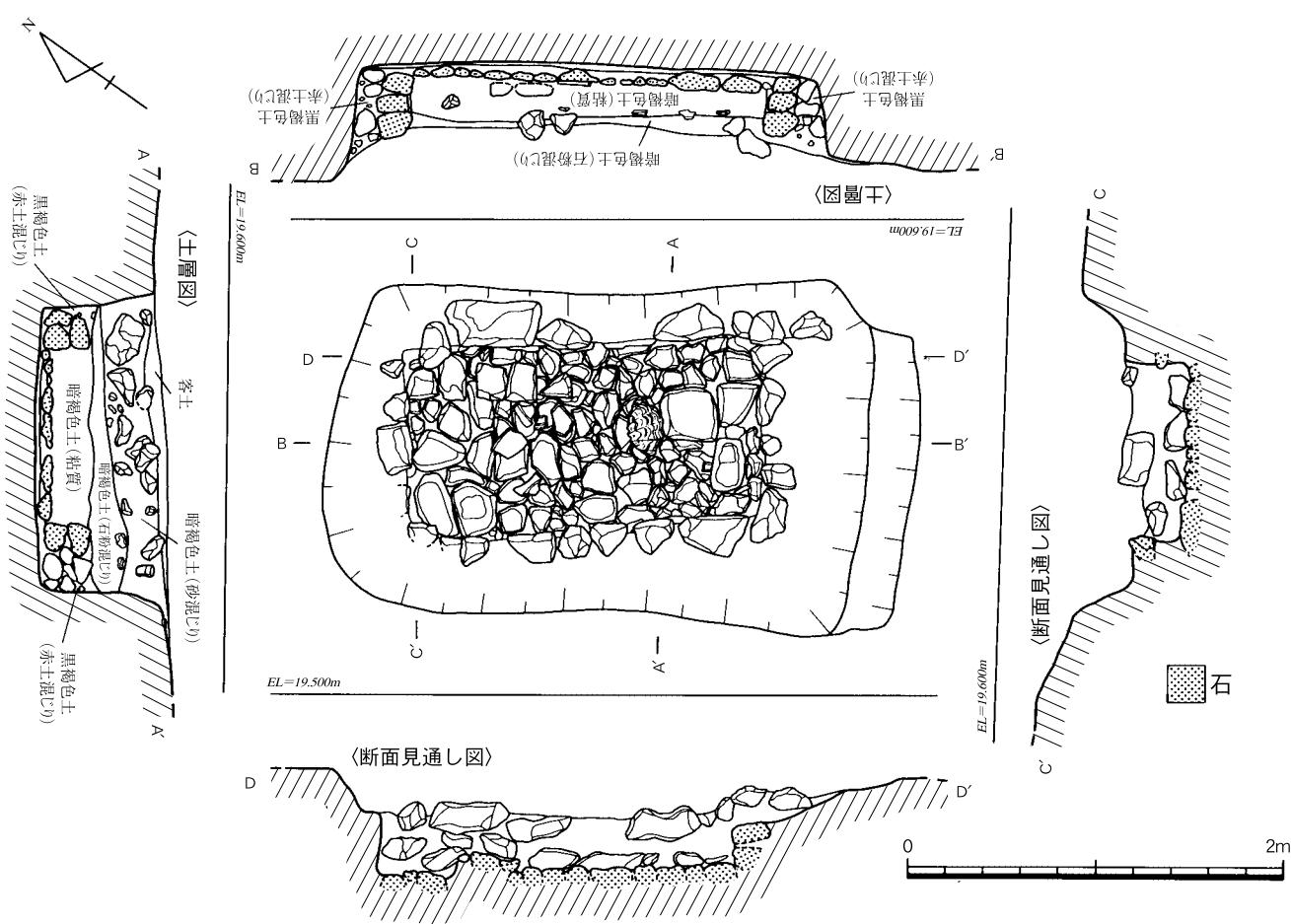
S P-20(い-2)は、長径103cm、短径82cmの橢円形で、深さは39cmである。10cm前後の石灰岩を充填していたが、中心に柱穴等は確認できなかった。

S P - 21 (い-2) は、直径約 65 cm、深さ 21 cm のピットである。埋土中には石灰岩礫が数個あり、ピット底部には炭がたまっている。炉跡の可能性がある。土器が少量出土した。

S P-26(い-1)は、直径約40cm、深さ約11cmである。埋土上層に大量の炭が堆積していた。埋土を採取して磁石を近づけた結果、1~8mmの粒が付着した。鍛冶炉の可能性があるピットである。

## 5 SW (石組み土坑) (第 11 図・図版 4)

いー6グリットで検出した、用途不明の土坑である。地山の赤土をほぼ垂直に掘り下げ、底に板状の石灰岩を敷き、石畳状となっている。ただし北東の壁際の1カ所には、ステップ状の低い段がある。周りは石灰岩の石積みで囲んでおり、石積みの裏込めは、石灰岩と黒褐色土（赤土混じり）である。石積みの表面には黄色の石粉？がへばりついている。石畳直上からは赤瓦・沖縄産無釉陶器の鉢・ヒレシャコガイが出土した。石組土坑内には暗褐色土（石粉？・砂混じり）が堆積しており、その中からも赤瓦・沖縄産陶器等が多く出土した。



第11図 SW- 1

第1表 遺構一覧

遺構	番号	グリット	長径	短径	深さ	EL	備考	遺構	番号	グリット	長径	短径	深さ	EL	遺構	番号	グリット	長径	短径	深さ	EL
士坑墓	1	う-3	130	40	17	-	17c~?	51	あ-2	25	23	15	18.88		133	う-3	42.5	40	6	19.58	
	2	あ・い-5	69	47	-	-				27	26	-	18.86				23	21	23	19.42	
SW (石組土坑)	1	い-6	31.2	17	7	18.58	20c。	53	あ-2	22	21	6	18.98		134	う-4	24	23	10	19.43	
	2	う-5	353	56	19	19.30				21	9	-	18.91				20	18	9	19.45	
SD (溝)	1	う-5	353	56	19	19.30		55	あ-2・3	23	22	17	18.88		135	う-4	28	22	16	19.32	
	2	う-1	183	36	33	19.47				21	20	13	18.93				21	20	10	19.36	
SK (土坑)	3	い-5・6	382	42	25	19.03	20c。	56	あ-4	42	41	17	18.91		136	う-4	13	10	13	19.31	
	4	う-6・7	490	37	17	19.37	20c。			16	23	6	19.07				16	13	12	19.44	
	5	う・え-6	363	260	85	18.80	20c。大量の遺物。	58	い-4	25	23.5	14	18.95		140	う-5	23	20	20	19.36	
	6	あ-1	265	164	99	18.11	17c。大量の遺物。			21	19	12	18.96				20	17	18	19.39	
	7	う・え-2	276	178	57	19.44	17c後半~18c。	60	い-5	20.5	20.5	11	18.97				18	16.5	19	19.35	
	8	い-2	283	220	81	18.19	17c前半。大量の遺物。			35	32.5	13	18.95				う-6	36	26	-	19.47
	9	い-1	356	255	55	18.72	17c前半。	61	い-5	22	22	14	18.94				25	24	42	19.35	
	10	い-5・6	345	143	34	18.80	19~20c。			23	22	17	18.96				27	25	50	19.27	
	11	い-6	111	72	15	19.02	16c~。	62	い-6	41	37.5	9	19.05				42	41	15	19.68	
	12	え-1	380	150	49	19.58				45	38	10	19.10				34.5	30	15	19.63	
	13	う-6	232	180	17	19.36	20c。	63	い-6・7	33	30	7	19.13				33	32	17	19.56	
	14	あ-4	191	94	71	18.28	20c前半。初代裁判所便所跡。			17	15	11	19.09				49	43	22	19.56	
	15	い-2	150	101	40	18.62	17~18c。炉跡。	64	い-7	27	21	6	19.10				79	63	34	19.55	
	16	う-2	145	70	19	18.83	17~18c。			26	26	9	19.06				37	32	-	19.57	
	17	あ-3	160	130	25	19.31	19c?炉?	65	い-5	20	20	9	19.07				43	42.5	24	19.65	
	18	あ-2	187	65	3	18.90				21	21	6	19.09				18	16	12	19.55	
	19	い-1	97	154	57	18.73	18~19c。	66	い-5	31	27	13	19.02				31	27	6	19.61	
	20	い-3・4	228	190	75	18.22	19c。			24	22	8	19.09				51	49	23	19.53	
	21	い-4	447	419	98.4	18.66	20c。2代目裁判所浄化槽。	67	い-4	40	38	13	19.02				35	32	14	19.65	
	22	う-2・3	156	101	42	19.18				36	30	11	19.03				45.5	25	20	19.46	
	23	え-3	173	91.5	36	19.64		68	い-4	22	22	12	19.06				22	20	13	19.47	
	24	え-6	394	140	39	19.63				23	22	12	19.07				18	17	10	19.47	
	25	い-6・7	112	103	22	18.98		69	い-6	73	44	12	19.02				35	34	17	19.42	
	1	う-6	51	45	9	19.49				74	44	12	19.03				45	35	13	19.60	
	2	え-5	64	62	-	19.81		70	い-3	30	30	7	18.99				70	35.5	21	19.50	
	3	う-4	40	35	19	19.84				25	25	6	18.97				48	27	7	19.87	
	4	う-4・5	73	40	6	19.55		71	い-3	26	26	10	18.91				27.5	25	15	19.73	
	5	え-5	60	40	-	-				40	37	9	18.96				30	19	16	19.64	
	6	え-4	80	50	11	19.72		72	い-3・4	41	41	21	18.85				45	40	17	19.70	
	7	う-4	55	40	-	19.62	19~20c。			27.5	25	23	18.81				29	29	-	19.85	
	8	え-4	38	37	15	19.81	18c~。	73	い-1	56	35	8	18.96				28	28	22	19.64	
	9	う-6	36	35	13	19.85				31	30	9	18.96				24.5	24.5	12	19.70	
	10	い-5	105	74	21	18.92	イヌの骨。	74	い-1	24	23	9	18.96				44.5	20	4	19.92	
	11	い-5	115	75	37	18.76	16~17c?柱跡。			51.5	46	10	18.88				48	27	15	19.80	
	12	う-4	75	50	3	19.09	17c?	75	い-1	37	31	16	18.86				36	35	-	19.80	
	13	う-4	45	41	12	19.00	18c。			56	35	8	18.86				23	20	15	19.83	
	14	あ-4	92	90	8	18.98		76	い-2	21	19	8	18.88				22	21	-	19.83	
	15	う-2	42	32	9	19.03				33.5	30	13	18.85				32	31	-	19.75	
	16	い-4	62	60	10	19.02	炉跡。	77	い-1	43	37	14	18.84				28	26	-	19.77	
	17	う-2	61	59	7	19.01	炉跡。			43.5	34	15	18.79				39	39	21	19.78	
	18	あ・い-4	83	56	21	18.68	炉跡。	78	い-5	19	19	15	18.81				24	23	-	19.89	
	19	う-5・6	34	32	21	19.24				25	24	5	18.92				51.5	30	18	19.82	
	20	い-2	103	82	39	18.87	17c?石灰岩充填。	79	い-1	36.5	34	9	18.93				21	20	30	19.71	
	21	う-2	66	64	21	18.84				35	33	15	18.82				30	26	-	19.85	
	22	う-2	27	24	13	19.20		80	い-1	57.5	40	12	18.84				20	19	-	19.80	
	23	い-1	95	53	-	18.76				26	25	5	18.84				54.5	53	10	19.94	
	24	あ-2	100	70	19	18.85		81	い-6	29	25	8	18.86				22.5	22	11	19.90	
	25	う-2	27	27	10	18.93	18c~。			56	35	15	18.70				71.5	11.5	-	19.93	
	26	い-1	42	39	11	18.89	炉跡。	82	い-5	92	77	17	18.65				22	20	-	19.89	
	27	あ-2	39	37	17	18.67				39	22	6	19.32				41	30	16	18.88	
	28	い-3	61	58	25	18.81	柱跡。	83	い-2	31	28	17	19.02				66	61	19	18.83	
	29	あ-2	29	26	20	18.80	石灰岩充填。			32.5	31	12	18.96				13.5	12.5	11	18.57	
	30	う-2	102	80	18	18.83		84	い-5	23	22	11	19.18				30	15	10	19.04	
	31	え-1	70	48	11	19.76				23	23	11	18.97								

## 第2表 遺物出土状況

注「+」:接合の意

# 第V章 遺物

今回は遺物コンテナに換算して195箱という、多量の遺物が出土した。陶磁器・屋根瓦・貝類・獸骨・金属製品・石製品・骨製品・鍛冶関連遺物等に大別できる。以下各種遺物について代表的なものを報告する。各種遺物には基本的に出土状況表をつけたが、土器・鍛冶関連遺物・貝類遺存体・動物遺体以外については、未実測の客土・出土地点不明資料を集計に加えていない。また搬入した遺物の開梱作業時に、一部混乱があつたため出土地不明資料が増えていることをお詫びする。

## 第1節 青磁

青磁は破片も含めて546点出土している。器種は碗が最も多く、皿、盤と続く。壺や鉢、瓶、香炉といった大型の器種も少数ながら出土している点が注目される。最も古い時期の資料では14世紀前半で新しい資料では近世段階に相当する。今回は主に遺構に伴う資料を中心にして報告していく。

第3表 青磁出土状況

器種・分類	出土地	SK												SP				SW-1	土坑 墓2	客土	Ⅱ層	Ⅲ層	トレンチ	明治時代 裁判所	壁面清 掃中	不明	合 計	
		1	2	4	5	6	10	12	14	15	16	17	18	11	13	17	20											
碗	蓮弁	1	1															1		40	2			1			2	
	直口		2																7								47	
	青文			1															19	2							8	
	無文				1																						22	
	外反			1	1														1	28	7		1	1			2	
	有文					2													7								7	
	無文						3	1	2										30	6	5						48	
	上縁																		15								18	
	蓮弁																		90	18	3	3					144	
	有文																		24	2		1					35	
皿	無文																		23	1	3	1					29	
	内底																										26	
	不明																										1	
	外反	無文	口～底																1								10	
	稜花	口縁部		2	2														6								12	
	蓮弁																		9	1							2	
	棱花	胸部				2													2								4	
	有文																		3								19	
	無文																		13	3							1	
	腰折	口～底																	1								1	
盤	稜花	口縁部																									6	
	蓮弁																										2	
	棱花	胸部																									1	
	有文																										1	
	無文																										5	
	内底	有文																	4								11	
	不明	無文	底部																9								2	
	口縁部																		7	1	1						10	
	胸部																			1								1
	底部																		1	3							5	
鉢	口縁部																										1	
小鉢	胸部																										1	
壺	底部																										1	
瓶	口縁部																			2							2	
香炉	脚																		3								3	
不明	口縁部																			1								1
	合 計		18	25	25	5	2	1	1	3	2	3	5	6	2	1	1	1	1	1	2	376	44	6	13	1	1	546

注「-」:計測不可

第4表 青磁観察一覧

単位:cm

図番号	分類	部位	口径	器高	底径	素地												釉色・質入			器形・文様・施釉などの特徴				出土地	
第12回・図版5	1	外反碗	17.8	-	-	灰白色の微粒子で黒色粒子が僅かに見られる。												青緑色の透明釉。質入は見られない。			外面部口縁部直下に5本の横位櫛書き文が見られる。内面には爪文に似た文様が見られる。14c前～中。				SK-2	
	2		18.8	-	-	灰白色で黒色粒子、気泡が見られる。												青緑色の失透釉。質入は見られない。口唇部の釉は薄い。			口縁直下で外反し、やや玉縁状となる。15c前～中。				II層	
	3		-	-	-	灰白色の微粒子でわずかに気泡が見られる。												灰緑色の失透釉で質入は見られない。			口縁部は緩やかに外反する。14c後～15c前。				土坑墓2	
	4		17.5	-	-	灰白色の微粒子で黄色の粗粒子が見られる。												薄い緑色の透明釉、細かい質入が内外面ともに見られる。			口縁部は緩やかに外反する。14c後～15c前。				SK-18	
	5		11.8	-	-	灰白色の微粒子で黒色の粒子が見られる。												薄い緑色の透明釉、かなり粗い質入が内外面ともに見られる。			口縁部は直口する。線刻の細蓮弁が外面に配されるが弁間と弁先は対応しない。16c中～17c前。				SK-1	
	6		16.6	-	-	白色の微粒子で黒色粒子が多く見られる。												薄い緑色の透明釉、かなり粗い質入が内面に見られる。			口縁部は直口する。口縁部直下に界線。線刻の細蓮弁が外面に配されるが弁間と弁先は対応しない。16c中～17c前。				SP-13	
	7		10.4	-	-	灰白色の微粒子で気泡がわずかに見られる。												濃緑色の失透釉。質入は見られない。			口縁部は直口する。線刻の細蓮弁が外面に配されるが、弁間と弁先は対応しない。16c中～17c前。				SK-2	
	8		13.0	-	-	灰白色の微粒子。褐色粒子がわずかに見られる。												薄い緑色の透明釉、粗い質入が内外面ともに見られる。			口縁部は直口する。線刻の細蓮弁が外面に配されるが、弁間と弁先は対応しない。16c中～後。				SW-1 暗褐色土粘質	
	9		15.0	-	-	白色の微粒子で黒色粒子が見られる。												薄い緑色の透明釉、粗い質入が内外面ともに見られる。			口縁部は直口する。簡略化された雷文が見られる。雷文の下部には草花文がある。				II層	
	10		15.0	-	-	白色の微粒子で気泡がわずかに見られる。												青緑色の失透釉、質入はみられない。			口縁部は直口する。外面には雷文の中心で反転する雷文を配する。内面には草花文の一部と考えられる枕線が見られる。15c前～中。				II層	

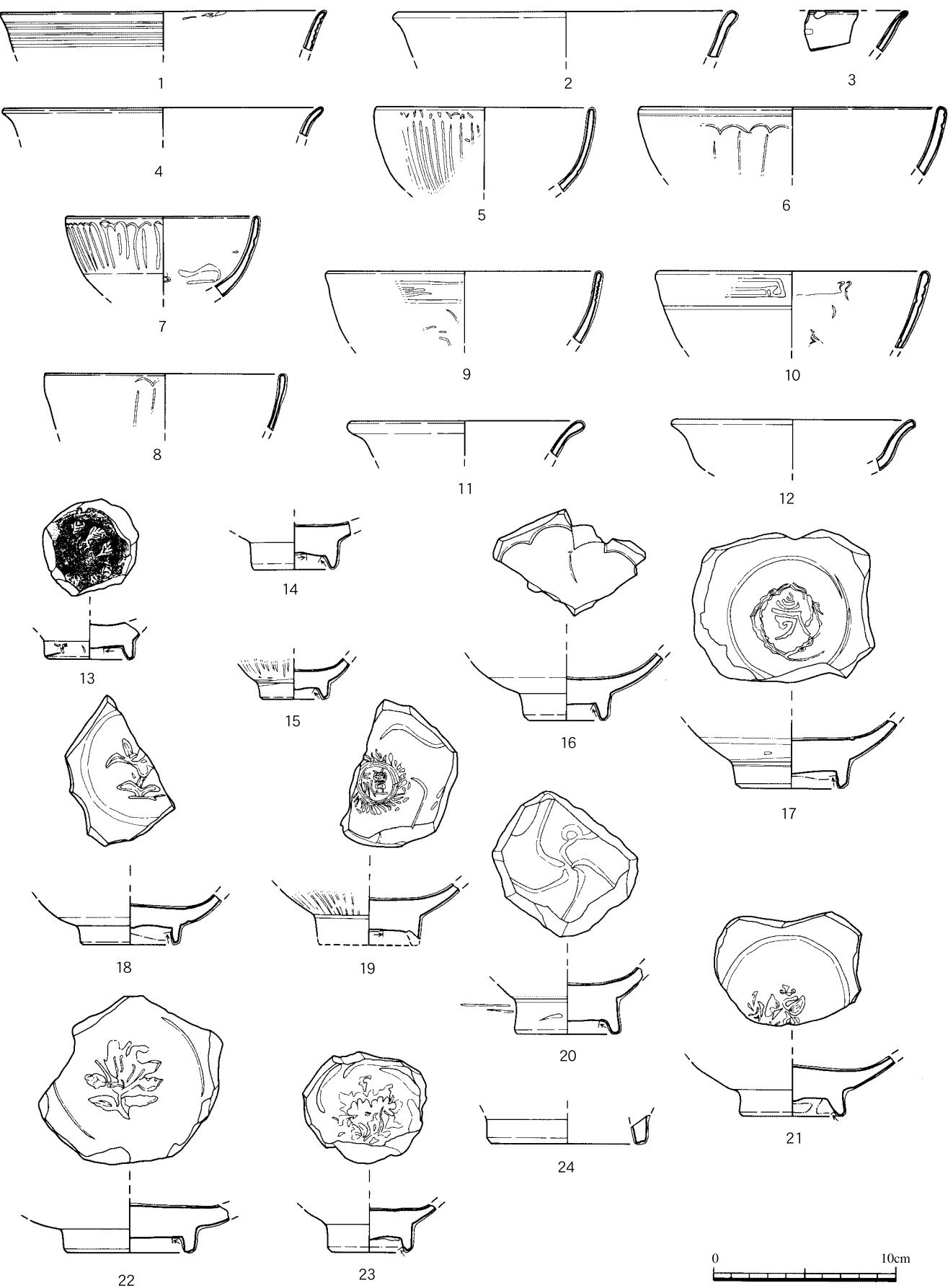
注「-」:計測不可

第4表 青磁観察一覧

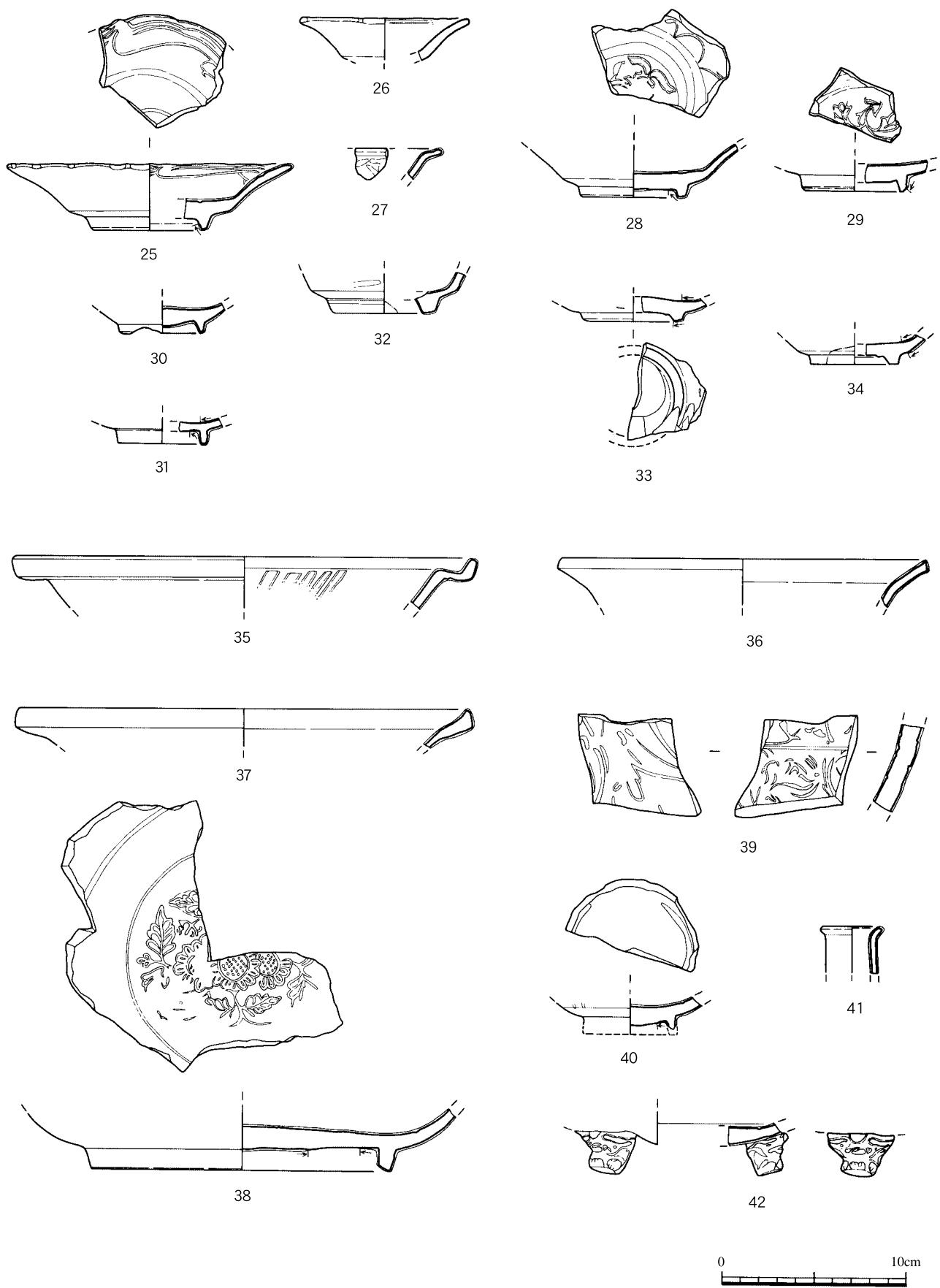
単位:cm

図番号	分類	部位	口径 器高 底径	素地	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地
第12 図 ・ 図版 5	碗	口縁部	13.0 - -	黄味がかった白色の微粒子。	オリーブ褐色の失透釉、内外面ともに貫入が見られる。	口縁部が外反し、やや玉縁状となる。文様は見られない。15c前～中。	II層
			13.0 - -	白色の微粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	青緑色の失透釉、貫入はみられない。	外反皿の口縁部。文様は見られない。15c前～中。	II層
		底部	- 4.4	白色の微粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	灰緑色のやや透明がかった釉で貫入は見られない。	高台は低く、内割りも浅い。内底面には印花文が見られる。内底面と外底面中央は露胎となる。16c中～17c前。	SK-1
			- 4.3	白色の微粒子で気泡が見られる。	青緑色の失透釉、内外面ともに細かい貫入が見られる。	高台は高く、内割りは浅い。文様は見られず、外底面は全釉後、輪状に釉剥ぎされる。16c中～17c前。	SK-2
			- 3.5	白色の微粒子で黒色粒子、気泡が見られる。	青緑色の失透釉、内外面ともに貫入が見られる。	小振りな碗の底部。胴下部には継位の櫛描が見られる。おそらく線刻細蓮弁の下部と考えられる。内底面は露胎となり、それ以外は全釉される。16c中～17c前。	II層
			- 4.3	灰白色の微粒子で黄色粒子、気泡が見られる。	灰緑色のやや透明がかった釉で貫入は見られない。	底径は小さく、やや緩やかに胴部へと移行する。内底面には円弧の連続文が見られる。16c中～後。	II層
		胴～底	- 5.6	白色の微粒子で黒色粒子、気泡がわずかに見られる。	薄い緑色の透明釉で貫入は見られない。	内底面には梵字様の文様とそれを閉む蛇行状の櫛描き文と陰圓線が見られる。15c前～中。	SK-2
			- 5.0	灰白色の微粒子で気泡が多く見られる。	青緑色のやや透明がかった釉で内外面ともに貫入が見られる。	高台下部は斜めに面取りがなされ豊付は尖る。内底面には印花文とそれを閉む帶状の圓線が見られる。高台内側から外底面にかけて露胎となる。15c前～中。	SK-4 3層
		底部	- (5.4)	白色の微粒子で褐色粒子が見られる。	青緑色のやや透明がかった釉で内外面ともに貫入が見られる。	外表面下部には継位の櫛描が見られる。おそらく線刻細蓮弁の下部と考えられる。内底面には「福」の字を中心配した花文様の文様とそれから逆S字の沈線が外側に配される。16c中～後。	客土
			- 5.6	灰白色の微粒子で白、黒色粒子が見られる。	青緑色の失透釉で内外面ともに細かい貫入が見られる。	高台は高く、内割りは浅い。高台と胴部との接続部には界線が見られる。内底面には捺じ花文が見られる。16c中～後。	SK-4
			- 5.4	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	青緑色の失透釉で外面に一部、粗い釉が見られる。	高台は「ハ」の字状に開く。内底面に印花文。外面には成形痕が見られる。15c前～中。	SK-2
			- 6.8	白色の微粒子で黒色粒子がわずかに見られる。	青緑色の失透釉で内外面ともに貫入が明瞭に見られる。	胴部へは緩やかに立ち上がることから大振の碗になると考えられる。内底面には印花文と陰圓線。釉は外底面を除いて施される。14c後～15c前。	SK-14
		底部	- 4.0	薄い橙色の微粒子で黒色粒子がわずかに見られる。	黄緑色の失透釉で内外面ともに細かい貫入が見られる。	高台は高く、径は小さい。内底面には印花文。釉は外底面が全釉後、輪状に搔き取っているが、搔き取り方が粗い。16c中～17c前。	II層
			- 8.4	白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	青緑色の失透釉、内外面ともに貫入は見られない。	高台内側に成形痕が見られる。15c。	SK-1
第13 図 ・ 図版 6	腰折皿	口～底	15.4 3.6 6.3	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	青緑色のやや透明がかった釉。内外面ともに粗い貫入。	棱花皿。内面には弧状文を連続させる。内底面にも文様が見られる。外底面から高台下部は露胎。15c前～中。	II層
			9.2 -	青灰白色的微粒子で黒色粒子が見られる。	緑色の失透釉。内外面ともに細かい貫入。	棱花皿。内面口縁部直下に2本一組の櫛描き文が見られる。素地には気泡が見られ器表には小孔が見られる。15c前～中。	SK-2
	小鉢	口縁部	- -	灰色の微粒子で黄色粒子が見られる。	緑色の失透釉。内外面ともに細かい貫入。	内外面ともに無文。口縁部は「く」の字状に折れる。14c後～15c前。	SK-4
			- 5.7	灰白色の微粒子。白色粒子、気泡が見られる。	緑色の失透釉、内外面ともに細かい貫入。	内面胴部には弧状文を連続させた文様が見られる。内底面には草花文か。外底面の釉は輪状に搔き取られる。15c前～中。	SK-4 3層
	皿	底部	- 5.2	白色の微粒子。黒色粒子がわずかに見られる。	白味がかった緑色の失透釉。貫入は見られない。	内底面には印花文か。外底面から高台下部にかけては露胎となる。15c前～中。	SK-1
			- 4.6	灰白色の微粒子で白色粒子がわずかに見られる。	白味がかった緑色の失透釉。貫入は見られない。	内外面ともに無文。高台のつくりはかなり雑。内外面ともに全釉される。器表には凹凸が多く見られる。15c前～中。	II層
	腰折皿	底部	- 4.8	白色の微粒子。黒色粒子がわずかに見られる。	白味がかった緑色の透明釉。内外面ともに貫入は見られる。	釉は内外底面ともに円形状に搔き取られる。釉の厚さには斑が見られる。15c中～後。	III層
			- 5.6	灰色の微粒子で黒色粒子が見られる。	青緑色の微粒子で黒色粒子が見られる。	外表面胴部に文様が見られるが全体構成は不明。15c前～中。	SK-1
	皿	底部	- 5.4	灰白色の微粒子で白色粒子が見られる。	灰緑色の失透釉。貫入は見られない。	内底面と外底面から高台内側にかけては露胎となる。外底面は成形痕が明瞭に残る。15c前～中。	SP-20
			- 4.7	黄灰色の粗粒子で白、黒色粒子が多く見られる。	灰緑色の透明釉。内外面ともにこまかい貫入が見られる。	内底面は露胎。豊付は水平に切られ、外底面には成形痕が明瞭に残る。15c前～中。	SK-4 5層
	銅線盤	口縁部	25.0 - -	灰白色の微粒子で気泡が見られる。	緑色の失透釉。貫入は見られない。	口縁端部は上方に折り上げる。内面には幅広の蓮弁文。外面には2条の幅広の界線が見られる。15c前～中。	II層
	鉢	口縁部	20.0 - -	灰白色の微粒子で黒色粒子が見られる。	白味がかった失透釉。内外面ともに貫入が見られる。	銅線口縁の鉢。外端部は平坦で稜は明瞭に見られる。釉は全体にほぼ均一の厚さで施される。16c前～中。	II層
	銅線盤	口縁部	24.2 - -	白色の微粒子。黒色粒子が見られる。	緑色のやや透明がかった釉。内外面ともに貫入が見られる。	口縁端部は折り上げる。胴部と銅線部の境には明瞭な稜が見られる。15c前～中。	SK-12
	盤	底部	- 16.2	灰白色の微粒子。白色粒子、気泡が見られる。	緑色の失透釉。内外面ともに粗い貫入が見られる。	高台は逆台形状で内底面には印刻で草花文と幅広の圓線。外底面は全釉後、輪状に搔き取る。14c後～15c前。	客土
	鉢	胴部	- -	白色の微粒子で褐色粒子、気泡が見られる。	緑色の失透釉。内外面ともに細かい貫入が見られる。	内外面ともに文様が見られるが全体構成は不明。14c後～15c前。	不明
	壺	底部	- (5.0)	灰色の微粒子で褐色の素粒子が混入する。	灰緑色の失透釉。貫入は見られない。	内底面は弧状の沈線が1条見られる。外底面は露胎で成形痕が明瞭に残る。15c前～中。	SK-4 1層
	瓶	口縁部	3.4 - -	白色の微粒子。黒色粒子がわずかに見られる。	緑色の失透釉。貫入はわずかに見られる。	長頸瓶で口縁部が「く」の字状に外反する。14c後～15c。	II層
	香炉	脚	- -	灰白色の微粒子。黒色粒子、気泡が見られる。	緑色の失透釉。貫入は見られない。	獸面状の足。三足香炉の脚部か。全釉される。14c後～15c前。	SK-4

注「-」:計測不可 ( ):推定



第12図 青磁(1)



第13図 青磁(2)

## 第2節 白磁

白磁は破片も含めて201点出土した。器種別には碗81点、小碗33点、皿23点、杯2点、小杯12点、鉢1点、瓶13点、壺1点、袋物1点、器種不明34点である。今回実測図を掲載した13点の製作時期別の点数は15世紀代が2点、16世紀代が1点、17世紀代が6点、17世紀後半～18世紀初が1点、18～19世紀が3点である。

碗・小碗については口縁部の形態により直口、外反に大別でき、さらに口唇部が無釉のものとそうでないものとに細別した。第14図1は「ビロースクタイプ」と呼ばれる碗の口縁部である。同図12は中国の漳州窯産の皿で、底部外面全体に1mm前後の砂粒が付着しているのが特徴である。

第5表 白磁出土状況

器種・分類	出土地		SK								SW-1	II層	III層	トレンチ	明治時代 裁判所	SK-2+ SK-4	合計
	外反	口縁部	1	2	3	4	5	6	14	16							
碗	直口	施釉									1	9	3		1		13
	直口	口禿									2						2
	外反	施釉	1								6				1		8
	外反	口禿	3								1	5	2				11
	胸部		2	2							22	5	3	1			35
	底部		1		1				1		5	2		1			11
小碗	口～底										2						2
	直口	施釉									1						1
	直口	口禿							1		1						2
	外反	施釉									2						2
	外反	口禿									1	13		1			15
	底部										10			1			11
皿	口縁部								1		6	1			1		9
	胸部										1						1
	底部		1			1					9	1		1			13
杯	底部										2						2
	口～底										2						2
小杯	口縁部		1	1							4						6
	底部										4						4
鉢	口縁部				1												1
瓶	口縁部										4						4
	頸部										1	2					3
	胸部		1		1						3			1			6
壺	口縁部		1														1
袋物	底部										1						1
不明	胸部		2		1	1	1		1	1	22	2					31
	底部		1								2						3
	合計		10	6	2	4	2	1	4	2	1	141	16	4	7	1	201

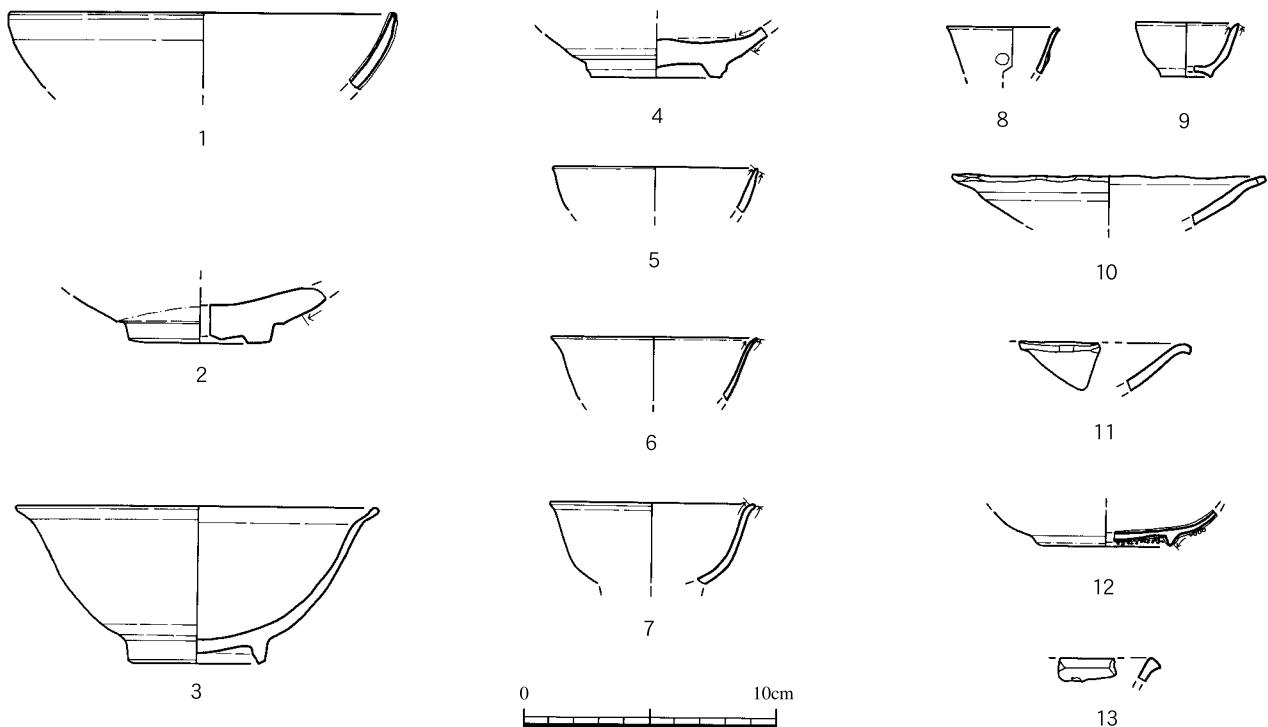
注「+」:接合の意

第6表 白磁観察一覧

単位:cm

図番号	器種	部位	分類	口径	素地	釉薬	貫入	产地・年代	観察事項		出土地	
				器高					内外面にみえる。透明釉。	ビロースクタイプ。		
第14 図 ・ 図 版 7	碗	口縁部	外反	15.4	白灰色。小さなスキマ。黒色細粒少し含む。	素地の色で白灰色にみえる。透明釉。	内外面にある 15c前～中	中国 15c前～中	ビロースクタイプ。		II層	
				—	—	—						
				—	黄灰色。黒色細粒。スキマが少しある。	黄灰色。外底面は露胎。						
	皿	口～底	外反	5.6	—	—	中国 16c中～後	内面に11個、外面上に60個のピンホールあり、ピンホールは底部外面と高台内に多い。	い-1 II層			
				14.3	白色。黒色細粒をわずかに含む。	灰白色(色あせていく)。置付け所々露胎。						
				6.1	—	—						
	小碗	底部	外反	5.4	—	—	中国 福建・廣東 17c	内底にも釉がとびちら。内底にも中心に削り残し点。高台の削りが雑。削りによるシワ、ヒビあり。	SK-4			
				—	白黄色。黒色細粒。	底部は内外露胎、口縁は明灰色。						
				5.2	—	—						
	杯	口縁部	外反	8.1	白色。	透明釉。	中国 德化窯 18～19c	内・外面上にピンホールが3個。	あ-4 SK-14			
				—	—	—						
				8.2	白色。	透明釉。			SW-1 暗褐色土層			
	小杯	外反	口禿	8.1	白色。	透明釉。	中国 福建・廣東 17c	内面:文様のような点。肥前産の可能性あり。	あ-4 SK-14			
				—	—	—			あ-1 SK-2			
				4.4	白色。	透明釉。			あ-1 SK-2			
	小杯	口縁部	外反	4	—	—	中国 德化窯 18c～19前	型成形。	う-4 II層			
				2.1	白色。	透明釉、口剥げ。						
				2	—	—						
	皿	外反	輪花	12.4	白色。	乳白色。	内外面にある 17c前～中	中国 17c前～中	内面に1個、外面上に6個のピンホールあり。		SK-4-1層+SK-4-2層+ あ-1SK-2	
				—	白色。黒色細粒を少し含む。	全面に透明釉。						
				—	—	—						
	皿	底部	外反	5.2	白灰色。	黄灰色。	中国 漳州窯 17c前～中	外底一面に砂付着。(漳州窯の特徴)	SK-5			
				—	明黄色。	明灰色。						
				—	—	—			SK-4			

注「-」:計測不可、「+」:接合の意



第14図 白磁

### 第3節 染付

中国産染付は破片も含めて701点出土している。器種は碗が大半を占めており、次に皿、少數ではあるが鉢も出土している。概ね近世以降の資料である。今回は主に遺構に伴う資料を中心にして報告していく。

第7表 染付出土状況

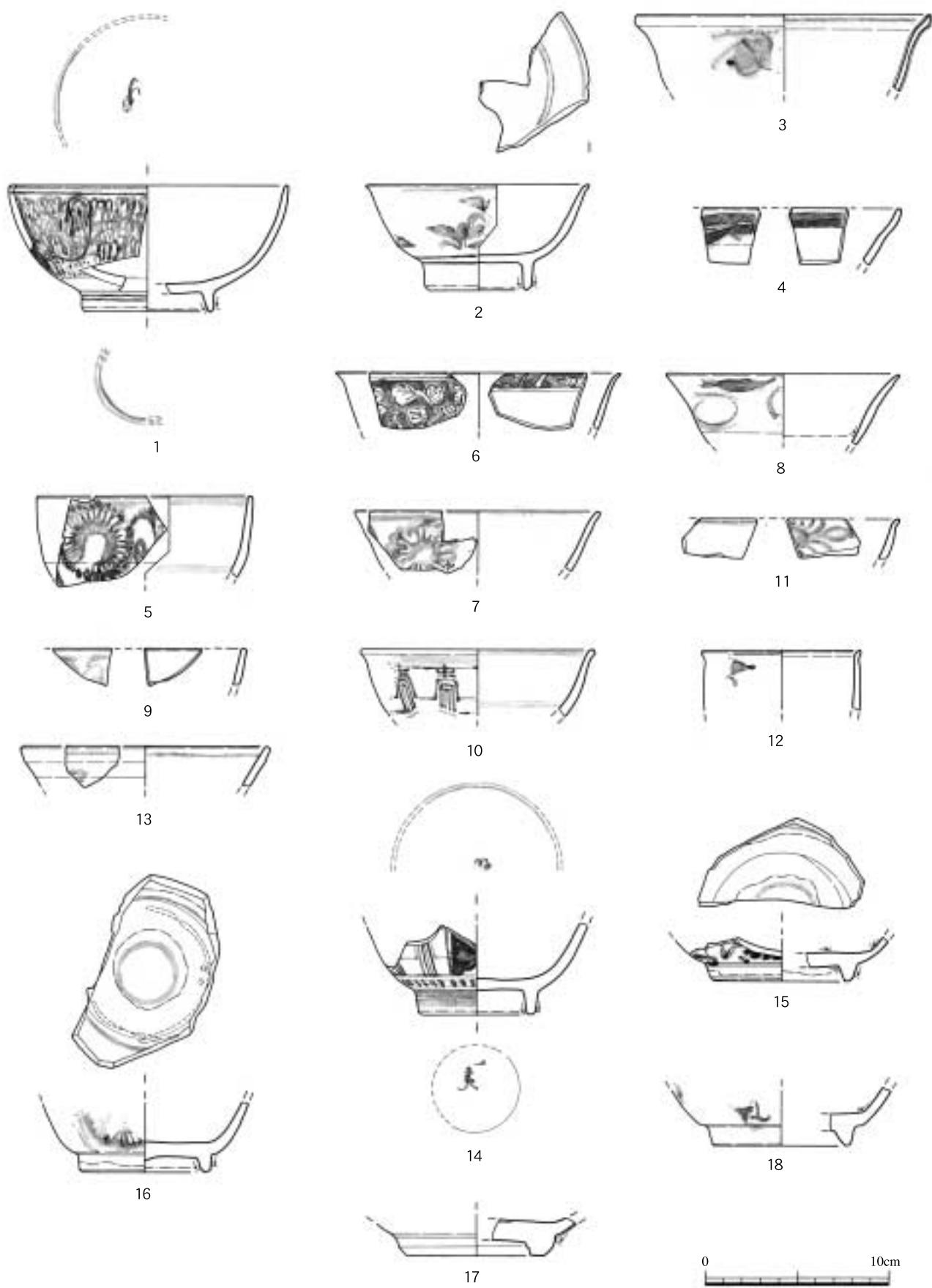
器種・分類	出土地	SK											SP-20	SW-1	土坑墓 I層	II層	III層	トレンチ	明治時代 裁判所	壁面 清掃中	合計	
		1	2	4	5	6	10	14	15	16	17											
碗	直口	口～底														1	59	4				1
		口縁部	2	2	1	2			3							1						74
	外反	口～底														1						1
		3	3					4				2	1	2		104	4	1	2	1	1	127
	内湾	口縁部		1	1																	2
	口折															2						2
小碗	胴部	6	7	2		1		1	2		2		2		188	6	4	4	2	227		
	底部	14	3	2			1		1		3		3		128	4	6	4	1	167		
															1		2				3	
皿	直口	口～底											1					1				2
		口縁部													8							8
	外反					1									13							14
	底部														1							1
鉢	胴部							1							7			1				9
	底部	5		1									1		17	1	2	1				28
杯	口縁部														1							1
小杯	底部		1																			2
瓶	頸部	1																				1
	胴部								1						1							2
蓮華	口縁部														1							1
不明	口縁部				1										1							2
	口縁部														18	2						20
	胴部														5							5
合計		29	17	8	1	5	1	9	2	1	6	1	9	1	557	22	13	15	4		701	

第8表 染付観察一覧

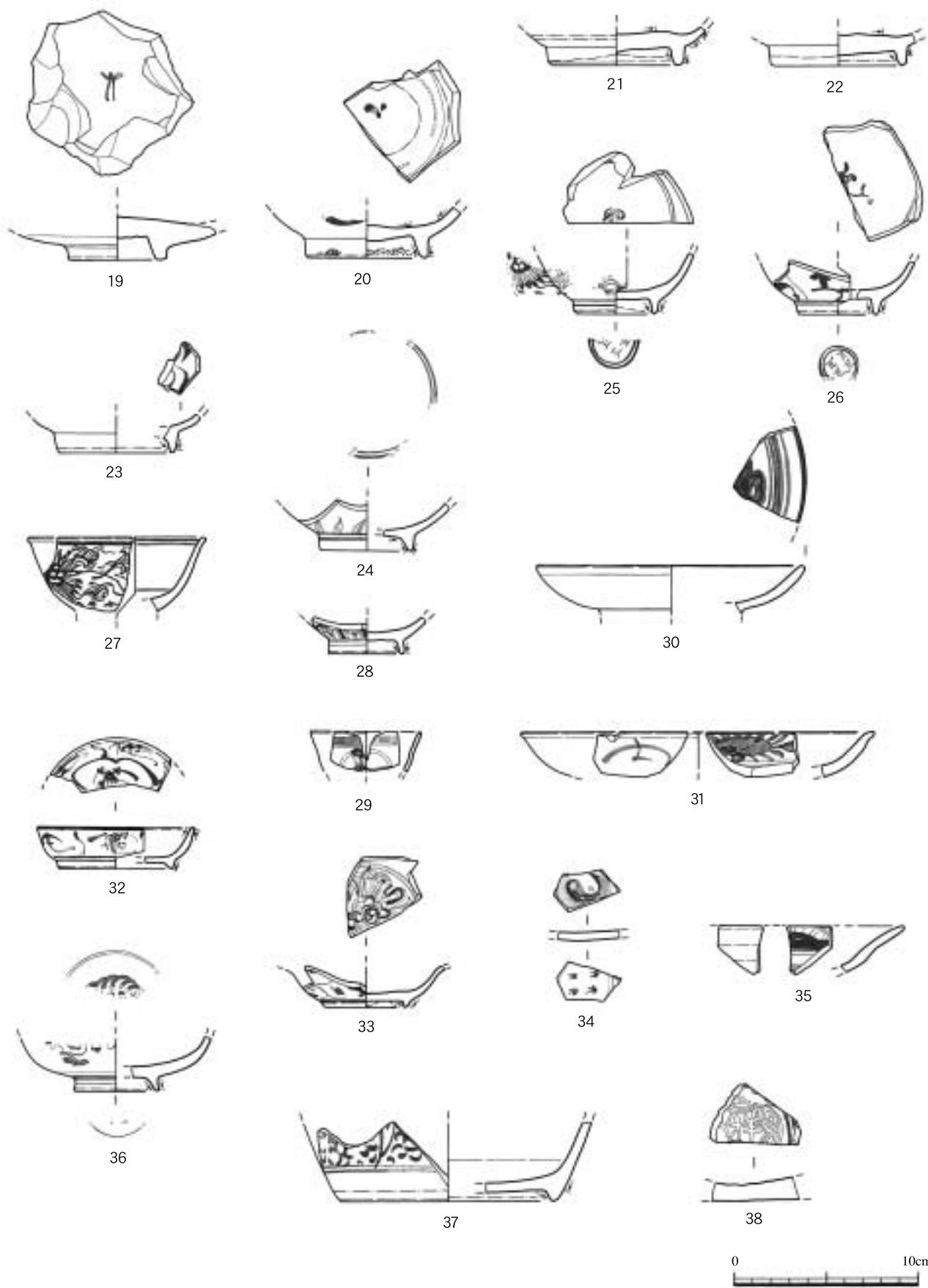
単位:cm

図番号	分類	部位	口径	器高	底径	釉薬	文様	貫入	出土地	
1	直口碗	口～底	15.0	6.8	6.9	疊付を除いて薄く施釉される。	外面胴部全体に文様が見られるが、釉内で呉須が滲み、文様構成は不明。内面には圓線と内底面にも文様が見える。17c前～中。	なし	II層	
2	外反碗		12.0	5.7	5.3	高台下部から畳付にかけて露胎。素地に気泡が見られるため、器表に小孔が見られる。	外面胴部に草文。内面には界線が見られる。18c前～中。	なし	II層	
3	内湾碗	口縁部	16.0	-	-	内外面ともに厚く施釉。素地に気泡が見られるため、器表に小孔が見られる。釉色は灰白色。	外面に草文と界線、内面口縁部直下には界線。18c前～中。	内外面ともに細かい貫入が明瞭に見られる。SK-4 3層		
4			-	-	-	内外面ともに薄く施釉。釉色は青灰色気味の白色。	外面口縁直下に帶文。内面口縁直下に帶状の界線。18c前～中。	内外面ともに細かい貫入が見られる。SK-2		
5	直口碗		11.6	-	-	内外面ともに薄く施釉。釉色は青灰色。	外面に菊花文。内面には帶状の界線が2条見られる。呉須の色には斑が見られる。18c前～中。	内外面ともに細かい貫入が見られる。SK-2		
6	外反碗		15.4	-	-	内外面ともに薄く施釉。	外面に青地に白抜きの草花文。内面には花文と思われる文様が見られる。17c前～中。	なし	SW-1 暗褐色土粘質	
7			13.2	-	-	内外面ともに薄く施釉。口唇部はとくに薄くなる。	外面に雜な描写的菊花文。内外面口縁部直下に界線。18c前～中。	一部にかなり粗い貫入が見られる。SK-2		
8			12.6	-	-	内外面ともに薄く施釉。	外面には丸文。口縁部直下には幅が一定しない界線。18c前～中。	なし	II層	
9	直口碗		-	-	-	内外面ともに薄く施釉。	口唇部には呉須が施される。外面には筆書き文様が見られる。17c前～中。	なし	SK-2	
10	外反碗	底部	12.6	-	-	内外面ともにやや厚く施釉。	外面胴部に寿字文が見られる。内面には界線が見られる。18c前～中。	なし	II層	
11	外反皿		-	-	-	内外面ともに薄く施釉。	外面口縁部直下に界線。内面には草花文。18c前～中。	なし	SK-6	
12	器種不明		8.6	-	-	内外面ともにやや厚く施釉。	外面は葉文と界線。内面は無文。18c前～中。	なし	SK-6	
13	直口碗		13.4	-	-	内外面ともに薄く施釉。	外面には筆書きの文様か。内面には界線。18c前～中。	内外面ともに細かい貫入が見られる。SK-4 1層		
14	碗	底部	-	-	6.3	疊付を除いて全釉される。外面はやや厚く施釉される。	外面胴部に寿字文が、その下部に簡略化された蓮弁文が見られる。外底面には「和美」の文字が入る。18c前～中。	なし	SW-1 石粉混 暗褐色土層	
15			-	-	7.6	内外面ともに薄く施釉。外面高台下部から外底面の一部は露胎。	外面胴部に文様が見られるが全体構成は不明。内底面には圓線。呉須は暗緑色。18c前～中。	なし	SK-2	
16			-	-	7.6	内外面ともに薄く施釉。高台の一部は露胎。内底面は輪状に釉剥ぎがなされる。	外面には菊花文、内底面には界線が見られる。18c前～中。	なし	II層	
17			-	-	7.4	内外面ともに薄く施釉。素地に気泡が見られるため、器表に小孔が見られる。内底面、高台以下は露胎。	18c前～中。	なし	SK-4 3層	
18			-	-	7.4	内底面を除いて全釉される。素地に気泡が見られるため、器表に小孔が見られる。	外面に菊花文が見られる。内面には文様は見られない。18c中～後。	粗い貫入が内外面ともに見られる。	II層	
19			-	-	5.3	全釉される。疊付には砂粒が付着し、焼台から離した際の割れが見られる。	内外面ともに界線が見られる。内底面には崩れた「大」の字状の文様が見られる。17c前～中。	なし	II層	
20			-	-	6.6	内外面ともに薄く施釉。全釉される。疊付には砂粒が大量に付着する。	外面には丸文か。内底面には斑点状の文様が見られる。18c前～中。	なし	II層	
21	碗	底部	-	-	6.8	内外面ともに薄く施釉。高台下部以外は全釉される。	18c前～中。	なし	II層	
22			-	-	6.8	内外面ともに薄く施釉。高台下部以外は全釉される。素地に気泡が見られるため、器表に小孔がわずかに見られる。	18c前～中。	なし	SK-4 1層	
23			-	-	6.2	内外面ともに薄く施釉。高台下部以外は全釉される。釉厚は斑が見られる。	内底面に草文か。17c前～中。	なし	SK-2	
24			-	-	5.0	内外面ともに薄く施釉。疊付と外底面中央は露胎。	胴下部に線描きの蓮弁文と高台に2条の界線が見られる。17c前～中。	なし	II層	
25			-	-	4.4	内外面ともに薄く施釉。高台下部以外は全釉される。	外面胴部に菊唐草文とその下部に略された蓮弁文。外底面には解説不明の銘款。内底面は満巻文が見られる。18c後～19c中。	なし	II層	
26			-	-	4.1	内外面ともに薄く施釉。高台下部以外は全釉される。外面高台脇の釉はやや厚くなる。	外面には仙芝祝寿文、外底面には解説不明の銘款。内底面にも文様が見られるが全体構成は不明。18c前～中。	なし	SW-1 暗褐色土粘質	
27	外反碗	口縁部	9.6	-	-	内外面ともに薄く施釉。	外面胴部に菊唐草文とその下部に略された蓮弁文が見られる。内面には2条一単位とした圓線、界線が見られる。18c後～19c中。	なし	SW-1 暗褐色土粘質	
28	碗	底部	-	-	4.2	内外面ともに薄く施釉。素地に気泡が見られるため、器表に小孔がわずかに見られる。	胴下部にはラマ式連弁文が見られ、高台には2条の界線が見られる。15c中～後？	なし	III層	
29	杯	口縁部	6.0	-	-	内外面ともに薄く施釉。	外面には四方櫻文と人物画、内面には雷文と界線が見られる。17c前～中。	なし	II層	
30	直口皿	口縁部	14.4	-	-	内外面ともに薄く施釉。	口唇部が尖る直口皿。外面には界線、口唇部は呉須が施され、内面には帶状の圓線が見られる。内底面にも文様が見られるものの全体構成は不明。18c。	なし	II層	
31	外反皿	口縁部	19	-	-	内外面ともにやや厚く施釉。	外面には筆書きの文様と内面に草花文と帶状の圓線。18c前～中。	なし	II層	
32	直口皿	口～底	8.4	2.2	6.1	内外面ともにやや薄く施釉。疊付から外底面までは露胎。	内外面、内底面に仙芝祝寿文。18c。徳化窯。	なし	SW-1 埋土	
33	外反皿	底部	-	-	4.5	内外面ともに薄く施釉。疊付のみ露胎。	外面には仙芝祝寿文、内底面には十字花文が見られる。15c前～中。	なし	II層	
34	不明	底部	-	-	-	内外面ともに薄く施釉。	内底面には太極図、外底面には文字様の文様が見られる。18c末～19c前。	なし	II層	
35	外反皿	口縁部	-	-	-	内外面ともに薄く施釉。	外面は無文。内面には帶状の寿花文。17c前～中。	なし	II層	
36	皿	底部	-	-	4.6	内外面ともに薄く施釉。高台と胴部の接続部は厚く施釉。	外面胴部に唐草文と界線。外底面と内底面にも文様が見られるが全体構成は不明。18c前～中。	なし	SW-1 埋土	
37	鉢	底部	-	-	11.4	内外面ともに薄く施釉。高台周辺は露胎となる。素地に気泡が見られるため、器表に小孔が見られる。	外面胴部に唐草文か。呉須は滲む。19c初～中。	なし	II層	
38	不明	底部	-	-	-	内外面ともに薄く施釉。素地に気泡が見られるため、器表に小孔が見られる。	内底面には「祥」の字を中心に配置した文様が印刻される。17c前～中。	なし	II層	

注 「-」:計測不可



第15図 染付 (1)



第16図 染付 (2)

## 第4節 鉄釉染付

鉄釉染付は破片で2点出土している。器種が判別でき、何れも碗である。2点ともⅡ層から出土しており近世以降か。

## 第5節 瑞璃釉

瑞璃釉は破片も含めて6点出土した。器種には碗、小杯、瓶、蓋がある。図化した5点は全て中国産で、17~18世紀に作られたものである。何れも外面に瑞璃釉をかけており、貫入はない。

## 第6節 翡翠釉・三彩

翡翠釉・三彩は各々1点ずつ出土した。翡翠釉は皿の底部で、三彩は蓋である。

## 第7節 宜興窯

宜興窯は破片で3点出土している。器種が判別できる資料は1点得られており、皿である。何れも小物で宜興窯独特の泥釉が施される。Ⅱ層から出土していることからおそらく近世以降と考えられる。その他はSK-1とSP-20から各1点ずつ出土している。

## 第8節 色絵

色絵は破片も含めて22点出土している。器種が判別できる資料は11点得られており、碗、皿が確認されている。そのうち碗が大半を占めており、草花文や蓮弁文、寿字文を描く。SK-4から2点、Ⅱ層から12点出土している。

第9表 鉄釉染付・瑞璃釉・翡翠釉・三彩・宜興窯・色絵観察一覧

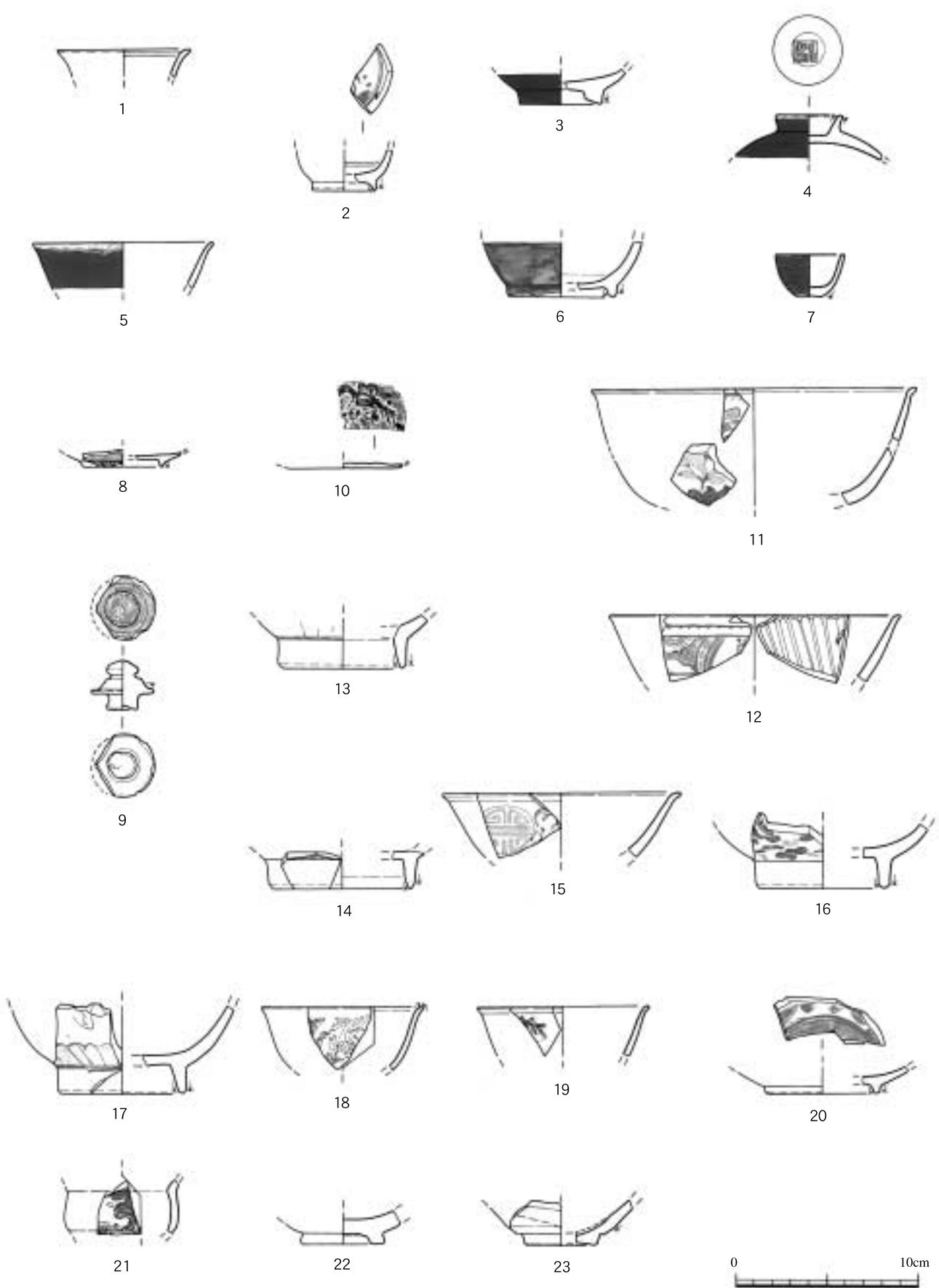
図番号	種類	器種	部位	口径	器高	底径	観察事項		出土地
							内面	外側	
1	鉄 釉 染 付	碗	口縁部	7.2	—	—	口縁部は外反し、内面は11線直下に2条の園線が見られる。釉は外面が茶褐色、内面には青白色の釉を薄く施す。素地は白色微粒子で黒色微粒子が僅かに混入する。17c前~中。	—	え-2 Ⅱ層
			底部	—	—	3.4	高台は外側に開き気味につくり、高台外側下部は斜めに面取りがなされる。外底面には園線が1条、内底面に2条の園線と山水文と思われる文様が見られる。釉は外面が茶褐色、内面には青白色の釉が覺えていて内外面共に薄く施釉され、素地は白色微粒子で黒色微粒子が僅かに混入する。17c前~中。	—	う-5 Ⅱ層
3	瑞 璃 釉	碗	底部	—	—	4.4	素地は白色、混入なし。色調は群青色。貫入なし。釉葉は内面:透明釉。外側:瑞璃釉。蓋付~高台内露胎。中国 景徳鎮 17c後~18c前。	—	う-4 Ⅱ層
4		蓋	把手	—	—	3.7	素地は白色、混入なし。色調は群青色。貫入なし。釉葉は内面:透明釉。外側:瑞璃釉。蓋付:露胎。中国 景徳鎮 18c。高台内に鉛。	—	客土
5		碗	口縁部	9.8	—	—	素地は白色、混入なし。色調は群青色。貫入なし。釉葉は内面:透明釉。外側:瑞璃釉。中国 17c。	—	う-5 Ⅱ層
6		瓶	底部	—	—	5.8	素地は白色、混入なし。色調は薄い群青色。貫入なし。釉葉は内面:露胎。外側:瑞璃釉。高台内:透明釉。蓋付:露胎。中国 17c中~後。	—	客土
7		小杯	口~底	3.8	2.3	1.3	素地は白色、混入なし。色調は群青色。貫入なし。釉葉は内面:透明釉。外側:瑞璃釉。外底面:露胎。17c後~18c。	—	う-3 Ⅱ層
8	翡翠釉	皿	底部	—	—	4.4	素地は、暗黃褐色で、青緑色もしくは黄緑色の釉がかけられる。ただし、蓋付と高台内は露胎である。高台外側には斜め方向の筋が並ぶ。17世紀前半~中頃に中國で作られたものである。	—	あ-2 Ⅱ層
9	三彩	蓋	—	—	—	—	素地は黄褐色で、外側のみに黄緑色の釉葉がかけられる。15世紀に中國華南地方で作られたものである。	—	あ-2 SP-20
第17 図 版 9	宜興窯	皿	底部	—	—	6.0	内底面に梅樹文が見られる皿か。梅樹文は陽刻で内底面全体に描かれていたと考えられる。僅かに見られる脣部への立ち上がり部から緩やかに脣部へ移行していくものと見られる。清朝時代。	—	う-1 Ⅱ層
		口	口~脣	18.7	—	—	口縁部は若干外反し、口唇部は丸みを帯びる。朱線で葉文の輪郭を縁取り、中に線と黄の染料を入れる。口縁部直下には園線と半円を繋ぎ合わせた帶文が配され、脣下部には朱で蓮弁文を配する。釉は薄く施される。17c。	—	う-6 SK-1
		口	口縁部	15.8	—	—	口縁部は若干外反する。脣部に朱線で半截された花文を交互に描き、帯の字を一定間隔に入れていく帶文が見られる。釉はやや厚く失透釉。素地は密で黒色微粒子が混入する。17c。	—	客土
		底部	—	—	6.2	14と文様のモチーフは類似する。釉はやや厚く失透釉で蓋付のみ露胎である。素地は密黒色微粒子が混入する。17c。	—	い-5 Ⅱ層	
		口	口縁部	—	—	7.5	底部の器壁は薄い。底部には朱線で線刻蓮弁文状の文様が描かれる。釉は薄く施され、高台下部から蓋付にかけて露胎となる。17c。	—	う-6 SK-1
		底部	—	—	—	—	口縁部は若干外反する。脣部に円形状の寿字文と四隅に蝙蝠が描かれる。色は剥落し明瞭ではない。釉は厚く失透釉。素地は密で黒色微粒子が混入する。18c後、福建。	—	SW-1 暗褐色土粘質
		口	口縁部	15.8	—	—	高台は高く、大振りの碗になると思われる。外面脣部に灰、黄色で描かれた草花文が見られる。釉はやや厚く失透釉で蓋付のみ露胎である。素地は密。	—	客土
		底部	—	—	7.2	13と同様に高台は高く、大振りの碗になると思われる。底部から脣部にかけての立ち上がりは急となる。底部に線刻蓮弁文状の文様を描く。脣部は朱、黄色で草花文を、内底部にも帯状の園線が配される。釉はやや厚く失透釉で蓋付のみ露胎である。素地は密黒色微粒子が混入する。17c。	—	客土	
		口	口縁部	—	—	7.5	高台は若干外反し、口唇部は尖る。脣部には草花文が描かれるがほとんど色が剥落しており、緑色のみが僅かに残存する。釉は薄く施される。17c。	—	え-6 Ⅱ層
		底部	—	—	8.8	—	13と同様に高台は高く、大振りの碗になると思われる。底部から脣部にかけての立ち上がりは急となる。底部に線刻蓮弁文状の文様を描く。脣部は朱、黄色で草花文を、内底部にも帯状の園線が配される。釉はやや厚く失透釉で蓋付のみ露胎である。素地は密黒色微粒子が混入する。17c。	—	い-1 Ⅱ層
		口	口縁部	—	—	9.4	—	—	—
		底部	—	—	—	—	口縁部は若干外反し、口唇部は尖る。器壁は薄く脣部へは僅かに膨らみを有しながら移行する。脣部に葉文がみられ、緑の染料が残存する。釉は薄く施される。17c。	—	う-6 SK-1
		皿	底部	—	—	6.3	器壁は薄く、蓋付は尖る。釉は薄く施され、蓋付にかけては露胎。文様は内底部に朱線で園線と、葉文の輪郭を縁取った中に翡翠色の染料を入れた葉文が見られる。素地は密で黒色粒子が混入する。気泡も僅かに見られる。16c後~17c前。	—	客土
		不明	脣部	—	—	—	素地は灰黃色で、黑色粒をわずかに含む。全体に熱を受けており、内面には緑色、外面上には赤色の釉がある。外面には型押文があり、内外面に貫入がある。脣部全径は6.1cmである。	—	客土

注「-」:計測不可

## 第9節 黒釉陶器

黒釉陶器は破片で4点出土したが、そのうち残りの良い2点を図化した。22は客土から出土した碗の底部で、底径は4.6cmである。高台はロクロケズリにより蛇の目状となっている。内外面に黒色の釉をかけ、高台~高台内はにぶい赤褐色(泥釉か)である。素地は灰白色で、白色粒をわずかに含む。内外面にはピンホールが多くある。18~19世紀前半に中国で作られたと考えられるが、沖縄産施釉陶器の可能性もある。

23も客土から出土した碗の底部で底径は3.6cmである。高台内~底部外面はロクロケズリで、内面~外面脣部下位に黒色の釉をかけている。脣部下位では、黒色の釉をかける前に暗赤褐色の釉(泥釉)をかけていることが確認できる。素地は明黄褐色~灰白色で黒色粒をわずかに含む。中国の明の時代に作られたと考えられる。



第17図 鉄釉染付・瑠璃釉・翡翠釉・三彩・宜興窯・色絵・黒釉陶器

## 第10節 褐釉陶器

褐釉陶器は破片も含めて1,784点出土した。そのほとんどが中国産と考えられる。器種には、壺、鉢、鍋、香炉、急須などがあるが、今回図化したものは壺と鉢のみである。製作時期は15～17世紀である。器面には、主にオリーブ～黒色の釉薬がかけられている。胎土には暗赤褐色粒、橙色粒、黒色粒、白色粒(長石か)、半透明粒(石英か)が混入している。

壺は口縁部の形態によって分類した。

I類：玉縁形(第18図1～5)

II類：方形(第18図8～10)

III類：逆L字形(第18図6・7)

IV類：「く」の字形(第19図31～34)

I～III類は主に中国産、IV類は主にタイ産である。

底部資料は、胴部への立ち上がり方と畳付の形態で分類した。

I類：直線的に立ち上がる。(第18図13・15～17、第19図18～19)

II類：底部端が外側にせり出している。(第19図21・23)

III類：内湾ないし屈曲して立ち上がる。(第19図22・24・25・28)

IV類：畠付が蛇の目状ないしそれに近い形。(第19図20)

V類：碁笥底(第19図27)

底部のI～IV類は壺、V類は鉢もしくは鍋と考えられる。

### 1. 中国産褐釉陶器(第18・19図1～28)

出土した褐釉陶器の大部分を占めている。そのほとんどが壺であり、口縁部は玉縁形(I類)もしくは方形(II類)が多い。20は底部の立ち上がりがやや外湾している。28は底部が内湾する部類だが、底部の立ち上がりが他の物と比べ、器壁が二倍ほど厚く、逆に底径は小さい。

### 2. タイ産褐釉陶器(第19図29～33・35)

シーサッチャナライ窯産(同図29・30・32)、ノイ川窯産(同図31・35)、窯不明(同図33)の壺の資料6点を図化した。タイ産褐釉陶器の壺は、頸部から口縁部がラッパ型に開くのが特徴で、大きく開くタイプ(同図29・30)と、小さく開くタイプ(同図31・32)とがある。

### 3. ミャンマー産褐釉陶器(第19図34)

34は壺の破片資料であるが、頸部から口縁部に向けて急激に外反している。胎土には暗赤褐色粒を多く含んでいる。

## 第11節 タイ産炻器

第19図36は、うー1グリットのII層から出土した、壺の肩部資料である。焼成度合いがやや軟質な陶器であることから炻器として取り扱った。内・外面ともクロロナデ痕が残り、胎土に3mm以下の白色粒、暗褐色粒、黒色粒、雲母粒をわずかに含む。色は灰色で、外面に花弁？のスタンプ文が並ぶ。タイ・スパンブリー県の(バン)バンブーン窯産で、久米島のヤッチのガマ<sup>註1</sup>に類例がある。

<註>

註1.「ヤッチのガマ カンジン原古墓群－県営かんがい排水事業(カンジン地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第6集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

第10表 褐釉陶器出土状況

器種・分類	出土地	SK																SP						SD			SW-1	ト坑 墓2	客 土	II 層	III 層	トレ ンチ	明治時代 裁判所	壁面 清掃中	SP-II- +SK-2	II 層	合 計
		1	2	4	5	6	7	8	10	14	15	16	17	2	4	6	11	12	14	20	21	23	24	28	1	2	3										
壺	I							2																									1	8			
	II																																7	8			
	III	口縁部															1															7	9				
	IV																																49	52			
	不明																															19	22				
	胴部	66	1	2																											28	1	99				
	I																															1	9				
	II							2									2														1	3					
	III	底部																													2	4					
	不明																														1	2					
鉢	III	口縁部																													9	11					
	V	底部																													1	1					
壺 or 鉢	直口	口縁部																													1	2					
	III																														1179	41	22	29	4	1441	
	胴部	34	28	13	7	2	1	2	24	4	8	6	1	1	2	2	1	2	1	1	1	1	4	2	4	5	8	42	4	1	1	48					
	I																														5	2	24				
	II																														24						
	III																														4	1	6				
	IV																														1	17					
	不明																														1	1					
鍋	V	底部																													1	1					
香炉		底部																													2	2					
急須		注口																													1	1					
不明	耳																														1	1					
直口	口縁部																														2	2					
不明	胴部	2																													1	3					
合 計		75	38	36	13	10	3	1	2	24	4	9	7	1	1	2	3	1	2	2	1	1	1	1	4	2	4	8	8	3	1397	52	27	35	4	1	1784

注「+」:接合の意

第11表 褐釉陶器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	部位	分類	口径 器高 底径	器形	調整	素地	釉薬	貫入	産地・年代	観察事項	出土地
第18 図・ 国版 10	1	壺 口縁部	I類	12.0 — —		外はロクロ?ナデ。	1mm以下の暗赤色粒、半透明 粒、橙色粒、白色粒を少し含む。 黄灰色。	灰オリーブ。頸部以 下は露胎。	外面に ある	中国 15c		い-5 SK-6
	2			12.2 — —								
	3			11.0 — —								
	4			11.5 — —								
	5			12.4 — —								
	6		III類	8.6 — —		外面は横ナデ?	1mm以下の橙色粒、白色粒、 半透明粒をわずかに含む。 灰黄色。	内・外面とも褐色。	なし。	中国 15~16c?		あ-3 SK-17
	7			13.0 — —								
	8			18.0 — —								
	9			10.0 — —								
	10			12.4 — —								

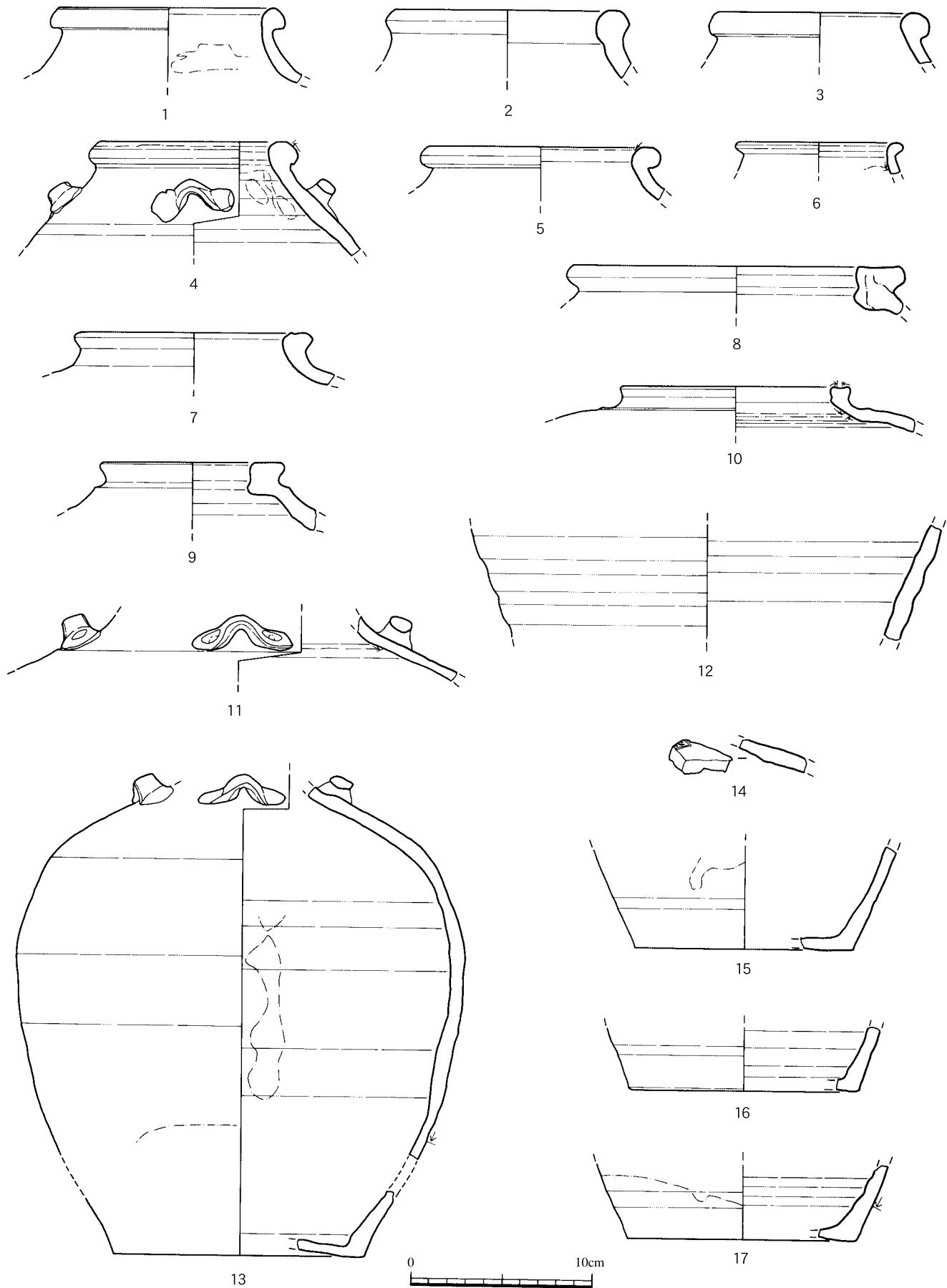
注「-」:計測不可、「+」:接合の意

第11表 褐釉陶器観察一覧

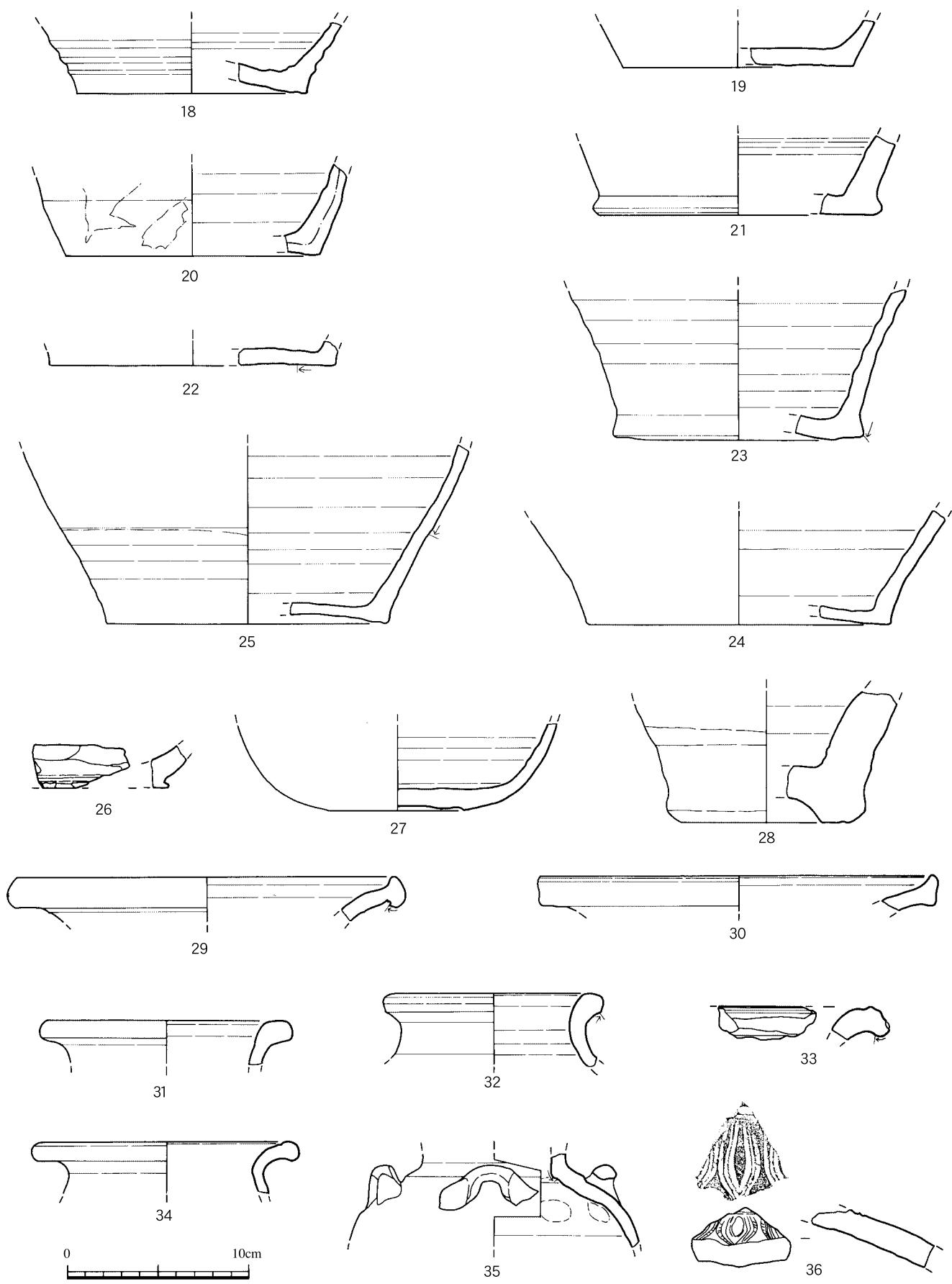
単位:cm

図番号	器種	部位	分類	口径 高 底径	器形	調整	素地	釉薬	貫入	産地・年代	観察事項	出土地	
第18 図・ 版10	壺	胴部	-	-	外耳を貼り付けた時の内面の指圧痕等はない。	内・外面ともナデ、ロクロナデ。	2mm以下の暗赤褐色粒、白色粒、半透明粒、橙色粒を少し含む。にぶい黄橙色。	内面は露胎。外面は褐色。	外面にある。	中国 15c		あ-1 II層	
				-		内・外面ともロクロナデ。	7mm以下の暗赤褐色粒、白色粒、半透明粒、黒色粒を少し含む。灰黄色。	内面はオリーブ褐色。外面は黒色。	内・外面にある。	中国 16~17c		い-2 SP-20	
				-	底部外面には庄痕と考えられるキズが残る。 13.8	内面はロクロナデ。外面はナデ。	2mm以下の半透明粒、白色粒、暗赤褐色粒、橙色粒を少し含む。にぶい橙色。	内面は露胎(灰色)。外面は暗オーリーブ色。	外面にある。	中国 15c		SP-11+ う-3 II層	
	壺	胴部	I類	-	外面に文字?のスタンプ文様。	内面はロクロナデ。	1mm以下の暗赤褐色、半透明粒をわずかに含む。黄色。	内面は露胎(黄色)。外面は褐色。	外面にある。	中国 15c		う-1 II層	
				-		外面はロクロナデのち 斜めナデ、工具ナデ。 内面はロクロナデ。	2mm以下の暗赤褐色、黒色粒、白色粒を少し含む。灰黄色。	内面はにぶい黄褐色。外面は露胎(灰色～にぶい黄色)。	なし。	中国 15~16c		う-3 III層	
				-		内面は横ナデ。外面はナデ。	1mm以下の暗赤褐色、黒色粒、半透明粒を少し含む。灰黄色。	内面は褐色。外面は露胎(灰黄色)。	なし。	中国 16c		い-5 SK-7	
	底部	I類	-	-		内面はロクロナデ。外面はロクロナデ、ケズリ。	2mm以下の橙色粒、暗赤褐色粒、黒色粒、半透明粒、白色粒を少し含む。橙色～灰色。	内面は露胎(灰色・暗褐色)で、外面の底部付近は露胎。(橙色)	なし。	中国 15~16c		SW-1 暗褐色土層	
				-		内面はロクロナデ。外面はナデ。	2mm以下の白色粒、半透明粒を少し含む。黒色粒をわずかに含む。	内面は暗褐色。外面は露胎(褐色)。	なし。	中国 15~16c		SK-4 2層	
				-		内・外面ともナデ。	8mm以下の白色粒、暗赤褐色粒、橙色粒、半透明粒、黒色粒を少し含む。灰色。	内・外面とも露胎(にぶい黄色)。	なし。	中国 15~16c		SK-4 5層	
第19 図・ 版11	壺	底部	I類	-		内面はロクロナデ。外面はロクロナデ、ナデ。底部、外面はナデ調整のため庄痕等は残っていない。	2mm以下の白色粒、半透明粒を少し、黒色粒をわずかに含む。	内面は暗褐色。外面は露胎(褐色)。	なし。	中国 15~16c		SK-4 2層	
				-		内・外面ともナデ。	8mm以下の白色粒、暗赤褐色粒、橙色粒、半透明粒、黒色粒を少し含む。灰色。	内・外面とも露胎(にぶい黄色)。	なし。	中国 15~16c		SK-4 5層	
			IV類	-		外面はナデ。	1mm以下の白色粒、半透明粒、黒色粒、橙色粒、暗赤褐色粒を少し含む。橙色、灰色。	内面は灰オーリーブ色。外面は黒褐色。	なし。	中国 16~17c		SP-11	
				-		内・外面ともロクロナデ。	2mm以下の白色粒、黒色粒、半透明粒を少し含む。灰色。	内面は暗赤褐色。外面は露胎(にぶい橙色)。	なし。	中国? 16~17c?		SW-1 暗褐色粘質土	
			III類	-		内・外面ともロクロナデ。	2mm以下の暗赤褐色粒、白色粒、半透明粒を少し含む。にぶい橙色～褐色。	内面は露胎(灰色)。外面はオーリーブ色。	なし。	中国 16~17c		い-5 SK-6	
				-		内・外面ともロクロナデ。	1mm以下の黒色粒を少し、白色粒をわずかに含む。灰黄色。	内・外面とも黒褐色。	内・外面にある。	中国 16~17c前		う-6 SK-1	
			III類	-		内面はロクロナデ、ナデ。外面はナデ。	1mm以下の黒色粒、半透明粒、橙色粒を少し含む。	内面は露胎(灰色)。	なし。	中国 15~16c		う-3 II層	
				-		内面はロクロナデ、ナデ。外面はナデ。	1mm以下の黒色粒、橙色粒、暗赤褐色粒、白色粒を少し含む。灰黄色。	内面は暗褐色。外面は暗オーリーブ色で、底部は露胎(灰黄色)。	なし。	中国 15c		客土	
			-	-		内面はナデ。外面はナデ、工具ナデ。	1mm以下の黒色粒、白色粒、半透明粒を少し含む。灰黄色。	内面は暗オーリーブ褐色。外面は露胎(橙色)。	なし。	中国? 16~17c?		あ-1 SK-2	
			鉢	底部	V類	-	内面はロクロナデ?外面はロクロケズリ、ロクロナデ。	2mm以下の白色粒、半透明粒を少し含む。橙色。	外面は露胎(橙色)。内面はにぶい黄色。	なし。	中国 15~16c	外面は熱を受け、ススが付着。	う-3 II層
			底部	III類	-	器壁が厚い。	内・外面ともナデ。	2mm以下の白色粒、半透明粒、黒色粒を少し含み粗い。灰黄色、橙色。	内面は露胎(灰色)。外面は黄色で所々露胎(褐色)。	なし。	中国 16c		客土
					-	20.6 ラッパ型に開く。	内・外面ともロクロナデ。	2mm以下の暗赤褐色粒、黒色粒、白色粒をわずかに含む。灰褐色。	内面は黒と黄色のままだ。外面は褐色(露胎?)。	なし。	タイ シーサッチャナライ窯		う-6 II層
			口縁部	IV類	-	21.4	内・外面ともロクロナデ?	1mm以下の暗赤褐色粒、白色粒、半透明粒を少し含む。	内・外面とも黒色。	なし。	タイ シーサッチャナライ窯	風化が進んでいる。	あ-1 SK-2
					-	13.2	内・外面ともロクロナデ。	1mm以下の橙色粒、暗赤褐色粒、黒色粒、白色粒を少し含む。	内面は暗褐色。外面はオーリーブ黄色。	なし。	タイ ノイ川窯		う-2 II層
			口縁部	IV類	-	12	ラッパ型に開く。	1mm以下の白色粒、半透明粒、暗赤褐色粒を少し、黒色粒をわずかに含む。灰色。	内面は露胎?(黒色)。外面は黒色。	なし。	タイ シーサッチャナライ窯		う-4 II層
					-		内・外面ともロクロナデ。	1mm以下の白色粒、暗赤褐色粒、半透明粒を少し含む。	内面は暗オーリーブ色～黒色。外面は露胎(赤褐色)。	内面にある。	タイ 16c		う-1 II層
			口縁部	-	14.6		内・外面ともロクロナデ。	暗赤褐色粒を多く、白色粒をわずかに含む。灰褐色。	内外面とも黒～オーリーブ黒。	内・外面にある。	ミヤンマー		う-4 II層
					-	口縁部は31のよう な形となる。	内面はナデ、ロクロナデ。	1mm以下の白色粒、半透明粒を少し、橙色粒をわずかに含む。暗赤灰色。	内外面とも黒色の釉が厚くかかる。内面 脇部は露胎(青灰色)。	なし。	タイ ノイ川窯		あ-1 SK-2

注「-」:計測不可、「+」:接合の意



第18図 褐釉陶器 1 (中国産)



第19図 褐釉陶器2（中国・タイ・ミャンマー産）・タイ産炻器

## 第12節 本土産陶磁器

今回の調査において本土産陶磁器は、磁器では染付・色絵・青磁・白磁・型紙摺り・銅版転写・クロム青磁が破片も含めて254点、陶器では肥前・京・薩摩・丹波などが同じく91点、合わせて345点出土している。産地については、京は伊賀・信楽などと判別がつけがたいことや、薩摩はその実態が把握できないといった問題があるので、この2種に関しては可能性が高いという意味で「～系」という表現を用いることにした。以下は特徴のみ記し、個別の所見は第13表に記載する。

### 1 磁器（第20・21図）

**染付(1～23)** 17世紀中葉～19世紀代の肥前が99点、19世紀代の瀬戸・美濃が10点、19世紀後半～20世紀代の新しいものが23点、合計132点出土している。実測したものは、肥前のみである。

肥前の器種としては、碗・小碗・皿・瓶・段重・鉢・蓋・蓮華などがある。

1～12は碗である。1～4・11は17世紀中葉～後半、5～10・12は18世紀代のものである。実測していないが19世紀代のものが多く見られる。18世紀代のものには、7・9・10のようにやや浅めで体部下半が張るいわゆる半球形碗も多い。文様は草花文が多く、コンニャク印判のものは9の菊菱文があるが、量的には多くない。高台の裏銘は少なく、12のように読み取れないものもある。

13～17は皿である。18～19世紀代のものがほとんどである。文様には花卉文が多く見られる。

18は蓋付鉢の蓋である。蓋自体はそれほど多くはない。19～22は瓶である。19～21のように体部が丸く徳利と思われるものが多いが、22は体部が直線的に伸びるので仏花瓶の可能性もある。23は小杯である。口縁部が端反するものである。

**白磁(24～26)** 白磁には、17～18世紀の肥前(24・25)、19世紀後半～20世紀前半の産地不明(26)の2種がある。実測以外の点数を含めると、前者が4点、後者が10点である。26には浮き彫りで記号もしくは番号が書かれている。

**型紙摺り(27～29)** 34点出土しており、今回は遺構出土のみ実測した。碗・小碗・皿・蓋・段重が出土している。碗は器形で見ると、27・28は腰部の張りが強く口縁部が直立するもの、29は高台からそのまま弧状に体部が立ち上がるもの、実測以外だが口縁部が大きく外反するものの大きく3つのタイプがある。文様としては、点描文、青海波文、蛸唐草文などを基調としている。28のように圓線が染付によるものも若干ある。また、変わったものとしては、赤壁の戦いの下りを八行詩にしたもののが書かれた物がある。

**色絵(30～32)** 17点出土しており、残りが良いものを実測した。碗・小碗・小皿・蓋が出土している。31は残りが良く、寿福文が施された碗である。

これらの他にはあまり見られないものがいくつかあり、個別に述べる。

33は鉄釉を施した底部で、糸引き痕が見られる。産地は限定できないが、九州地方のいずれかと思われる。34は青磁碗で、福島県相馬地方で焼かれたと思われる。35は白磁香炉で、産地は不明であるが、可能性としては薩摩か、本土産ではなく中国の可能性もある。36は薩摩系の染付で、20世紀初頭のものである。

また、クロム青磁と銅版転写は実測していないが、相当数出土している。クロム青磁は30点出土しており、小碗のものがほとんどであるが、2点方形香炉がある。銅版転写は24点出土しており、碗・小碗がほとんどである。

### 2 陶器（第22・23図）

**肥前(37～50)** 25点出土しており、器種には碗・皿・盤・瓶がある。

37～40は灰釉碗で、17世紀後半～18世紀のものである。時期および器形的にも非常にまとまったものである。釉は高台には掛けられず、光沢のあるものとないものがある。また、実測していないが内面見込みに釉剥ぎされたものが1点ある。

41～45は皿で、やはり17世紀後半～18世紀のものである。口縁部が比較的直線的に伸びるもの(41)、やや屈曲し外反するもの(42)、短く外反し平面が稜花形を呈するもの(43)など、幾つかタイプがある。

また量的に少ない物として、46は鉄釉碗、47は刷毛目文を施した碗(現川か)がある。

48・49は盤であり、内面には鉄釉による文様が描かれる。器形的には、瀬戸や京にも見られるものである。

50は底部が上げ底状の灰釉瓶である。他の器種と比べて、18世紀後半～19世紀代と新しいものである。

**京系(51～54)** 13点が出土しており、器種には碗・皿・蓋等がある。

51・54は蓋である。51は軟質の胎土に灰釉が掛けられた小蓋である。54は鉄釉により施文された蓋である。

52・53は金・赤・緑色の顔料を使った色絵が施された碗である。

**薩摩系(55～60)** 36点が出土しており、その多くは壺・袋物の体部片であるが、器種には碗・鉢・壺・袋物がある。

55は把手がついており、急須の可能性がある。56は壺である。57は碗である。58は皿である。59は袋物の体部であろう。

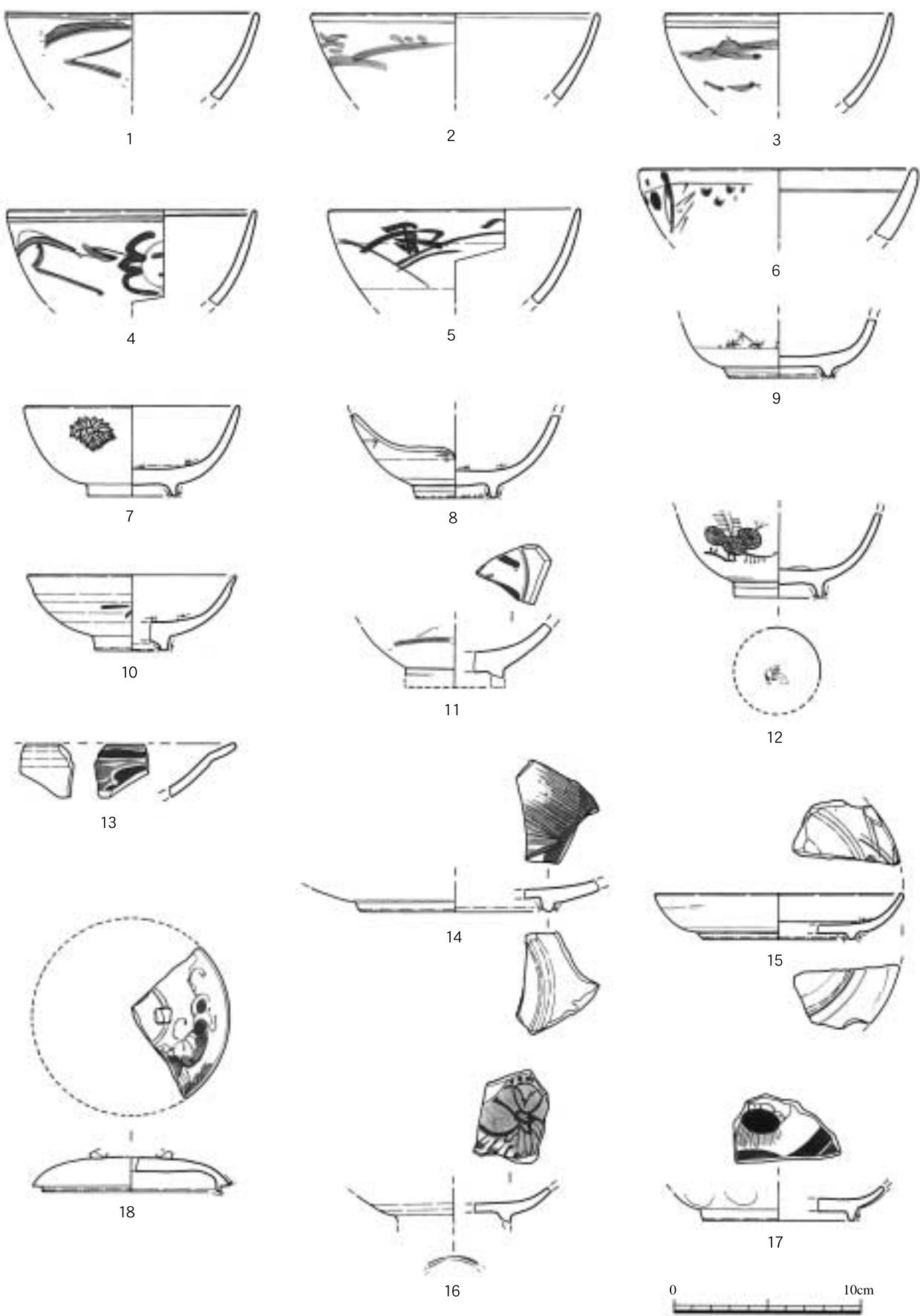


第13表 本土産陶磁器観察一覧

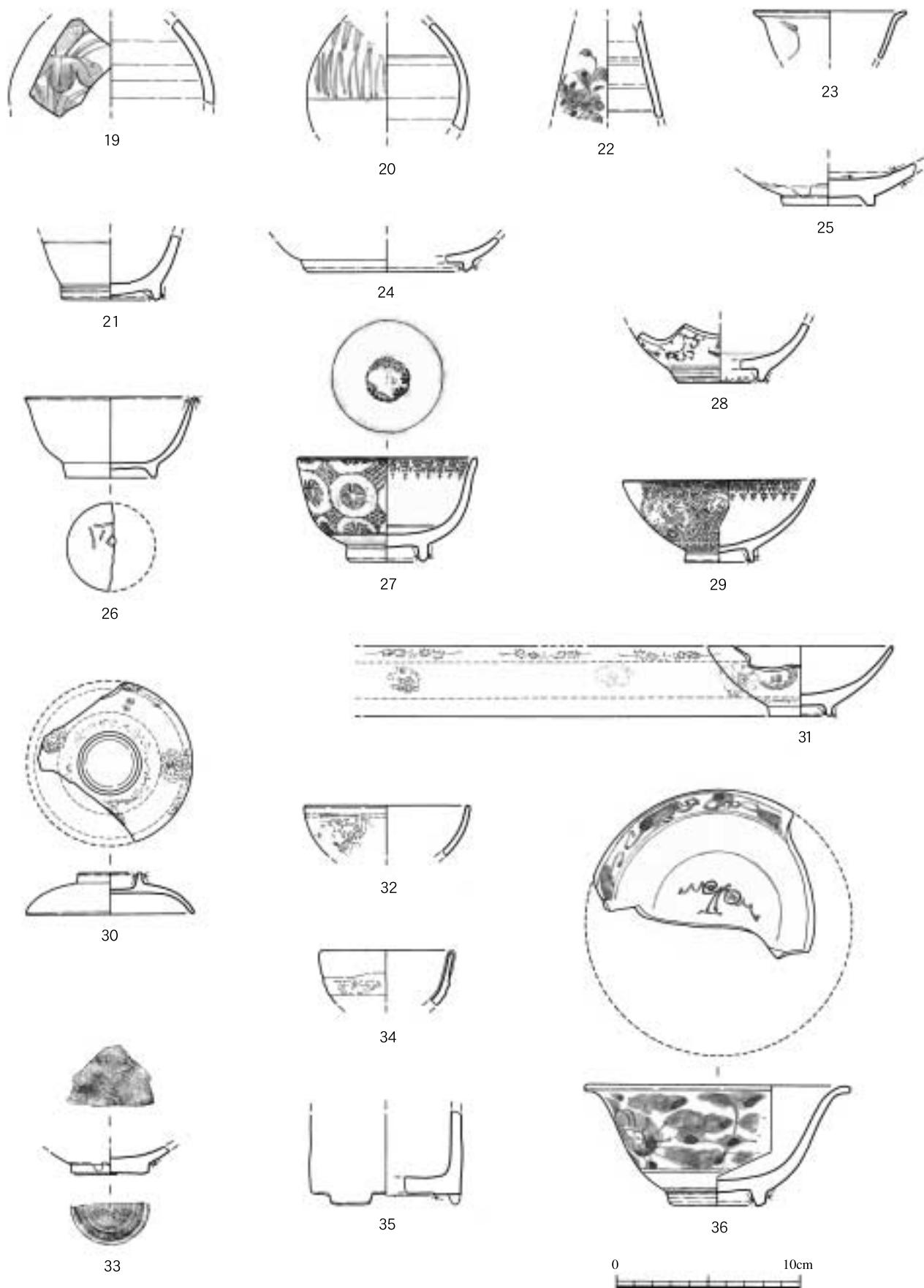
単位:cm

図番号	種類	器種	口径	底径	器高	特徴	出土地	
第20図・図版12	肥前染付	碗	13.4	—	—	外面山水文か。光沢あり。17c中後。	う-3 II層	
			15.2	—	—	外面崩れた草花文か。17c中後。	客土	
			12.0	—	—	外面山水文。光沢あり。17c中後。	う-3 II層	
			13.2	—	—	外面崩れた草花文。17c中後。	あ-2 III層	
			13.4	—	—	外面簡略化された山水文。18c前~中。	あ-1 SK-2	
			14.8	—	—	外面崩れた草花文、内面口縁よりやや下がって太めの圈線。器壁厚い。18c中後。	客土	
			11.2	4.8	4.8	半球形碗。外面菊菱文、内面蛇の目釉剥ぎ。釉・呉須が鈍い。波佐見。18c中後。	う-5 II層	
			—	4.3	—	内面蛇の目釉剥ぎ、白濁したアルミナ塗布。高台内側に砂付着。波佐見。18c中後。	う-6 II層	
			—	5.4	—	腰張形の碗。外面斜格子文。18c前。	う-1 II層	
			11.0	3.8	4.0	半球形碗。内面蛇の目釉剥ぎ、透明のアルミナ塗布。釉の発色鈍い。18c後~19c前。	う-4 II層	
			—	(5.2)	—	内面見込み、圈線内荒磯文か。17c中後。	う-4 II層	
			—	4.6	—	外面菊花文、高台見込み読み取れない裏銘あり。17c後~18c前。	う-6 II層	
			—	—	—	内面波瀾文か。肥前志田窯19c前中。	客土	
			—	10.4	—	内面見込み草花文か。18c前中。	え-6 II層	
			13.1	7.9	2.4	内面斜二重格子文、蛇の目釉剥ぎ、白濁したアルミナ塗布。波佐見。17c後~18c前。	不明	
			—	—	—	内面見込み花文。17c後~18c前。	う-6 SK-1	
			—	8.0	—	内面見込み花文か。高台見込み釉剥ぎ。釉・呉須の発色悪い。19c前中。	不明	
			蓋	9.4	—	外面花唐草文か。かえり部径10.4cm。かえり部に砂付着。18c中後。	あ-4 SK-14	
		瓶	—	—	—	外面草花文。17c中後。	う-6 II層	
			—	—	—	外面二重網目文。17c中後。	う-6 II層	
			—	5.4	—	内面未調整。胎土は軟質。17c中後。	う-1 II層	
			—	—	—	仏花瓶もしくは水注。外面縱方向に展開する草花文。17c中後。	あ-1 SK-2	
		小杯	8.3	—	—	口縁端反。器壁が2mmと薄い。19c代。	あ-1 SK-2	
			—	8.6	—	釉の発色鈍い。肥前17c中後。	SK-4 1層	
		皿	—	5.0	—	内面蛇の目釉剥ぎ、肥前17c後。	う-3 II層	
			9.2	4.8	4.3	高台見込みに浮き彫りがあるが、読み取れない。20c前。	う-6 SK-1	
		碗	9.8	4.4	5.6	直立する器形。外面点描文地に円形窓絵(中に菱花)。内面見込みに菊花文。	う-6 SK-1	
			—	4.6	—	外面点描による花唐草文か。高台圈線は染付による。肥前系か?	あ-1 II層	
			10.4	3.8	4.5	外面青海波文に五弁花形窓絵(中に鳥)。	う-6 SK-1	
		蓋	9.0	—	—	つまみ径3.4cm。外面上方に波文。	客土	
			9.8	3.2	3.8	外面上方唐草文、中位に寿福文、菊花文、下位に波文。30に文様構成類似。	い-6 II層	
		碗	9.0	—	—	外面蜻?唐草文。	客土	
			—	—	—	香炉? 鉄釉。	客土	
		小碗	—	4.1	—	外面鉄釉。底部糸引き痕。	客土	
			7.1	—	—	内面・外面上方に青磁、貫入りあり。外面下方は褐色で無数の小孔あり。相馬の19c後か。	客土	
		香炉?	—	6.8	—	底部釉剥ぎ。脚3方向。外面の釉には細かいヒビが薄く入る。薩摩もしくは中国か?	客土	
			14.3	6.5	5.2	外面大きめの花文、内面上方唐草文? 見込み不明。薩摩20c前半か。	あ-3 SK-17	
		灰釉碗	—	4.2	—	胎土軟質。釉は灰色で薄い。体部下半の棱がきつめ。17c後~18c前。	え-3 II層	
			—	4.2	—	胎土軟質。釉は灰色で光沢あり。体部下半の棱がきつめ。17c後~18c前。	う-5 II層	
			—	—	—	胎土軟質。釉は内面灰色で光沢あり、外面は青緑色。17c後~18c前。	う-3 II層	
			—	4.3	—	胎土軟質。釉は灰色で光沢なし。17c後~18c前。	あ-3 II層	
		肥前陶器	13.2	4.4	3.3	胎土硬質。釉は透明感があり、内面コバルト色、外面は黄、緑色。銅線釉? 内面見込み釉剥ぎ。17c後~18c前。	あ-1 SK-2	
			—	—	—	胎土軟質。口縁部は大きく屈曲し外反。釉は外面透明感のある灰色、内面青緑色。17c後~18c代。	う-3 II層	
			13.9	—	—	胎土硬質。鉄釉。口縁部は棱花形。17c後~18c代。	客土	
			—	4.7	—	胎土軟質。釉内面光沢のある青緑色、外面灰色。内面見込み釉剥ぎ。17c後~18c前。	不明	
			—	6.0	—	胎土軟質。釉内面青緑色、外面光沢のある灰色。内面見込み釉剥ぎ。17c後~18c前。	客土	
		鉄釉碗	—	3.4	—	胎土硬質。鉄釉。17c後~18c前。	不明	
			—	3.6	—	胎土は緻密で硬質。釉は透明感のある深緑色。白土化粧、巻き刷毛目。高台見込みにも掛かる。17c後~18c前。現川か?	客土	
		盤	23.6	—	—	胎土軟質。灰釉。内面見込み鉄釉色絵。口縁部が短く巻き込む。	あ-2 II層	
			18.9	—	—	釉は透明感のある灰釉。内面見込み鉄釉色絵、草花文。底部上げ底状。	客土	
			—	6.6	—	胎土硬質。釉は外面にややガラス状の青緑色。底部は上げ底状。18c後~19c代。	客土	
		京系陶器	小蓋	8.6	—	つまみ径2.6cm。胎土軟質。外面体部上方に灰釉。	う-4 II層	
			—	4.0	—	胎土軟質。釉はガラス状の緑白色、高台掛からず。内面見込みに赤、金、緑による色絵。小さめの花弁文か?	え-2 II層	
			—	4.0	—	胎土硬質。釉はガラス状の緑白色、高台掛からず。内面見込みに金、緑による色絵。草花文?	客土	
			蓋	—	—	つまみ径4.0cm。胎土軟質。釉は透明感のある灰色。外面に鉄釉色絵。	客土	
		薩摩系陶器	急須?	5.0	—	胎土軟質で非常に精良。釉は白色。把手の痕跡あり。	え-4 II層	
			壺	9.2	—	胎土は粗く、軟質。外面から内面口縁部にかけては黒褐色の釉が掛かる。胎土から薩摩か?	い-1 II層	
			碗	—	3.5	外面に深緑色を呈した釉が掛かる。薩摩か沖縄か?	客土	
			皿	—	4.2	黒褐色の釉が高台見込みを除き掛かる。胎土から薩摩か。	う-1 II層	
			袋物	—	—	胴部上半か。突線文と縄目文を施す。	え-1 II層	
			風炉?	—	—	釉は外面上に白色。上半に稜花? 形の窓部あり。外面鉄釉による花弁文、直線文あり。	う-4 II層	
		産地不明陶器	壺	9.0	—	内外面ともに黒褐色を呈する。内面に凹凸あり。	え-3 II層	
			鉄釉壺	11.9	—	63と同一個体。内外面ともに黒褐色の釉が掛けられる。	客土	
			急須	—	8.4	62と同一個体。内外面に黒褐色の釉が掛かるが、底面には掛からない。	え-4 II層	
			急須	—	5.3	内外面ともに暗赤色を呈する。底部には「匂?」の墨書、布痕あり。万古焼か宜興窯?	客土	
			急須	—	8.6	—	色調は明赤褐色。万古焼か宜興窯?	う-4 II層-客土
			油壺	—	—	外面鉄釉。産地は不明で、東南アジア方面の可能性も?	客土	
		丹波	大壺	—	19.0	胎土軟質で、粗い。釉は鉄釉、内面には黒色釉の流しが見られる。底部内面に輪状トチノ痕3ヶ所あり。	あ-4 SK-14	

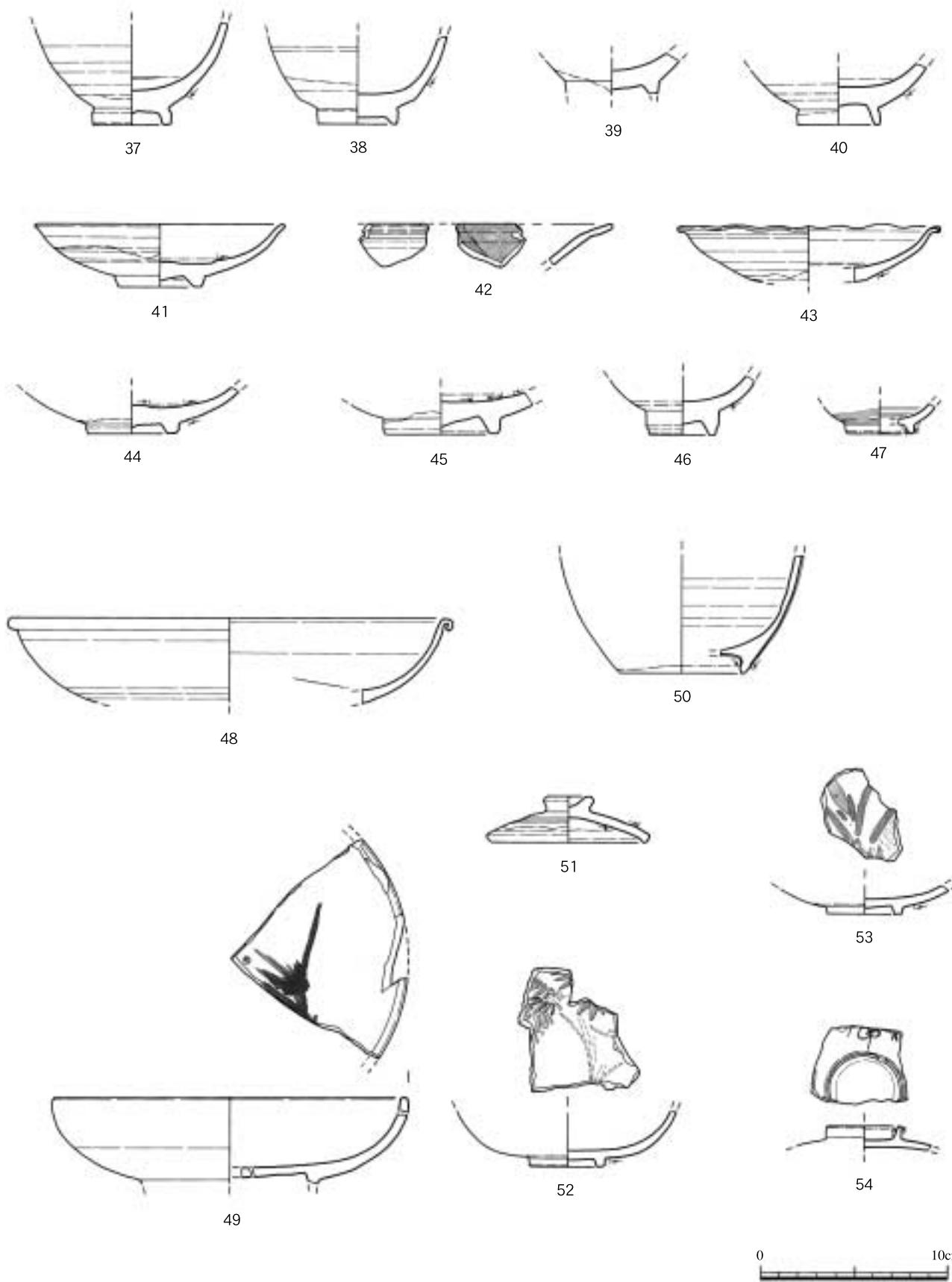
注:「-」:計測不可、「+」:接合の意、( ):推定の意



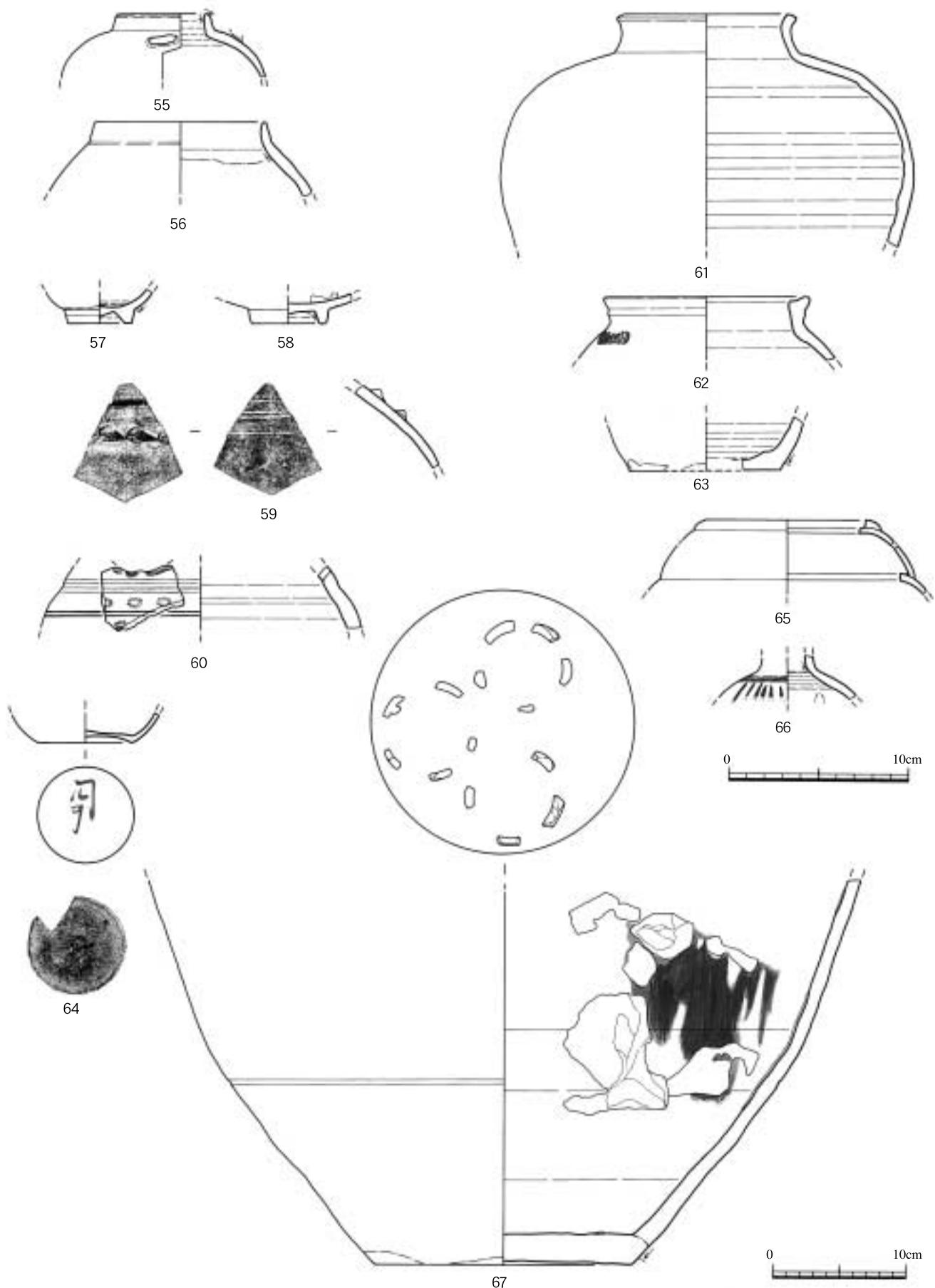
第20図 本土産陶磁器（1）



第21図 本土産陶磁器 ( 2 )



第22図 本土産陶磁器（3）



第23図 本土産陶磁器(4) 縮尺は67が1/4、その他は1/3

## 第13節 沖縄産施釉陶器

器面に釉薬をかける陶器で「上焼（ジョウヤチ）」とも呼ばれる。今回は破片も含めて1,812点（客土、不明分はさらにコンテナ4箱分）が出土した。器種には碗、小碗、皿、瓶、壺、鍋、火炉、火取、鉢、蓋、急須などがある。碗が1,322点以上と最も多く、急須、火取、鉢、壺、小碗などが続く。各器種ともロクロナデ成形し、底部外面はロクロケズリで仕上げるものが多い。素地の色は灰色系、黄色系に大別でき、白色粒、黒色粒、橙色粒などをわずかに含む。釉薬には灰釉（灰オリーブ色、オリーブ色、オリーブ黒色）、黒釉（黒色）、鉄釉（暗赤褐色、黒褐色釉）、白化粧（白化粧土+透明釉）、その他（呉須、海鼠釉、緑色釉）などがある。施釉部には貫入、ピンホールをもつ例が多い。重ね焼きをする碗、小碗、鉢については、フィガキー（口縁部～胴部を釉薬の中に浸す施釉方法）や見込みを蛇の目状に釉をはじいたり、疊付にアルミナを付ける場合が多い。遺構からの出土状況を見ると、SK-1が最も多く、SW-1、SK-3・5が続く。

以下、主な器種について概説し、詳細は観察表にゆずる。

### 1. 碗

器形、釉薬で分類した。

I 胴部が直線的で、口縁部が直口する。

A 灰釉をフィガキー（第24図1～5）

B A以外（第24図6～8）

8は胴部が丸みを持ち、口縁が直口する例である。外面の白化粧をコンパスのような道具でかきとて文様を施している。文様の中心部・外円の3カ所（計4カ所）には、コンパス状道具の支点があたったと考えられる小さなくぼみがある。半径1.8cmの円1つ・円弧3つから成る文様である。灰釉をフィガキーした底部資料については、見込み中心部に施釉（第25図26）・施文（同図23）・墨書（同図22）する例や、高台内に墨書をもつ例が多い。

II 胴部が少し丸みを持ち、口縁部が外反する。

A 全面に白化粧を施す（第24図9・10・12・15・17・18、第25図19）。見込みを蛇の目釉はぎし、呉須などの文様を白化粧が挟み込む例が多い。

B A以外（第24図11・13・14・16）。

### 2. 小碗（第26図36～43）

胴部が丸みをもち、口縁部が外反する。胴部の丸味が強い例（第26図42）や屈曲する例（同図43）、面取りをもつ例（同図37）がある。両面もしくは片面に白化粧を施し、見込みを蛇の目釉はぎする例が圧倒的に多い。

### 3. 壺

大型と小型とがある。大型（第27図51～54）は「アンダガーミ」と呼ばれ、内外面に黒色の釉をかけている。

第14表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	分類	部位	口径高 底径	調整		素地	釉薬	施釉	ピンホール	観察事項	出土地
					内面	外面						
第24 図・ 図版 16	碗	I-A	口縁部	13.9 6.5 6	ロクロナデ、底部はロクロケズリ	色は明黄褐色で白色粒、黑色粒、暗赤色粒をわずかに含む。	内・外面:灰オリーブ	フィガキー		貫入は内・外面の口縁部にある。	SW-1 埋土	
				13.8 6.4 6.8	ロクロナデ、底部～胴部中位はロクロケズリ	色は橙色で白色粒、黑色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:白色	フィガキー	内外面に多くある。	う-4 II層		
				13.6 6 7	ロクロナデ、底部はロクロケズリ	色は灰色で黑色粒をわずかに含む。	内・外面:灰色	フィガキー	内外面に少しある。	トレンチ		
			I-B	13 6.5 6	ロクロナデ、底部はロクロケズリ	色は灰色で白色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:オリーブ黒	フィガキー	内外面に少しある。	え-2 SK-3		
				14.4 — —	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰白色で黑色粒をわずかに含む。	内・外面:灰オリーブ色	フィガキー?	内外面に少しある。	え-2 SK-3	
		II	口縁部	11.8 — —	ロクロナデ	ロクロナデ	色は白色で黑色粒をわずかに含む。	内面:暗褐色、オリーブ、白、青 外面:緑のまだら	全面施釉	貫入は口縁部外面にある。	あ-2 SP-25	
				14 — —	ロクロナデ	ロクロナデ	色は黄褐色で暗赤色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:白色 外面:黒褐色	白色釉～黒褐色釉	外面に多く、内面に少しある。	え-2 SK-3	
			口縁部	11.6 6.8 6	ロクロナデ、底部はロクロケズリ	色は灰白色で黑色粒を少し含む。	内・外面:白化粧	白化粧土～文様～透明釉～見込み蛇の目釉はぎ、口縁部内面釉はぎ	内外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。口唇内面にも外面と同じ黒褐色釉。口縁直下に段あり。 貫入は内・外面にある(未烈)。外面の3カ所に、白化粧土をかきとて文様を施す。疊付けるアルミナ、口縁内面の透明釉をかきとる時に、とひかんな文様のような刻み目が出来ている。高台内の白化粧土がかきついでいる部分は、褐色である。ロクロは右まわり。	SW-1埋土 ～SW-1暗褐色土	

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意

第14表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	調整		素地	釉薬	施釉	ピンホール	観察事項	出土地
					内面	外面						
第24 図 ・ 図版 16	9	碗	II-A	口～底	12.8 6.2 6	ロクロナデ、底部はロクロケズリ	色は灰色・黄橙色で黒色粒をわずかに含む。	内面:白化粧 外面:白化粧・暗黄緑色	白化粧土→沈線・刻目。見込み蛇の目釉はぎ・暗黄緑色釉→透明釉	内外面にある。	貫入は内・外面にある(水烈)。外面に沈線、刻目文あり。疊付にアルミナ。重ね焼き時のアルミナ痕が見込みの蛇の目釉はぎ部にある。	う-6 SK-1
	10			口縁部	12.7 — —	ロクロナデ	色は黄橙色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:白化粧 外面:白化粧・緑色	白化粧土→緑色の文様→透明釉	内外面に多くある(穴は浅い)	貫入は内・外面にある。外面に緑色の文様。	え-2 SK-3
	11		II-B	口縁部	13.6 — —	ロクロナデ	色は黄橙色で黒色粒をわずかに含む。	内面:灰オリーブ 外面:黒～黒褐色	内面に灰オリーブ釉→口縁内面と外面に黒褐色釉	内外面にわずかにある。	貫入は内面、口縁部外面にある。	SW-1暗褐色 土+SW-1右敷
	12			口～底	12.2 — —	ロクロナデ	色は黄橙色。	内・外面:白化粧	全面に白化粧	外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある(水烈)。	い-5 SK-6
	13		II-B	口～底	14.2 5.8 7.6	ロクロナデ、底部はロクロケズリ	色は灰白色で黒色粒をわずかに含む。	内・外面:明オリーブ 灰色	フィガキー→見込みに円形施釉	内・外面にわずかにある。	貫入は口縁部にある。	う-3 II層+ う-4 II層
	14			口縁部	12.1 5.6 5.7	ロクロナデ	色は黄橙色で黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:灰オリーブ 色	フィガキー	内・外面にわずかにある。	貫入は口縁部にある。ロクロは左回り。	う-4 II層
	15		II-A	口～底	11.8 5.6 6	ロクロナデ、底～胴中位はロクロケズリ	色は黄橙色。	内・外面:白化粧	白化粧→見込み蛇の目釉はぎ	胴部外面上位に多く、内面にわずか。	貫入は内・外面にある(水烈)。疊付にアルミナ。	SW-1 褐色土
	16			口～底	12.8 6.3 5.6	ロクロナデ	色は黄橙色。	内・外面:暗オリーブ褐色、見込みに暗褐色釉(泥釉?)	フィガキー→見込みに円形施釉	内・外面にわざかにある。	貫入は内・外面にある(水烈)。見込みの蛇の目皿胎部は幅5mm前後と來いが、見込みの暗褐色釉は泥釉?カラス分が少ないので、焼成時の溶着防止機能は失われていないようである。	え-4 SP-8
	17		II-A	口～底	13.6 6.3 5.8	ロクロナデ、底～胴中位はロクロケズリ	色は灰色～黄橙色。	内・外面:白化粧	白化粧→見込み蛇の目釉はぎ	外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある(水烈)。重ね焼き時のアルミナ痕が見込みの蛇の目釉はぎ部にある。疊付にアルミナ。	SW-1石混じり暗褐色土+ SW-1埋土
	18			口縁部	12.8 5.7 6	ロクロナデ、底～胴中位はロクロケズリ	色は灰色～黄橙色で黒色粒を少し、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:白化粧(明オリーブ灰色)	白化粧→見込み蛇の目釉はぎ	外面に多く、内面にわずかにある。	貫入は口縁部外面、高台内面にある。重ね焼き時のアルミナ痕が見込みの蛇の目釉はぎ部にある。疊付にアルミナ。透明釉ではなく明オリーブ灰色なので、厳密には白化粧ではない。	う-4 II層+ え-4 II層
第25 図 ・ 図版 17	19	碗	II-A	口～底	12 5.8 5.1	ロクロナデ、底～胴中位はロクロケズリ	色は黄橙色。	内・外面:白化粧・呉須	白化粧→呉須文様→透明釉→見込み蛇の目釉はぎ	内・外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある(水烈)。重ね焼き時のアルミナ痕が見込みの蛇の目釉はぎ部にある。疊付にアルミナ。内・外面に呉須による文様。	あ-5 客土
	20			底部	— — 6.8	ロクロナデ	色は灰色で黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:暗オリーブ灰(腹部内上面半と見込み中心部以外は黄色っぽ変色)	施釉→見込み蛇の目釉はぎ(高台、底部外面は露胎)	内・外面に多くある。	重ね焼き時のアルミナ痕が見込みの蛇の目釉はぎ部にある。疊付にアルミナ。	う-6 SK-1
	21		—	—	— 6.4	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色は灰色で白色粒をわずかに含む。	内・外面:暗オリーブ色～オリーブ黒色	内面に薄く暗褐色釉(見込みは蛇の目状に塗り分け)→オリーブ(系)	外面にわずかにある。	底部外面に墨書。	客土
	22			—	— 6.8	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色は浅黄橙。	内・外面:にぶい黄橙色	フィガキー	内・外面に少しある。	内面に墨書。	う-6 SK-1
	23		—	胴～底	— 6.6	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色は灰白色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:暗赤褐色(文様)、灰オリーブ色 外面:灰オリーブ色	圓線・巴文→フィガキー	内・外面にわずかにある。	貫入は外面にある。胴部内面に2本の墨線。見込みに巴文。(いずれも暗赤褐色釉)疊付に砂粒が付着。見込みには重ね焼き時の砂粒が付着。	う-6SK-1+ う-5 II層
	24			II-B	— 5.8	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色はにぶい黄橙色で黒色粒をすこし含む。	内面:白化粧 外面:白化粧、呉須	白化粧→呉須文様→透明釉→見込み蛇の目釉はぎ	外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。外面に呉須による文様。疊付にアルミナ付着。見込みの蛇の目釉はぎ部に重ね焼き時のアルミナ付着。	う-6 SK-1
	25		—	—	— 6	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色はにぶい黄橙色で黒色粒を少し、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:灰色	白化粧上→灰色釉→見込み蛇の目釉はぎ	内・外面に多くある。	貫入は内・外面にある(水烈)。疊付にアルミナ付着。見込みの蛇の目釉はぎ部に重ね焼き時のアルミナ付着。	う-4 II層
	26			—	— 7.3	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色は灰白色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内・外面:灰白色	フィガキー、見込みに不正円形の施釉	なし。	底部は深く、器壁が薄い。素地はやや多孔質。	う-6 SK-1
	27		—	—	— 6.7	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色はにぶい黄橙色で黒色粒、橙色粒を少し含む。	内面:見込みに黒褐色(泥釉?) 外面:暗赤褐色	フィガキー?見込みに黒褐色の円形施釉	なし。	疊付周辺にアルミナ付着。素地はやや砂質。	い-5 SP-13
	28			—	— 6	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色は黄橙色で黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:白化粧(灰白色)	白化粧→見込み蛇の目釉はぎ	外面に少し、内面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。疊付にアルミナ付着。見込みの蛇の目釉はぎ部にアルミナ付着。	あ-1 SK-2
	29		—	底部	— 7	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色はにぶい黄橙色で白色粒、暗赤褐色をわずかに含む。	内面:露胎 外面:灰	フィガキー	なし。	器形、釉薬が30に似る。底部外面に墨書。	客土
	30			—	— 6.2	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色はにぶい黄橙色で黒色粒、透明粒をわずかに含む。	内・外面:灰	フィガキー	外面にわずかにある。	底部外面に「三」の墨書。	客土
	31		—	—	— 6.6	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色は浅黄色で黒色粒をわずかに含む。	内面:白化粧、灰オーリーブ・緑灰色の文様 外面:白化粧	白化粧→線刻文様→灰オーリーブ・緑灰色の文様→透明釉	外面に少しある。	貫入は内・外面にある(水烈)。線刻文様とその部分に灰オーリーブ・緑灰色の施釉、見込みには目跡とともに黒色の付着物。疊付はアルミナ付着。	客土
	32			碗	— 6.3	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色は灰白色で黒色粒をわずかに含む。	内・外面:灰色	フィガキー	外面に少しある。	露胎部は灰白色だが、所々赤褐色の部分もある。見込みに重ね焼き時の目跡あり。	あ-4 SK-14
第26 図 ・ 図版 18	33			—	— 6.6	ロクロナデ、底～胴下位はロクロケズリ	色は淡黄色、灰色で黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:灰	フィガキー	外面にわずかにある。	露胎部は淡黄色。見込みに砂・灰色釉が付着。	い-5 SP-13

注「-」:計測不可、「+」:接合の意

第14表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	調整		素地	釉薬	施釉	ピンホール	観察事項	出土地
					内面	外面						
34	碗	-	胴～底	-	ロクロナデ、底部外面～胴下位はロクロケズリ	色は淡黄色で黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:灰	フィガキー	なし。	露胎部は淡黄色だが一部赤褐色の部分もある。見込みに灰色釉が付着。	え-2 SK-3	
35	碗	-	胴部	-	ロクロナデ、底部外面～胴下位はロクロケズリ	色は黄褐色で白色粒をわずかに含む。	内・外面:灰色	フィガキー	外面に少しある。		あ-1 SK-2	
36	-	9.5	ロクロナデ、底部外面～胴下位はロクロケズリ	4.6	色は橙色。	内・外面:白化粧	白化粧一見込み蛇の目釉はぎ	内・外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。唇付にアルミニナ付着、見込みに重ね焼き時のアルミニナ付着。	客土		
37	-	8.8	ロクロナデ、底部外面～胴下位はロクロケズリのち面取り	4.8	色はぶい黄橙色で白色粒、黒色粒、暗赤色粒をわずかに含む。	内・外面:白化粧	白化粧一見込み蛇の目釉はぎ	外面にわずかにある。	貫入は口縁部内・外面にある。唇付にアルミニナ付着、見込みに重ね焼き時のアルミニナ付着。	あ-3 II層		
38	-	8.5	ロクロナデ、高台内～胴部下位はロクロケズリ	4.2	色は浅黄色。	内面:白化粧、黒褐色 外面:ぶい赤褐色、黒褐色	内面に白化粧土、外面にぶい赤褐色釉一ロープ部に黒褐色釉一内面に透明釉一見込み蛇の目釉はぎ	内・外面にわずかにある。	貫入は内面にある。唇付にアルミニナ付着、見込みに重ね焼き時のアルミニナ付着。高台・高台内は露胎。(高台内中心部に赤褐色釉付着)	客土		
39	小碗	-	9.9	ロクロナデ、高台内～胴部下位はロクロケズリ	色は灰白色で黒色粒を少し含む。	内面:白化粧 外面:褐色・黒色	内面に白化粧土、外面に褐色釉一ロープ部外面に黒色釉一全面に透明釉一見込み蛇の目釉はぎ	なし。	貫入は内面にある。唇付にアルミニナ付着、見込みの蛇の目釉はぎ部に重ね焼き時のアルミニナ付着。	え-2 II層		
40	-	5	ロクロナデ、高台内～胴部下位はロクロケズリ	-	色は淡黄色で橙色粒を多く含む。	内・外面:黑色	高台～高台内以外に施釉	内・外面にわずかにある。	ロクロは右回転。	明治時代裁判所確認トレント暗褐色土(赤土混じり)		
41	-	5.8	ロクロナデ、高台内～胴下位はロクロケズリ	-	色は浅黄色。	内・外面:露胎	不明	なし。		え-4 SP-9		
42	-	4	ロクロナデ、高台内～胴下位はロクロケズリ	-	色は浅黄色で黒色粒、暗赤色粒をわずかに含む。	内・外面:白化粧	外面に縦の線刻一全面に白化粧土一全面に透明釉	なし。	貫入は内・外面にある。外面に線刻。唇付にアルミニナ付着。	SW-1 暗褐色土		
43	-	4.2	ロクロナデ、高台内～胴下位はロクロケズリ	-	色は灰色で黒色粒をわずかに含む。	内・外面:オリーブ灰	高台内～胴屈曲部以外に施釉	内面に少しある。	貫入は内・外面にある。唇付に砂粒が付着。	客土		
44	盤	口縁部	-	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、暗赤色粒をわずかに含む。	内・外面:白色	全面に施釉	外面にわずかにある。		あ-1 II層		
45	-	ロクロナデ	-	-	色は褐色で白色粒をわずかに含む。	内・外面:暗紅褐色、白化粧土	内面～胴部上半に暗灰褐色釉。口縁部内面の文様部と、口縁部外面に白化粧土。	外面にわずかにある。	口縁部内面に線刻あり。	客土		
46	鉢	口～底	28.8	ロクロナデ、高台内～胴下位はロクロケズリ	色は浅黄色で黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:白化粧 外面:オリーブ黒	内面に白化粧土一外面にオリーブ黒色釉一内面に透明釉一見込みを蛇の目釉はぎ	内・外面にあら。	貫入は内面にある。唇付にアルミニナ付着、見込み蛇の目釉はぎ部に重ね焼き時のアルミニナ付着。	え-4 II層		
47	-	22.6	ロクロナデ、高台内～胴下位はロクロケズリ	10.1	色は浅黄色で黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:白化粧 外面:オリーブ黒	内面に白化粧土一外面にオリーブ黒色釉一内面に透明釉一見込みを蛇の目釉はぎ	内・外面にあら。	貫入は内面にある。唇付にアルミニナ付着、見込み蛇の目釉はぎ部に重ね焼き時のアルミニナ付着。	え-6 II層		
48	鉢?	口縁部	42.1	ロクロナデ	色は暗褐色で白色粒、透明粒、暗赤色粒を多く含む。	内面:緑色 外面:暗褐色	口縁部の内面・平坦面以外に施釉	内・外面にわずかにある。	外縁下に線刻。混入物が多い。	客土		
49	急須	胴部	-	ロクロナデ	ナデ	色は暗褐色で白色粒、黒色粒、暗赤色粒を少し含む。	内面:灰白色 外面:オリーブ黒(所々黄色に変色)	全面に施釉	外面に多く、内面にわずかにある。	貫入は外面上にある。注口と耳が同じ場所についている。注口と器面は、半円形の穴でつながる。	客土	
50	-	ロクロナデ	-	-	ロクロナデ	色は灰白色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:ぶい褐色 外面:黒色。ぶい褐色	注ぎ口がつく部分に穿孔一内面と穿孔部外面に、ぶい褐色施釉→注口をとりつける一外面に黒釉	内・外面にわずかにある。	貫入は外面上にある。胴径は19.5cmである。	客土	
51	-	胴～底	-	ロクロナデ、高台内～胴下位はロクロケズリ	色はぶい橙色～灰色で白色粒、黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:黒色(高台内はオリーブ黒)	見込み、高台外側、唇付以外に施釉	内・外面に少しある。	貫入は外面上にある。高台～高台内に砂粒が付着。見込み露胎部にアルミニナ付着。	う-1 II層		
52	壺?	口～胴	12	ロクロナデ	ロクロナデ	色は浅黄褐色。	内・外面:黑色	口縁部平坦面以外に施釉	内・外面に少しある。	貫入は外面上ある。外面に沈線。口縁平坦面は露胎でアルミニナが付着。口縁部内面には、焼成時に別の焼物片が溶着している。	う-4 II層	
53	胴部	-	ロクロナデ	ロクロナデ	色はぶい黄橙色で白色粒、黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:黑色	内面胴部上半と外面に施釉	内・外面に少しある。	貫入は外面上ある。耳がシーサーの顔をしている。	う-6 SK-1		
54	底部	-	ロクロナデ	ロクロケズリ	色は灰白色。	内・外面:黑色	唇付以外に施釉	内・外面にあら。	底部内面には余分な?素地が付着。	客土		
55	壺?	底部	-	ロクロナデ、高台内～唇付はロクロケズリ	色はぶい黄橙色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:白化粧土 外面:緑色	内面に白化粧土、外面には緑色釉唇付～高台内は露胎	外面に多くある。	外面に沈線あり。底部中心部は焼成後に穿孔しているように見える。	う-6 SK-1		
56	鍋?	口～胴	15.3	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰黄色で白色粒をわずかに含む。	内面:暗褐色 外面:黑色	受け部以外は施釉	外面に少し、内面にわずかにある。	胴径は14.2cmである。	え-4 II層	
57	鍋	-	12.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰色で白色粒を少し、黒色粒をわずかに含む。	内・外面:暗赤褐色	受け部以外は施釉	なし。		う-4 II層	
58	瓶	口～頸	3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰白色で白色粒、黒色粒を少し含む。	内・外面:黑色	頸部内面以外に施釉	内・外面にわずかにある。		う-4 II層	
59	瓶	口～胴	2.4	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰色で黑色粒を少し含む。	内・外面:黃褐色	頸部内面～外面に施釉	内・外面にわずかにある。		う-6 SK-1	
60	瓶	胴部	-	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰白色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:暗赤褐色、灰オリーブ	外面に施釉	外面に少しある。	貫入は外面上にある。格子目の線刻。「渡名喜瓶」	客土	

注「-」:計測不可、「+」:接合の意

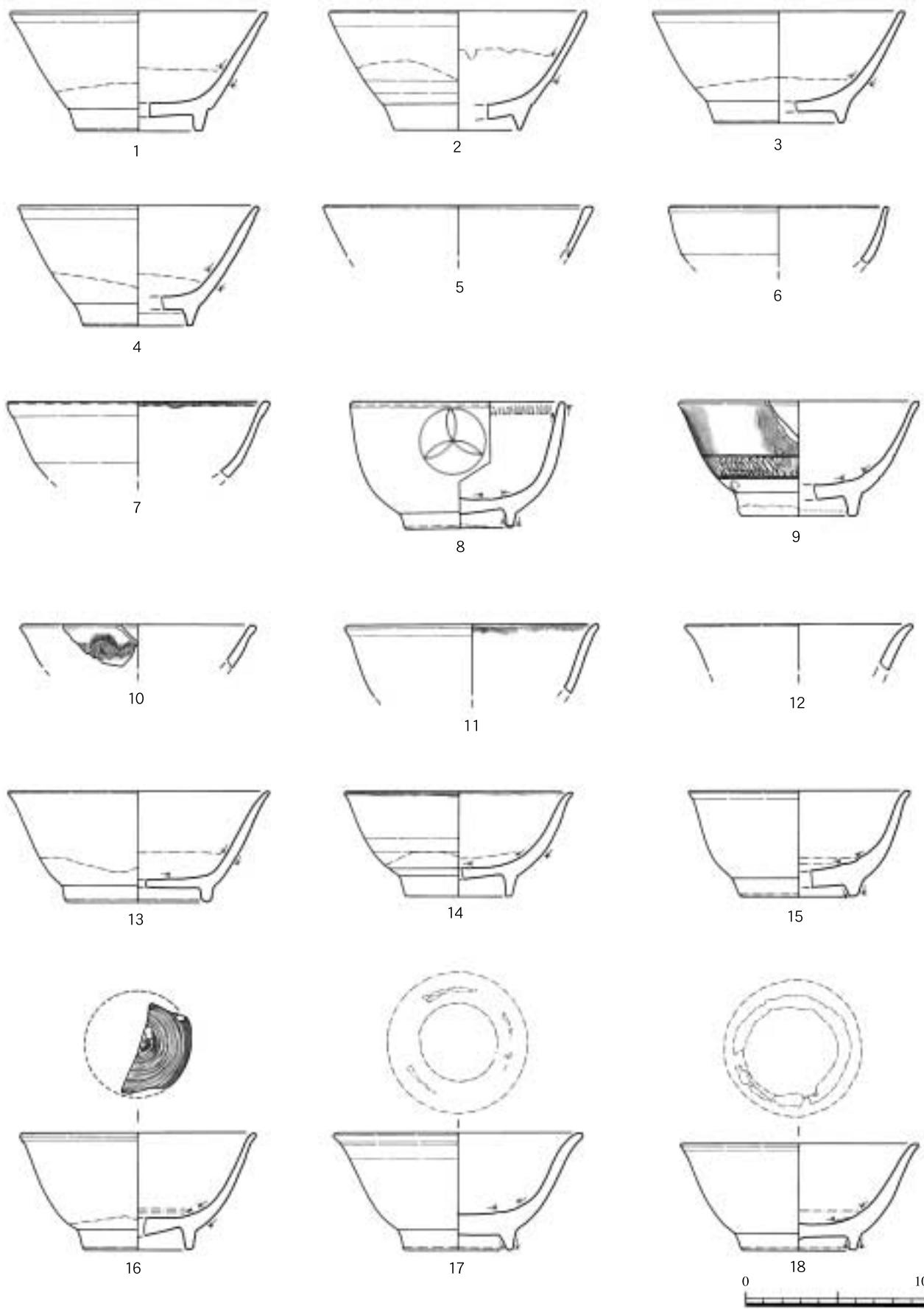
第14表 沖縄産施釉陶器観察一覧

単位:cm

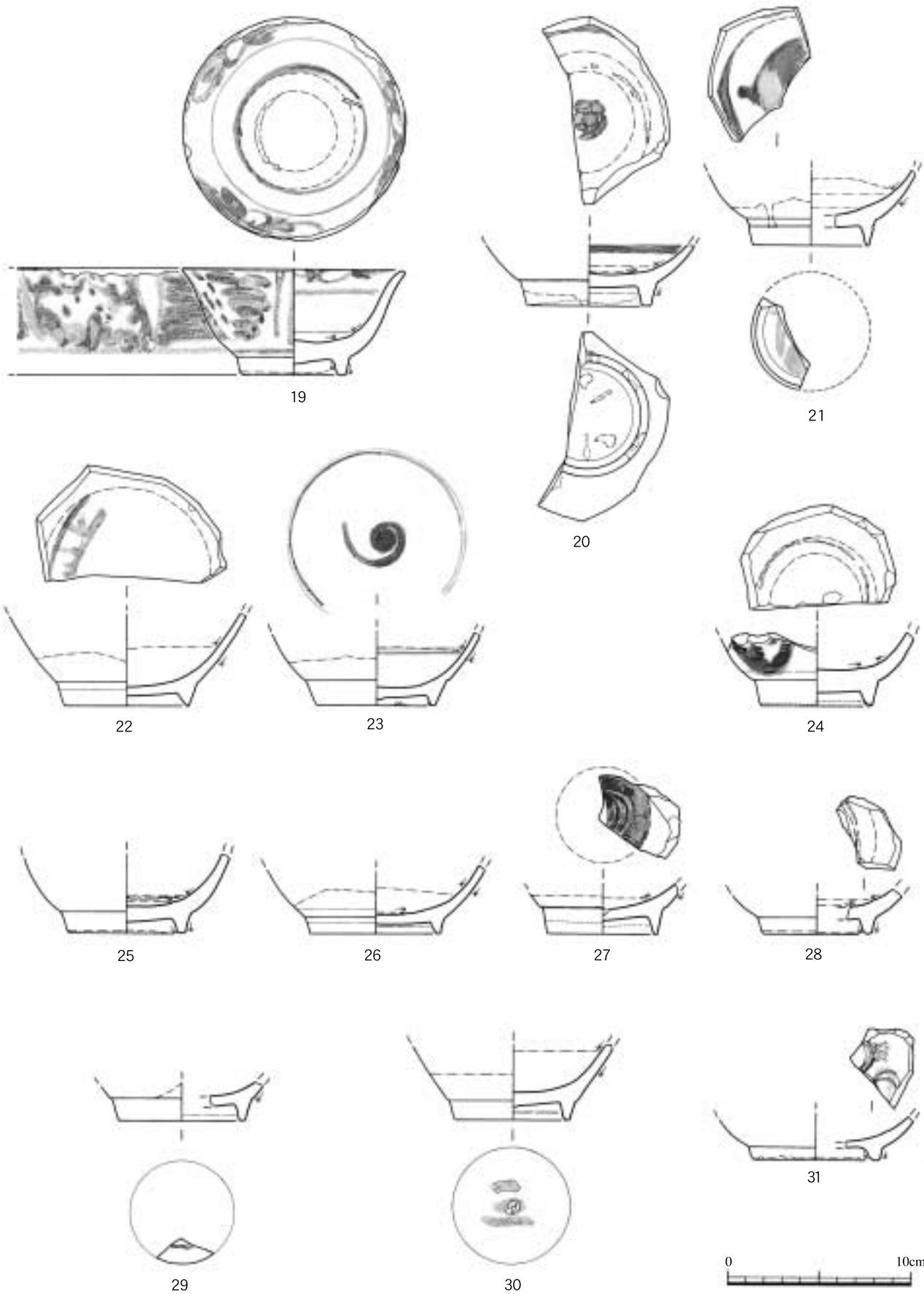
図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	調整		素地	釉薬	施釉	ピンホール	観察事項	出土地
					内面	外面						
61	壺	-	口～頸	3.2 -	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰白色で黒色粒をわずかに含む。	内・外面:灰オリーブ～黒	頸部内面～外面に施釉	内面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。	客土
					-	ロクロナデ	ロクロナデ～胴部下位はロクロケズリ	色は灰白色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:暗オリーブ灰	胴部外面に施釉	外面にわずかにある。	
63	瓶	-	胴～底	-	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰白色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:黒色	外面に施釉	外面にわずかにある。	胴径は6cmである。	3トレチ
64	壺	-	胴～底	5.9	ロクロナデ、高台内～胴部下位はロクロケズリ	ロクロナデ	色は灰白色で黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:黒褐色、一部海鼠釉(青色、緑色)	胴部外面に施釉	外面に少しある。	高台にアルミナ付着。貫入は外面にある。胴径は10.8cmである。	え-6 II層
65	瓶	-	胴～底	6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は浅黄色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:黒～オリーブ灰	外面に施釉(高台外側と骨付は露胎)	外面に少しある。	胴径は8.3cmである。	え-6 II層
66		-	底部	5.2	ロクロナデ	ロクロケズリ	色は灰白色で白色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:暗赤褐色	外面に施釉(高台内の半分と骨付は露胎)	外面にわずかにある。	見込みに鉄锈?が線状に付着。	客土
67		-		5.4	ロクロナデ	ロクロケズリ	色は灰色で黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:黑色(釉が薄い部分にはぶい赤褐色)	外面に施釉(骨付は露胎)	外面にわずかにある。	骨付に砂粒が付着。	う-4 II層
68	壺	-	底部	7.7	ロクロケズリ	ロクロケズリ	色は灰白色で黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:黒色	外面に施釉(高台～高台内は露胎)	外面にわずかにある。		SW-1 暗褐色上
69	瓶	-	底部	-	ロクロナデ	ロクロナデ	白色粒、黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:緑色	外面に施釉(高台内は露胎)	外面にわずかにある。	高台内に墨書。	客土
70	蓋	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰色で黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:オリーブ褐色	外面と穿孔部内面に施釉	外面にわずかにある。	貫入は外面にある。外面に白色の象嵌。底径は5.6cmである。	う-6 SK-1
71		-	3.8	-	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰色で黒色粒を少し含む。	内面:露胎 外面:灰オリーブ色	外面に施釉	外面に少しある。	貫入は外面にある。外面に白色の象嵌。底径は4.8cmである。	SW-1 暗褐色上
72		-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明黄褐色で白色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:灰オリーブ黒	外面に施釉	外面に少しある。	外面に2本の圓線。底径は12.6cmである。	SW-1 暗褐色上+う-6SK-1
73	急須	-	口～底	5.4 7 7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	色は白色、にぶい黄褐色で黒色粒をわずかに含む。	内・外面:白化粧	白化粧(口縁部は露胎で底部外面は白化粧のみ)	内・外面に少しある。	貫入は内・外面にある。注口と胴部は2個の穴でつながる。	あ-5 客土
74		-	口～胴	5.7	ロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい黄褐色で白色粒を少し含む。	内・外面:白化粧	白化粧→注口取り付け→注口に白化粧土→透明釉(口縁部は白化粧土のみ)	内・外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。白化粧土を施した後、注口接着のために器面に沈線を刻む。	う-6 SK-1
75		-	口～底	5.9 8.8 7.2	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:白化粧 外面:白化粧、呉須、緑色	白化粧土→注口取り付け→注口に白化粧土→外面に線刻→呉須、緑色釉→透明釉(底部外面は白化粧土のみ。口縁内面は白化粧土をかきとっている)	内・外面に少しある。	貫入は内・外面にある。胴径は11cmである。外面に線刻とその上に呉須。注口、耳の取り付け根に緑色釉。	う-6 SK-1
76		-	-	5.6 8.5 6.6	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	色は明黄褐色で黒色粒をわずかに含む。	内外面:暗褐色	口縁部内面～胴部外面に施釉	なし。	貫入は内外面にある。胴径は11.6cmである。	客土
77	急須	-	底部	7.2	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰白色。	内・外面:灰白色	全面に施釉(底部外面は露胎)	内・外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。底部外面に墨書。	客土
78		-	注口	-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	色はにぶい赤褐色で白色粒、橙色粒、透明粒を少し含む。	内面:暗褐色 外面:黒褐色	全面に施釉	なし。		う-6 II層
79	火取	-	底部	-	ロクロナデ、高台内～底部屈曲部はロクロケズリ	ロクロナデ	色は浅黄褐色。	内面:露胎 外面:暗褐色	胴部外面は露胎	なし。	底部内面に砂目痕あり。	え-2 II層
80		-	口～底	11 9.2 9	ロクロナデ、高台内～底部屈曲部はロクロケズリ	ロクロナデ	色は灰白色～浅黄褐色で橙色粒をわずかに含む。	内面:緑色 外面:白色、緑色	胴部外面(白色釉)と口縁部内・外面(緑色釉)に施釉	外面に少しある。	外面全体に沈線文様。	う-4 II層+う-5 II層
81		-	口～底	14	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰色で白色粒をわずかに含む。	内・外面:黒色	口縁部内面～外面に施釉	内・外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。	え-4 II層+う-1 II層
82		-		11.4	ロクロナデ、底部屈曲部まではロクロケズリ	ロクロナデ	色は灰白色で白色粒をわずかに含む。	内・外面:灰オリーブ	口縁部内面～胴部外面に施釉	外面に少しある。	貫入は内・外面にある。	あ-4 SK-14
83	-	-	口～胴	15.2	ロクロナデ、胴部下位はロクロケズリ	ロクロナデ	色は灰白色。	内・外面:灰オリーブ	口縁部内面～胴部外面に施釉	外面に少しある。	貫入は内・外面にある。	う-6 SK-1
84		-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰オリーブで黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:黒、黒褐色のまだら	全面に施釉	内・外面に少しある。	貫入は内面にある。	あ-5 SK-13
85	火炉	-	口～胴	15	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ	色は浅黄色。	内・外面:黒褐色	内面胴部上位～外面に施釉	内面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。胴径は18.8cmである。	う-4 II層
86	香炉	-	底部	-	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	色は浅黄色で黒色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:緑色(大半が白色に変色)、白化粧土	外面全体に白化粧土→外面胴部に緑色釉	なし。	底部内面に「大ミヤ古間七(切)口」の墨書。	客土
87	香炉?	-	底部	-	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	色は明黄褐色で白色粒、黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:露胎 外面:緑色	胴部外面に施釉	なし。	貫入は外面にある。	上坑墓2
88	灯明具	-	胴～底	4.2	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰白色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内・外面:暗オリーブ	腰部以外に施釉	外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。底部外面に深さ1.5cmの穿孔。	客土
89	不明	-	注口?	-	ナデ	ナデ	色は灰黄で黒色粒をわずかに含む。	内・外面:オリーブ褐色	内・外面に施釉	外面にわずかにある。	貫入は内・外面にある。	客土

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意

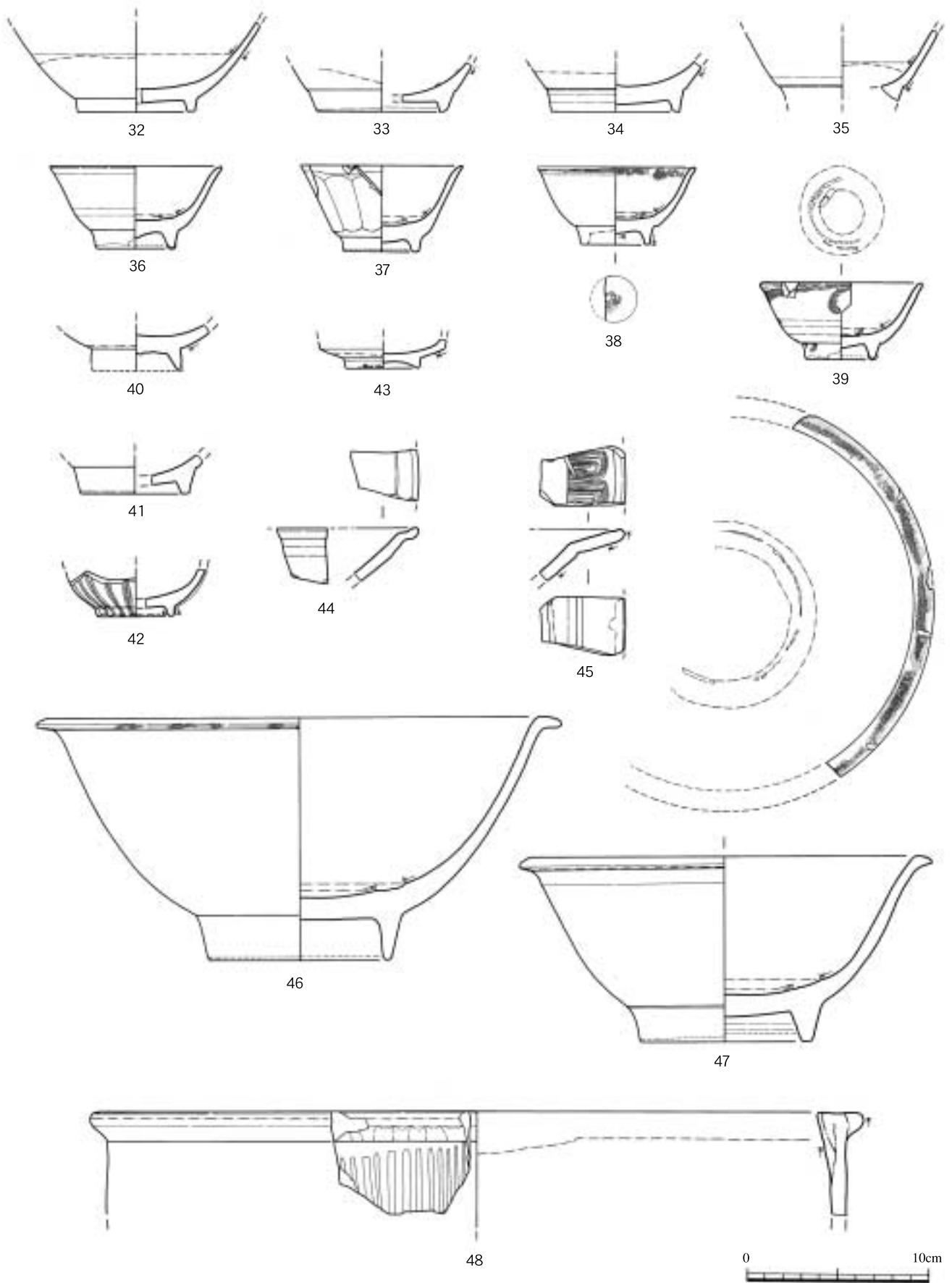




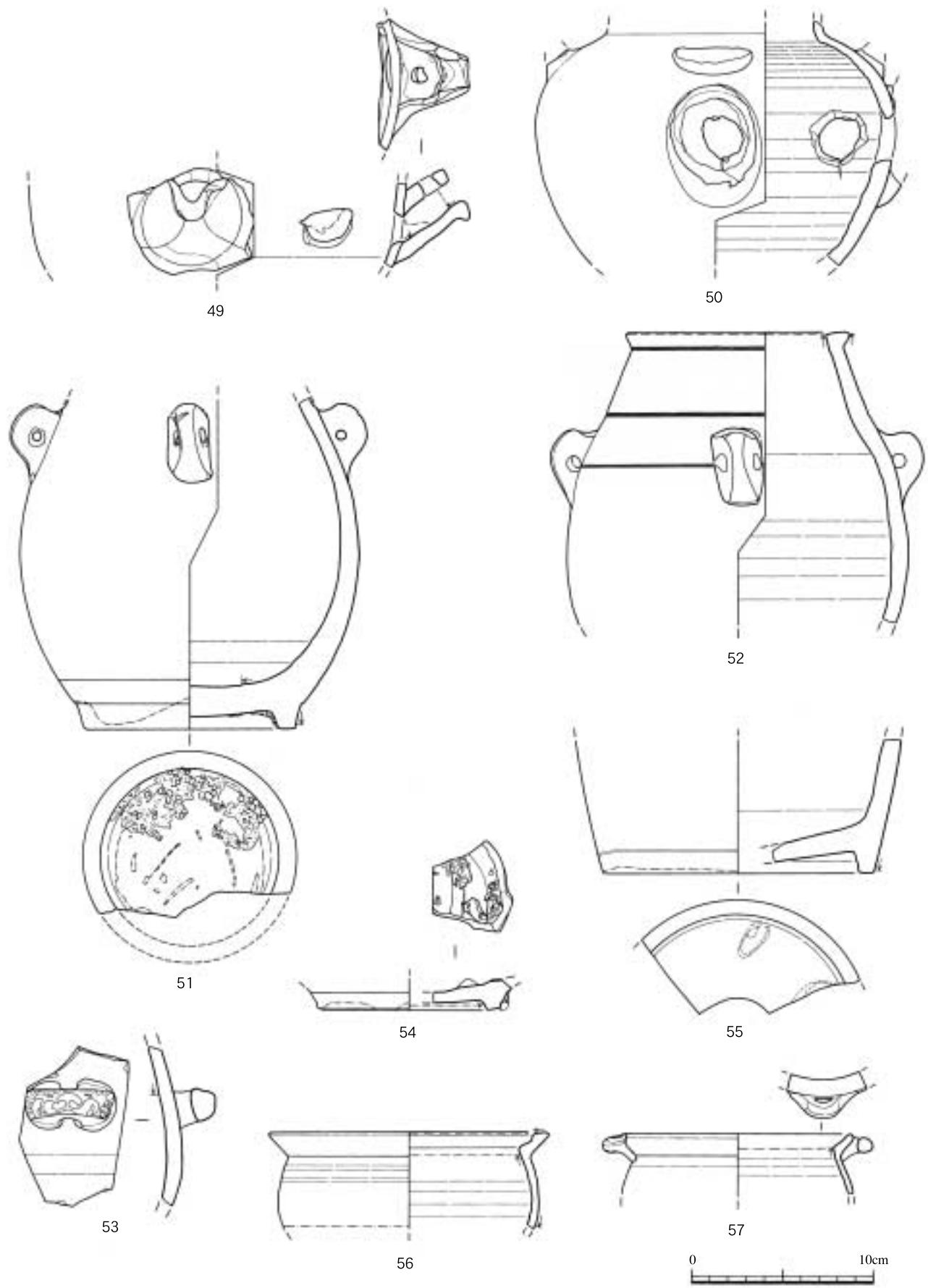
第24図 沖縄産施釉陶器（1）



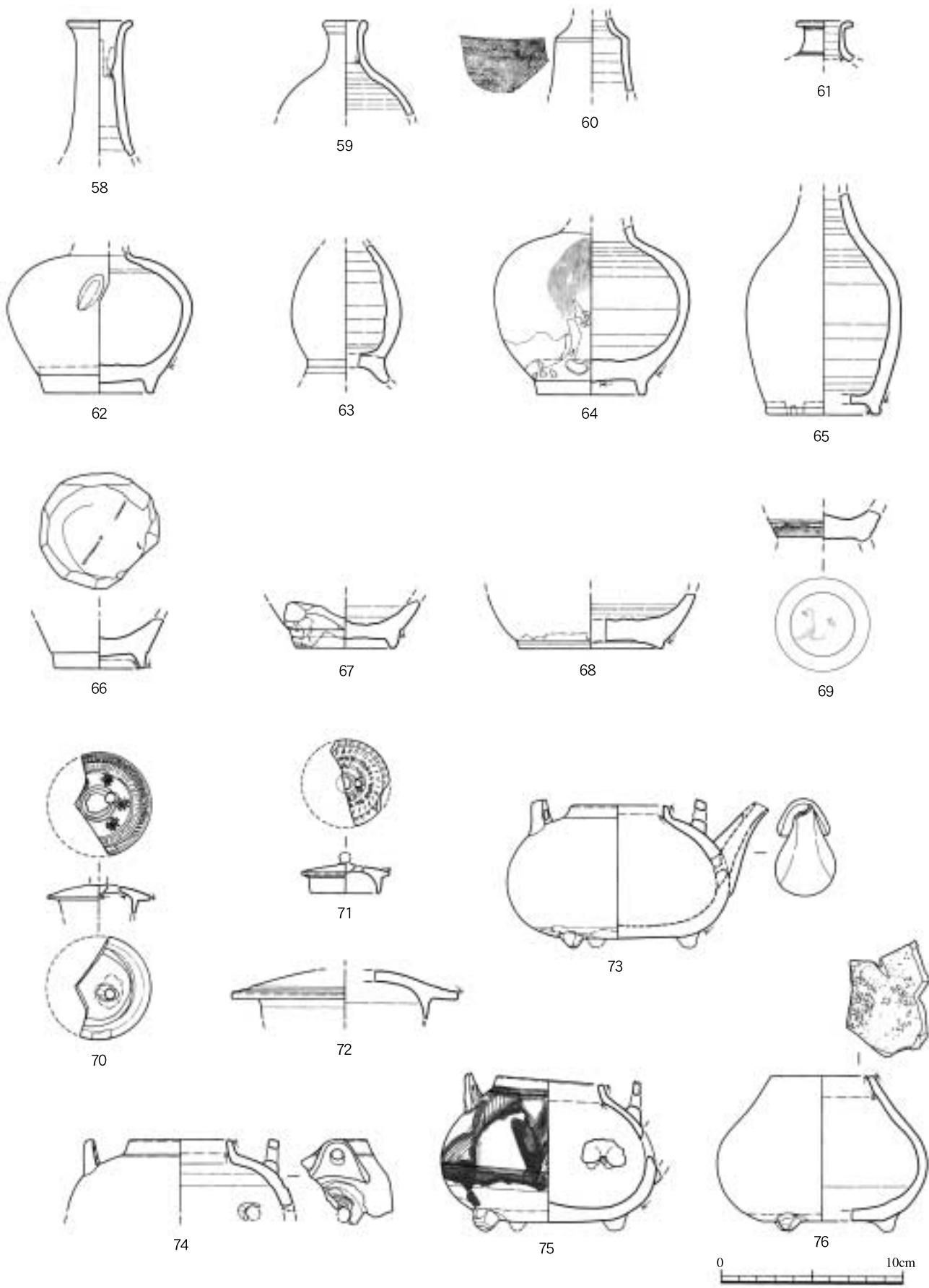
第25図 沖縄産施釉陶器（2）



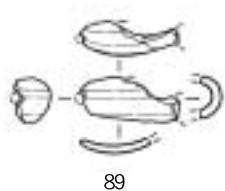
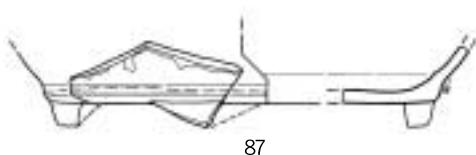
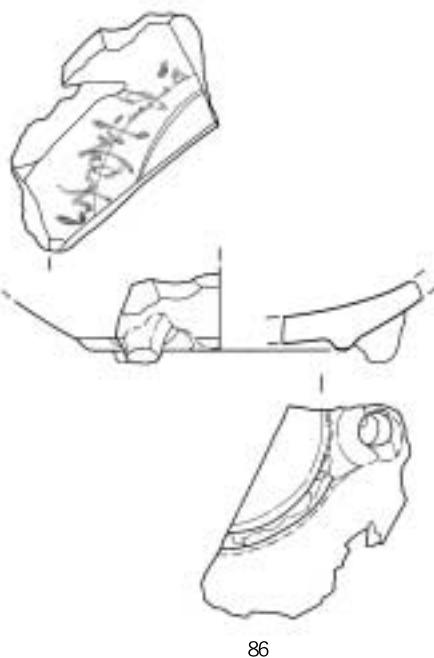
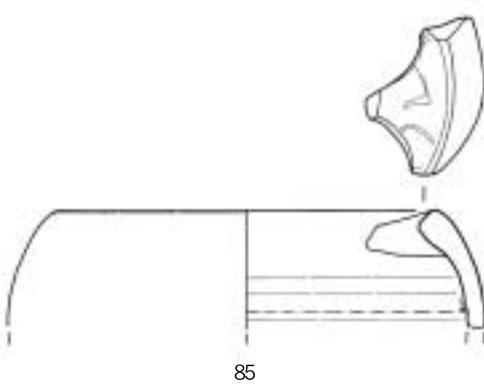
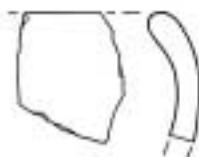
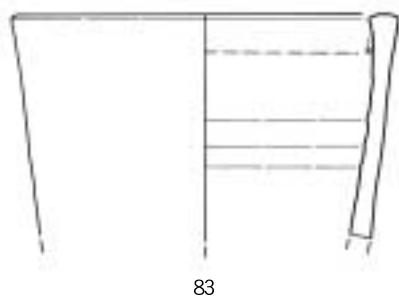
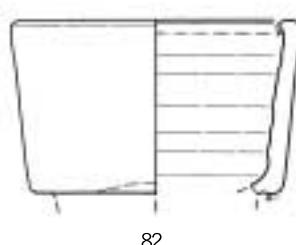
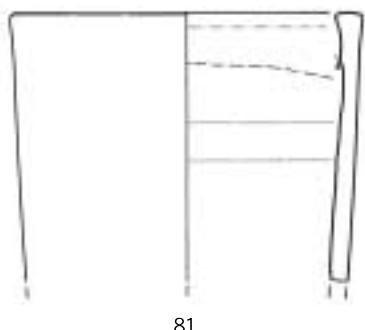
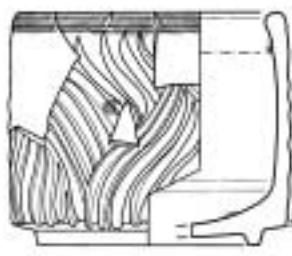
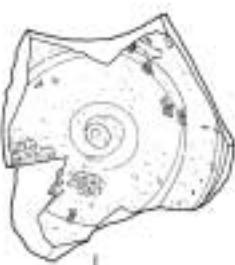
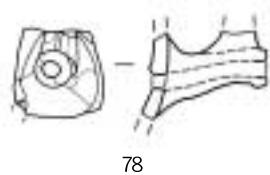
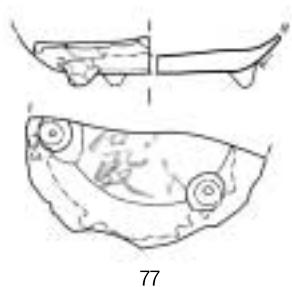
第26図 沖縄産施釉陶器（3）



第27図 沖縄産施釉陶器（4）



第28図 沖縄産施釉陶器（5）



第29図 沖縄産施釉陶器（6）

## 第14節 沖縄産無釉陶器

「荒焼（アラヤチ）」とも呼ばれ、高温で焼き締められた陶器である。基本的に釉薬はかけられていないが、泥釉等がかけられる場合がある。今回の発掘調査では破片も含めて2,817点と、客土、出土地不明分がコンテナケース17箱分出土している。遺構では、SK-1が280点と最も多く、SW-1、SK-2・6・14と続く。器種には、鉢、水鉢、擂鉢、壺、甕、瓶、皿、火炉、火取、蓋などがある。素地には、白色粒、半透明粒、黒色粒、暗赤色粒をわずかに含む。ロクロの回転運動を利用し形をつくり、工具によるケズリや文様等を施して仕上げている。赤褐色系統のものが多い。

以下主な器種について概説し、詳細は観察表にゆずる。

### 1. 鉢

I類：口縁部が「く」の字（第30図4・5、第31図19）

II類：口縁部が逆「L」字（第30図3・6・9、第33図41）

III類：口縁部が直口し、口唇部が両側に少し張り出す（第30図2・7）

IV類：その他（第30図10）

ただし、第30図3～5は擂鉢の可能性もある。

### 2. 水鉢（第30図8）

「ミジクブサー」とも呼ばれる。浅鉢形で肩が張り、口縁部を短く「く」の字に折り曲げている。肩部には波状文が施される。

### 3. 擾鉢

I類：口縁部が「く」の字。口縁部直下は断面三角形の突帯状に稜を持つ。擂り目は太く粗く施される。胴部は直線的で、ロクロナデによる凹凸を残す例が多い。（第30図11～15、第31図16～18・20～22）

II類：口縁部が逆「L」字。口縁部平坦面には1～2本の沈線がめぐる。胴部は丸みを持ち、擂り目は細かく密に施される。（第31図23～25、第32図26～29）

### 4. 壺

I類：口縁部が玉縁形で大型「ジンガーミ」と呼ばれる。（第32図32・34）

II類：口縁部が逆「L」字形「マースガーミ」とも呼ばれる。（第33図35～37）

III類：その他（第33図38～40）

### 5. 甕

I類：口縁部が逆三角形（第34図54・55）

II類：口縁部が方形（第34図56）

III類：口縁部が逆「L」字形（第34図57）

### 〈参考文献〉

「首里城跡－管理用道路地区発掘調査報告書－」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第1集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

## 第16表 沖縄産無釉陶器観察一覧

図番号	器種	分類	部位	口径 高 底径	調整		素地	色調	観察事項	出土地	単位:cm
					内面	外面					
第30図 ・ 図版 22	火取	I類	口縁部	10.5	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で白色粒をわずかに含む。	内面:暗赤褐色 外面:暗赤褐色～黒褐色		え-1 II層	
				—							
	鉢	II類	口～胴部	13.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は青灰色で(中心部分は)ぶい赤褐色、灰色)白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内面:ぶい黄橙色 外面:ぶい黄橙色～黒褐色	胴径は14cmである。	あ-1 SK-14	
				—							
				—							
		I類	口縁部	—	ロクロナデ	ロクロナデ	色は赤褐色で白色粒、透明粒、雲母をわずかに含む。	内面:赤褐色 外面:暗赤褐色		い-2 SK-16	
				—							
				—							
	II類	口～底	ロクロナデ	32.0	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、黒色粒を少し、雲母をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色	口唇部に沈線文あり。ケズリに用いた工具の幅は約2cm。	客土	
				20.6							
				14.0							

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意

第16表 沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	調整		素地	色調	観察事項	出土地	
					内面	外面					
第30 図・ 図版 22	7	III類	口縁部	31.6 — —	ロクロナデ	ロクロナデ	色は赤褐色で黒色粒、暗赤色粒を少し、白色粒をわずかに含む。	内面:赤褐色 外面:にぶい黄橙色	外面に突帯文と波状文あり。	え-4 II層	
	8			22.8 24.0 —							
	9	II類	口縁部	— — —	ロクロナデ	ロクロナデ、ナデ	色は明赤褐色で(中心付近は暗青灰色)黒色粒、白色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色	外面に波状文あり(5本/9mmの溝)。胴径は24cmである。	う-3 II層	
	10			— — —							
	11	擂鉢	口縁部	32.8 — —	ロクロナデのち拂り目 のち、口縁部ロクロナデ。	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で白色粒をわずかに含む。	内面:にぶい赤褐色 外面:褐色	拂り目上端はナデ消されている。	う-6 SK-1	
	12			31.4 8.4 15.2							
	13		I類	32.8 — —	ロクロナデのち拂り目 のち、口縁部ロクロナデ。	ロクロナデのち底部 にナデ?	色は暗赤褐色で白色粒、黒色粒、暗赤色粒をわずかに含む。	内面:底部は赤、胴～ 口縁部は褐色 外・面:にぶい赤褐色、 黒褐色	口縁部直下が突帯状。拂り目は16本/3 cmで左回りに施される。外面のロクロナ デによる凹凸が目立つ。拂り目上端は ナデ消される。	う-3 II層	
	14			33.6 — —							
	15			31.6 — —							
	16	擂鉢	口～ 底部	31.8 14.0 10.7	ロクロナデのち拂り目 のち、口縁部ロクロナデ。	ロクロナデ	色は暗赤褐色で暗赤色粒、橙色 粒を多く、白色粒、黒色粒をわざ かに含む。	内・外面:褐色	口縁部直下がくびれる。拂り目は7本/2 cmで右回りに施される。底部外面には 余分な粘土の付着や大小の圧痕があ る。15によく似る。外面に薄い自然 釉?	う-5 II層	
	17			24.4 — —							
	18			37.0 — —							
第31 図・ 図版 23	19	鉢	I類	29.0 — —	ロクロナデ	ロクロナデ	色は赤褐色で白色粒をわずかに含む。	内・外面:赤褐色 外・面:にぶい黄橙色		い-2 SK-16	
	20	擂鉢	口縁部	35.2 — —	ロクロナデのち拂り目 のち、口縁部ロクロナデ。	ロクロナデのちハケ メ	色は暗赤褐色で白色粒、黒色粒をわざかに含む。	内・外面:明赤褐色、に ぶい黄橙色		あ-4 SK-14	
	21			— — —							
	22			— — —							
	23	II類	口縁部	23.8 — —	ロクロナデのち拂り目 のち、口縁部ロクロナデ。	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で白色粒を少 し、橙色粒をわずかに含む。	内面:赤褐色 外・面:灰黄褐色	拂り目は6本/1cmで上端はナデ消され る。口縁外面上に黄色の付着物。	あ-1 SK-2	
	24			32.6 16.6 13.6							
	25		口～ 底	31.0 14.0 11.0	ロクロナデのち拂り目	ロクロナデのち底部 外・面はケズリ	色は暗赤褐色で白色粒、黒色粒、 橙色粒をわずかに含む。	内面:赤褐色、口縁部 は灰褐色 外・面:暗赤褐色	拂り目は20本/2.7cmで、左回りに施さ れる。拂り目上端はナデ消されていない。 不明	う-2 II層	
	26	擂鉢	口～ 底	30.8 13.2 12.0	ロクロナデのち拂り目 のち、口縁部ロクロナデ。	ロクロナデのち底部 外・面はケズリ	色は赤褐色で白色粒を少し、黒色 粒、暗赤色粒、雲母をわずかに含 む。	内面:灰色 外・面:灰褐色	7本/1cmの拂り目で左回りに施される。 拂り目上端はナデ消される。	う-2 II層	
	27			27.2 — —							
	28		口縁部	— — —	ロクロナデのち拂り目 のちロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で透明粒を少 し、白色粒、黒色粒をわずかに含 む。	内面:明赤褐色 外・面:赤褐色	拂り目は5本/1cmで上端はナデ消され ている。口縁平坦部の沈線を施した後 に注ぎ口を作っている。	あ-1 SK-2	
	29			28.6 — —							
第32 図・ 図版 24	30	II類	—	底部	— 12.4	拂り目	ロクロナデのち胴部 下端と底部はケズリ	色は明赤褐色で白色粒、暗赤色 粒、黒色粒、雲母をわずかに含 む。	内・外面:明赤褐色	拂り目は7本/1cmで左回りに施す。	SW-1 埋土
	31		—	胴部	— — —	ロクロナデ	ロクロナデのち胴部 下端はケズリ	色は橙で白色粒、黒色粒、暗赤色 粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:橙色	外面に墨書。拂り目は5本/1cmで左回り に施す。	客土
	32	壺	I類	16.4	ロクロナデ	ロクロナデのち耳と りつけ、刻目、線刻	色はにぶい赤褐色で白色粒、黑 色粒、雲母をわずかに含む。	内面:赤褐色 外・面:黑褐色	口縁外面に刻目文。肩部に線刻文。 1つの耳を取り付ける際、指で4カ所な でつけるのみである。頸部内面には、接合 痕が明瞭に残っている。	客土	
	33	不明	—	胴部	— — —	ロクロナデ	ナデ?	色はにぶい赤褐色で白色粒、黑 色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:にぶい赤褐色 外・面:暗赤褐色	すん胴。胴径は24.8cmである。	SK-2 5層
	34	壺	I類	25.2	ロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で橙色粒を少 し、白色粒、黒色粒をわずかに含 む。	内面:灰褐色、にぶい 赤褐色 外・面:灰褐色、明赤褐色		客土	
	35			11.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で(外側は灰色)白 色粒をわずかに含む。	内面:灰褐色 外・面:暗赤褐色	外面に沈線文。	い-2 III層	

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意

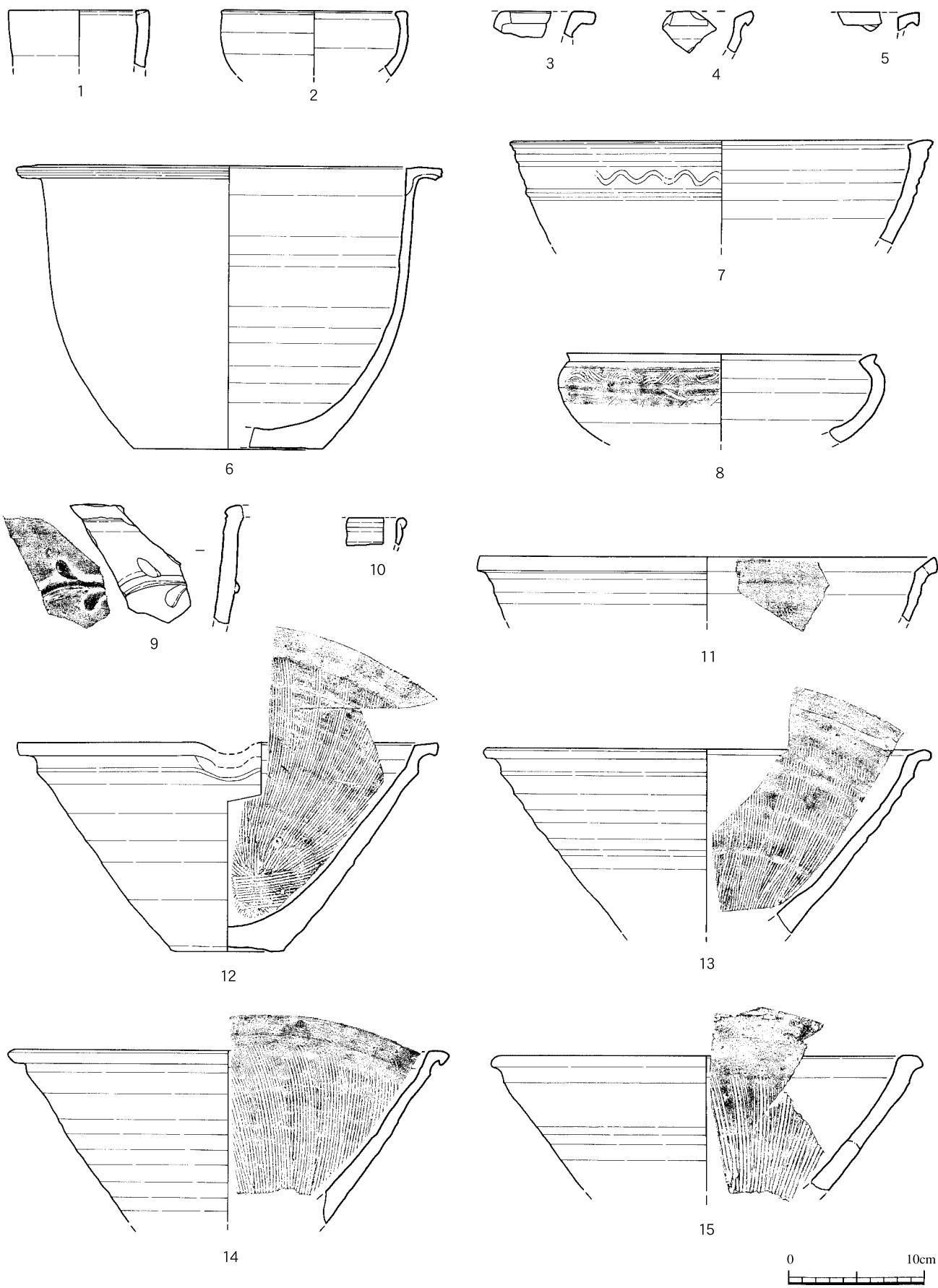
第16表 沖縄産無釉陶器観察一覧

単位:cm

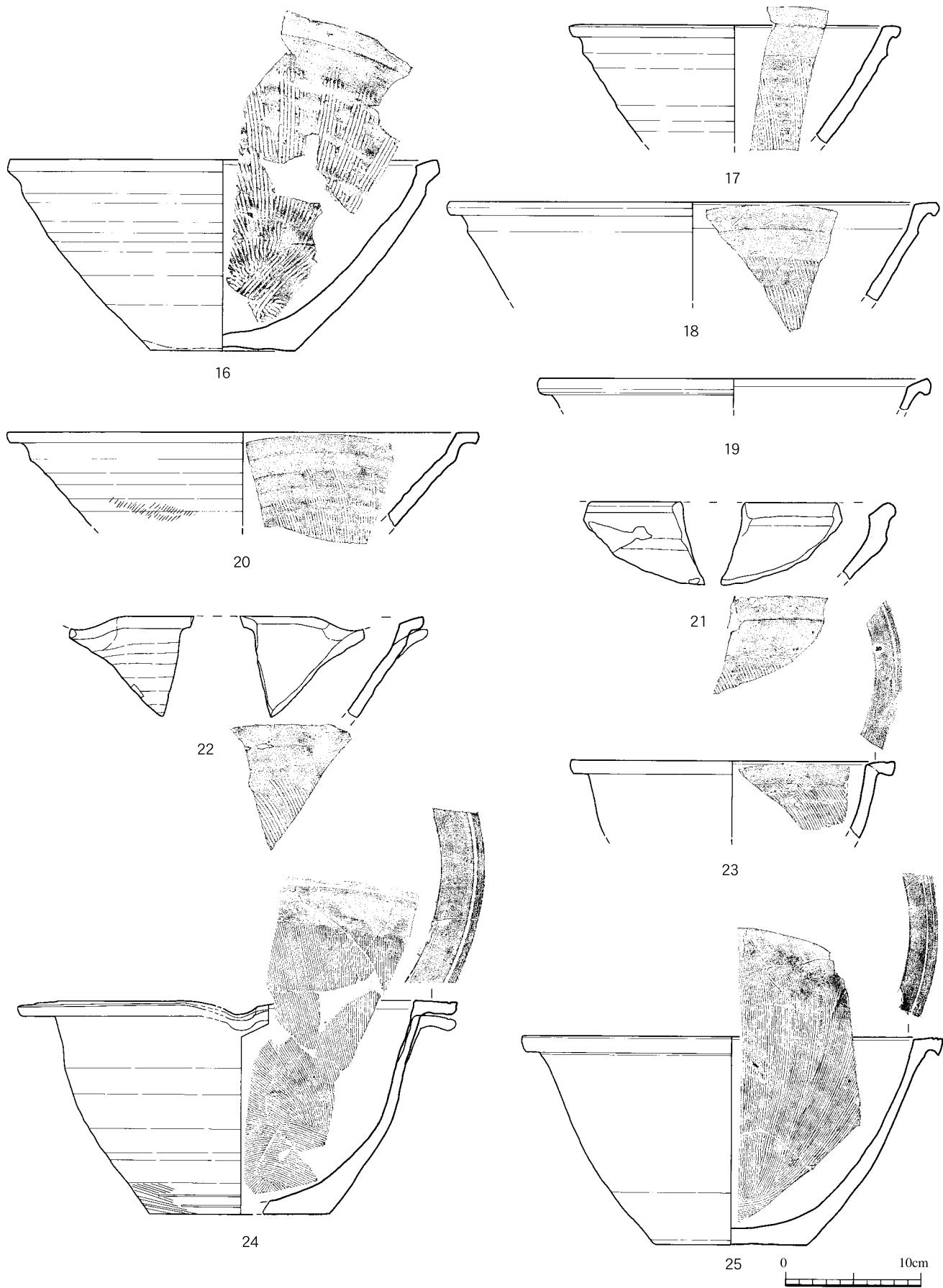
図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	調整		素地	色調	観察事項	出土地
					内面	外面				
36	壺	II類	口～胴部	14.2	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で(外側は灰色)白色粒、橙色粒を少し、黒色粒をわずかに含む。	内・外面:にぶい赤褐色		あ-1 SK-2
				—						
				—						
37	壺	III類	口縁部	13.9	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で白色粒、透明粒を少し、暗赤色粒をわずかに含む。	内・外面:暗赤灰色(泥釉?)		あ-1 SK-2
38				13.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で(外側は灰色)透明粒をわずかに含む。	内面:黒褐色 外面:暗赤褐色		あ-1 SK-2
39				5.3	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色	外面に沈線文。	客土
40	壺	III類	口～胴部	9.0	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	色は明赤褐色で白色粒、黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:明赤褐色 外面:明赤褐色、淡黄色	沈線文あり。	客土
41	鉢?	II類	口縁部	—	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で白色粒、透明粒、橙色粒を少し含む。	内・外面:暗赤褐色(泥釉?)		え-5 SP-5
42	壺?	—	胴部	—	ロクロナデ	ロクロナデ	色は灰色で(中心部は暗赤褐色)白色粒、透明粒をわずかに含む。	内面:黄褐色 外面:褐色	外面に波状文あり。	う-6 SK-9
43	壺	—	胴部	—	ロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で白色粒、黒色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:褐色 外面:暗赤灰色	外面に沈線文。「十七」の線刻	う-6 SK-1
44				—	ロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で透明粒を少し、白色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:にぶい赤褐色	外面に沈線文あり。頭径は11.8cmである。	あ-1 SK-15
45				9.0	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ、ロクロケズリ	色は明赤褐色で(外側は橙色、灰色)白色粒、黒色粒、橙色粒を少し含む。	内面:明赤褐色 外面:橙色	底部外面は大小の圧痕が残る。	あ-4 SK-14 +え-6 II層
46	壺	—	底部	7.8	ロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で白色粒、暗赤色粒をわずかに含む。	内面:灰色 外面:にぶい赤褐色	底部外面は大小の圧痕が残る。また黄色の付着物がある。	あ-1 II層
47				—	ナデ	ナデ	色は灰色で白色粒、透明粒を少し、黒色粒を多く含む。	内面:橙色		い-1 III層
48	瓶	—	底部	— 3.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で橙色粒を少し、白色粒、暗赤色粒をわずかに含む。	内・外面:暗褐色	底部外面に線刻あり。	客土
49	甕	—	胴部	—	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、黒色粒をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色	突帯文、波状文、貼付け珠文あり。	あ-1 SK-15 +う-6 II層
50	甕?	—	胴部	—	ロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で白色粒、橙色粒を少し、黒色粒をわずかに含む。	内面:黒褐色 外面:にぶい橙色	貼付け葉文あり。	い-6 II層
51	甕?	—	底部	—	ナデ	ナデ	色は明赤褐色で白色粒、黒色粒、橙色粒を少し、透明粒をわずかに含む。	内面:緑灰色 外面:明赤褐色	「七」の線刻	客土
52	瓶	—	胴部	—	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で黒色粒を少し、白色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:暗赤褐色 外面:黒褐色	外面に沈線文あり。破面はポーラス状。胴径は9cmである。	え-2 II層
53				—	ロクロナデ	ロクロナデ	色は赤褐色、灰色で黒色粒を少し、橙色粒を多く、白色粒、透明粒をわずかに含む。	内面:赤褐色 外面:にぶい黄褐色	外面に沈線文あり。胴径は13.6cmである。	客土
54	甕	I類	口縁部	38.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、黒色粒を少し含む。	内・外面:明赤褐色	外面に沈線文あり。	う-6 SK-1
55				40.3	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、透明粒、暗赤色粒をわずかに含む。	内面:明赤褐色 外面:橙色	外面に沈線あり。	あ-1 SK-15
56				43.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、透明粒、暗赤色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:橙色	外面に沈線あり。	う-6 SK-1
57	甕	II類	口縁部	42.8	ロクロナデ	ロクロナデ	色は赤色で橙色を多く、白色粒、透明粒をわずかに含む。	内面:赤色 外面:灰黃褐色	外面に沈線あり。口縁部下端がフリル状。	客土
58				—	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で白色粒、透明粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:にぶい赤褐色	外面に線刻文・沈線あり。胴径は35.6cmである。	う-2 II層
59				21.4	ロクロナデ、ナデ	ロクロナデ、ナデ	色は明赤褐色で暗赤色粒を少し、白色粒、透明粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色	底部と胴部の境は、ケズリによる面取りされる。	い-1 II層
60	甕	—	底部	26.0	ナデ	ケズリナデ	色は明赤褐色で白色粒、黒色粒、橙色粒、透明粒をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色	底部と胴部の境はケズリにより面取り。	SW-1 石敷上
61	火炉	—	口～胴部	17.6	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で白色粒、透明粒、暗赤色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:にぶい赤褐色 外面:暗赤褐色	外面に沈線と波状文あり。胴径は21.6cmである。	客土
62				15.6	ロクロナデ、耳取り付け の指オサエ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、橙色粒を少し含む。	内・外面:にぶい橙色	外面に沈線文。胴径は18.2cmである。	客土
63				19.4	ロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で透明粒をわずかに含む。	内・外面:暗赤褐色	外面に沈線文あり。胴径は21.2cmである。	あ-1 SK-2
64	急須?	—	口～胴部	8.0	ロクロナデ	ロクロナデ	色はにぶい赤褐色で白色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面:にぶい赤褐色 外面:黒褐色の泥釉	外面に青色釉による文様。	う-2 II層
65	蓋	—	口～胴部	14.0	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、暗赤色粒、橙色粒を少し、黒色粒をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色	上面には圧痕等が残る。底径は14.0cmである。	客土
66				9.0	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で透明粒、橙色粒を少し、黒色粒をわずかに含む。	内面:にぶい黄褐色 外面:暗灰黄色(自然釉?)	底径は9cmである。	あ-4 SK-14
67				8.4	ロクロナデ	ロクロナデ	色は暗赤褐色で白色粒をわずかに含む。	内面:黑色 外面:黑色・灰色	底径は8.4cmである。	客土
68	皿	—	底部	5.4	ロクロナデ、ロクロケズリ	ロクロナデ	色は明赤褐色で暗赤色粒を少し、白色粒をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色	ロクロは左回転。	あ-4 SK-14
69	不明	—	—	25.8	ロクロナデ	ロクロナデ	色は明赤褐色で白色粒、暗赤色粒、橙色粒、透明粒をわずかに含む。	内・外面:明赤褐色		客土
70	壺	—	底部	13.8	ロクロナデ	ロクロケズリ	色は橙色で白色粒、透明粒を少し、暗赤色粒、橙色粒を多く含む。	内面:灰色 外面:灰(オーリーブ)黄色の自然釉?が付着)	蛇の目高台、ロクロは右まわり。17後～18c。	う-2 II層

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意

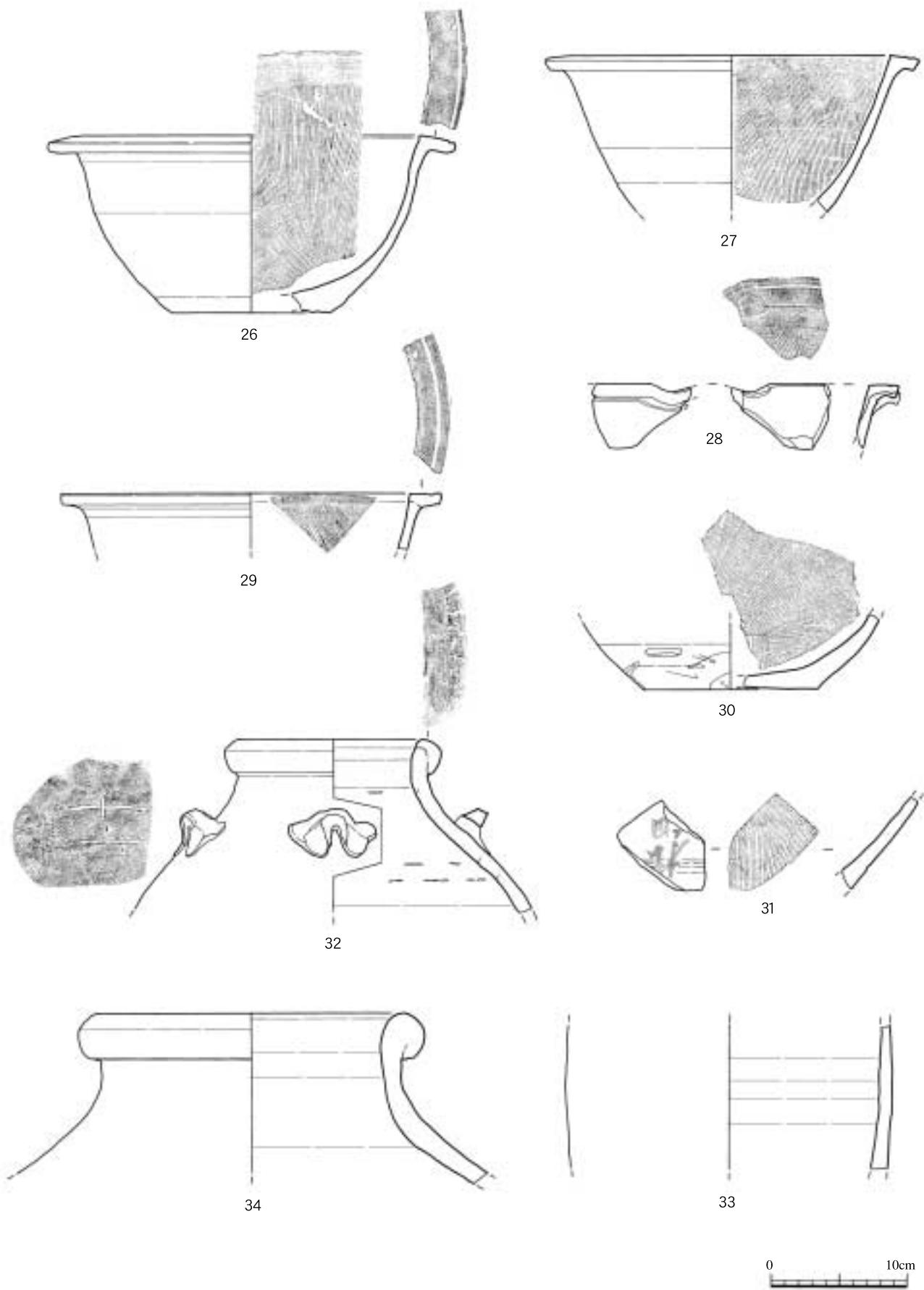




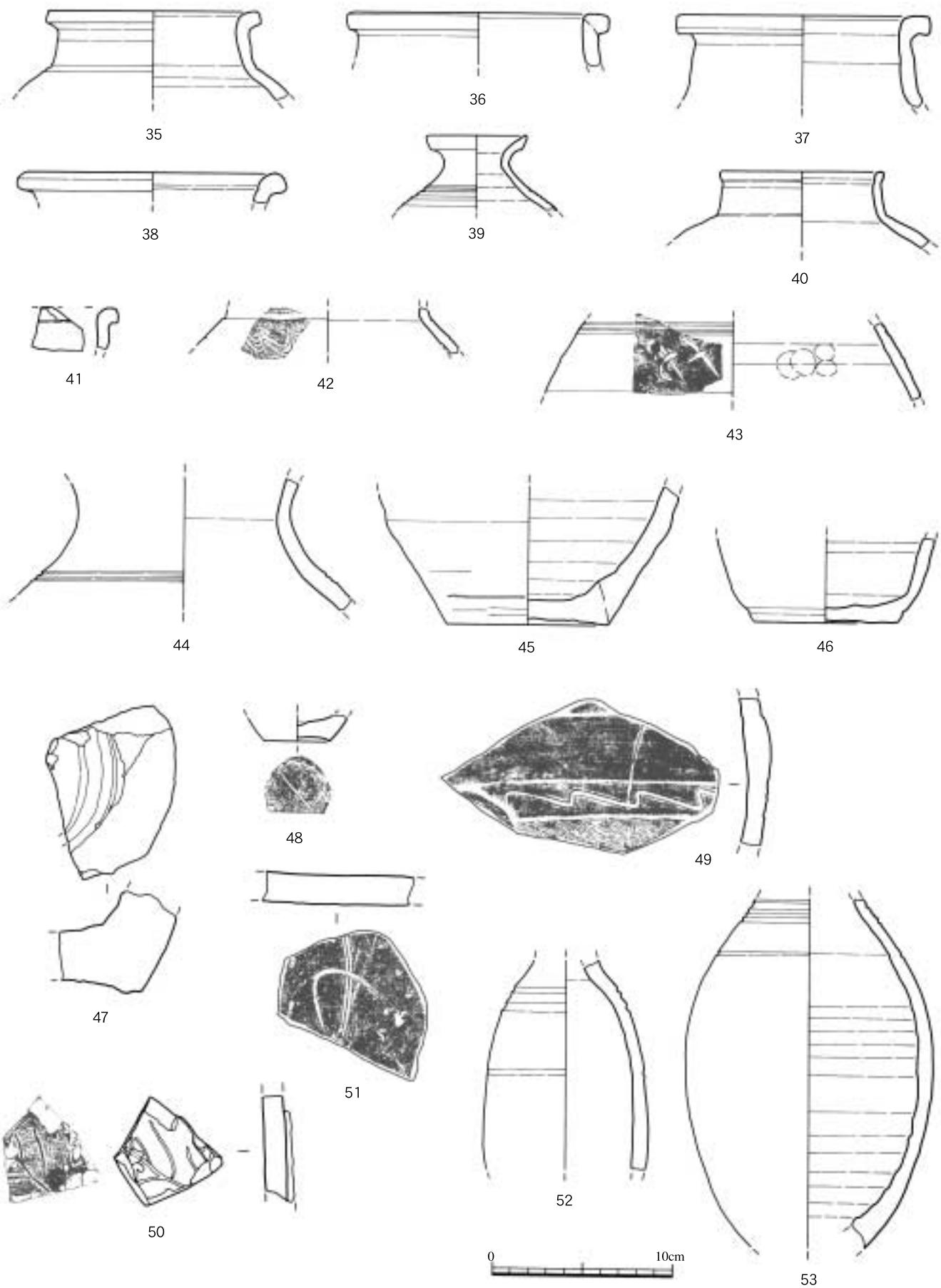
第30図 沖縄産無釉陶器（1）



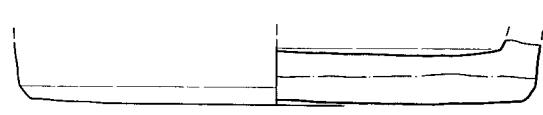
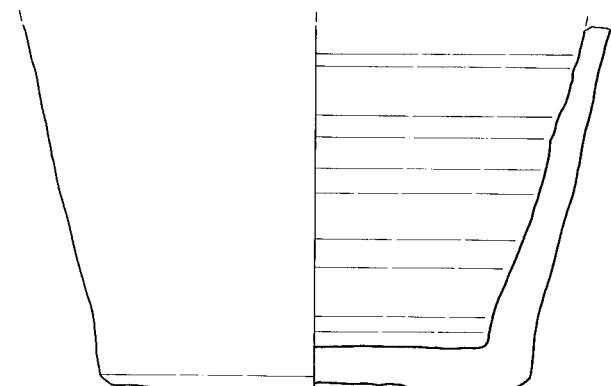
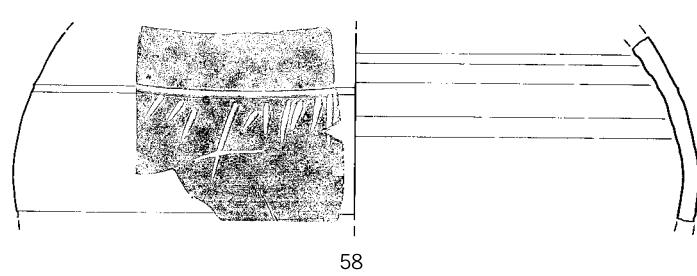
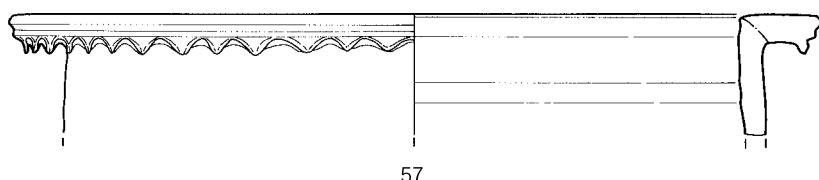
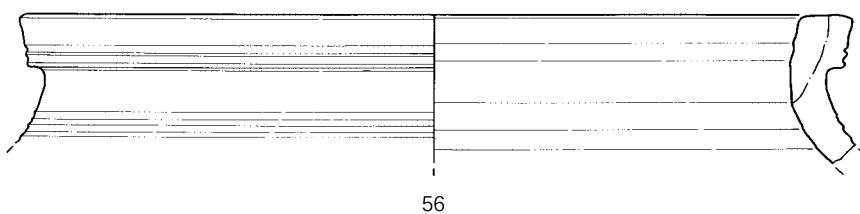
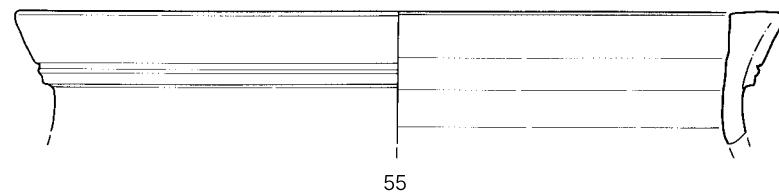
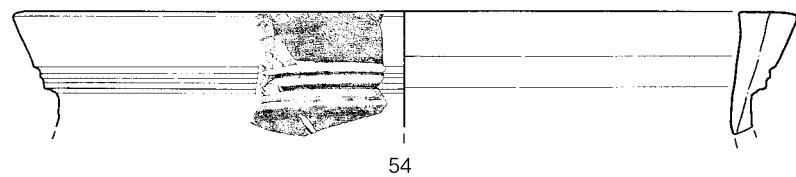
第31図 沖縄産無釉陶器（2）



第32図 沖縄産無釉陶器（3）

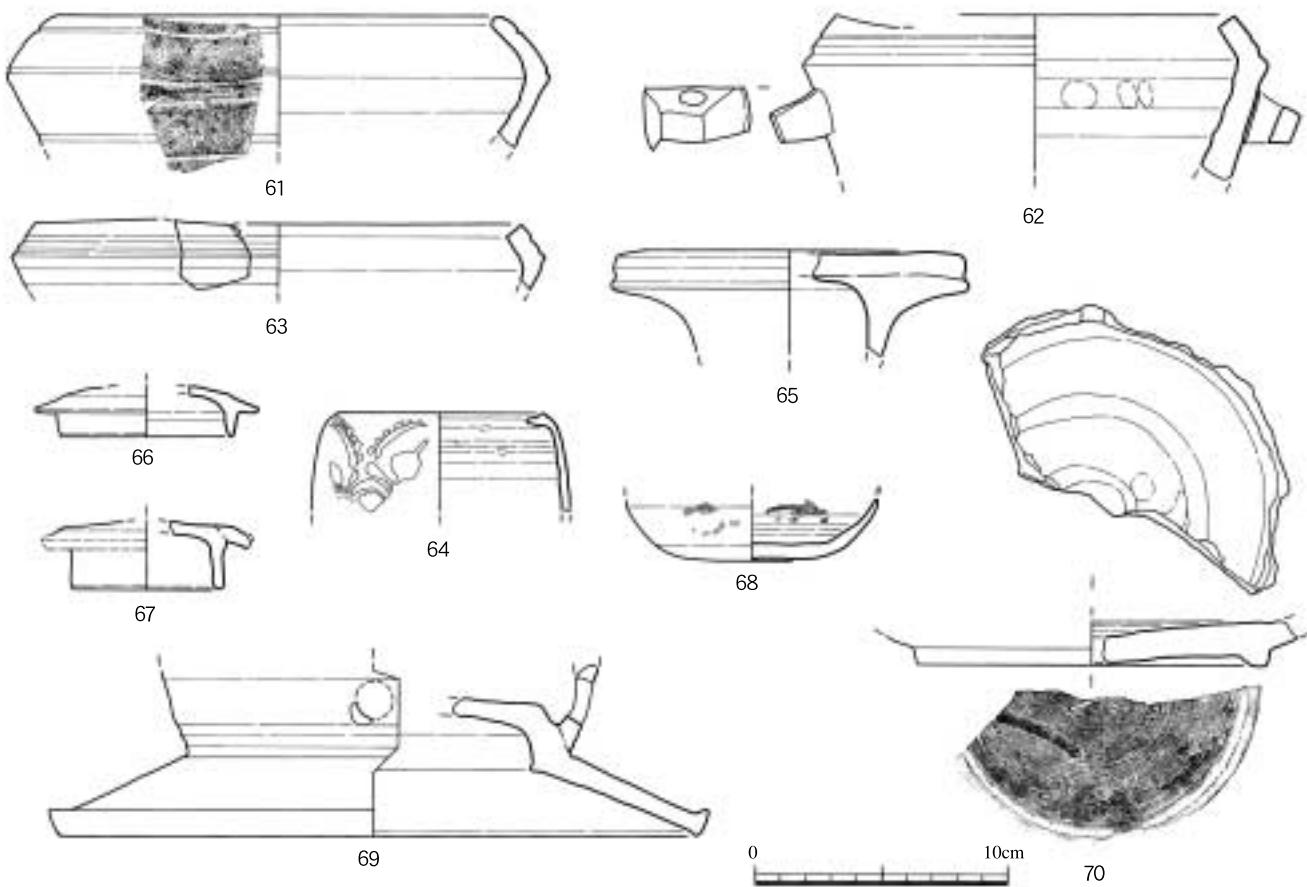


第33図 沖縄産無釉陶器 (4)



0 10cm

第34図 沖縄産無釉陶器（5）



第35図 沖縄産無釉陶器（6）

## 第15節 陶質土器

陶質土器は「アカモノ」と呼ばれる焼き物で、胎土に白色粒、赤色粒、黒色粒、雲母粒を含み橙色である。手で触るとザラザラし、粉末が付く。今回の調査では皿、鍋、火炉、鉢、急須、蓋などが出土した。器面には、ロクロの回転運動を利用したナデ、ケズリ痕が残っている。包含層（II層）以外では、SK-1、SW-1から多く出土している。

火炉には、白色化粧土の圈線をほどこす例（第36図7、第37図16）があり、器形もバラエティーに富む。

蓋には、第36図9・10のように撮みがなく、大型のものと11のように撮みがあり小型なものがある。前者は壺、後者は急須の蓋と考えられる。

第18表 陶質土器出土状況

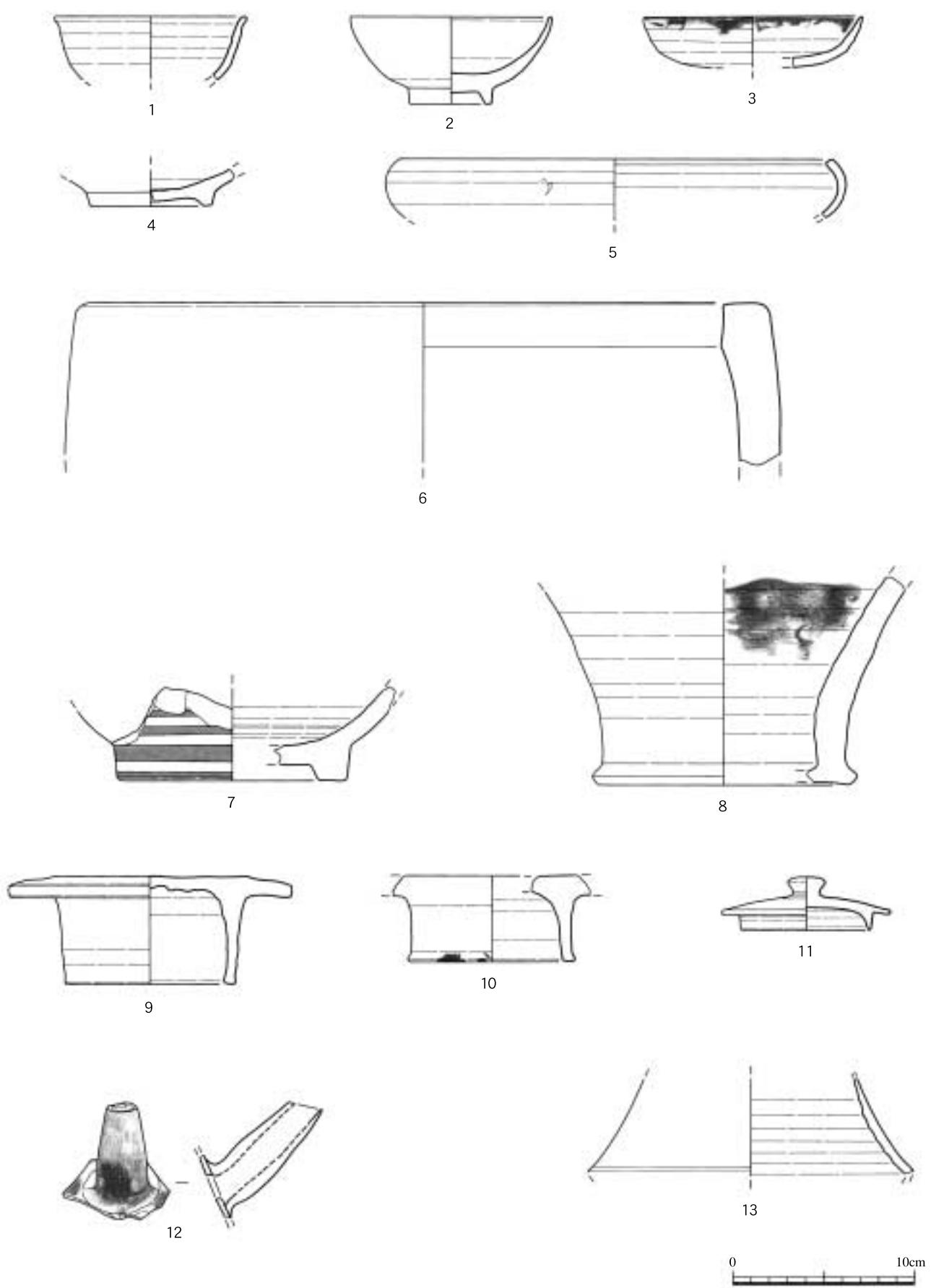
器種	出土地		SK						客土	Ⅰ層	Ⅱ層	トレンチ	明治時代 故跡	不明	合計	
	1	2	4	6	14	16	17	SW-1								
碗	口～底									2						2
	口縁部									2						2
皿	口縁部										10					10
	口縁部							1		1						2
鍋	口縁部									1						1
	胴部	3							4	40	4		2		53	
火明皿	口縁部									2						2
	口縁部	4			1	1	1	1		5				1	14	
火か	耳	1								1						2
	胴部	2	1					1		7	2				13	
火炉？	口縁部										1					1
	口縁部									2						2
鉢	耳										4	1				2
	底部	1									1					1
急須	口縁部										8	1				9
	耳										4					4
急須	胴部								3	5						8
	蓋									5	1	1				7
壺？	底部									1						1
蓋				2				2	1	1						6
不明	口縁部					1				2	3	1				7
	胴部	2		1	1	1	1	10		20			1		37	
不明	底部									5	1	1				7
	不明											1				1
合計	13	1	1	3	4	2	2	24	6	131	9	5	4	1	206	

第19表 陶質土器観察一覧

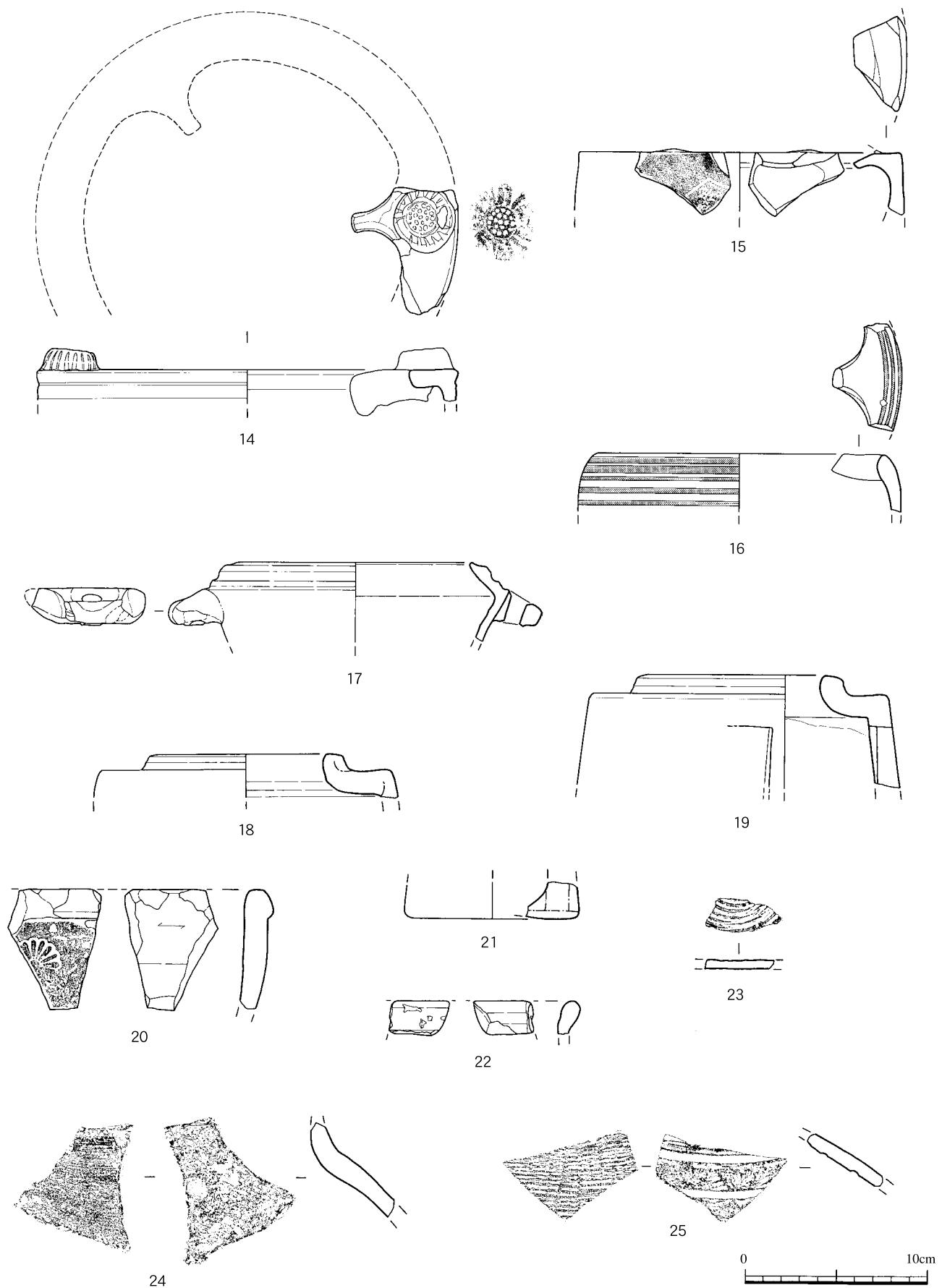
単位:cm

図番号	器種	部位	口径	器高	底径	器形	調整	素地	色調	観察事項	出土地	
第36図・図版26	1	碗	口～胴部	10.4	—	—	口縁部を少しつまみ出して外反させている。	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	1mm以下の赤褐色粒、白色粒を少し含む。橙色。	橙		う-3 II層
	2		口～底	11	4.5	4.8	口縁部は直口する。	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、高台周辺はロクロケズリ	1mm以下の赤褐色粒を少し含む。橙色。	橙		い-2 II層
	3	灯明皿	口～胴部	12	—	—	口縁部は直口する。	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、底部はロクロケズリ	1mm以下の白色粒、赤褐色粒をわずかに含む。橙色。	橙	口縁部にある。	う-3 II層
	4	碗	底部	—	—	6.6		内面:ロクロナデ 外面:ロクロケズリ?(摩滅)	1mm以下の赤褐色粒、白色粒、雲母を少し含む。明黄褐色。	明黄褐色		SW-1 暗褐色土
	5	鉢	口縁部	23.6	—	—		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	1mm以下の赤褐色粒、白色粒、雲母を少し含む。	内・外面:橙		SW-1 埋土
	6	火炉?	口縁部	38	—	—		内面:ナデ 外面:ナデ	8mm以下の赤褐色粒、白色粒、雲母を少し含む。	内・外面:橙		あ-4 SK-14
	7	火炉	底部	—	—	12.2		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、ロクロケズリ	1mm以下の赤褐色粒、白色粒、雲母を少し含む。	内・外面:橙	白化粧土による圈線。	客土
	8	壺?	底部	—	—	13.8	底の厚さは薄く、器壁は内湾して大きく開きながら胴部へ向かう。	内面:横ナデ 外面:横ナデ	3mm以下の赤褐色粒を少し、白色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面:橙	中国産褐釉陶器の壺の底部に形が似る。	客土
	9	蓋	—	—	5.9	9.2		内面:ロクロナデ、ロクロケズリ 外面:ナデ?(風化)	5mm以下の白色粒、赤褐色粒、黒色粒、雲母を少し含む。	内・外面:橙	口縁外面の一部に黒色の付着物。底径は15.5cmである。	客土
	10		—	—	4.7	9.2	全体的に風化が進んでいる。	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ、ナデ?	3mm以下の赤褐色粒、白色粒、雲母を少し含む。	内・外面:橙		SW-1 埋土
	11		—	—	2.9	7.0	直径2.1cmの撮影がある。	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	3mm以下の赤褐色粒、白色粒、雲母、黒色粒を少し含む。	内・外面:橙	底径は9.2cmである。	い-5 SK-6
第37図・図版26	12	急須	注口	—	—	—	器面上に楕円形の穴があり、そこに注口がとりついている。	内面:ナデ 外面:ナデ	2mm以下の赤褐色粒、白色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面:橙	根元付近に媒が付着。	う-4 II層
	13	急須	胴部	—	19.8	—	内面に強いロクロナデ痕が残る。外面屈曲部に沈線。	内面:ロクロナデ 外面:ナデ	1mm以下の赤褐色粒、白色粒、黒色粒、雲母を少し含む。	内面:赤褐色。 一部橙色。外面:橙		SW-1 暗褐色土
	14	火炉	—	23	—	—	平坦部に直径3cmほどの粘土を貼り付け、線刻、点刻をほどこす。	内面:ナデ、ロクロナデ 外面:ナデ、ロクロナデ	1mm以下の赤褐色粒、白色粒、黒色粒、雲母を少し含む。橙色。	内・外面:橙色の地に明赤褐色の化粧土をぬる。		不明
	15		口縁部	—	17.6	—	外面に文字を押印している。	内面:ナデ 外面:ロクロナデ	1mm以下の雲母を多く、白色粒、赤褐色粒、黒色粒を少し含む。橙色。	内・外面:橙		う-6 SK-1
	16		—	—	15.8	—		内面:ナデ、ロクロナデ 外面:ナデ、ロクロナデ	1mm以下の雲母を少し、白色粒、赤褐色粒、黒色粒をわずかに含む。橙色。中心は灰色。	内・外面:橙	白化粧土による圈線。	う-6 SK-1
	17		—	—	12.6	—	孔径1cm。上から下に向かって穿孔。	内面:ロクロナデ 外面:ナデ、ロクロナデ	1mm以下の赤褐色粒、白色粒、黒色粒、雲母を少し含む。	内・外面:橙		客土
	18	不明	口縁部	—	10.6	—		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	2mm以下の赤褐色粒、白色粒、黒色粒、雲母を少し含む。	内・外面:橙		客土
	19		—	—	11.4	—		内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	2mm以下の赤褐色粒、白色粒、黒色粒、雲母を少し含む。	内・外面:橙		客土

注「-」:計測不可



第36図 陶質土器（1）



第37図 陶質土器（2）・瓦質土器・カムィヤキ

## 第16節 瓦質土器

瓦質土器は破片も含めて5点出土した。そのうち4点を図化した。

第37図20は鉢の口縁部である。内面は横なで調整で、口唇部は玉縁状である。素地の色は黄灰色で、1mm以下の雲母、白色砂粒を少し含む。内外面は炭素吸着のため黒色で、外面には菊の花のスタンプ文様がある。出土地は不明である。

同図21は、え-6グリットのII層から出土した、底部資料である。鉢であろうか。底径は8.4cmで、内・外面ともなで調整である。素地は灰色で、2mm以下の雲母、白色砂粒、黒色粒を少し含む。内・外面とも灰色だが、外面の方がより暗い。

同図22は、う-5グリットのII層から出土した口縁部の破片資料で、器種は不明である。3ヵ所の破面のうち一面は、内外面と同じく炭素吸着のため黒色である。この一面は破面ではなく、本来の面を残しているようである。素地は灰色で、白色砂粒をわずかに含む。内外面とも横なで調整である。

同図23は、胴部片で器種、出土地は不明である。内面は灰色で青海波文のタタキ痕があり、外面は暗灰色でなで調整である。素地には1mm以下の雲母、白色砂粒、黒色粒を少し含む。

## 第17節 カムイヤキ

カムイヤキとは鹿児島県伊仙町(徳之島)にあるカムイヤキ古窯跡群で焼かれた還元焼成の焼き物で「類須恵器」とも呼ばれる。10世紀~14世紀頃に作られ、南西諸島を中心に分布する。

尻並遺跡からは破片も含めて10点出土したが、残りのよい2点を図化した。第37図24は、う-2グリットのII層から出土した壺の頸部である。外面はロクロなで、内面は剥離のため調整不明である。素地には1mm以下の白色砂粒を少し含み、内・外面ともに青灰色である。

同図25は、う-4グリットのSK-12から出土した壺もしくは甕の胴部片である。外面には格子目のタタキ痕があり、内面はタタキ痕がなで消されたあと、沈線がめぐっている。素地には1mm以下の白色砂粒、赤褐色粒を少し含み、器面は青灰色である。

第20表 カムイヤキ出土状況

器種	出土地		SK-12	SP-5	II層	合計
	頸部	底部				
壺					3	3
	底部				1	1
壺or甕	胴部		1			1
不明	不明			1	4	5
	合計		1	1	8	10

## 第18節 土器

今回の調査で破片も含めて15,717点(総重量が273.127kg)が出土した。多くの遺構から出土しているが、特にSK-1・2・4からの出土が多い。土器について説明するにあたり、まず素地、製作技法等で2つに大別した。ただし、素地はA類だが焼成度はB類といった具合に厳密に分類することが難しい例もいくつかあった。

	素地	成・整形方法	焼成度	文様
A類	白色粒(主に石灰質粒、サンゴ)を多く含み、暗赤色粒、橙色粒を含む。	ナデ、工具ナデ(ハケメ?)、ケズリ。その後に口縁部や外面をミガキ調整するものが多い。	器面は主に橙色で、所々に黒班をもつ例が多い。	基本的ない。
B類	白色・暗赤色・橙色粒、雲母等をわずかに含む。 A類に比べ混入物は目立たない。素地は緻密。	ロクロナデ、ナデ。	器面は主に橙色で、A類よりも色が均一であざやか。	波状文を施す例が多い。

器種については壺、鉢、火炉、火入、火取、急須、七輪、皿、蓋、香炉などがある。以下主な器種について概説し、詳細は観察表に示した。

### 1. 壺

最も出土量の多い器種である。口縁部の形態をもとに分類を行った。

A-1類: 口縁部が直線的なもの(第38図1~4・9・11、第47図113・114)

A-2類: 口縁部が外反するもの(第39図12~22)

A-3類: 口縁部が短いもの(第38図5~8・10、第39図23、第40図24~30)

B-1類: 口縁部がきつく外反するもの(第40図31~33、第41図37)

## B-2類:口縁部が逆「L」字形のもの(第41図38・39)

A類の壺の特徴として、口縁部～頸部に粘土を貼って肥厚したり、口唇部の粘土がはみ出して未調整のものが多いことが挙げられる。

### 2. 鉢

A-1類:口縁部が直口する(第41図40～42・50・51、第42図58)

A-2類:口唇部が少し外反する(第41図43～47)

B-1類:口縁部が短く、急激に外反する(第42図52～53)

B-2類:口縁部が長く、ゆるやかに外反する(第42図54)

B-3類:口縁部が逆「L」字形(第42図59～61)

B-4類:口縁部が逆三角形(第43図62)

B-5類:口唇部が内側もしくは両側に少し突出する(第43図63)

B-6類:口縁部が内傾する(第42図57)

A類の鉢の特徴として、A類の壺と同様なことが挙げられる。

### 3. 底部資料

A-1類:底部がくびれる(第46図100・102)

A・B-2類:底部の立ち上がりがきつい(第45図94・96・97、第46図99、第47図103・105・110・117)

A・B-3類:底部の立ち上がりがゆるい(第45図95、第46図98・101・104・107)

A・B-4類:高台あり(第46図106)

B-5類:脚あり(第47図109・111・112)

### 4. 七輪・さな(第44図81・82)

81はA類の七輪である。口縁部には3カ所の支えがあり、底部にはアーチ形の通風口が1カ所にある。内部には直径11cmの穴がある。この穴の上に82のようなさなを乗せて、さなの上で炭などを燃やして使ったと考えられる。

第21表 土器観察一覧

単位:cm

図番号 第38 図 ・ 図版 28	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器形	調整		素地	色調	観察事項	出土地
						内面	外面				
壺	壺	A-1	口～頸部	17.6	口縁部外面に粘土のはみ出しが少しある。	口縁部はミガキ、胴部はナデ、もしもはケメリ(風化が進む)、胴部の調整はやや粗い。	工具ナデ?のち口縁部は横、胴部は斜め方向のミガキ。	色は橙色で白色粒、石灰質粒、赤色粒を多く、サンゴ片、貝殻片、橙色粒、黒色粒、雲母を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色	胴径22.5cm、	い-1Ⅲ層-あ-2 Ⅱ層-SK-4- あ-3Ⅱ層
				13.5	頸部を肥厚させているようである。口唇部のナデが難な所がある。	ケズリ、頸部～口縁部はミガキ。	工具ナデのちミガキ。	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ片、赤色粒を少し、橙色粒をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: 明黄褐色	胴部最大径付近に黒色の付着物あり、胴部外面に黒斑あり(黄灰色で境界不明瞭)、胴径22.5cmある。	SK-4- SK-4-3層
				22.0	口縁部の粘土のはみだしあがない、頸部に粘土を貼り付け肥厚。	口縁部は横ミガキ、胴部は横ミガキ、胴部はケズリ。	口縁部は横ミガキ、胴部は横ミガキ、斜めミガキ。	石灰質粒、赤色粒を多く、サンゴ片、橙色粒を少し含む。	内面: 明赤褐色 外面: 明黄褐色、黒斑	外面の全体に黒斑あり(黒色)。	SK-2
			口縁部	—	頸部を肥厚させているようである。	ナデ	口縁部は横ナデ、他は斜め方向の丁寧なナデ。	色は橙色で赤色粒、サンゴ片、貝殻片を少し、石灰質粒を多く含む。	内面: 橙色、黒斑 外面: 橙色、黒斑	外側胴部にスカウト付着、口縁部内・外間に黒斑あり。	SK-5
			口～胴部	23.5	頸部を肥厚する、頸部以下は被熱したためか、風化が進む、ケズリ。	口縁部は横ミガキ、胴部はナデもしくはケズリ。	丁寧な横ミガキ。	色は橙色で石灰質粒、サンゴ片を多く、赤色粒を少し含む。	内面: 明赤褐色～橙色 外面: 明褐色、黒斑	胴部外面にスカウト付着、外側ほぼ全体に黒斑あり(黒色)、胴径35.2cm。	SK-2- い-1Ⅱ層
				—	ミガキ調整の関係で、頸部が一部肥厚しているように見えれる。	口縁部は横ナデ?、胴部は横ミガキ、胴部は横ケズリ。	口縁部は横ナデ?、胴部は斜めミガキ。	石灰質粒を多く、サンゴ片、赤色粒を少し、雲母をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: 淡い橙色	口底部～内面の一部にスカウト付着。	SK-2
				16.6	口縁部内外面と頸部外面を肥厚、口縁部のナデは難。	口縁部はミガキ、胴部はケズリないしナデ。	工具ナデのち、ナデもしくは粗いミガキ。	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ片、赤色粒を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色	底部～胴部中位に黒斑あり(灰色～黒色で境界やや不明瞭)ヌスの可能性もある。胴径20.6cm。	SK-2-層-SK- 4-3層-SK-4-5 層
			口～底部	13.5	口縁部内外面と頸部外面を肥厚、口縁部のナデは難。	口縁部はミガキ、胴部は工具ナデ?	工具ナデ?	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、サンゴ片を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色		あ-1 SK-2
				9.5	—	頸部内面が厚く張り出す。	工具ナデ?	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、サンゴ片を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色		
			A-1	19.2	—	頸部はナデ	ナデ(風化進む)	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、サンゴ片を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色		い-1 Ⅲ層
				—	—	頸部内面が厚く張り出す、焼きしまっておりたたくと金属音、気泡状の白色物を多量に含む。器形は8と同じだが胎土、後成度合、色調が明らかに違う。	ナデ?(風化)	ナデ?(風化)	色は暗青灰色で石灰質粒を少し、サンゴ片を多く含む。	頸部内面に黄色の付着物、上器ではなく、陶器、炻器の可能性が高い。	不明
				17.8	—	頸部を少し肥厚。	ミガキ	色は橙色、1カ所にスサ痕、石灰質粒を多く、サンゴ片、赤色粒を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色、黒斑	内面にスカウト付着、胴部の1カ所に黒斑あり(濃い黄褐色、黒色)。	あ-1 SK-2

注「-」:計測不可、「+」:接合の意

第21表 土器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器形	調整		素地	色調	観察事項	出土地	
						内面	外面					
第39 図・ 図版 28	壺	A-2	口～ 胴部	12.4	頸部を少し肥厚。5mm以上 の赤色粒が目立つ。	ケズリもしくはナデ	工具ナデの ちミガキ。	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、 サンゴ片、橙色粒を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色	胴径42.8cm。	不明	
				13	口縁部 はみだし、肥厚はない。	ナデか(風化)	ミガキもしくは ナデか(風化)	色は橙色で赤色粒、石灰質粒を多く、 サンゴ片、橙色粒を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色		SK-4 3層	
				14	口～ 胴部 口縁部の粘土が不規則に はみ出している。	工具ナデのち粗い ミガキ(沈線状の風 ガキもある)	工具ナデもし くはミガキ(風化 している)	色は明赤褐色で石灰質粒、赤色粒を 多くサンゴ片を少し含む。	内面: 明赤褐色 外面: 明赤褐色	ススもしくは焦げが付 着。頸部～胴部に炭 素が付着(ススか黒斑 かは不明)。	い-1 Ⅲ層	
				15	口縁部 内面に接合痕が残る。	ナデか	胴部はミガキ に近い丁寧 なナデ。	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ 片、赤色粒、橙色粒を少し、貝殻片を わずかに含む。	内面: 橙色 外面: 橙色		あ-1 SK-2	
				16	口縁部の内外面は肥厚 し、その接合痕が明瞭。	ナデ。口縁部はミ ガキ。	工具ナデの ちミガキ。	色は橙色で(中心部は灰色)石灰質粒 を多くサンゴ片、赤色粒を少し、貝殻 片をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: 橙色		い-1 Ⅲ層	
			口～ 胴部	17	頸部を肥厚させる。	ナデか	ナデか	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、 サンゴ片を少し、橙色粒をわずかに含 む。	内面: 橙色 外面: 橙色	口縁部外面に黒斑あ り。	SK-4 1層	
				18	頸部が分厚い。	ミガキ	ミガキ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、 サンゴ片を少し、貝殻片をわずかに含 む。	内面: 橙色 外面: 橙色	ススは破面にも付着 していることから二次的 な可能性がある。	あ-2 Ⅲ層	
				19	口唇部は一部外面にせり 出している。頸部は調整の 関係で断続的に肥厚して いるように見える。	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、 サンゴ片を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色		え-5 SP-2	
				20		ナデか	ナデか	色は橙色で石灰質粒、赤色粒、橙色 粒を多く、サンゴ片、橙色粒を少し含 む。	内面: 橙色 外面: 橙色		土坑墓2	
				21		横ミガキ	横ミガキ	色は橙色、にぶい黄橙色で石灰質粒 を多く、赤色粒、サンゴ片を少し含む。	内面: にぶい黄橙 色 外面: 褐灰色	灰色の黒斑?あり。	あ-4 SK-14	
			口縁部	22	5mm前後の大粒の赤色粒 が目立つ。	横ミガキ	縦工具ナデ のち横ミガキ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、 橙色粒、サンゴ片を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色		SK-4	
				23	A-3 口縁部 口縁部が少し外にせり出 す。	風化のため不明	ナデか	色は橙色で(中心部は黄灰色)石灰質 粒を多く、赤色粒、サンゴ片を少し含 む。	内面: 橙色 外面: 橙色		土坑墓2	
第40 図・ 図版 29	壺	A-3	口縁部	24	頸部にミガキ前の工具ナ デ痕が残る。	胴部は工具ナデ、 口縁部はミガキ。	横ミガキ	色は橙色、黄灰色で石灰質粒を多く、 サンゴ片、赤色粒を少し、貝殻片をわ ずかに含む。	内面: 橙色 外面: 橙色	外面部の一部に黒斑あ り(黒色で境界が明 瞭)。	SK-2 6層	
				25		風化のため不明	細かく丁寧な 横ミガキ。	色は橙色、赤色粒を少し、貝殻片をわ ずかに含む。	内面: 橙色 外面: 橙色	外面部の一部に黒斑あ り(黒色で境界が明 瞭)。	あ-1SK-2+ SK-4-2層	
				26		ナデか	ナデか	色は橙色、にぶい褐色で石灰質粒を 多く、サンゴ片、赤色粒を少し、貝殻 片をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: 橙色	外面部に黒斑あり(黒色 で境界が明瞭)。	SK-4+ SK-4-5層	
				27	部分的に口唇部に粘土の はみ出しがある。	工具ナデの ちミガキ。	工具ナデの ちミガキ。	色はにぶい褐色で石灰質粒を多く、 赤色粒を少し含む。	内面: にぶい黄橙 色 外面: 褐灰色	外面部に黒班あり(にぶ い褐色)。	SK-5	
				28	頸部を肥厚しているが粘土 が足りない部分が所々に ある。口唇部は若干粘土 がはみ出する。	口縁部はミガキ。 胴部は工具ナデ?	横ミガキ	色はにぶい褐色で石灰質粒を多く、 赤色粒を少し含む。	内面: 橙色 外面: 橙色	外面部に黒班あり(境 界は明瞭)。	SK-4 3層	
			口～ 胴部	29	口唇部は少し粘土がせり 出す。	丁寧なナデ	ケズリ	色は橙色、灰褐色で石灰質粒を多く、 赤色粒、橙色粒、サンゴ片を少し含 む。	内・外面部: にぶい 橙色	内面部に灰色の付着 物あり(ススか黒班かは 不明)。	不明	
				30	形は29に似るが、頸部内 面の肥厚はない。	丁寧なナデ	丁寧なナデ	色は橙色、灰褐色で石灰質粒を多く、 赤色粒をわずかに含む。	内・外面部: 橙色	内面部に灰色の付着 物あり(ススか黒班かは 不明)。	不明	
				31	20.7	口縁部はミガキ、 ロクロナデ。	頸部～口縁部 はロクロナデ。 胴部は横、斜め方 向のミガキもしくは丁寧な ナデ。	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、 サンゴ片を少し含む。	内・外面部: 橙色	胴上半の一部に黒班 (しきものあり(灰色))、 胴部外面に波状文あ り(6本/9mmの溝)。胴径 は44cmである。	う-1 II層	
				32	19.6 27.5 14.0	胸部下半は斜め 方向のナデ。胸部 上半～口縁部はロ クロナデ。	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、 サンゴ片を少し含む。	内・外面部: 橙色	胸部外面に波状文あ り(6本/7mmの溝)。胴径 は35.2cmである。	う-1 II層+ う-5 II層+ う-6 SK-1	
				33	19.4	波状文を施した後に一部 ナデた部分がある。	ロクロナデ	色は橙色、灰色で石灰質粒、赤色粒、 雲母を少し含む。	内・外面部: 橙色	胸部外面に波状文あ り(5本/7mmの溝)。	う-4 II層	
第41 図・ 図版 29	壺	B	口～ 胴部	34	香炉	20.8	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒 を少し含む。	内・外面部: 橙色	頸部外面に菊花文ス タブあり。	う-1 II層
				35	B	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒をわ ずかに含む。	内・外面部: 橙色		客土	
			B-1	36	口～ 底部	ナデ	ロクロナデ	色はにぶい黄橙色で赤色粒、橙色粒 を少し、石灰質粒、雲母をわずかに含 む。	内・外面部: にぶい 黄橙色		客土	
				37	B-1 口～ 胴部	21	ロクロナデ。所々 に縦、斜めナデ。	ロクロナデ	色はにぶい黄橙色で石灰質粒を多く、 赤色粒、橙色粒、雲母を少し含む。	内・外面部: にぶい 黄橙色	外面部に沈線文と波状 文あり(5本/8mmの溝)	う-2 II層
		B-2	口～ 胴部	38	29.8	縦工具ナデのち? ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で赤色粒、橙色粒を少し、石 灰質粒をわずかに含む。	内・外面部: 橙色	外面部に波状文あり(5本/ 8mmの溝)	う-4 II層	
				39	33.8	内外面とも風化が進む。	ロクロナデ?	ロクロナデ?	色は橙色で石灰質粒、赤色粒、橙色 粒、黒色粒を少し含む。	内・外面部: 橙色	外面部に波状文あり(4本/ 6mmの溝)	い-1 II層

注 「-」: 計測不可、「+」: 接合の意

第21表 土器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器形	調整		素地	色調	観察事項	出土地
						内面	外面				
第41図・ 図版29	鉢	A-1	口縁部	—	内外面とも口縁部は粘土を足して肥厚しているようである。口唇部には若干のはみ出しがある。	粗いナデ	粗いナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、サンゴ片を少し含む。	内・外面: 橙色		う-6 II層
				29.2		工具ナデのち?ナデ	工具ナデのち?ナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、橙色粒、サンゴ片を少し含む。	内・外面: 橙色		う-3 II層+ う-4 II層
				—	口唇部のはみ出し等はない。口径30~40cm前後。	ケズリに近いナデ。	ケズリに近いナデ?	色はぶい黄橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒、サンゴ片を少し含む。	内・外面: 橙色	ススが外面にある(黄灰色で境界不明瞭)。	不明
				—	口唇部が少しせり出す。口径35cm前後。	ナデ	ナデ	色は明黄褐色、橙色で石灰質粒を多く、サンゴ片を少し、赤色粒をわずかに含む。	内・外面: 明黄褐色~橙色		う-2 SP-22
				—	口唇部が少しせり出す。口径35cm前後。	横ナデ	横ナデ	色は黄橙色、橙色で石灰質粒を少し、赤色粒を多く含む。	内面: 黄橙色 外側: 橙色		SK-4 2層
		A-2	口縁部	—	口唇部の粘土がはみ出した部分はナデられていない。口径30cm前後。	ナデか	ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒、サンゴ片を少し、貝殻片をわずかに含む。	内・外面: 橙色		う-1 II層
				—	口唇部の粘土がはみ出した部分はナデされていない。5mm前後の大粒の赤色粒が目立つ。	工具?ナデ、ナデ	工具?ナデ、ナデ	色は黄橙色、橙色で赤色粒を多く、橙色粒を少し、石灰質粒をわずかに含む。	内面: 黄橙色 外側: 橙色		う-3 II層
				15.9		胴部はナデ、口縁部はミガキ。	胴部はミガキに近い丁寧なナデ。口縁部はミガキ。	色はぶい黄橙色で石灰質粒を多く、赤色粒をわずかに含む。	内・外面: 黄橙色	2つの破片が接合したが一方は外面が黒斑に覆われもう一方には黒斑がない。土器が焼成中に割れ、一方は黒斑がついたまま焼成が終わり、もう一方は表面の炭素が燃焼した為、黒斑として残らなかつたのではないか。	不明
				—							
				—	口径20cm前後。	口縁部はミガキ。胴部はナデもしくは粗いミガキ。	口縁部はミガキ。胴部は工具ナデのちナデ。	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、サンゴ片を少し含む。	内・外面: 橙色		SK-4
第42図・ 図版30	鉢	A	口縁部	—	口径30cm前後。	ミガキ	ミガキ	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ片を少し、赤色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面: 橙色	外面にススあり(黄灰色で境界不明瞭)。	不明
				—	口径20cm前後。	工具ナデのち丁寧なナデ。口縁部はミガキ。	工具ナデのち丁寧なナデ。口縁部はミガキ。	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒、サンゴ片を少し含む。	内・外面: 橙色		SP-18
				—	頸部はナデが不充分。	胴部はケズリ。	工具のちナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、サンゴ片を少し含む。	内・外面: 橙色		い-2 III層
		A-2	口縁部	16.2		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を少し、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色	波状文あり(7本/1cmの溝)。	客土
				—	口径20cm前後。	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を少し含む。	内・外面: 橙色		う-6 SK-1+ う-3 II層
				—	5mm前後の赤色粒が目立つ。器壁が所々クレーター状にはじけこんでおり、そこには高い確率で赤色粒がある。	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で赤色粒を多く、石灰質粒をわずかに含む。	内・外面: 橙色	波状文があり(6本/1cmの溝)、胴径30cmである。	あ-4 SK-14
			B	30.2		ナデ	ロクロナデ、ミガキ。	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、サンゴ片を少し含む。	内・外面: 橙色	沈線文がある。胴径19.4cm。	う-1 II層
				—		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ片を少し、赤色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面: 橙色	沈線文がある(文様として施したことかは不明)。	う-4 II層
				—		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ片を少し含む。	内・外面: 橙色	胴径37.6cm。	客土
				—		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で赤色粒、橙色粒を少し、石灰質粒をわずかに含む。	内・外面: 橙色		客土
第43図・ 図版30	鉢	B-6	口～胴部	35.2		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で赤色粒、橙色粒を少し、石灰質粒をわずかに含む。	内・外面: 橙色		客土
				—	口径30cm前後。	工具ナデのち?ナデ	工具ナデのち?ナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、橙色粒を少し含む。	内・外面: 橙色		客土
				—	内面は口縁部の橙色、胴部がぶい黄橙色だが、その境界は直線的ではつきりしている。	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色、灰色で石灰質粒、赤色粒を少し、雲母をわずかに含む。	内面: 橙色、ぶい黄橙色 外側: 橙色		あ-4 SK-14
		B-3	口～胴部	26.6		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で赤色粒、橙色粒を少し、石灰質粒、赤色粒を少し、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		
				37.2		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で赤色粒、橙色粒を少し、石灰質粒、赤色粒を少し、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		客土
				46.9	口縁部平端面に2本の沈線。ロクロナデの凹凸が目立つ。	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒を少し、サンゴ片、赤色粒、橙色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		い-1 II層
				44.6	口縁部平端面に2本の沈線。	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を少し、橙色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		あ-4 SK-14
		B-5	口～胴部	40.8		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色(中心部は黄灰色)で石灰質粒を多く、赤色粒を少し、橙色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色	口縁部平端面に波状文がある(7本/1.2cmの溝)。	客土
		64	擂鉢	B	底部	—	擂り目は7本/2cm。底部外側には圧痕が残ったままである。	不明	ロクロナデもしくはロクロケズリか。	色は橙色で赤色粒を少し、石灰質粒をわずかに含む。	

注「-」:計測不可、「+」:接合の意

第21表 土器観察一覧

単位:cm

図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器形	調整		素地	色調	観察事項	出土地
						内面	外面				
第43 図・ 図版 30	火灰	A	口～ 底部	— 12.8 11.2	耳の周囲に工具痕。	ミガキ	ケズリ	色はにぶい黄橙色で赤色粒を少し、 橙色粒をわずかに含む。	内・外面:黄橙色	内面底部へ口縁部に 黒色付着物あり(スヌ ニシコグ)。外面底部 あり(黒色)。胴径19.2 cm。	SK-4
		B	口～ 胴部	16.2 — —		ミガキ、ケズリ	ミガキ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を少し 含む。	内・外面:橙色		客土
		A	口～ 胴部	15.8 — —		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を少し 含む。	内・外面:橙色	沈線文あり。	客土
第44 図・ 図版 31	火灰	B	口～ 胴部	12.4 — —	直径1.7cmの穴を空けた時 の粘土のはみだしは、外 面はきれいに消されている が、内面はそのままであ る。	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒を少し、赤色粒 を多く、雲母をわずかに含む。	内・外面:橙色	内面が少しスヌけてい るようである。	客土
		A	口～ 胴部	18.2 — —	1.6cmの褐鉄鉱粒を1粒含 む。	ロクロナデ。耳貼り つけ時のナデ、オ サエ。	ロクロナデ。耳貼りつけ時のナデ、オ サエ。	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ 片、赤色粒を少し含む。	内・外面:橙色	耳の下半がスヌけてい るようである。	う-4 II層
		A	耳?	— — —	耳周辺に沈線状の工具痕 が残る。	ケズリのちナデ?耳 貼付け時のオサ エ。	工具ナデの ちナデ。	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ 片、赤色粒を少し含む。	内・外面:橙色	外面に黒斑あり。	不明
		A		— — —	耳の周辺に5mm程度の赤 色粒が目立つ。沈線状の 工具痕。	ナデもしくはケズリ	ナデ	色は橙色(中心部は灰色)で石灰質 粒、赤色粒を多く、サンゴ片、橙色粒 を少し含む。	内・外面:橙色		不明
第45 図・ 図版 31	火取?	A	口～ 胴部	21 — —	外面の一部に灰色の付着 物。	ナデもしくはケズ リ。耳貼付けのため のオサエ。	ミガキ、ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ 片、赤色粒を少し、橙色粒をわずかに 含む。	内・外面:橙色	内面にスヌあり。	あ-2 II層
		A	口～ 胴部	6.8 — —		オサエ、ナデか。	ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ 片、赤色粒を少し、橙色粒をわずかに 含む。	内・外面:橙色		う-3 II層
		B		19.8 — —		ナデ、ロクロナデ。	ロクロナデ	色は橙色(中心は灰黄色)で石灰質 粒、赤色粒、橙色粒、雲母を少し、サン ゴ片をわずかに含む。	内・外面:橙色		客土
第46 図・ 図版 32	皿	B	口～ 底部	9.4 2.2 4.8	混入物が少なく精選されて いる。	風化のため不明。	ロクロナデ、胴部 ～底部はケズリ。	色は橙色(中心は灰黄色)で石灰質 粒、赤色粒をわずかに含む。	内・外面:橙色		客土
		B	把手	— — —		ナデ	工具ナデの ち?丁寧なナ デ	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ 片、赤色粒、黒色粒を少し、橙色粒を わずかに含む。	内・外面:橙色		客土
		B	底部	— 9.6		ナデ、ロクロナデ	ナデ、ロクロ ナデ	色は橙色で石灰質粒、橙色粒、雲母 をわずかに、赤色粒を少し含む。	内・外面:橙色		客土
		B	—	— — —	△類に近い胎土。長石・石 英粒らしきものを含む。風 化が進む。	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ 片、赤色粒、橙色粒を少し含む。	内・外面:橙色		客土
第47 図・ 図版 33	急須	B	注口	— — —		ナデ	ミガキ	色は橙色で石灰質粒を少し、赤色粒、 雲母をわずかに含む。	内・外面:橙色		客土
		B	口～ 胴部	17 — —		ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で石灰質粒、サンゴ片、赤色 粒をわずかに、雲母を少し含む。	内・外面:橙色		3トレンチ
		A	口～ 底部	20.6 14.8 19.4	さなど組み合わせて使用し たと考えられる。アーチ形 の通風孔が1カ所ある。 ①下段部と上段部を別々に 作る(この段階で上段部に は4本の刻目が入る)②下 段部と上段部をつなげる。 外面は風化が進む。	ミガキ	ナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、 サンゴ片、橙色粒を少し含む。	内・外面:橙色	内面の所々にスヌが 付着。胴部に4本の刻 目。	う-6 II層+ う-5 II層
		A	—	— — —	直径1.4cm前後の穴が7個 ほど空いていると考えられ る。	ナデか	ナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、 サンゴ片、橙色粒を少し含む。	外面:橙色	上面が黄灰色にスヌ けている。上面径が 10.2cm、下面径が7.9 cmである。	う-4 III層
第48 図・ 図版 34	フライパン 状	B	把手	— — —		ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒、雲母をわず か、赤色粒を少し含む。	内・外面:橙色		客土
		A	—	— — —	径1cmの孔。	耳貼り付けの指オ サエ。ナデ。	ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、サンゴ 片、赤色粒、橙色粒、雲母をわずかに 含む。	内・外面:橙色	内面にスヌあり。	う-2 II層
		A	—	— — —	径1.2cmの孔。	耳貼り付けの指オ サエ。ナデ。	ナデ	色は橙色で石灰質粒を少し、赤色粒、 橙色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面:橙色	一部にスヌらしきもの が付着。	う-4 不明
		A	—	— — —	径1cmの孔。	ナデか	ナデ	色は橙色で石灰質粒、橙色粒を多く、 赤色粒を少し、雲母をわずかに含む。	内・外面:橙色	外面のほぼ全面に黒 斑あり。	え-6 II層
第49 図・ 図版 35	鉢	A	—	— — —	中空。	ナデか	ナデ	色は明黄褐色で石灰質粒を多く、貝 殻片を少し、雲母をわずかに含む。	内・外面:明黄褐 色		不明
		A	—	— — —	内面に突起がある。5mm前 後の赤色粒、橙色粒が目 立つ。	ナデ	ナデか	色は橙色で石灰質粒、赤色粒、橙色 粒を多く含む。	内・外面:橙色		客土
		A	—	— — —	耳貼り付けの指オ サエ。ナデ。	ナデ	色はにぶい黄橙色で石灰質粒を少 し、赤色粒、橙色粒をわずかに含む。	内・外面:にぶい 黄橙色		い-1 II層	
		A	—	— — —	器壁に対して耳が斜めに 付く。器面を手で触ると粉 が付着。	ナデか	ナデ	色は明黄褐色で石灰質粒を多く、サン ゴ片を少なく、赤色粒、橙色粒をわ ずかに含む。	内・外面:明黄褐 色	耳に浅い刻目文様あ り。	不明
第50 図・ 図版 36	不明	A	胴部	— — —		ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、貝殻片、 赤色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面:橙色	龍の頭部を表現。	客土
		B	不明	— — —		ナデ	ナデ	色は橙色(中心部は明黄褐色)で赤 色粒、橙色粒を多く、石灰質粒を少 なく含む。	内・外面:橙色		不明

注 「-」:計測不可、「+」:接合の意

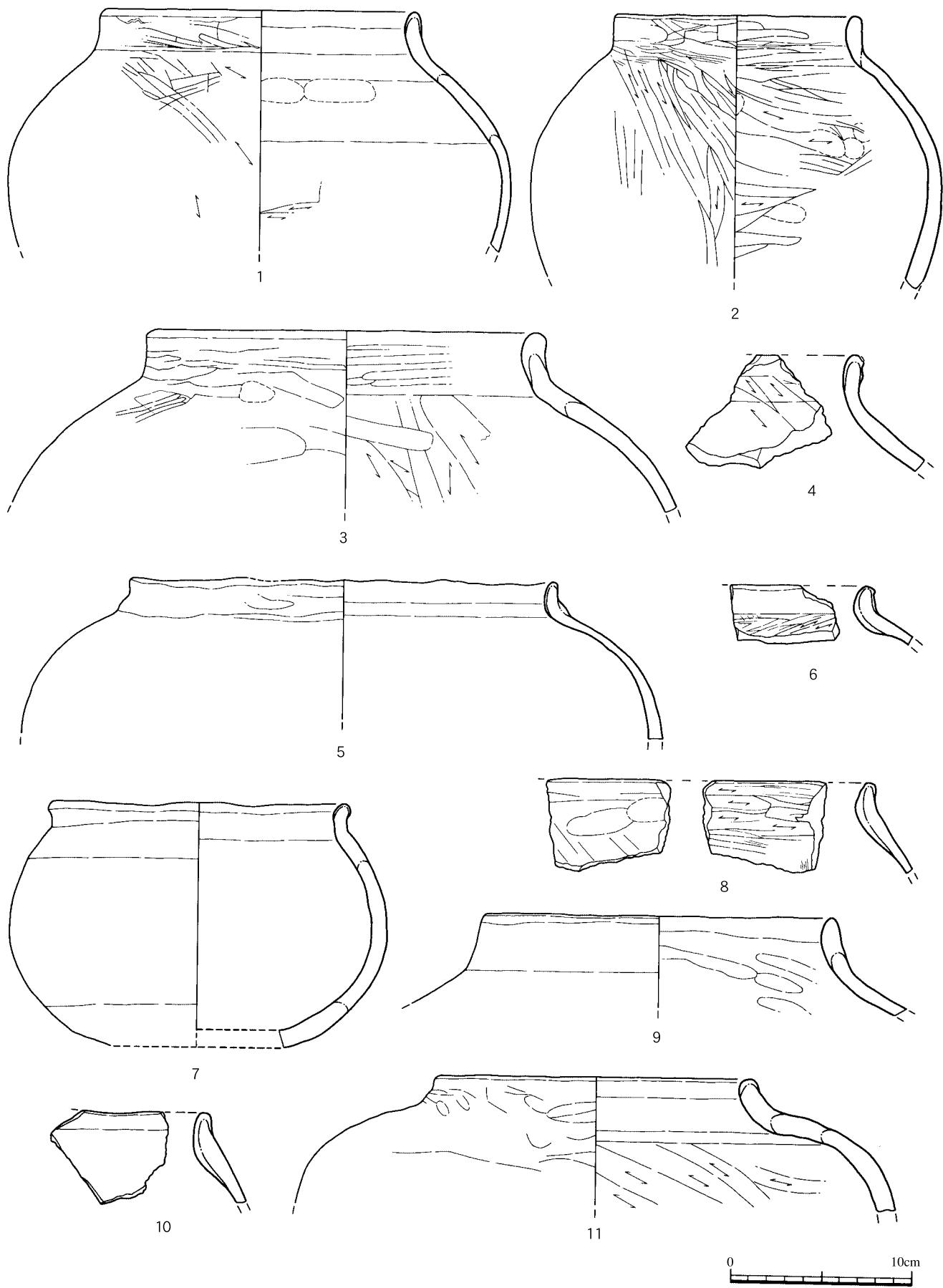
第21表 土器観察一覧

単位:cm

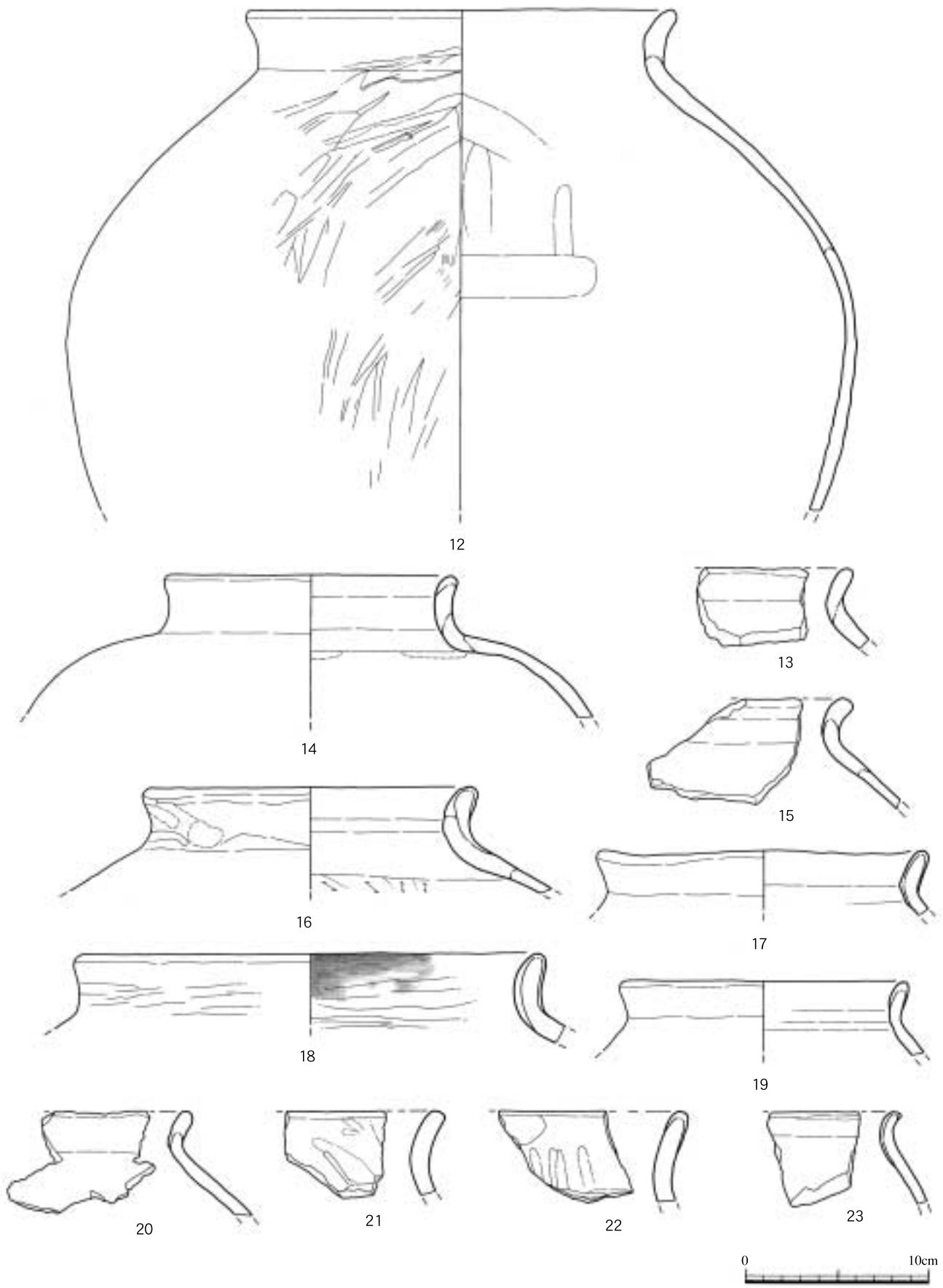
図番号	器種	分類	部位	口径 器高 底径	器形	調整		素地	色調	観察事項	出土地	
						内面	外面					
第45 図・ 図版 31	93	不明	B	不明	— — —	ナデ	ナデ	色は橙色(中心は褐色)で石灰質粒を少なく、赤色粒をわずかに含む。	内・外面: 橙色	内面?に貼付文様? 瓦の可能性がある。	客土	
	94		A-2	底部	— — 13.8			色は橙色で石灰質粒、赤色粒、橙色粒を多く、サンゴ片をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: にぶい黄橙色		SK-4 5層	
	95		A-3		15.3 —	内外面ともボーラス状。クリヤーのような灰色の粒をわずかに含む。	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒を少し、サンゴ片を少し、貝殻片、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色	底部のほぼ全面に黒班あり(黒色)。	あ-2 SP-29
	96		A-2		16.6	内面はボーラス状。 ミガキに近い丁寧なナデ。	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒を多く、橙色粒を少し含む。	内・外面: 橙色		SK-4-3層+ SK-4-5層
	97				19.6	内面はボーラス状。	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒を少し、橙色粒をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: 明黄褐色		SK-4 2層
	98		A-3	底部	— — 16.4	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒、橙色粒を多く、サンゴ片、貝殻片をわずかに含む。	内・外面: 明黄褐色	底部全体に黒班あり(黒色)。	SK-4 1層	
	99		A-2	底部	— — 11.8			工具ナデの ちナデ	色は明黄褐色で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒、雲母をわずかに含む。	内面: 明黄褐色 外面: 黒色(黒班)	外面全体に黒班あり。胴径21.2cm。	SK-4
第46 図・ 図版 32	100	不明	A-1	底部	— — 11	内外面ボーラス状。	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒を少し、赤色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色	底部内外面に付着物(スヌがどうかは不明)。	あ-2 III層
	101		A-3	底部	— —	ナデ	ナデ	色は明黄褐色で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: 黑色(黒班)	外面全体に黒班あり。	SP-12	
	102		A-1	底部	— — 7			ナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒、橙色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		あ-4 SP-18
	103		A-2	底部	— — — 5mm前後の赤色粒、橙色粒、貝殻片が目立つ。	ナデ	ナデ、沈線(ミガキ)	色はにぶい黄橙色で赤色粒、橙色粒、貝殻片が多く、石灰質粒、黑色粒、雲母をわずかに含む。	内面: 黒色(黒班) 外面: 橙色	内面と胸部全面に黒班あり(黒色)。	SP-11	
	104		A-3	底部	— — 10	内外面ボーラス状。 ミガキもしくは丁寧なナデ。	ミガキもしくは丁寧なナデ	色は橙色、にぶい褐色で石灰質粒、赤色粒、橙色粒を多く含む。	内・外面: 橙色、に ぶい褐色	内外面のほぼ全体にスヌあり、破面にもあるので2次的な可能性もある。	い-1 III層	
	105		A-2	底部	— — 23.0	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒、橙色粒を多く、赤色粒を少し含む。	内面: 橙色 外面: 黑色(黒班)	外表面全体に黒班あり。底部付近に幅2cmの低い突起。	え-5 II層	
	106		A-4	底部	— — 7			工具ナデの ちミガキ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: 黑色(黒班)	外面全体に黒班あり。	不明
	107		B-3	底部	— — 14.7	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色(中心部は褐色)で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒を少なく、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色	胴径27.2cm。	客土	
	108	香炉?	B	底部	— — 9	おそらく3カ所に逆三角形の脚が付く。	ロクロナデ	ロクロナデ、 ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒を少なく、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		客土
第47 図・ 図版 32	109	不明	B-5	底部	— — — 六角形?の底部。	ナデ	ナデ	色は橙色で赤色粒、橙色粒を多く、石灰質粒を少なく、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		う-1 II層	
	110		B-2	底部	— — —	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色	沈線文様あり。	う-6 II層	
	111		B-5	底部	— — 18.7			ロクロナデ	色は橙色(中心部は灰色)で石灰質粒、赤色粒を少なく、橙色粒、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		不明
	112		B-5	底部	— — — 脚破面に工具ナデ痕。	ミガキ、ナデ	ナデ	色は橙色(中心部は灰色)で石灰質粒を多く、赤色粒、橙色粒を少なく、雲母をわずかに含む。	内・外面: 橙色		客土	
	113		壺	口縁部	— — —	ナデ	ナデ	色は橙色で石灰質粒、赤色粒、橙色粒を少なく、貝殻片を多く含む。	内・外面: 橙色	頸部外面に黒褐色の付着物あり(スヌかどうかは不明)。	い-5 SK-6	
	114				— — — 内面ボーラス状。	ナデ	ナデ	色は橙色で白色粒、灰色粒、石灰質粒、黒色粒を少し、貝殻片を多く、赤色粒をわずかに含む。	内・外面: 橙色	肩部に沈線。まず横線(若干右上がり)を引き、次に右上がりの線を引く。沈線の縦内には細かな条線が残る。	え-4 II層	
	115	蓋	B	—	— — — 立ち上がり部の1カ所に直径4mmの穿孔。	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で白色粒、石灰質粒、赤色粒、透明粒、黒色粒を少し、貝殻片を多く含む。	内・外面: 橙色	底径は15.2cmである。	い-5 SK-6	
	116	碗?	A	口～ 底部	13 — —	ナデ	ナデ	色は褐色で石灰質粒を少なく、貝殻片を多く、赤色粒、黒色粒をわずかに含む。	内・外面: 橙色		い-2 II層	
	117	不明	A-2	底部	— — —			ナデか	ナデか	色は橙色で石灰質粒を少し、貝殻片を多く含む。	内・外面: 橙色	SK-4
	118	急須?	八重山 焼	底部	— — — 内面に自然釉?	ナデか	ナデ	色は青灰色(白色粒を少し含む)。	内・外面: 青灰色		不明	
	119	壺		口縁部	20.2 — —	ロクロナデ	ロクロナデ	色は橙色で白色粒を少し、透明粒、黒色粒をわずかに含む。	内面: 橙色 外面: 青灰色		不明	
	120	フライパン 状製品	B	把手	— — — ミガキに近い丁寧なナデ	ミガキに近い丁寧なナデ	ミガキに近い丁寧なナデ	色は明黄褐色(中心部は灰色)で黒色粒を少し、橙色粒をわずかに含む。	内・外面: 明黄褐色		客土	
	121	鉢?	B	口縁部	— — —	ナデ	ナデ	色は明黄褐色で白色粒、赤色粒、橙色粒、黒色粒、雲母をわずかに含む。	内面: 明黄褐色 外面: 明黄褐色、灰色	外面に黒班あり(灰色)。口縁部に波状文あり。	あ-4 SK-14	
	122	不明	B	底部	— — — 多角形の底部。	丁寧なナデ	丁寧なナデ	色は明黄褐色で白色粒、赤色粒、透明粒をわずかに含む。	内・外面: 明黄褐色		え-6 II層	

注「-」:計測不可、「+」:接合の意

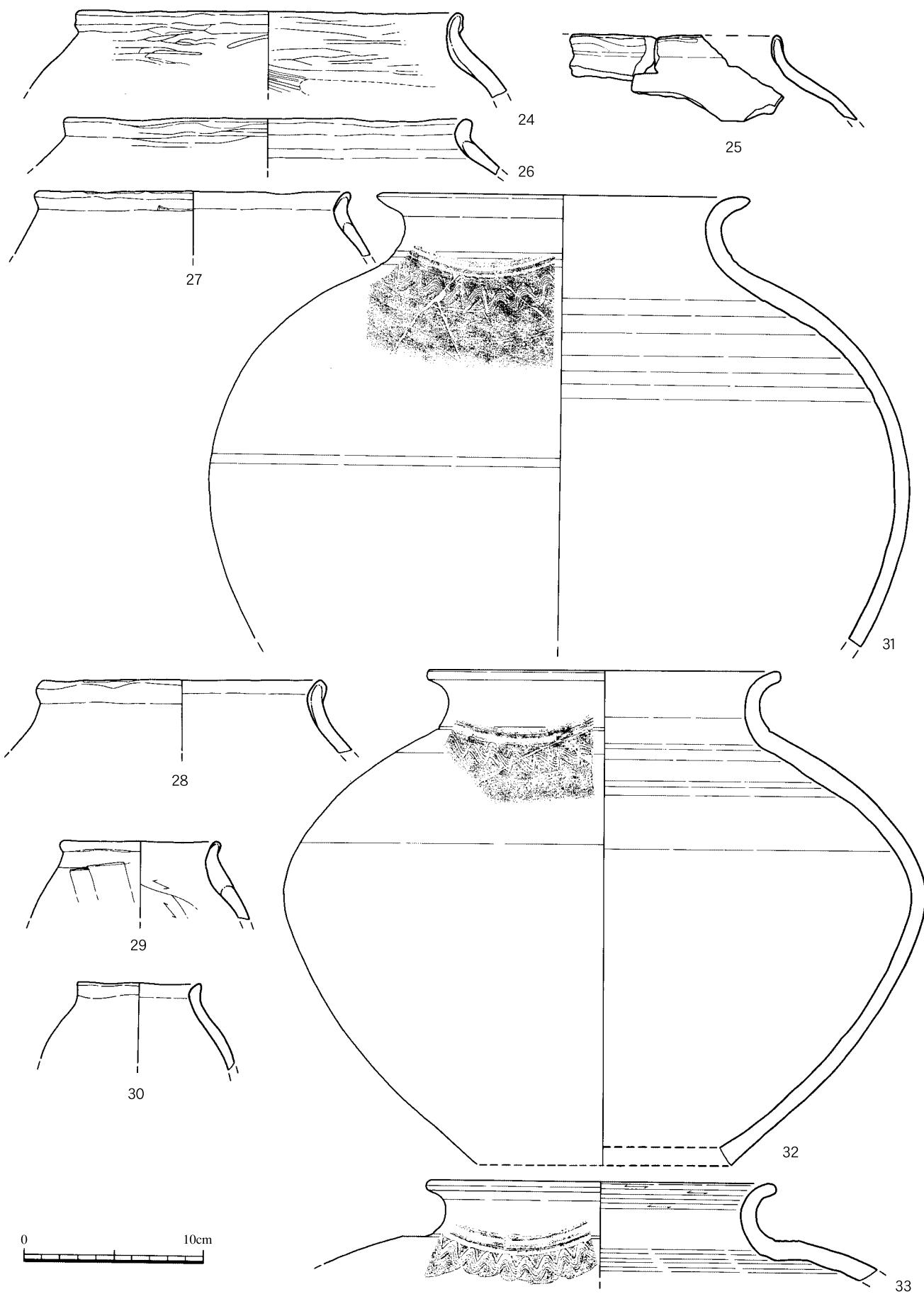




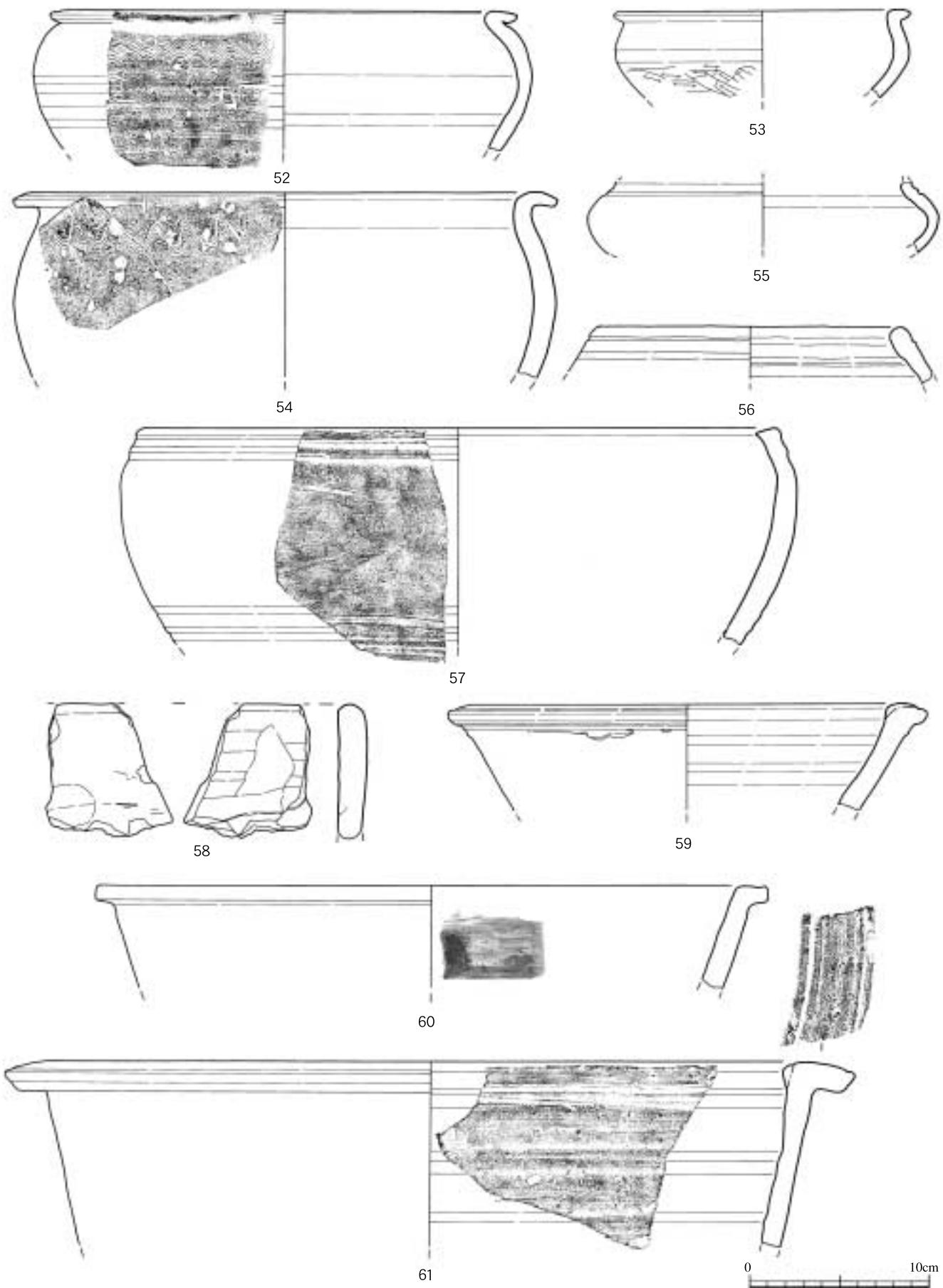
第38図 土器(1)



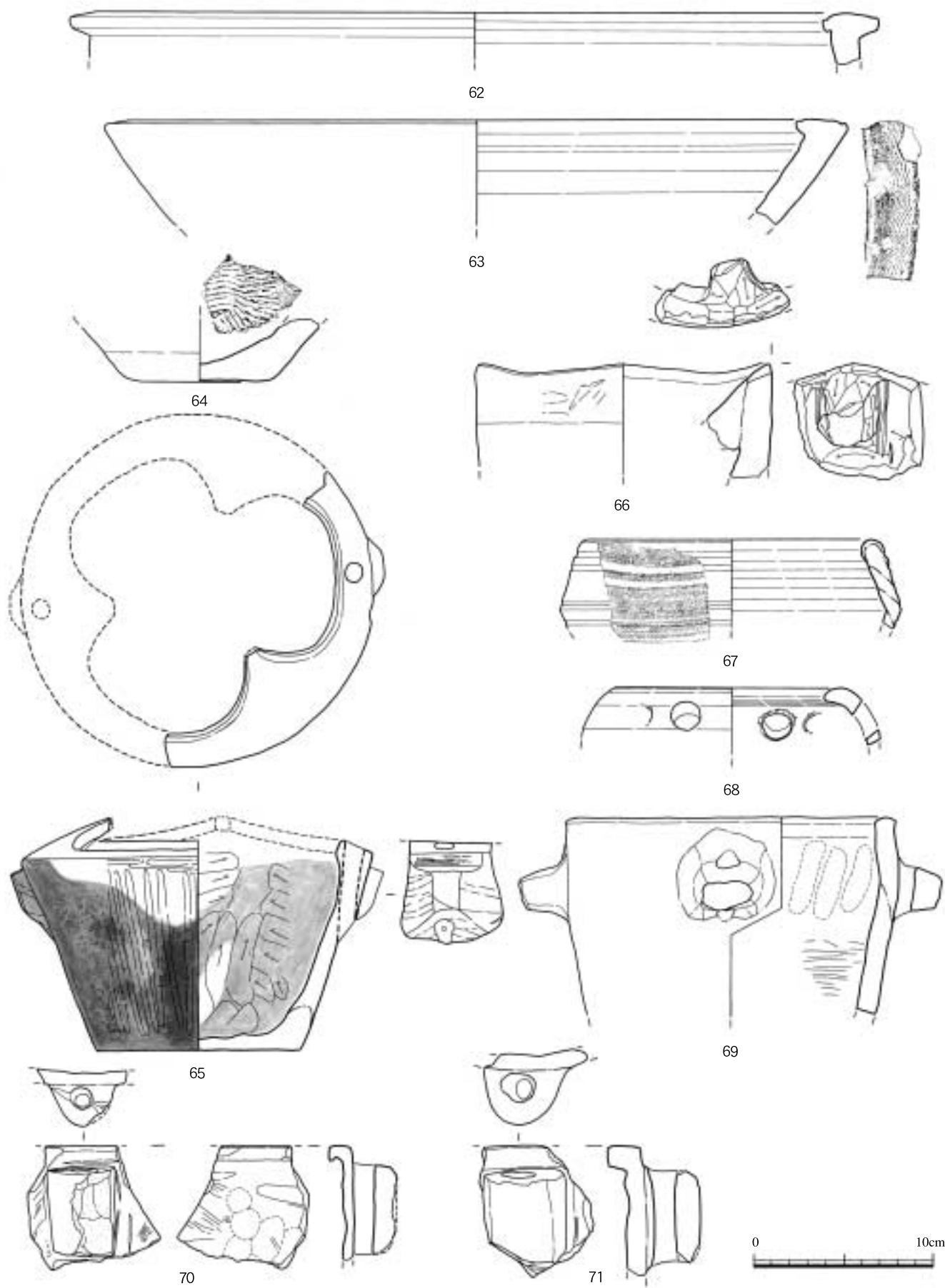
第39図 土器(2)



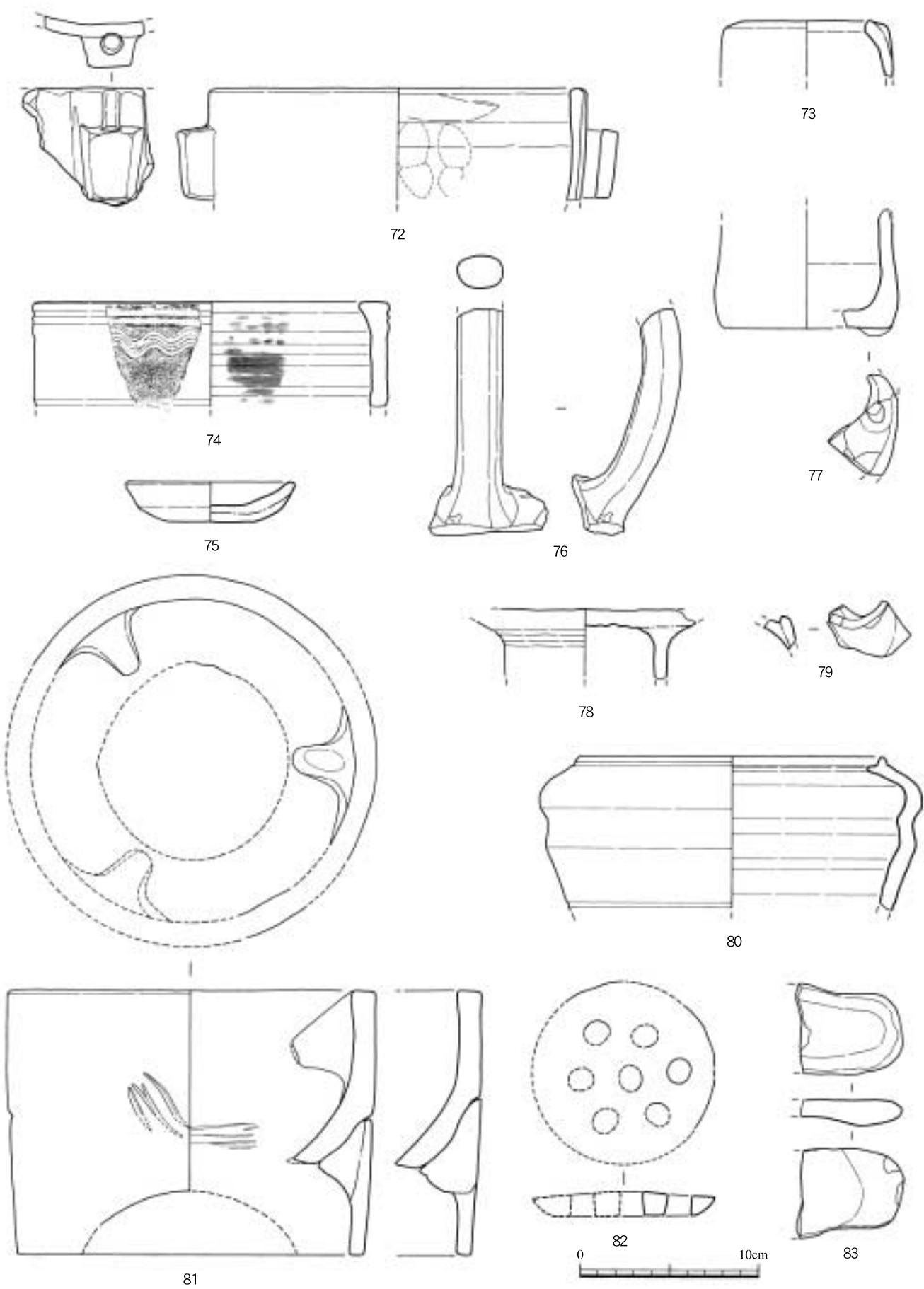
第40図 土器(3)



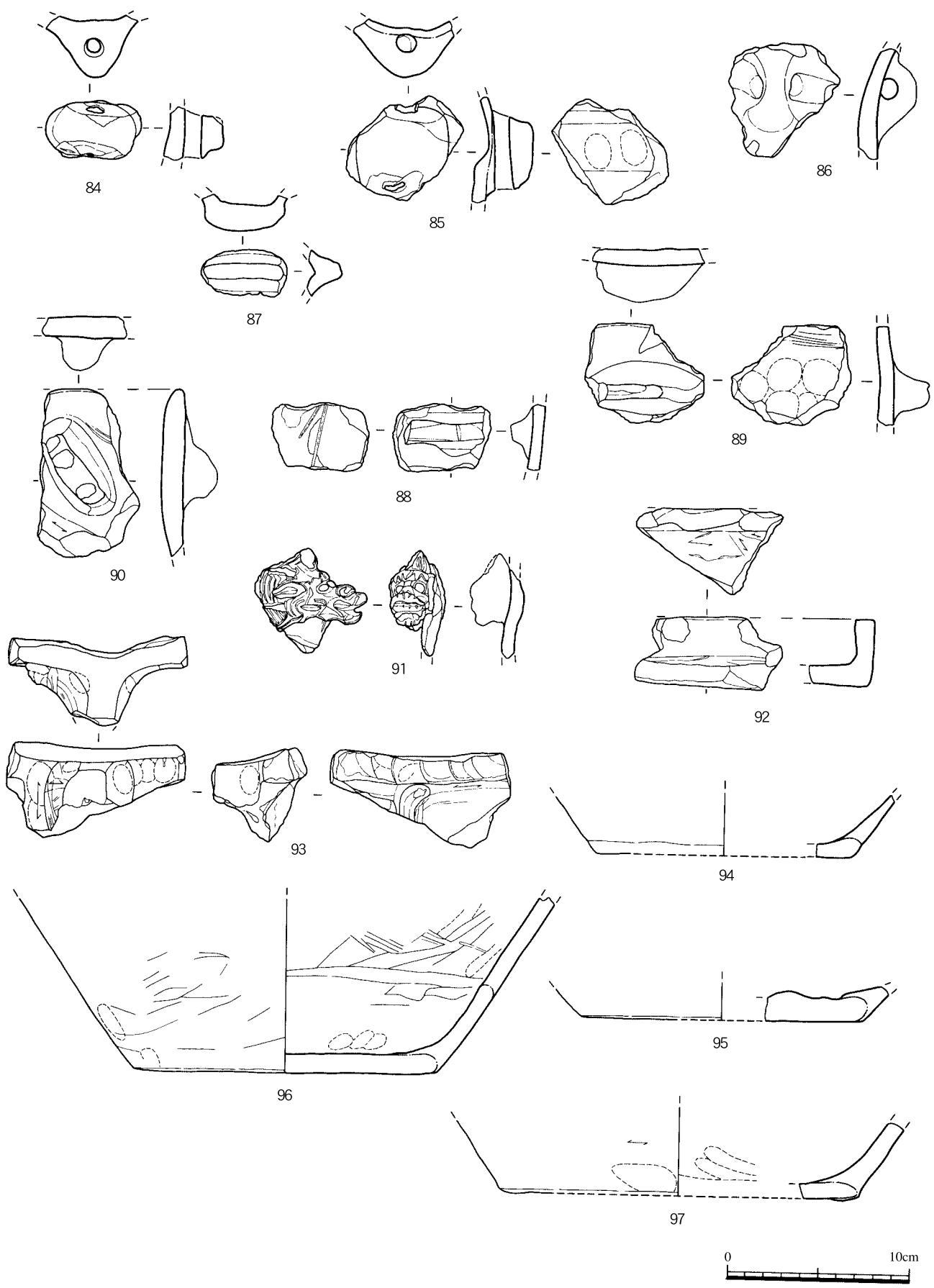
第42図 土器(5)



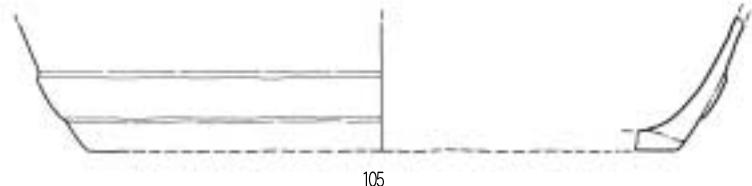
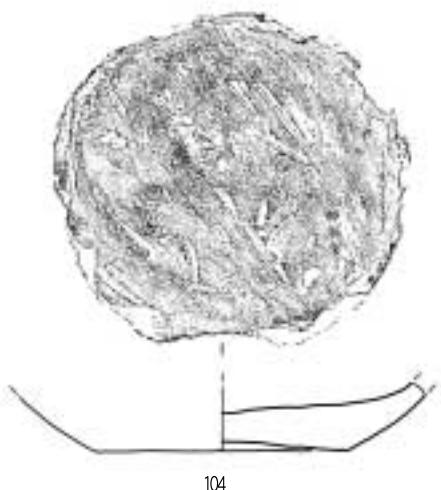
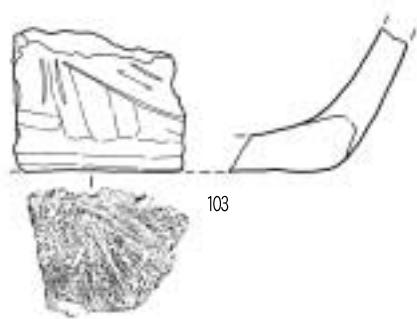
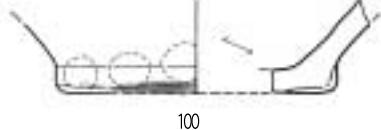
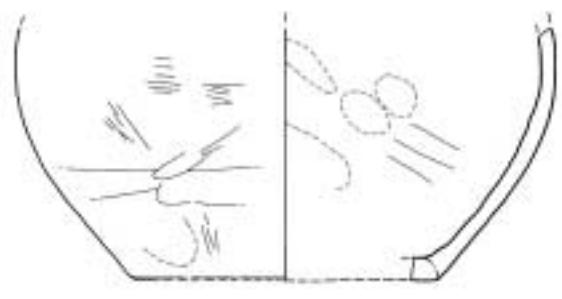
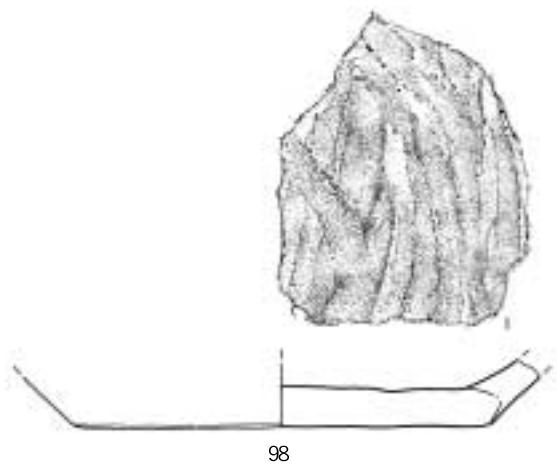
第43図 土器(6)



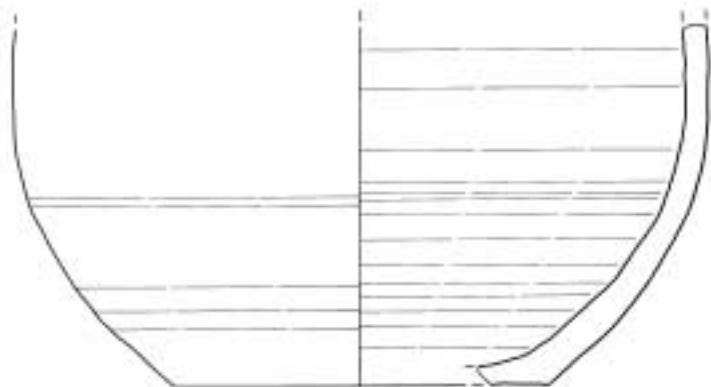
第44図 土器(7)



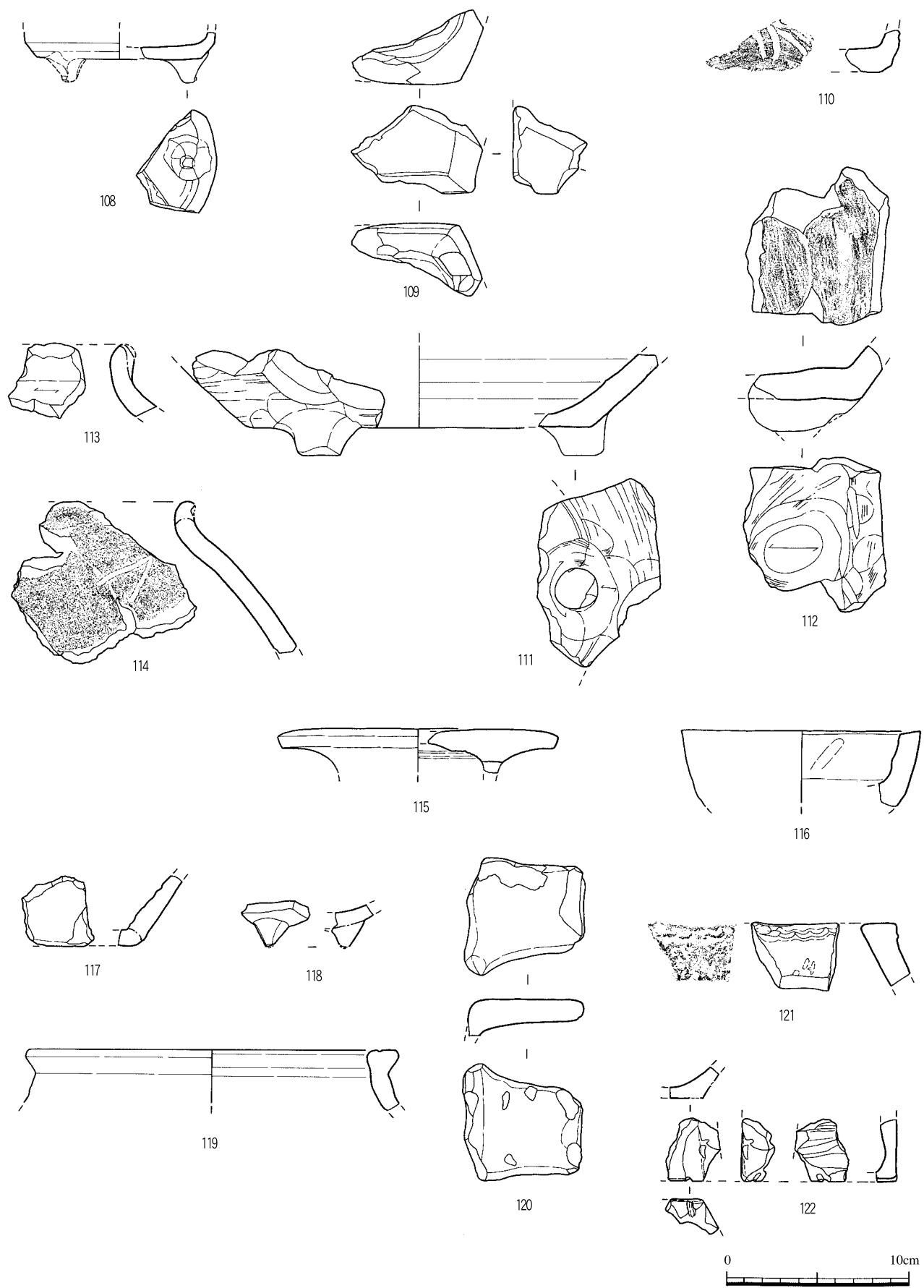
第45図 土器(8)



0 10cm



第46図 土器(9)



第47図 土器(10)

## 第19節 土製品

土製品は破片も含めて19点出土しているが、その内土器片を加工したものが16点で、当初から土製品として作られたのは3点である。

1～4は土器片を円形に加工したもので、その中央に1点もしくは2点円形の0.5cm前後の孔を穿孔している。1は小孔が1つ、法量が径3.5～3.8cm、厚さ0.5cm、重量7.4g、いー2 III層出土。2は中央部の孔は貫通していない。法量が径3.8～4.3cm、厚さ0.8cm、重量14.3g、客土出土。3は小孔が2つ、径3.8cm、厚さ0.9cm、重量14.1g、SP-13出土。4は小孔が2つ重なったように開けられている。法量が径3.4～3.8cm、厚さ0.7cm、重量10.3g、客土出土。

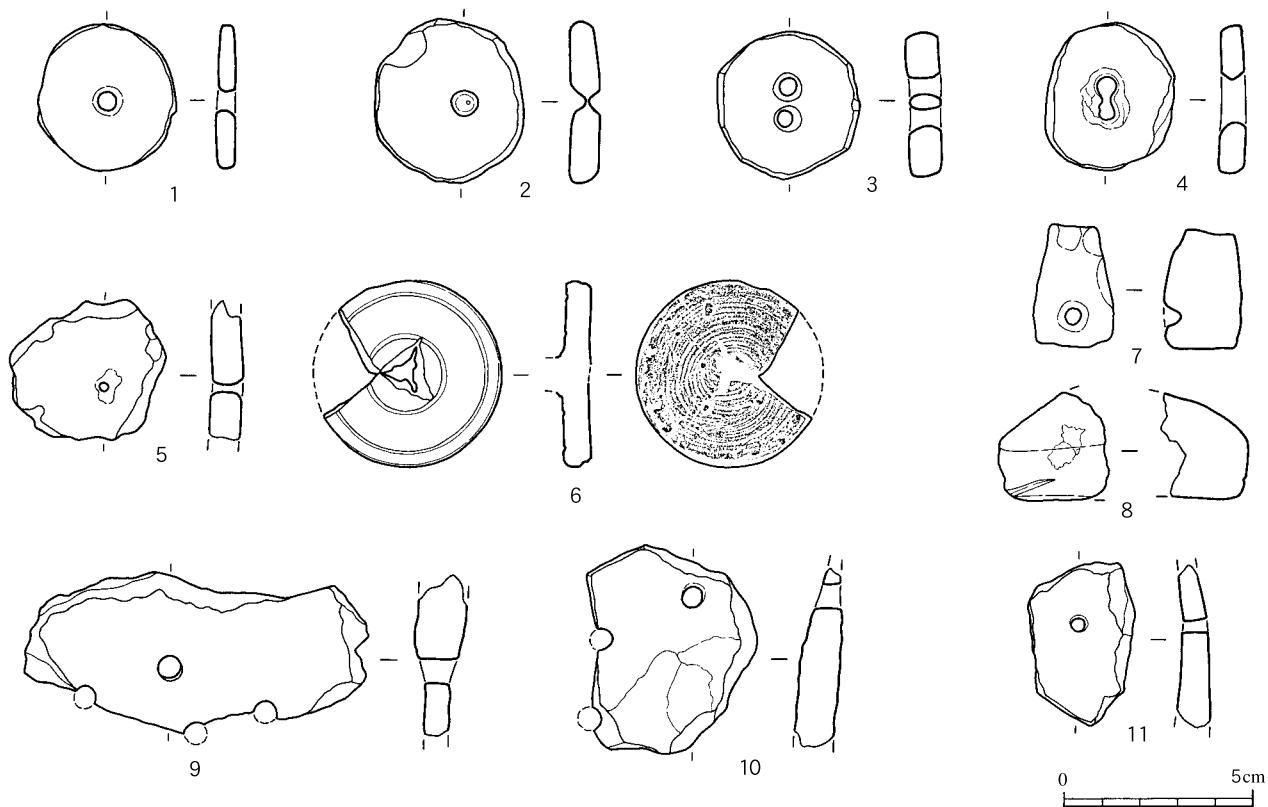
5はやや不整ではあるが、円形に加工しようとしたものと思われる。また、小孔も中央よりややすれるが0.2cm前後に開けられている。出土地不明。

6は硬質の焼成であり、本来は中央部につまみを有し、蓋状のミニチュア品であったものと思われる。つまみがあった面には、2条の圈線が線刻されている。その反対側の面には糸きり痕が見られ、ロクロ成形によるものと思われる。径4.9cm、厚さ0.8cm。うー6 II層出土。

7・8は手づくねにより成形している。7は上部がややすぼまる円柱状を呈している。法量が器高3.2cm、上面径1.2cm、下面径2.0cm、あー2 II層出土。8は完存していないがドーム形を呈するものである。うー4 裁判所基礎出土。

9～11は土器片に5mm前後の小孔を1～数個あけたものである。この手のものは、実測分以外を含めると10点出土している。これらは、土器片自体に顕著な研磨等である一定の形にしたものではない。9はうー1 II層出土。10・11は客土出土。

他に実測外のものでは、土器片の割辺を研磨したものが1点出土している。



第48図 土製品

## 第20節 円盤状製品

円盤状製品は土器・陶磁器片を円盤状に整形したもので、13点出土している。円盤状に加工したものでも、中央部に小孔をあけたものは土製品の項で記述した。

素材は沖縄産施釉陶器3点、沖縄産無釉陶器3点、本土産陶器1点、土器3点、陶質土器1点、瓦2点である。使用した部位は体部片が10点で、底部を使用したものが3点である。底部を利用した物は、高台をそのまま残している。

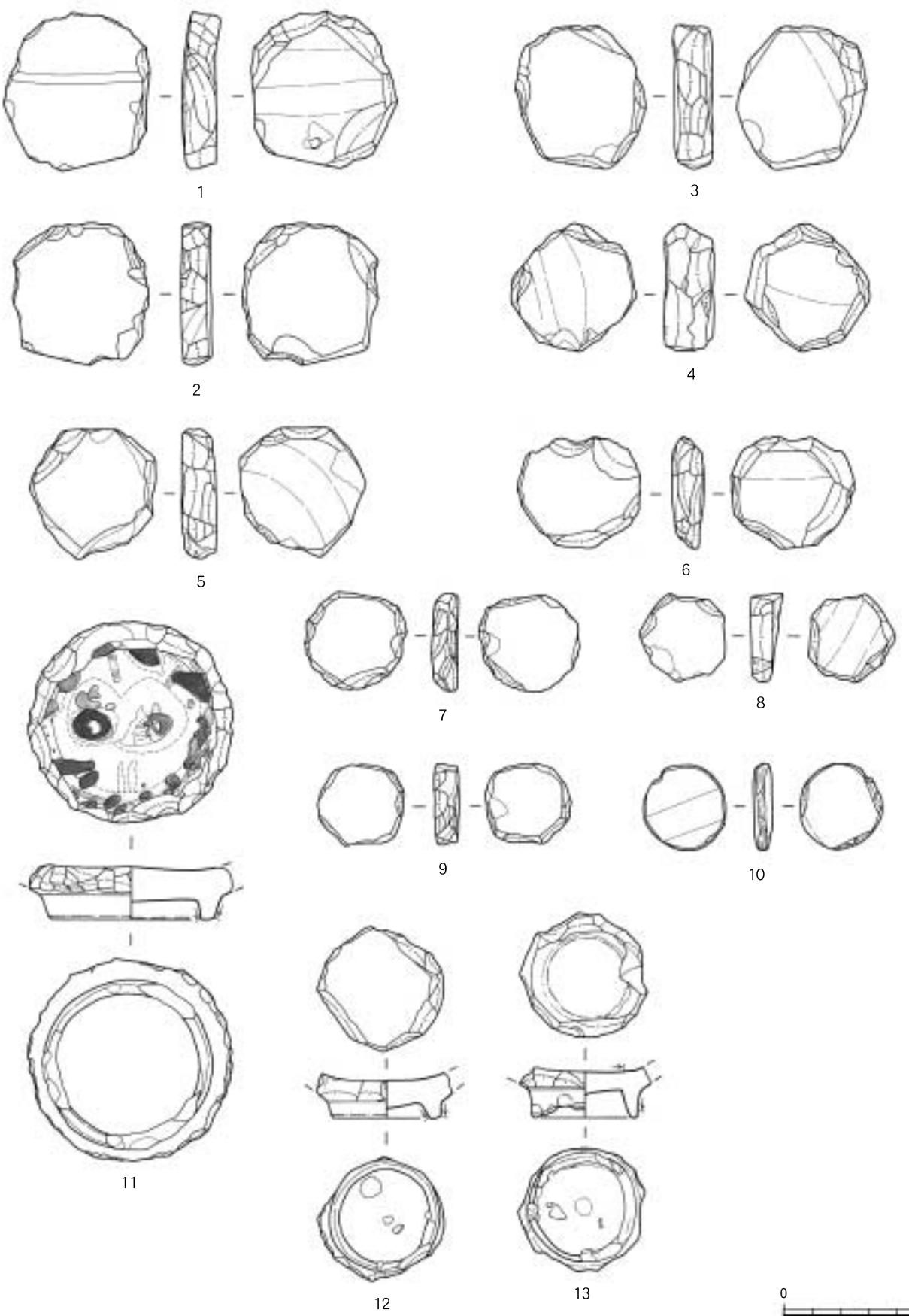
また、径の大きさから4つのサイズに分けることができ、2.9~3.4cmが4点、3.9~4.6cmが5点、5.0~5.6cmが3点、7.1cmが1点である。このように、径が3~5cm前後のものが多いことは沖縄全体の傾向と大きく変わることがない。

第23表 円盤状製品出土状況

種類	出土地	SK-6	SP-4	客土	II層	明治時代 裁判所	不明	合計
本土産陶器							1	1
沖縄産施釉陶器				2				2
沖縄産無釉陶器	1			1				2
沖縄産無釉陶器?					1			1
陶質土器				1				1
土器			1	1	1	1		4
瓦				2				2
合計		1	1	7	2	1	1	13

第24表 円盤状製品観察一覧

図番号	素材	長径 (cm)	短径 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	使用部位	備考	出土地
第49 図 ・ 図 版 35	1 沖縄産無釉陶器	5.6	5.0	1.0	46.1	壺・胴部	外面沈線2条。	い-5 SK-6
	2 本土産陶器(薩摩系)	5.0	4.7	0.9	32.9	袋物・胴部		不明
	3 瓦	5.1	4.4	1.1	32.5	平瓦		客土
	4 瓦	4.5	4.2	1.6	28.8	平瓦		客土
	5 沖縄産無釉陶器か?	4.6	4.3	1.2	16.3	壺・胴部		い-1 II層
	6 沖縄産無釉陶器	4.2	3.9	1.1	25.6	壺・胴部		客土
	7 土器	3.4	3.3	0.9	11.2	壺・胴部		え-2 明治裁判所基礎
	8 土器	3.1	3.0	0.8	8.4	壺・胴部		客土
	9 土器	2.9	2.7	0.8	7.8	壺・胴部		う-5 SP-4
	10 陶質土器	3.0	2.8	0.3	3.9	急須・胴部	外面に煤付着。	客土
	11 沖縄産施釉陶器	7.1	7.0	1.1	71.2	碗・底部	底径5.9cm。見込みに色絵。	え-6 II層
	12 沖縄産施釉陶器	4.5	4.3	0.9	24.4	碗・底部	底径3.8cm	客土
	13 沖縄産施釉陶器	4.3	4.2	0.7	23.5	碗・底部	底径3.8cm	客土



第49図 円盤状製品

## 第21節 煙管

煙管は破片も含めて17点出土し、内8点を図化した。煙管は雁首、羅宇、吸口の3部分から成るが今回の調査では、羅宇は1点も出土していない。おそらく木製あるいは竹製の羅宇を使っていたと考えられる。また、雁首、吸口は金属製と陶製に大別できる。

第25表 煙管出土状況

材質	出土地		客土	II層	合計
	SK	2			
金属製	雁首			4	4
	吸口			1	1
陶製	雁首			4	4
	吸口		1	2	3
陶質土器	雁首		1		1
	雁首	1		1	1
真鍮	吸口	1	1	1	3
合計		2	1	2	17

第26表 煙管観察一覧

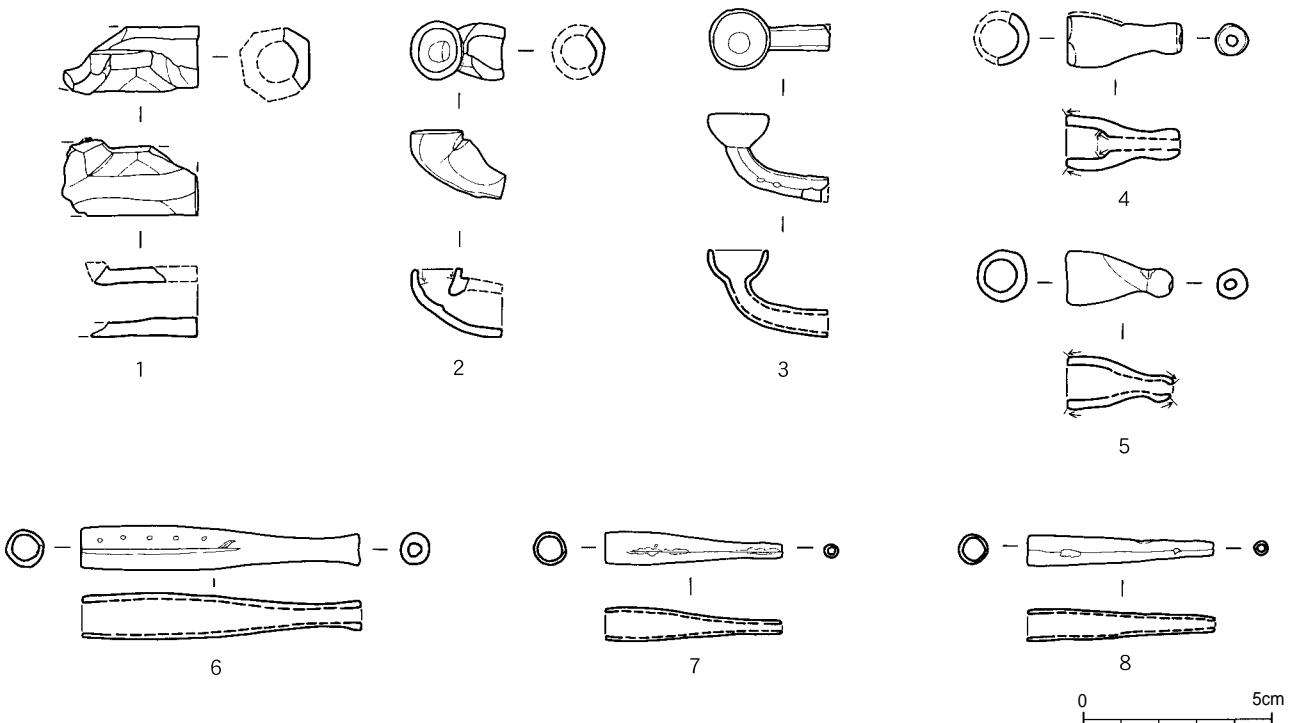
単位:mm/g

図番号	部位	完/破	材質	計測値										重さ	色調	観察事項	出土地		
				a	a'	b	b'	c'	d	e	f	f'	g	g'	h				
第50 図 ・ 図 版 36	雁首	破片	無釉 陶器	—	—	—	—	9.29	17.9	—	—	—	—	—	—	6.3	橙色	器面・素地は橙色。8面に面取り。	い-5 II層
			施釉 陶器	15.02	11.04	12.28	8	—	—	26.46	—	—	—	—	—	3.7	黄、緑、茶の釉薬	素地は白灰色。火皿内部に煤による汚れあり。	II層
			真鍮	15.95	13.50	9.13	8	—	—	—	—	—	—	—	—	4.3	暗緑色	青銘あり。	SK-2
	吸口	破片	施釉 陶器	—	—	—	—	—	—	—	—	6.02	2.65	29.98	2.5	白～白灰	貫入あり。素地は白色。	い-5 客土	
			—	—	—	—	—	—	—	13.44	8.59	4.01	2.41	28.32	2.9	緑	素地は白色。	い-1 II層	
			真鍮	—	—	—	—	—	—	9.91	7.32	7.62	3.10	73.66	14.5	暗緑色	繋ぎ目？に段差があり、溝状となる。吸口の合わせ目に飾り珠のようなものが5個あり。敲打面有。	客土	
		完形	—	—	—	—	—	—	—	7.88	6.72	3.37	1.67	49.22	2.9	暗緑色	継ぎ目あり。青銘あり。	あ-3 II層	
			—	—	—	—	—	—	—	8.28	6.78	3.52	2.19	46.64	2.6	暗緑色	継ぎ目の溶接痕立つ。吸口の繋ぎ目が判る。	SK-2	
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		

注「-」:計測不可

\* 計測値凡例

a:火皿(外径)、a':火皿(内径)、b:火皿(高綠-胴部底部)、b':火皿(高綠-胴部上面)、c:接続部外径、c':接続部内径、d:雁首 胴部(高)、e:雁首 長軸値、f:接続部外径、f':接続部内径、g:吸口部外径、g':吸口部内径、h:吸口 長軸値



第50図 煙管

## 第22節 骨製品

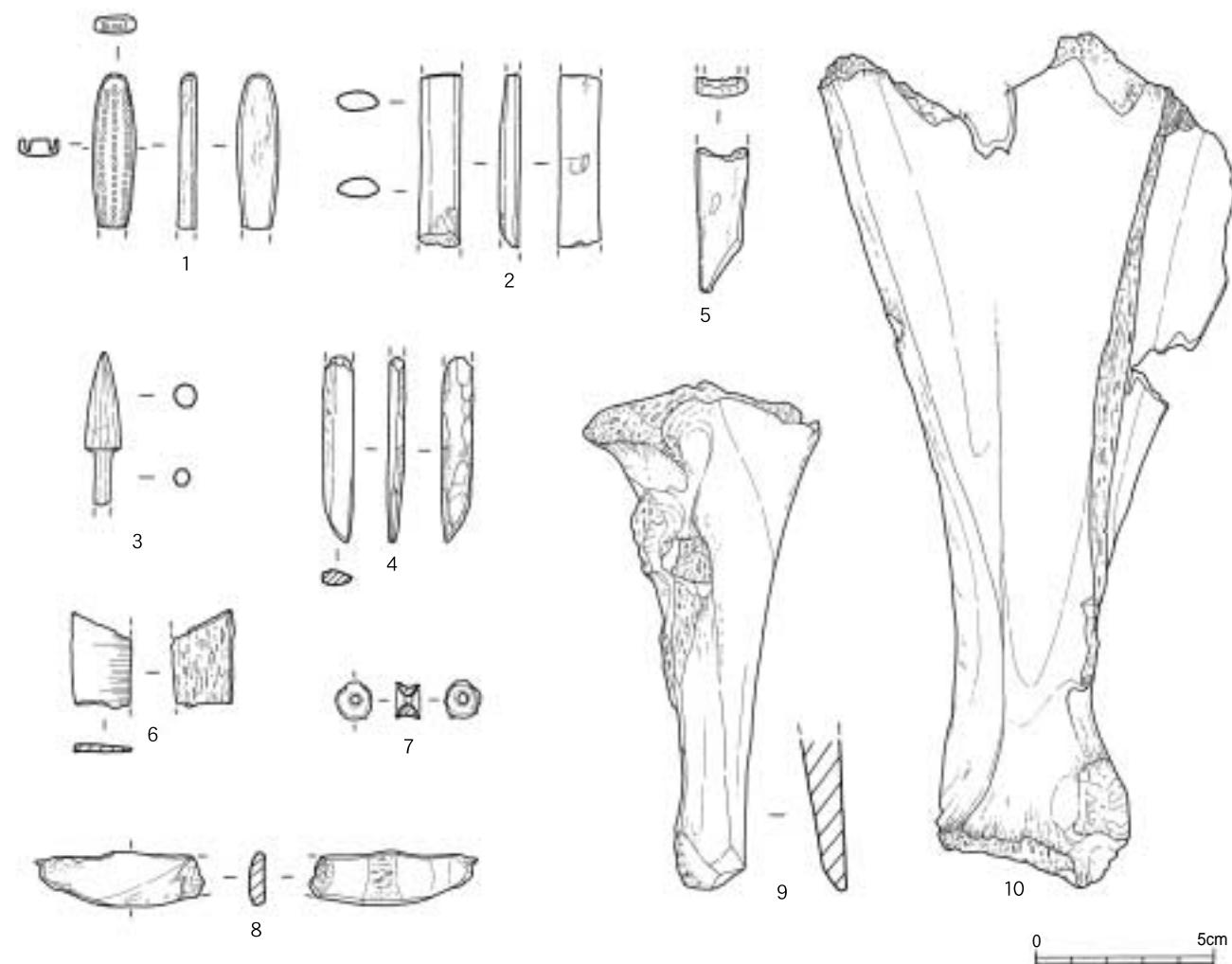
骨製品は合計で10点出土した。歯ブラシ、鏃、脱穀具（ウスピラ註）などである。  
ウスピラとは先島地方で最近まで使用していたとされる脱穀具である。本品はウシの肩甲骨が利用されており、近位骨端の棘下窩をU字に欠き、その部分に穂を引っかけ、それを引く事で穂をそぎ取る仕組みとなっている。

<註>

註1. 三島 格「ウスピラ」児嶋隆人先生喜寿記念論集「民具マンスリー」神奈川大学日本常民文化研究所 古文化論集抜粹1991.1.20

第27表 骨製品観察一覧

図番号	器種	完/破	残存長	幅	厚	重さ	調整	観察事項		出土地
第 51 図 ・ 図 版 34	歯ブラシ	破	42.42	11.67	0.5	2.4	磨き	穴は縦方向にはきれいに並ぶが、横方向には並ばない。縦に3列の穴、先端に3つの穴。穴の直線は1.2~1.35。		客土
			46.52	10.92	0.6	3.6	磨き	柄部に銘？あり。		客土
	鏃	破	42.97	9.35	—	2.2	削り	ジュゴンの肋骨。基部長:14.74mm 基部直径:3.61mm		う-1 明治裁判所基礎
			51.52	8.11	3.59	1.9	磨き、削り	先端はナイフ状に鋭利に尖る。		あ-1 SK-2
	不明	破	39.58	14.11	2.29	2.1	磨き	牛または馬の肋骨。先端がナイフ状に尖る。		客土
			25.36	16.49	1.95	0.8	磨き、線刻	長さ5mm前後、細く浅い刻目がある。		客土
			6.41	8.9	2.55	0.4	穿孔	エイの尾椎に穿孔。		SP-16-17
	不明	破	46.7	14.55	4.07	2.8	磨き	牛の下顎骨。全体が滑らかで、一端が小さく尖る。		う-3 II層
			143.38	64.85	40.1	60.7		牛の左尺骨。先端をヘラ状に尖らせる。		い-1 III層
	ウスピラ (脱穀具)	破	244	108.5	57.5	145		牛の右肩甲骨。U字に欠けた部分の周辺が摩耗。		客土



第51図 骨製品

## 第23節 簪

簪は合計11点出土した。その内5点を図化した。簪はカブ、首、ムディ、竿の四部分からなる。ムディが不明瞭なもの(第52図3・4)もある。カブの形態で、花形、匙形、耳搔き形に大別した。花形は男性用の本簪(髪差)、耳搔き形は男性用の副簪(押差)、匙形は女性用の本簪(ジーファー)として使われていたとされる<sup>註1</sup>。

<註>

註1. 沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』上 1983.4

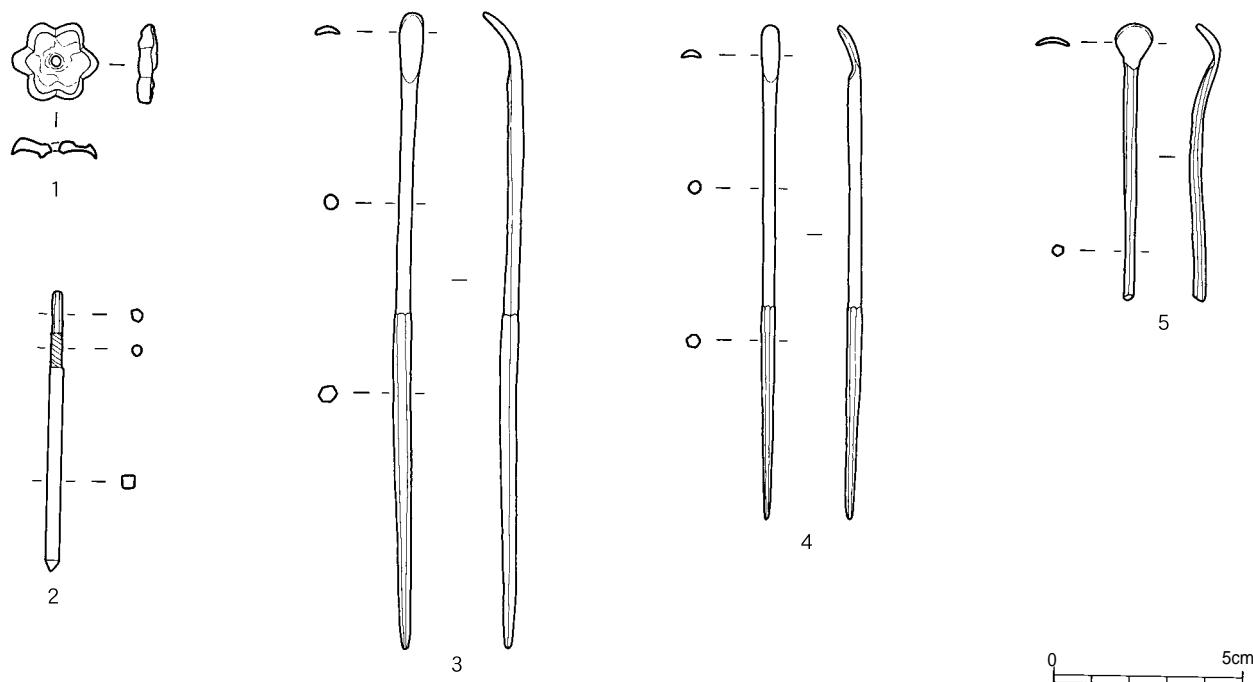
第28表 簪出土状況

分類	出土地		SK-1	II層	明治時代 裁判所	不明	合計
	完形	破損					
耳搔き形	完形	1	3				4
	破損		2				2
花形	破損			1	1		2
	破損		1				1
不明	破損	1	1				2
	合計	2	7	1	1		11

第29表 簪観察一覧

単位:mm/g

図番号	分類	器種	完/破	残存長	残存重量	花	頭(カブ)	首	ムディ	竿	観察事項	出土地	
						縦軸 厚さ	長軸 幅 厚さ	最大幅 最小幅 長さ	幅 長さ	最大幅 最小幅 長さ			
第52 図 ・ 図版 38	1	花形	髪差	破	3.79	3.5	21.82 3.79	— — —	— — —	— — —	中心部の穴の直径は2.66mm。	不明	
	2	花形	髪差	破	73.48	5.7	—	— — 11.08	3.27 — 8.60	2.70 3.68 3.39 53.80	首は六角柱。ムディは6本線のねじり文様。竿は四角柱。先端は四角錐。	え-3 明治裁判所礎石下造成	
	3	耳搔き形	押差類	完	166.89	13.0	—	18.21 5.98 3	3.84 3.19 59.96	— — —	4.44 0.95 88.72	首は円柱、竿は六角柱。先端は六角錐。	SK-1
	4	耳搔き形	押差類	完	130.06	6.3	—	15.16 4.78 2	3.19 2.75 58.13	— — —	3.52 1.10 56.77	首は円柱、竿は六角柱。先端は六角錐の摩耗がすすむ。	II層
	5	匙形	簪	破	71.76	2.6	—	9.91 8.80 2	2.82 2.20 14.9	— — —	首・竿は六角柱。	II層	



第52図 簪

## 第24節 金属製品

金属製品はそのほとんどが鉄製品で近代以降に属するものと考えられる資料が大半を占める。大半が客土若しくは近代に相当する層から出土している。本報告では特徴的な資料のみ取り上げていく。

### 釘・釘状製品

鉄釘は全て角釘を取り上げた。何れも欠損、鏽、腐食が進み、全形が窺える資料は極めて限られる。全体の形状がL字状となるもの（第53図2）、頭部がL字状となるもの（第53図3、4、5、6）、頭部がT字状となるもの（第53図1）がある。断面形は多角形、長方形、正方形の各種が見られる。長さを窺うことができる資料は第53図2、5で、それぞれ6.8cmと10.7cmとなっている。また、第53図6には釘を固定するためか芯の部分に漆喰が付着している。1～3、5、6は客土出土。4は3トレンチ出土。

第30表 鉄釘出土状況

分類	出土地	客土	II層	III層	トレンチ	明治時代 裁判所	合計
	丸釘			2		4	
角釘		5	2		1		8
合 計		5	2	2	1	4	14

### 楔形製品

第53図7 完成品で上端2.2cm、下端1cm、長さ6.3cmの台形状となる。厚さは4mmで上端の断面形は尖り、下端は面を有する。残存量31g。SK-1出土。

### 毛抜き状製品

第53図8 全長7.1cm、厚さは1mm。全体的に鏽で覆われているが、それ程浸食されておらず、全形を窺うことができる。U字状に湾曲し先端部は「く」の字状に折れる。断面形は7mm×1mmで先端部は開く。残存量10g。SK-2からの出土。

### 鉄環

第53図9 断面形が円形となる直径5.1cmの環に、直径1cmの断面形が長方形状となる環が取り付く製品。扉や戸に取り付く環の可能性が挙げられるが、詳細に関しては不明である。残存量51g。客土出土。

### その他の金属製品

第53図10 孔が3つ見られる板状製品。形状は橢円形状となり、欠損している部分から幅6mmの柄のようなものが取り付くと考えられる。厚さは0.5mmと薄い。残存量1g。出土地不明。

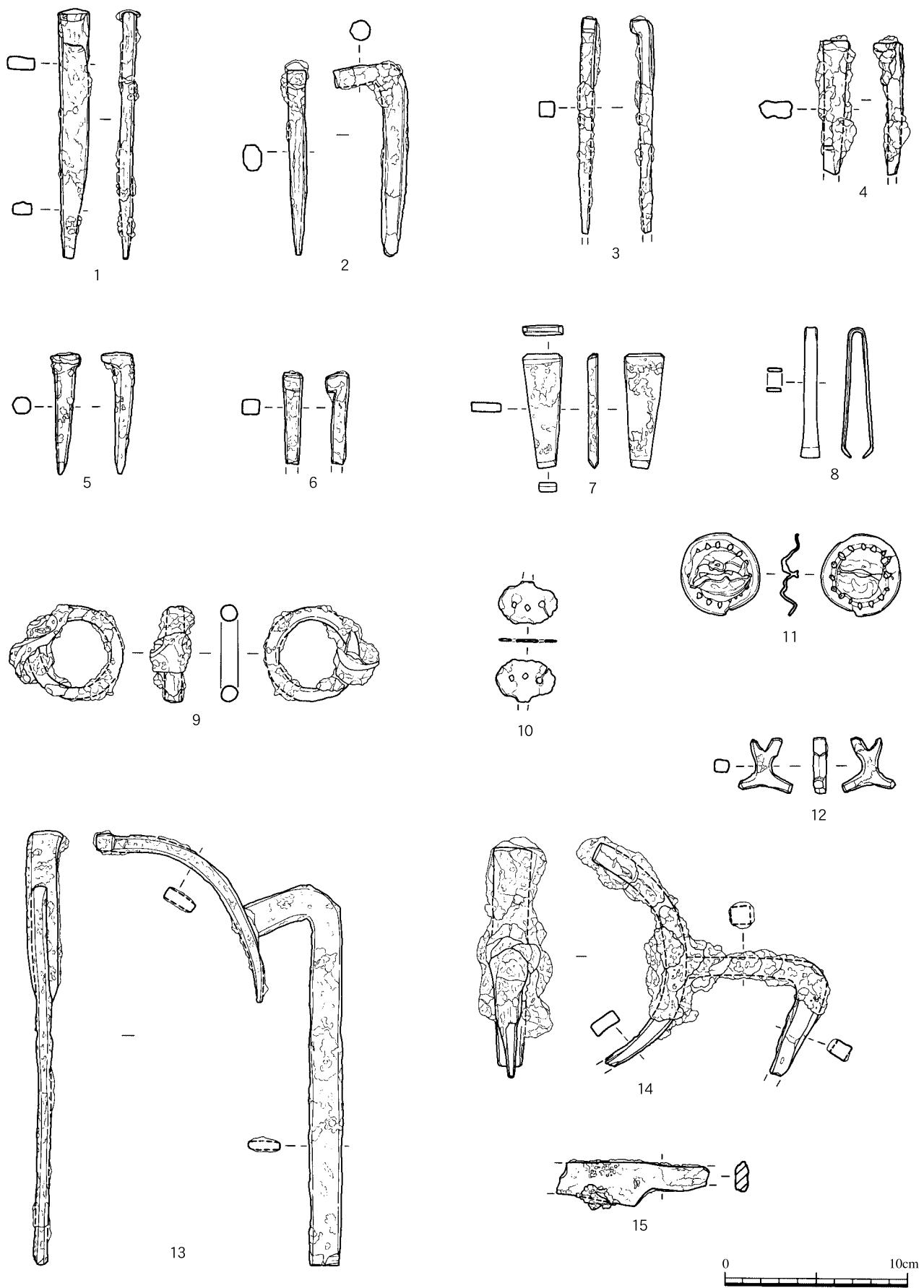
第53図11 平面形がやや橢円状で、断面形が凸状となる金属製品。周囲には菱形状となる孔が16個配される。全体的に歪みが見られ、本来の形状を詳細に知ることはできない。残存量5g。II層出土。

第53図12 一方がやや開いたV字状となり、もう一方がU字状となる銅製品。断面形は方形状となる。鏽化はそれほど進んでおらず、全形を窺うことができる。しかし、その用途については不明である。残存量17g。II層出土。

第53図13 円弧状の金具にL字状の金属片が取り付く製品。鏽が大量に付着し、また欠損しているため全形を窺い知ることはできず、その用途に関する詳細は不明である。残存量234g。II層出土。

第53図14 13と同様に円弧状の金具にL字状の金属片が取り付く製品。13は金属片部分の断面が正方形状となるのに対して、この資料は断面形が長方形状となる。その用途については不明である。残存量218g。出土地不明。

第53図15 刀子か。鏽が全体を覆い、一部鏽膨れが見られる。先端部は欠損している。刃身部分は先端になる程、幅が狭くなる。残存量25.3g。II層出土。



第53図 金属製品

## 第25節 石器・石製品

石器・石製品は破片も含めて30点出土し、内15点を図化した。主な器種には硯、砥石、碁石、印鑑、蓋、石球などがある。

硯については全て頁岩だが、第54図2・4は小豆色をした赤褐色頁岩である。

第31表 石器・石製品出土状況

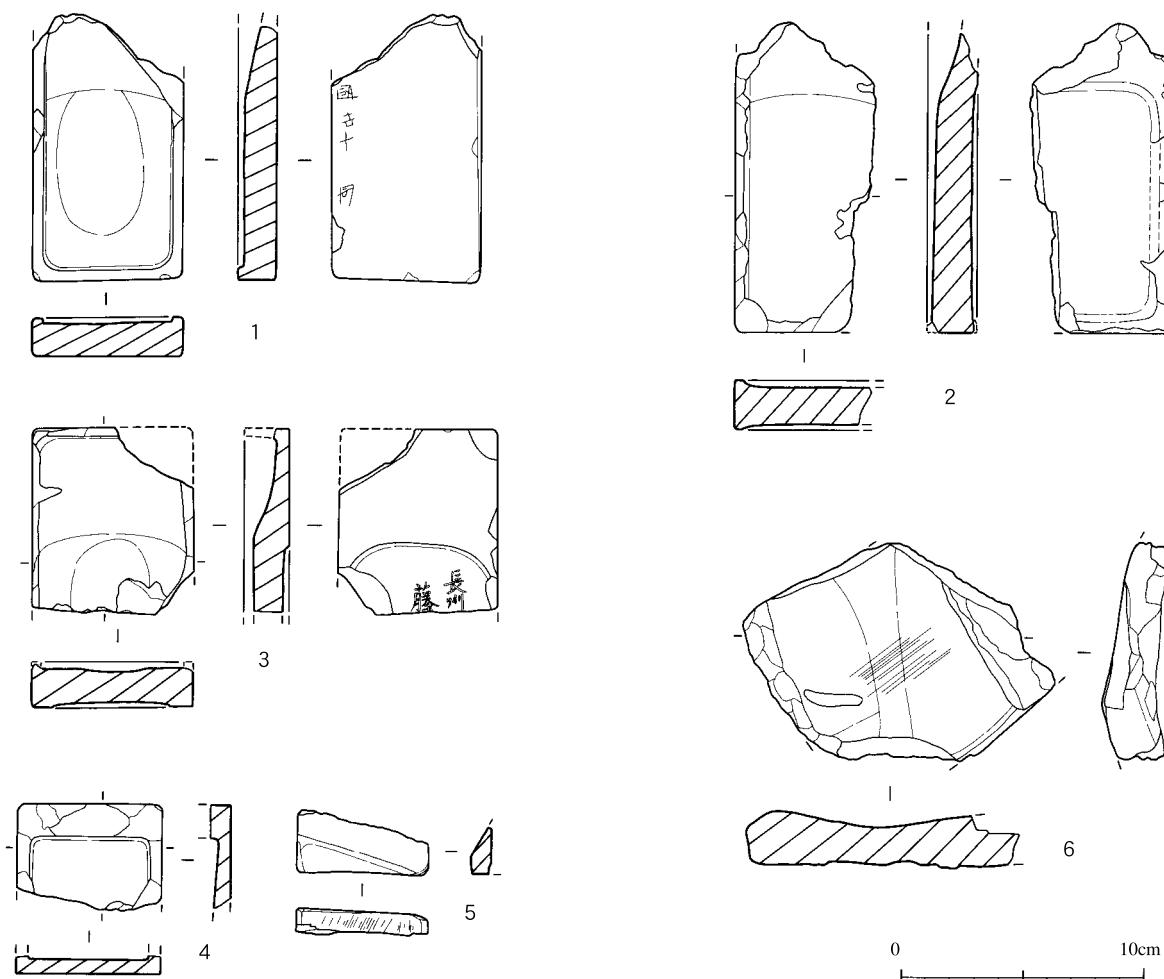
種類	出土地			客上	II層	明治時代 裁判所	SK-1+ II層	不明	合計
	1	2	14						
硯					2	1		1	4
砥石	1					3			4
蓋						1			1
碁石					1				1
印鑑						1			1
石球								2	2
石材	1					2			3
有孔	1								1
用途	磨面有	2	1	1		6	2		12
不明	磨面無					1			1
	合計	5	1	1	5	13	2	1	30

注「+」接合の意

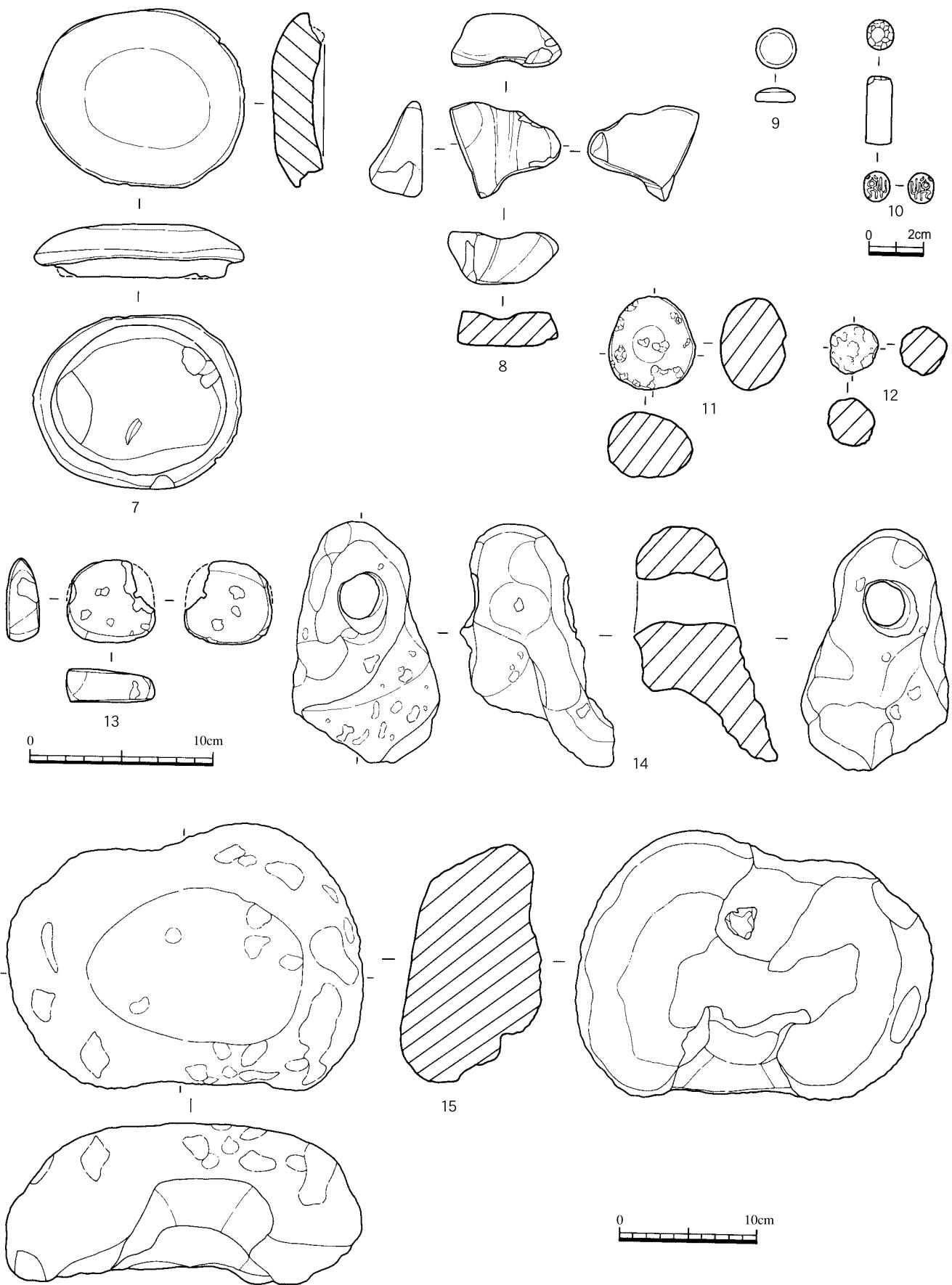
第32表 石器・石製品観察一覧

図番号	器種	長さ	幅	厚さ	重さ	色調	石質	観察事項		出土地
								客土	II層	
1	硯	10.9	6.2	1.6	170.6	黒灰色	頁岩	裏面に名前?「国吉十口同」。使用のため硯面が少し窪む。		客土
2		12.7	5.8	2.05	230.4	小豆色	赤色頁岩	使用による硯面のへこみはほとんどない。裏面も削り込む。	う-6 SK-1+え-4 II層	
3		7.7	6.6	1.9	111.2	灰色	頁岩	裏面に「長州 藤」の銘。裏面も削り込む。使用の為、硯面が少し窪む。	え-6 客土	
4		4.4	5.9	0.8	40.1	小豆色。2より薄い。	赤色頁岩			う-6 II層
5	砥石	2.6	5.4	1.1	15.5	黄灰色	頁岩	硯転用か。		う-4 II層
6		8.9	12.8	2.7	350	黄灰色	砂岩			う-5 II層
7	蓋	11.3	9.6	2.9	205.3	白	漆喰?	表面は比較的なめらか。		う-4 II層
8	砥石	5.1	6	2.8	67.1	黄灰色	砂岩	全面がなめらかだが、二面が溝状に窪む。		う-4 II層
9	碁石	2.15	2.15	0.7	5.3	黒	不明	ガラス質。天然のものかどうかは不明。		い-3 客土
10	印鑑	2.45	0.9	1.1	5.2	白灰色地に黒のまだら	チャート	「悦」?の陰刻。頭部は細かく面取りされる。文字部分には朱肉が残っている。		い-6 客土
11	石球	5.1	4.6	3.5	96.8	白	琉球石灰岩	比較的なめらか。		不明
12		2.65	2.55	2.5	16.7	白		やや凹凸あり。		う-4
13	不明	4.5	4.7	1.75	9.0	黄白色	軽石	全面丁寧に削る。		あ-4 SK-14
14	有孔	13.1	7.9	8.4	450	白	琉球石灰岩	表面はやや凹凸。孔径は2.5~3.2cm。鋸りか。		う-6 SK-1
15	不明	26.9	19.4	11.5	3160	白	サンゴ	表面は平らだが、裏面は凹凸がある。側面の2ヶ所に平らに削れる部分がある。礎石か。		客土

注「+」接合の意



第54図 石器・石製品(1)



第55図 石器・石製品(2) 縮尺は10が1/2、15が1/4、その他は1/3

## 第26節 瓦

瓦は破片も含めて1,333点出土した。7割～8割が平瓦で2割が丸瓦である。明朝系の瓦が4点出土しており、大部分は初代那覇地方裁判所平良支部の屋根に葺かれていた瓦と考えられる。

瓦のほとんどが赤瓦（橙色）で、黄褐色や灰色、黒色等の瓦が少量ある。今回は代表的な10点を図化した。軒丸瓦、軒平瓦は、明朝系を除いて瓦当文様はなし。

平瓦は、凹面に布目痕、模骨痕を残し、これらがなで消される場合もある。凸面は基本的に調整で、横方向もしくは波状の沈線文様をもつものがある。側面は、模骨から切り離されたあと、調整は行っておらず、粗い面を残す。

丸瓦の凹面には布目痕、模骨痕が残り縁辺部は削り調整である。凸面はナデ調整である。瓦には瓦同士をつなぎとめるための漆喰が残っている。

## 第27節 塼

塼は破片も含めて9点出土した。第57図11はII層から出土した破片資料である。厚さは3.9cmで、表面は丁寧に削られツルツルである。器面、断面とも橙色で5mm以下の赤褐色粒、黒色粒、白色粒を少し含む。

第33表 瓦・塼出土状況

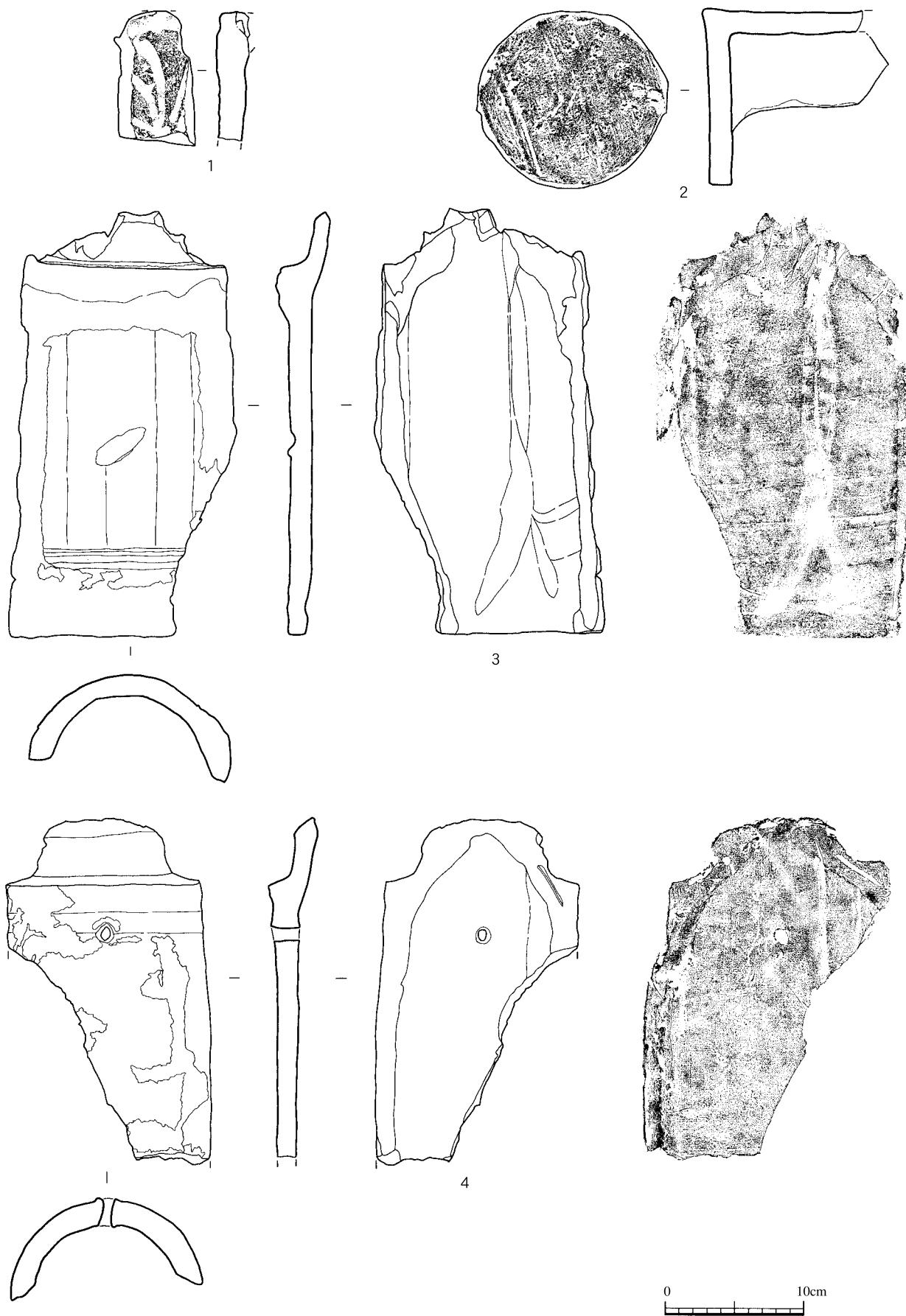
分類	出土地	SK															SP				SD-2	SW-1	土坑墓2	客土	II層	III層	トレンチ	明治時代 裁判所	壁面 清掃中	不明	合計
		1	2	3	4	6	8	9	10	11	14	15	16	17	3	13	20														
瓦	平	直線文	4															1		19									24		
		波状文	1																2	6									12		
		無文	93	2	3	92	5	1	9	97	6	8	1	1	1	4	1	1	47	2	2	459	2	26	29			891			
		その他	3			4	1				1									83			2						94		
瓦	丸	被熱																		1									1		
		直線文	1																	1	1								3		
		有孔				2				1										1									4		
		無文	31	3	1	11			1	54	2					1			36		110		2	8				260			
瓦	軒平	その他	5																	13									18		
		明朝系				1														1	1								3		
		無文				1				3										1	3								8		
		軒丸	明朝系																	1									1		
		無文	2	1	1													3		4			1		1		13				
		飾り瓦																											1		
	合計		140	6	4	112	6	1	10	155	8	9	1	1	1	1	5	1	1	87	2	8	701	0	4	31	37	1	1333		
	塼		1																				5	1	1			1	9		

注 平、丸瓦のその他にはレンガ色、灰色、明るい黄色、黄褐色、黒色などを含む

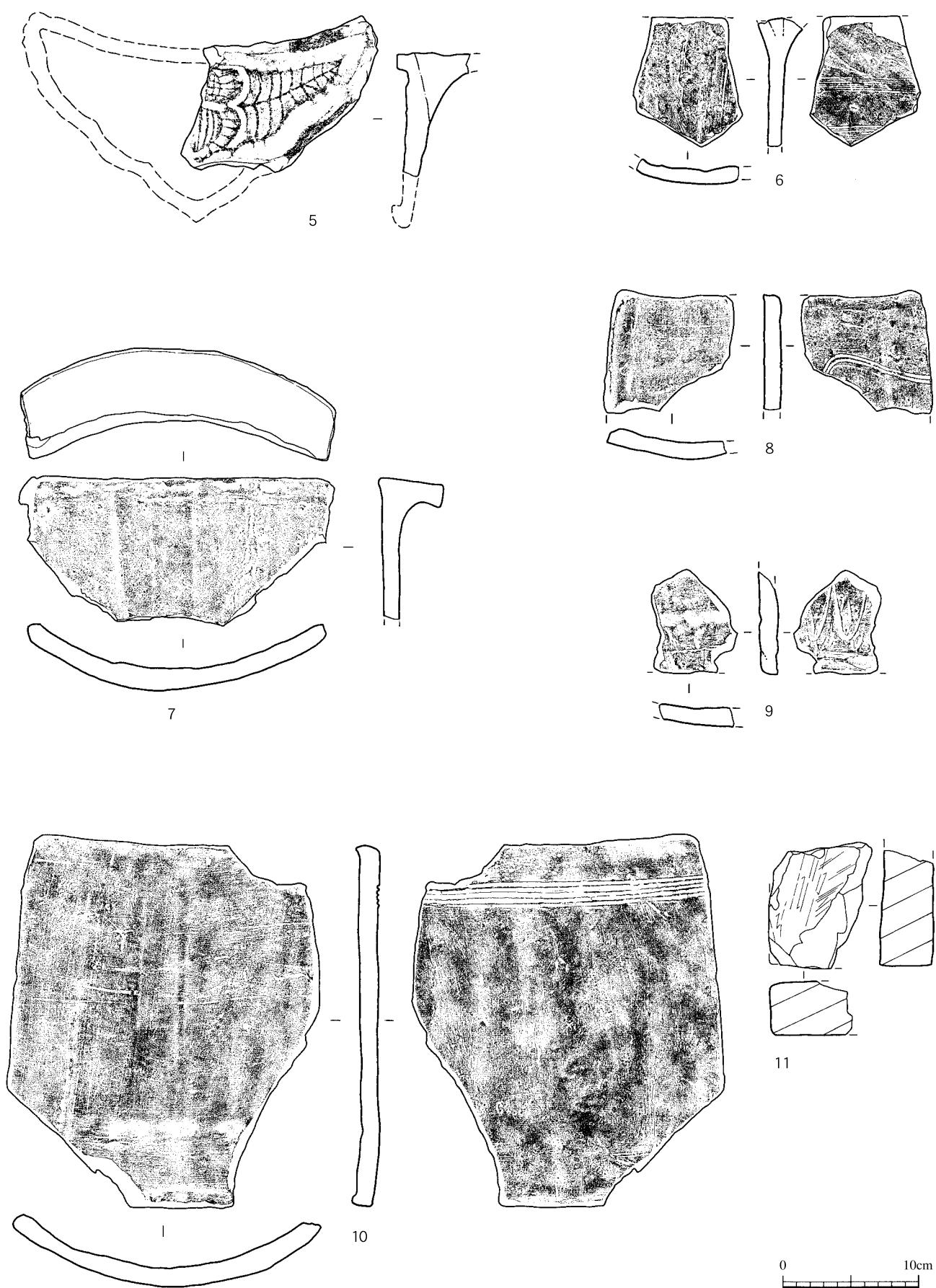
第34表 瓦観察一覧

図番号	器種	法量	調整		素地	色調	観察事項		出土地	単位:cm
第56図 ・ 図版 41	軒丸瓦	瓦当最大径13.0 瓦当厚1.7 丸瓦部厚1.6	—	粗いナデ。	2mm以下の赤褐色粒、白色粒を少し含む。	橙色。	割れ口を見ると、瓦当部との接合部にスキマがある。明朝系。	客土		
	丸瓦	残長31.9	—	瓦当裏面はナデられているが、平滑ではなく斜め方向に筋が入る。	1mm以下の赤褐色粒、黒色粒、白色粒を少し、雲母をわずかに含む。	橙色。	瓦当表面は、まず横ナデのあと丸瓦部をとりつけ、最後に外縁部を円周方向にナデする。丸瓦部は長軸方向のナデ。凹面には布目が残る。外面に漆喰が付着。	客土		
第57図 ・ 図版 41	軒平瓦	残長24.8	—	布目が残るがあまり目立たない。横骨痕が残る。	5mm以下の赤褐色粒、黒色粒、白色粒をやや多く含み、雲母を少し含む。	橙色。	凸面の4周には漆喰が厚く付着。凹面中央部には浅い溝状のくぼみがある。意図的なものではなさそうである。凹面には、工具でナデした浅い沈線が走る。	客土		
	平瓦	—	—	凹面には布目が残る。縁辺部はナデ、ケズリ。	3mm以下の赤褐色粒、黒色粒、白色粒を少し含み、雲母をわずかに含む。	橙色。	凸面の4周には漆喰が付着。丸瓦部に直径1cmの穿孔。	SK-4		
	軒平瓦	瓦当長23.1 瓦当幅5.0	—	凹面には布目があり、模骨のラインが3本ある。凸面は丁寧なナデ。瓦当部は丁寧なナデ。	8mm以下の赤褐色粒、白色粒、黒色粒を少し、雲母をわずかに含む。	橙色。	花と葉をモチーフにした瓦当文様。明朝系。	客土		
	平瓦	—	—	凹面には布目痕、模骨痕。	2mm以下の赤褐色粒、白色粒を少し、黒色粒、雲母をわずかに含む。	橙色。	外縁には7本/1cmの沈線文があるが、瓦当を取り付ける時に一部ナデ消されている。	客土		
	長軸27.5 厚1.3～1.8 短軸約24	—	—	凹面には布目痕、模骨痕。凸面には5本の沈線文様。凸面はナデ。側面は無調整。	8mm以下の赤褐色粒を多く、白色粒、黒色粒を少し、雲母をわずかに含む。	橙色。	凸面に漆喰が付着。	客土		

注 「-」:計測不可



第56図 瓦(1)



第57図 瓦(2)・磚

## 第28節 鍛冶関連遺物

鍛冶関連遺物として、羽口（炉内に空気を送る送風管の先端）、坩堝、焼土、鉄滓（鉄を熔かしたり、たたりした時に出る鉄くず）、鉄鍋、その他がある。

### 1. 羽口（第58図1～5）

合計35点出土した。SK2・14からそれぞれ3点、その他は客土、包含層出土である。同図1～3、5は直径5～8cm、同図4はやや大型で直径10cmを越えそうである。いずれも白色ないし、粘土が熔けて出来る黒色のガラス質の付着がある。焼土に比べ白色が少なく、胎土が精選されている。

### 2. 焼土（第58図7～14、第59図15～25）

合計267点のうち18点を図化した。なお、便宜上、左端の平面図を外面、右端の平面図を内面とした。多くが、明赤褐色を呈すが、内面はより赤味が強く、外面は黄色っぽい。器面が受けた熱の温度に起因すると考えられる。白色粒（石灰質？）を多く含む。

7～9は直径1cm前後の植物の茎？の圧痕をもつ。圧痕は断面「U」字形の溝状で、溝の表面には、長軸方向に細かい筋が多く走っている。禾本科植物の茎の痕であろうか。同図13にも、断面が「U」字状の浅い溝があるが、これは指ナデ痕のようである。同図10は、断面が二等辺三角形だが、二等辺にあたる部分はナデ調整のため、直線ではなく内湾している。同図11・24もこれに近い資料である。9・14も断面が二等辺三角形であるが、同図10・11に比べやや大きい。12・13・15・16・18・19・23は、内面にスサ痕をもつ資料で、外面はナデ調整のため平坦である。17・19・23はある構造物のコーナーに当たる部分の資料である。20・21・22は小型で、他の焼土に比べ白色粒の数が少なく、混入物が目立たない。25は焼土にガラス質のスラグ？が付着している。

### 3. 坩堝（第58図6）

破片も含めて3点出土したうち1点を図化した。口縁部全体に多孔質のスラグ？が付着している。

### 4. 用途不明品（第59図26）

26は、多孔質のスラグ？の全面が多角形に磨かれた資料である。砥石であろうか。

### 5. 鉄滓（第60図27～52）

破片も含めて82点が出土した。その多くが包含層からの出土で、遺構からはわずかである。

表面は黄褐色の土砂や錆で覆われているが、内面は暗青灰色である。また木炭、木炭痕をもつ例が多い。断面形は浅い椀の形をしているものが多い。このような鉄滓は、炉の中で鉄を熔かした時に、炉の底にたまって出来るもので、椀形鉄滓と呼ばれている。表面にある木炭、木炭痕は、鉄を熔かす時の燃料として木炭を使用した証である。個々の詳細については、観察表にゆずる。

### 6. 鉄鍋等（第61図53～69）

破片も含めて51点が出土し、うち17点を図化した。遺構からの出土例はわずかである。厚さは1mm～5mm程度で、3mm前後の例が多い。鍋が最も多く、口縁部には耳がつくようである。底部は丸底が多く、湯口の痕が円形の突出として残っている。平底で、突起状の支脚をもつ例69もある。60・61はかまどに取り付ける枠として機能したものであろうか。64・65は他の鍋に比べ口径が小さい。以上の資料は全て破片資料で、木炭が付着している例が多い。また、別の鉄片が付着している例59・62・63がある。これらは鍋として使用中に割れた後に、その破片を熔かして別の鉄製品を作るための鉄素材として用いられたと考えられる。おそらく炉の中に鉄鍋片と木炭を入れて熔かしたと考えられる。

第35表 鍛冶関連遺物出土状況

分類	出土地	SK													SP						SW-1	客土	II層	III層	トレンチ	壁面 清掃中	不明	合 計
		1	2	3	4	5	6	9	10	11	12	14	16	17	1	4	5	16・17	20	23								
羽口											3										22	3				3	35	
坩堝																					2					1	3	
鉄滓		2		1	2					1	4		13					2			23	24	1	2		7	82	
褐鉄鉱		2	2		1			1	2	2	4	4		1	8	1	2	1			20	173	104	7		1	39	375
鉄鍋等		1	4																		32	12	1			1	51	
焼土		34	2	22	5						3	4	2				12	1			39	43	36	1	1	62	267	
炉壁熔解物																					1						1	
ガラス質滓																					2							2
不明											1										1						16	18
炭	有	有		有	有	有						有									有	有				有		
合 計	3	46	2	24	7	0	1	3	2	5	14	4	16	8	1	2	13	2	1	20	295	186	45	3	2	129	834	

\*「有」：炭が出土の意

第36表 鍛冶関連遺物観察一覧 1

単位:cm/g

図番号	器種	重畠	縦幅	横幅	厚	素地	色調	観察事項	出土地
第58 図 版 42	羽口	1	56.6	5.6	4.8	3.2	白色粒、赤色粒を少し含む。	内面: 橙色 外面: スラグ	ガラス質付着。 SK-2
		2	14.8	3.5	3.0	2.2	白色粒、赤色粒を少し含む。	赤褐色	SK-2
		3	49.9	4.1	5.6	2.9	赤色粒、橙色粒、石灰質粒、黒色粒、白色粒を少し含む。	内面: 明褐色 外面: 橙色粒	外径7.2cm、内径2.5cm、厚さ2cm。 SK-14
		4	146.2	7.2	7.9	3.9	白色粒を多く、橙色粒、赤色粒を少し含む。	内面: 橙色 外面: スラグ	ガラス質付着(黒色) SK-2
		5	59.3	4.4	5.2	4.1	白色粒、赤色粒、橙色粒を少し含む。	橙色	ガラス質付着部の断面外側赤褐色。 客土
	坩堝 (炉壁?)	6	—	—	—	—	白色粒を多く、赤色粒を少し含む。	橙色	口縁に気泡状のスラグ付着。 客土
		7	25.5	4.9	4.1	1.6	白色粒、貝殻片をわずかに含む。	赤褐色	直径1cm前後の断面円形に近い溝が5本。溝の壁面には長軸方向に細かなスジ。(禾本科植物の茎の跡か?) SK-4 2層
		8	26.8	5.4	4.0	1.6	白色粒(サンゴ含む)を多く、赤色粒を少し含む。	明赤褐色	溝は平行ではなく、ややズレている。溝内には所々スヌのようなものが付着。溝内に細スジ。溝内はスヌけている。 不明
		9	66.4	5.7	5.8	3.7	白色粒を多く、赤色粒を少し含む。	明赤褐色	外表面は横断面三角形、内面は縦断面禾本科痕溝4本。 不明
		10	31.6	3.0	5.1	3.0	黒色粒、赤色粒、白色粒を少し含む。	明赤褐色	断面二等辺三角形、内湾。 客土
		11	28.8	3.6	6.0	2.2	黒色粒、赤色粒、白色粒を少し含む。	にぶい黄褐色	縦断面二等辺三角形で、三面とも生きている。底辺の面はやや粗いが、他の二面はややなめらか。 SK-2
		12	48.3	6.8	3.1	3.9	赤色粒を少し、1mm以下の白色粒を多く含む。	内面: 暗赤褐色 外面: 赤褐色～暗赤褐色	断面に直径4mm前後の穴(スサのあとか?) 不明
		13	265.1	8.9	10	4.5	5mm以下の鉄片を少し、白色粒を多く含む。	明赤褐色	幅約2cm、深さ0.5cmの「U」字形の溝が2本以上走る。 II層
		14	71.1	6.5	6.2	2.9	白色粒を少し、赤色粒をわずかに含む。	橙色	表・裏面とも生きており、裏面は断面三角形。 II層
第59 図 版 43	焼土 (炉壁?)	15	64.8	7.0	8.8	2.4	赤色粒、石灰質粒、白色粒を少し含む。	明赤褐色	III層
		16	11.3	4.3	2.0	1.6	白色粒を多く、赤色粒を少し含む。	明赤褐色	SK-4
		17	31.5	4.2	4.6	2.3	黒色粒、白色粒をわずかに含む。鉄片?をわずかに含む。	明赤褐色	外表面の浅い溝には細スジあり。外表面は黒く(スヌ?)、内面は明赤褐色、コーナー部分。 II層
		18	26.3	3.4	4.3	2.5	白色粒を多く、赤色粒をわずかに含む。	内面: 明赤褐色 外面: 明褐色	SK-2
		19	32.5	8.7	13.3	5.8	1mm以下の白色粒を多く、赤色粒、黒色粒を少し含む。	明赤褐色	II層
	焼土 (炉壁?)	20	13.7	3.6	2.3	1.7	白色粒をわずかに含む。	赤褐色	表面は滑らか。不定形。物を作る時の台か? 客土
		21	13.7	3.5	3.8	1.6	白色粒をわずかに含む。	明赤褐色	不明
		22	22.8	4.8	2.9	2.1	白色粒をわずかに含む。	赤褐色	器面はなめらか。不定形。指紋、擦痕がある。20に似る。 不明
		23	143.3	8.1	6.0	4.5	白色粒を多く、赤色粒を少し含む。	明赤褐色	縦断面形は浅く波打つ。スサの茎直徑は3mm前後。 不明
		24	10.5	2.4	3.2	2.1	白色粒、橙色粒、黒色粒を少し含む。	明赤褐色	断面三角形。 II層
	スラグ+ 焼土	25	97.8	7.2	8.0	3.3		黒色	木炭痕?あり。炉壁?付着。ガラス質にぶい色の部分あり。 あ-1 客土
		26	—	5.3	4.6	3.0		黒色	全面がけずられ、なめらか。中はスポンジ状の気泡から成る。 客土

注 「—」:計測不可

第36表 鍛冶関連遺物観察一覧 2

単位:cm/g

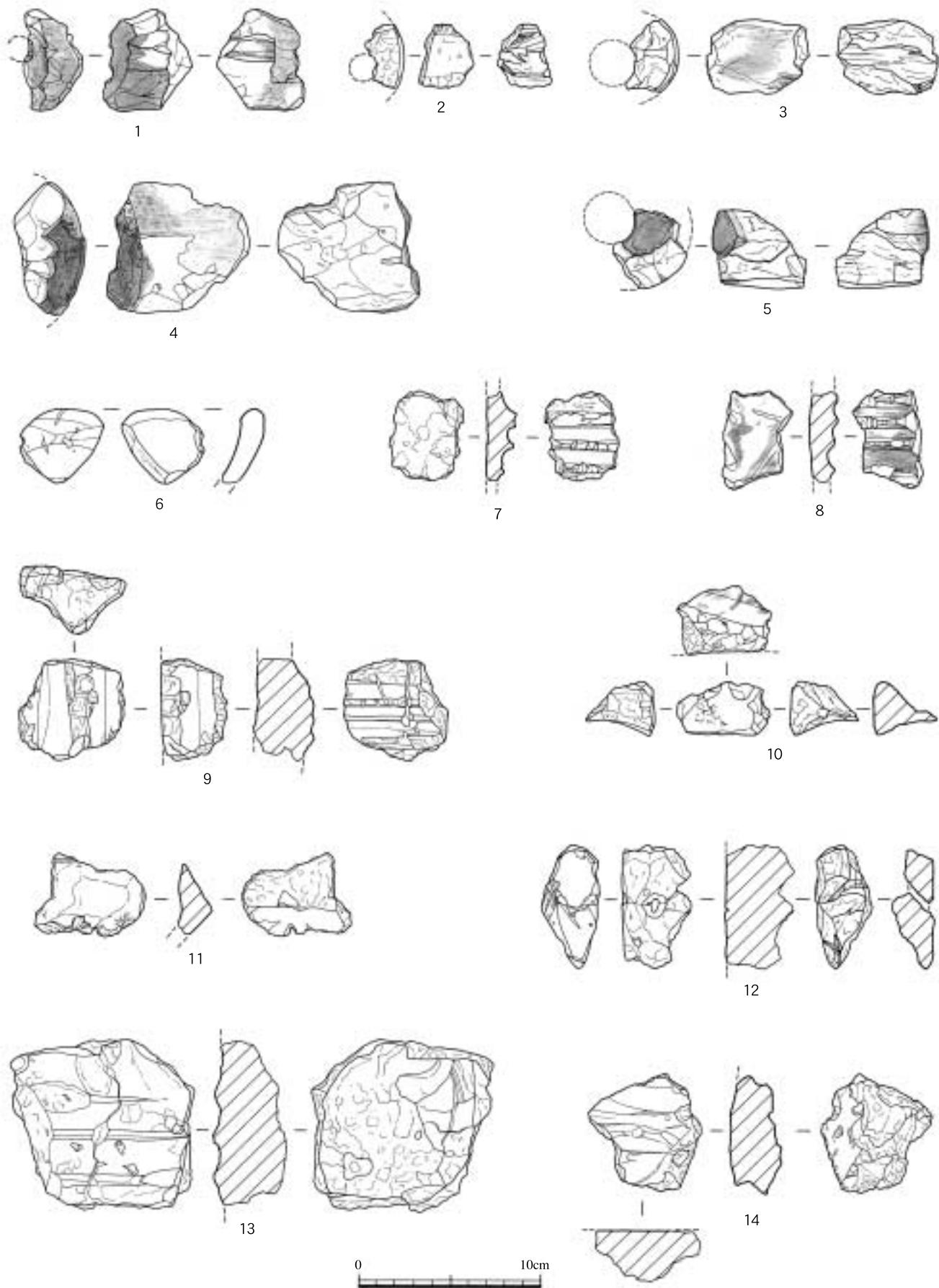
図番号	器種	部位	完/破	重量	法量	付着物(木炭・木炭痕)	色調	観察事項	出土地
第60 図 版 44	鉄滓	—	完	288.5	縦幅 7.15 横幅 9.0 厚さ 3.0	上面に少し残る	内面: 暗灰色 表面: 赤褐色	表面は比較的平坦である。全面に黄褐色の土砂が付着。破面はない。 客土	客土
			—	174.9	縦幅 6.4 横幅 7.2 厚さ 2.7	下面に多く残る	内面: 暗灰色 表面: 赤褐色	上下面とも比較的滑らかである。破面数は2面。 II層	II層
			—	118.3	縦幅 6.4 横幅 5.55 厚さ 3.15	下面に少しある	内面: 青灰色 表面: にぶい赤褐色	上面は比較的滑らかだが、下面是やや凹凸が目立つ。破面数は3面。 II層	II層
			—	222.5	縦幅 6.8 横幅 7.4 厚さ 4.8	上下側面にあり	内面: 暗青灰色 表面: 暗赤褐色	全体に黄褐色の土砂が付着。碗状で底面はカーブを描く。他は凹凸が目立つ。破面数は不明。 SK-14	SK-14
			—	152.5	縦幅 6.4 横幅 7.8 厚さ 2.9	下面の1カ所に付着。全体に黄色の付着物あり	内面: 暗青灰色 表面: 一部にぶい赤色	上下面とも凹凸が目立ち、気泡もやや多い。破面数は2面? SK-14	SK-14
		—	完?	132.1	縦幅 5.5 横幅 6.3 厚さ 3.2	下面に少しある	内面: 不明 表面: 暗灰色・暗赤褐色	全体的に凹凸、気泡が少ない。破面数はなし? 客土	客土
			—	86.6	縦幅 6.1 横幅 6.9 厚さ 2.3	下面に少しある	内面: 暗灰、黒色 表面: 暗灰色、赤褐色	全体的に凹凸、気泡が少ない。全体に黄褐色の土砂が付着。破面数は3面。 II層	II層
			—	82	縦幅 3.9 横幅 7.5 厚さ 2.7	上下面に大きめのものが多くある	内面: 暗灰色 表面: 赤褐色	全体的にやや凹凸が目立つ。全体に黄褐色の土が付着。破面数は1面。 II層	II層
			—	161.2	縦幅 5.9 横幅 8.2 厚さ 2.7	なし	内面: 暗灰色 表面: 赤褐色	下面に気泡が多い。全体に黄褐色の土が付着。破面数は2面。 あ-2	あ-2
			—	65.6	縦幅 2.1 横幅 4.6 厚さ 2.6	下面に少しある	内面: 暗青灰色 表面: 暗青灰、赤褐色	上下面とも凹凸が少ない。全体に黄褐色の土が付着。破面数は5面。 SK-5	SK-5
		—	—	83.7	縦幅 4.1 横幅 4.4 厚さ 3.5	上・下側面に多く残る	内面: 暗灰色 表面: 暗赤褐色	下面は凹凸が目立つ。全面に明黄褐色の土が付着。破面数は1面。 II層	II層

第36表 鍛冶関連遺物観察一覧 2

単位:cm/g

図番号	器種	部位	完/破	重量	法量	付着物(木炭・木炭痕)	色調	観察事項	出土地
第60 図 ・ 図版 44	鉄滓	破	38	—	159.2	縦幅 横幅 厚さ 5.1 4.7 4.1 なし	内面:暗灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	凹凸は比較的少ない。全体的にオリーブ黄色の土が付着。破面数は3面。	II層
			39	—	86.6	縦幅 横幅 厚さ 4.8 5.4 2.8 下・側面に少しある	内面:暗灰色、暗青灰色 表面:暗赤褐色	凹凸・気泡が少しある。全体に黄褐色の土が付着。破面数は1面。	客土
			40	—	131.9	縦幅 横幅 厚さ 4.5 4.1 3.8 なし	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色	上面は少し凹凸があり、下面是気泡がある。破面数は4面。	う-2 SP-20
			41	—	80.6	縦幅 横幅 厚さ 4.4 4.7 3.1 なし	内面:青灰色 表面:青灰色、暗赤褐色	凹凸・気泡が少しある。破面数は2面。	II層
			42	—	89.6	縦幅 横幅 厚さ 4.0 5.1 2.7 下面にわずかにある	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	上面は間凸がはげしい。黄褐色の土・錆ぶくれがある。破面数は4面。	II層
			43	—	88.5	縦幅 横幅 厚さ 3.6 4.4 3.0 なし	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色	黄褐色の土が付着。上面は比較的平坦だが、下面是間凸が目立つ。破面数は4面。	II層
			44	—	91.1	縦幅 横幅 厚さ 3.5 4.6 3.1 なし	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	上・破面に気泡が少しある。黄褐色の土が付着。破面数は4面。	客土
			45	—	52.1	縦幅 横幅 厚さ 3.8 4.4 2.6 なし	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	上・下面に凹凸が少しある。黄褐色の土が付着。破面数は4面。	SK-2
			46	—	58.8	縦幅 横幅 厚さ 3.9 3.7 2.3 なし	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	下面是間凸がはげしい。黄褐色の土が付着。破面数は3面。	II層
			47	—	56.8	縦幅 横幅 厚さ 4.1 4.6 2.4 上面にわずかにある	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	全体に黄褐色の土が付着。上面に気泡が目立つ。下面是比較的なめらか。破面数は2面。	客土
			48	—	41.8	縦幅 横幅 厚さ 4.3 3.2 2.0 なし	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	下面是少し凹凸がある。全体に黄褐色の土が付着。破面数は2面。	客土
			49	—	54.8	縦幅 横幅 厚さ 3.3 4.1 2.3 なし	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	全体に黄褐色の土が付着。破面数は3面。	客土
			50	—	24.4	縦幅 横幅 厚さ 3.1 2.7 2.5 上面にあり	内面:暗青灰色 表面:暗青灰色、赤褐色	上面は間凸が目立つ。全体に黄褐色の土が付着。破面数は2面。	SK-17
			51	—	4.5	縦幅 横幅 厚さ 2.3 3.0 1.3 なし	内・表面:黒色	全体に気泡が多い。ガラス質。破面は1面。	SK-17
			52	完	12.3	縦幅 横幅 厚さ 2.4 4.2 1.4 なし	内面:青黒色 表面:青黒色	全体に気泡が少しある。全体に黄褐色の土が付着。破面はない。	SK-17
第61 図 ・ 図版 44	鍋	口縁部	53	—	375.8	口径 器高 底径 45.6 — 内面に多く付着	暗青灰色、暗赤褐色	口唇部は面取り、外面の約半分は溶けかかった状態で固まっている。	客土
			54	—	88.1	口径 器高 底径 — なし	暗灰色、暗赤褐色		III層
			55	—	83.2	口径 器高 底径 — 内面に多く付着	暗灰色、暗赤褐色	内外面に小さな鉄片が付着。器壁が薄い。	い-5 客土
			56	—	20.5	口径 器高 底径 — 外面にわずかに含む	暗灰色、暗赤褐色		SK-2
			57	—	137.3	口径 器高 底径 45.3 — 内面少し付着	暗灰色、暗赤褐色	口唇部は面取りされ、耳が付く。	客土
			58	—	134.9	口径 器高 底径 — 内外面に少し付着	暗灰色、暗赤褐色	口唇部は面取りされる。	不明
			59	—	71.9	口径 器高 底径 — 内外面に多く付着	暗灰色、暗赤褐色	内面に鉄片が付着。	客土
			60	不明	122.7	口径 器高 底径 25.3 — なし	暗灰色、暗赤褐色	口縁部内面に突起が付く。外面に溶けた鉄が付着。	い-6 客土
			61	—	92.5	口径 器高 底径 21.2 — なし	暗灰色、暗赤褐色	60と同様の器種か。	客土
			62	耳	35.3	口径 器高 底径 — なし	暗灰色、暗赤褐色	内面に鉄鍋の耳片と鉄鍋片が付着。	客土
			63	耳?	64.8	口径 器高 底径 — なし	暗灰色、暗赤褐色	鉄片が2枚付着。	II層
			64	碗?	11~胴	口径 器高 底径 16.0 — なし	暗灰色、暗赤褐色		う-1 II層
			65	—	39.2	口径 器高 底径 12.4 — なし	暗青灰色、暗赤褐色	口縁部は直口し、口唇部は平坦。外面は少し溶けかかった状態で固まっている。	あ-5 客土
			66	—	336.7	口径 器高 底径 — なし	暗青灰色、暗赤褐色	鉄鍋を作るときの湯口の痕が、円形の突出として底部外面に残る。底部外面突出部径4.8cm。	II層
			67	—	92.2	口径 器高 底径 — なし	暗青灰色、暗赤褐色	鉄鍋を作るときの湯口の痕が、円形の突出として底部外面に残る。底部外面突出部径3.4cm。	客土
			68	—	78	口径 器高 底径 — なし	暗青灰色、暗赤褐色	鉄鍋を作るときの湯口の痕が、円形の突出として底部外面に残る。底部外面突出部径3.2cm。	SK-2
			69	—	114.8	口径 器高 底径 20.6 — 内外面に少しある	暗青灰色、暗赤褐色	底部には突起状の支脚がつく。(おそらく3カ所に)	う-4 II層

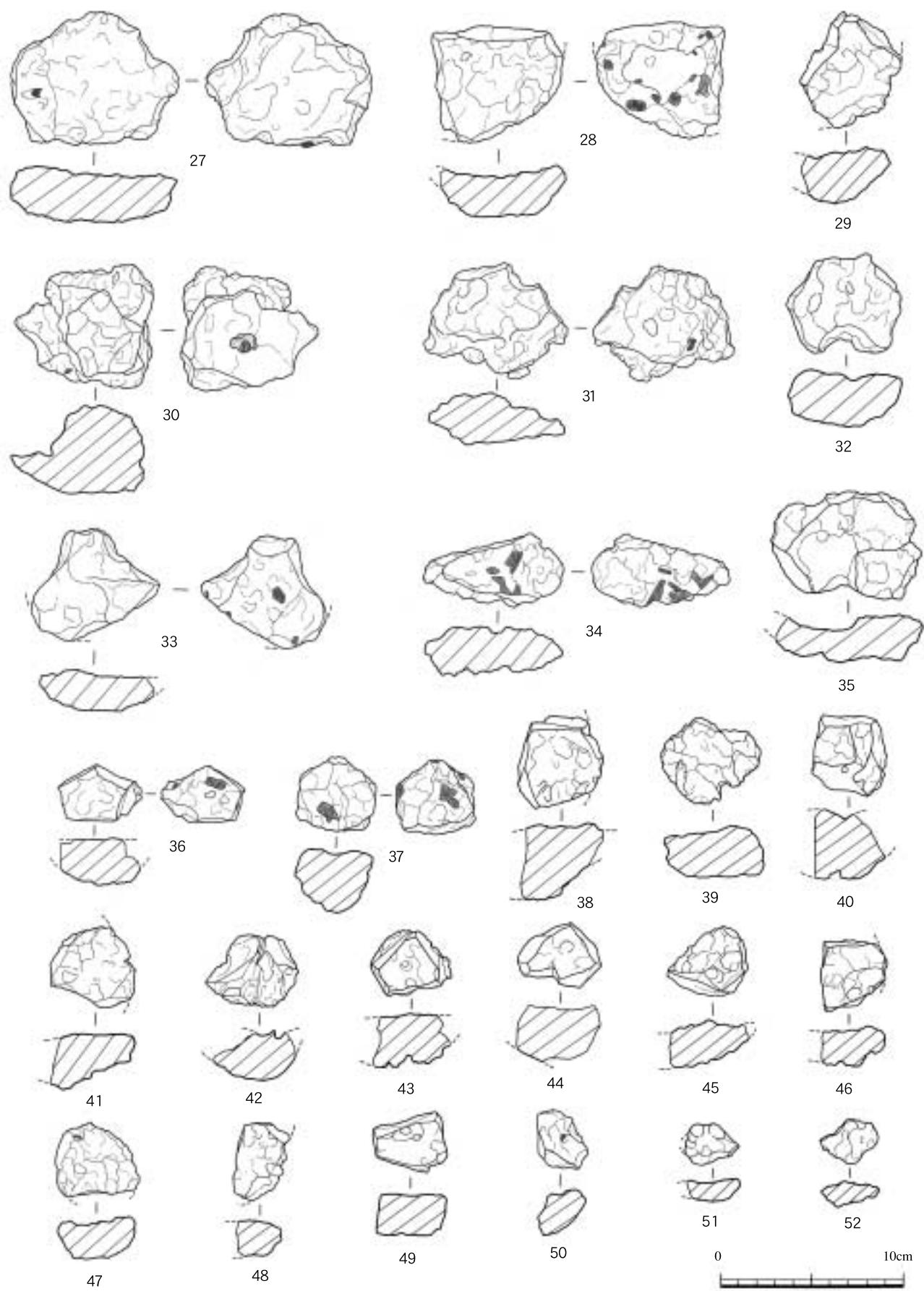
注「—」:計測不可



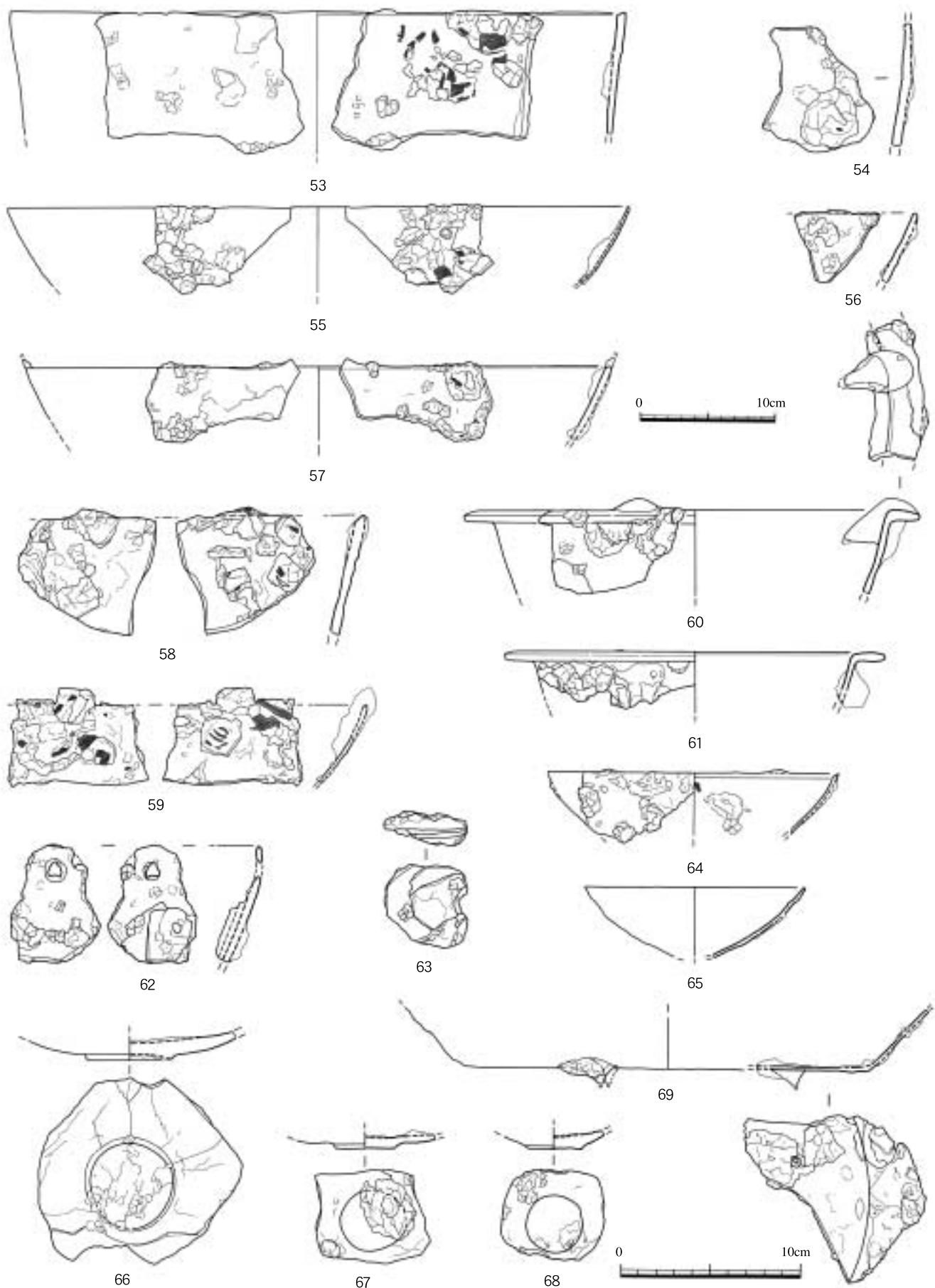
第58図 鍛冶関連遺物 1 (羽口・坩堝・焼土)



第59図 鍛冶関連遺物 2 (焼土・用途不明)



第60図 鍛冶関連遺物3（鉄滓）



第61図 鍛冶関連遺物 4 (鉄鍋等) 53・55・57の縮尺は1/4、その他は1/3

## 第29節 自然遺物

自然遺物には貝類遺存・脊椎動物遺体・植物遺存体がある。

植物遺存体には次の2種類がある。1つは、長さ約1cmの米粒形である。一端が少し尖り、そこにしづがよっている。黒色で外皮はうすく中空である。種子か果実かは不明である。えー4グリットのⅡ層から10粒ほど出土した。

もう1つは、残存長約3.8cmのへたで1点のみの出土である。全体が黄褐色で、へたからのびる茎の部分は所々黒い。種名、出土地点は不明である。

### 1. 貝類

貝類は合計1,652個体出土した。出土状況を見ると、遺構（SK1・2・3・4・6・14・17、SP16・20・21、SW-1）出土のものは全体の約1割で、残りは客土や包含層等からの出土である。

貝の種類別に見ると、巻貝が約9割、二枚貝が約1割を占める。巻貝のうち、群を抜いて多いのがチョウセンサザエである。おそらく食用にされたと考えられる。そのほかでは、サラサバティ、マガキガイ、センニンガイ、ギンタカハマが多い。二枚貝ではヒレジャコガイが最も多く、リュウキュウザル、ウラキツキガイが続く。

貝の生息地別にみると、干瀬に住むチョウセンサザエとリーフ斜面に住むサラサバティ、ギンタカハマ等以外はすべてリーフ内の亜潮間帯上縁部に住む貝がほとんどである。河口のマングローブ林に生息するセンニンガイは、現在フィリピンが生息域の北限で、琉球列島では17世紀初頭に消滅し、現生していない<sup>註1</sup>。沖縄の遺跡から出土する事はあるが、尻並遺跡のように63点も出土する例はあまりない。あ・い-1グリッドの包含層から集中的に出土している。

#### ＜註＞

註1. 潟の生態史研究会 名和 純氏の御教示による。

### 貝類生息地の分類

外洋～内湾		水 深	底 質
I	外洋・サンゴ礁	0 潮間帯上部（1ではノッチ、Ⅲではマングローブ）	a 岩板
		1 潮間帯中・下部	b 軽石
II	内湾・軽石地域	2 亜潮間帯上縁部（1ではイノー）	c 岩礁底、砂泥底、砂底
		3 干瀬（1にのみ適用）	d マングローブ植物上
III	河口干潟・マングローブ域	4 礁斜面およびその下部	e 淡水の流入する礫底
		5 止水	
IV	淡水域	6 流水	
		7 林内	
V	陸域	8 林内・林縁部	
		9 林縁部	
VI	その他	10 海浜域	
		11 打ち上げ物	
		12 化石	

#### ＜引用文献＞

「古我知原貝塚」『沖縄県文化財調査報告書』 第84集 1987. 12



## 2. 脊椎動物遺体

金子浩昌

### (1) はじめに

宮古・尻並遺跡は2001年8月～11月に沖縄県立埋蔵文化財センターによって発掘調査された平良（ひらら）市字西里345（那覇地方裁判所敷地内）所在の遺跡である。近・現代に至るまでの遺構、遺物が検出されたが、特に最下層に土坑墓、石組み遺構、土坑、柱穴、炉跡を検出、多くの陶磁器などの遺物とともに食料残澤と考えられる遺物があり、獣魚類の骨も多かった。先島におけるこの時代の人々の生活を考えるときにこうした資料は基本的な価値をもつ。特にこの地域の報告が少ないので、貴重な資料である。

報告に当たり調査員羽方誠氏、整理に当たった瑞慶覧尚美氏、玉城照美氏、玉城恵美利氏と協力された方々に御礼申し上げたい。

### (2) 検出された脊椎動物遺体種名表

節足動物門 Phylum ARTHROPODA	属・種不明 Gen.et sp.indet
軟甲亜綱 Subclass Malacostraca	ウミガメ科 Family Chelonidac
十脚目 Order Decapoda	属・種不明 Gen.et sp.indet
科・属不明 Fam.et gen.indet	
脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA	鳥綱 Class Aves
硬骨魚綱 Class Osteichthyes	ミズナギドリ目 Order Procellariformes
スズキ目 Order Perciformes	アホウドリ科 Family Diomedeidae
ハタ科 Family Serranidae	アホウドリ属 Diomedea sp.
属・種不明 Gen.et sp.indet	ミズナギドリ科 Family Procellariidae
フエダイ科 Family Lutjanidae	属・種不明 Gen.et sp.indet
属・種不明 Gen.et sp.indet	キジ目 Order Galliformes
フエキダイ科 Family Lethrinidae	キジ科 Family Phasianidae
ハマフエキ <i>Lethrinus nebulosus</i>	ニワトリ <i>Gallus gallus var. domesticus</i>
フエダイ or フエキダイ科 Lutjanidae/Lethrinidae	哺乳綱 Class Mammalia
ベラ科 Family Labridae	齧歯目 Order Rodentia
コブダイ(カンドイ) <i>Semicossyphus reticulatus</i>	ネズミ科 Family Murida
属・種不明 Gen.et sp.indet	属・種不明 Gen.et sp.indet
ブダイ科 Family Scaridae	食肉目 Order Carnivora
ナンヨウブダイ <i>Scarus gibbus</i>	イヌ科 Family Canidae
ナガブダイ <i>Scarus rubroviolaceus</i>	イヌ <i>Canis familiaris</i>
属・種不明 Gen.et sp.indet	ネコ科 Family Felidae
ニザダイ科 Family Acanthuridae	ネコ <i>Felis catus</i>
属・種不明 Gen.et sp.indet	海牛目 Order Sirennia
フグ目 Order Tetraodontiformes	ジュゴン科 Family Dugongidae
モンガラカワハギ科 Family Balistidae	ジュゴン <i>Dugong dugong</i>
ハリセンボン科 Family Diodontidae	寄蹄目 Order Perissodactyla
属・種不明 Gen.et sp.indet	ウマ科 Family Equidae
両性綱 Class Amphibia	ウマ <i>Equus caballus</i>
無尾目 Order Anura	偶蹄目 Order Artiodactyla
科・属不明 Fam.et gen.indet	ウシ科 Family Bovidae
爬虫綱 Class Reptilia	ウシ <i>Bos taurus</i>
カメ目 Order Chelonia	ヤギ <i>Capra hircus</i>
リクガメ科 Family Testudinidae	イノシシ科 Family Suidae
	ブタ <i>Sus scrofa var. domesticus</i>

### (3) 検出された脊椎動物

文中の計測値単位は特に記されていない限りmmで表す。

#### 1. 節足動物

カニ

ハサミ脚が1点あったのみである。

#### 2. 魚類

魚骨の出土は少なかった。宮古地方のこの時期での特徴のように思われるが、これも遺跡による違いがあろう。

ハタ科の一種

やや多くの標本があった。歯骨は近心高9.5、全長70.0になる標本であった。

ハマフエフキ

標本検出としてはもっとも多い。ハマフエフキ*Lethrinus nebulosus*が主体で、これとは別種の2種があった。ハマフエフキの顎骨全長は28.0±~58.0±になる。

フエダイ科／フエフキダイ科の一種

前鰓蓋骨、主鰓蓋骨、角骨などが各1点ある程度であるが、種名を明らかにすることはできなかった。

コブダイ（カンダイ）

前上顎骨、主上顎骨各1、下咽頭骨3がある。下咽頭骨幅は幅44.83、53.0±、73.0±になる。体長30~50cm前後の個体になる。

ナガブダイ

下咽頭骨1（歯部幅18.12）があつたのみである。

ナンヨウブダイ

下咽頭骨2（歯部幅11.9、11.9）。体長30cm前後の個体であった。

ブダイ科の一種

前上顎骨4、歯骨1があつた。

ニザダイ科の一種

尾柄部の鱗1があつたのみである。

モンガラカラハギ科の一種

歯1、方骨1、舌顎骨1、第2臀鰭棘1、大形の腰体片1があつた。歯は全長37.0±、腰体は破片であるが、全長100.0前後に達したであろう。体長30cm以上になる大形のカラハギ類になったはずである。

ハリセンボン科の一種

標本は3点あつたが、顎骨の残されていたのは上顎骨1点のみで、他の2点は顎骨内の歯の部分のみであった。

歯の部分の横径18.8、20.7、24.8

歯の横径で20~25.0になれば、体長30~40cmというサイズになったはずであり、大形のハリセンボンといつてよいであろう。

#### 3. 両生綱

カエル類

骨格の保存がよく、現代のものの混入ではないかと思われる。

#### 4. 爬虫綱

リクガメ類

甲板の破片1があつたのみである。

ウミガメ類

甲板片、縁骨など7~8点の小片が検出されたのみである。大形サイズになるとは思えない骨片である。

#### 5. 鳥綱

ミズナギドリ類？

尺骨片1点があつたのみである。

## アホウドリ

左脛骨、骨体部1点があった。

## ニワトリ

四肢骨のみが検出されているが、ほとんどの骨格が両端を欠損しており、解体時の破損によるものであろう。骨の総数でも49点であり、日常的に食べる程の量ではないと思われる。骨格に大形サイズの標本のあるところをみると、すでに幾つかの品種があったことも考えられる。

## 6. 哺乳綱

### ネズミ類

右脛骨、全長30.7

### イヌ

イヌの遺骸の出土は多かった。下顎骨だけでも若年を含め成体6点があり、同一個体と思われる1体もあった。しかし、多くは不完全な骨格であった。なかには食べられた個体もあったかも知れない。サイズのかなり違う大小の個体があったようである。

#### 小形犬

SP-10 一括個体：不完全な椎骨、頭骨としては上顎骨と下顎骨があるのみである。四肢骨も不完全。四肢骨で骨端の骨化していたのは上腕骨、橈骨の遠位骨端のみであった。

#### その他のイヌ骨格

下顎骨：5点はすべて遊離別個体、歯の完存する例はない。特に骨体を破損させた痕跡はみられないが、M<sub>1</sub>が割れている例（図版49）があり、叩かれたことを推測させる。下顎骨の骨体、下顎枝に解体痕のみられるのが3例あった。歯の咬耗は一般に弱く、萌出から日時を経ていないと思われる。

四肢骨：橈骨で完存する1例があるが、小形犬サイズ、橈骨中央頑丈示数7.17で、骨体は華奢である。他の四肢骨も完存標本はない。解体痕は橈骨にみた。

### イヌ歯牙、顎骨の計測表

SP-10 イヌ

	I <sup>3</sup>	C	P <sup>4</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	C	P <sub>4</sub>	M <sub>1</sub>
歯冠長	5.4	7.5	14.5	10.7	5.6			
歯冠幅	4.3	5.1	7.4	12.8	7.2			

下顎骨全長	96.5	下顎枝幅	23.1、同高	36.1
下顎骨高	P <sub>4</sub> ・M <sub>1</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>1</sub> ・M <sub>2</sub>	厚 M <sub>1</sub>
	15.6	16.9	16.9	8.9

#### ①、②、③、下顎骨の計測表

(高)	(厚)		
	P <sub>4</sub> ・M <sub>1</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>1</sub> ・M <sub>2</sub>
①	17.1	17.7	18.9
②	16.1	18.4	18.0
③		16.8	17.6
			8.3
			8.7

	C	P <sub>4</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>
咬筋窩深	長×幅	長×幅	長×幅	長×幅
①	3.5	—	9.7×4.8	—
②	4.5	8.2×5.4	—	—
		—	—	18.2×7.4

### 遊離犬歯計測表

上顎犬歯	L/R	歯冠長	歯冠幅
	L	8.6	5.4
	R	7.3	4.5
	R	6.4	4.2
	R	8.2	5.0

下顎犬歯	L/R	歯冠長	歯冠幅
	R	7.9	4.9

### 大形犬

左側頭骨の顎関節部周辺を残すのみの破片であるが、1点検出されている。標本自体に解体痕などはみない。所属年代についてはなお問題があるかも知れない。



## ネコ

SK遺構で一括した出土がみられた。保存も良好ではなく、頭部がなかった。出土状況が不明であるが、四肢骨など解体されたような痕跡はない。同一個体ではないかと思われる。ネコの検出例は多いが、ほとんどまとまることがない。本例は珍しい例である。

## ジュゴン

骨格の検出は少なかった。頸椎の椎弓部片と肋骨各1点があつたのみである。頸椎は解体時にこの部分を切断しているのであろう。肋骨の両端にも折ったり、切り付けた痕跡をみた。肋骨は骨器の素材とされたのである。

## ウマ

ウシに比べるとはるかに少なく、両種の量的な違いをよく示していた。

頭蓋部分は破片でも確認できなかつた。左上顎骨1点、下顎骨は角部破片2点があつたのみである。歯は切歯14点があつたが、臼歯はわずかに5点があつたのみ。

## 四肢骨

肩甲骨は1点あつたが、肩甲頸最小径 (SLC) 57.3は中形馬の小、上腕骨遠位骨端部1点があり、骨端幅 (Bd) 62.6は小形馬である。橈骨は2点、遊離遠位骨端部幅63.5も小形1点、尺骨は1点、中足骨の1例に近位骨端を叩いたような痕がみられた。道具に使つたような痕跡である。中手骨に近、遠位骨端の外れる幼体骨があつた。

寛骨臼部片には、臼部を二分するような切痕がついていた。解体法を示す1例である。

脛骨は2点と破片があつた。遠位骨端幅58.8で小さい。二つに折っていた。

基節骨全長72.0で小形、中節骨全長41.8、42.3で小形であった。中節骨の後面中央に横走する切痕をみた。末節骨を外す切痕であり、蹄を取るのが目的であったと思う。

## ブタ

もっと多くの骨格を残していた。食肉の中心であったことが推測される。すべての骨格は解体され、壊されて利用されていたのである。

**椎骨、肋骨**：ごく一部が残されるのみであった。肋骨を切断した痕跡は多く残されない。

**頭骨**：頭頂骨、前頭骨が多く残されていた。しかし、それぞれを接合できた標本は数点であつて、頭骨を復元するということはできなかつた。残された部位の数からみると、側頭骨左13が最大数であるが、実際はさらに多いであろう。

前頭骨類骨突起端幅64.0±、70.0±、72.0、78.8、強い短頭形質のブタであったことが推定される。また頭頂骨壁の厚いことも特徴的である。

**上・下顎骨**：上顎骨の遺存例は少なかつた。下顎骨は多く残されていたが、吻部近心部の残る例は1例のみであつた。イノシシに比べて左右骨体幅広く、下顎角23度、50度であった。犬歯4例はすべて♂であったが、下顎骨のすべての雌雄を区別できたわけではない。下顎骨は吻部を打ち割り、枝部を割って外している。このために完存する標本はない。歯はM<sub>3</sub>の萌出初期段階もしくはM<sub>2</sub>の萌出直後段階であつて、1.5歳～2.5歳未満であったはずである。1.5歳で性的に成熟するので、繁殖可能であり、また可食対象になった。

## 四肢骨

**肩甲骨**：遺存率はやや低い。頸部幅14.3例は生後半年未満個体である。20.0±が1.5～2.5歳個体のサイズである。

頸部幅24.2が1例のみあり最大であり、3歳以上の個体である。

**上腕骨**：多く残されている。近位骨端はすべて外れ、また壊されることが多い。遠位骨端は4点が骨化、滑車上孔の閉鎖例は左3、右4があつたが、破損標本が多いので出現率は不明である。開口例が多いのであろう。幼体例が1点あつた。

**橈骨**：多く残されている。近位骨端の骨化例が左2、右1例があつた。

**尺骨**：少ない。幼体例左右各1、近位骨端は未骨化。DPA30.0±になるのが普通。

**寛骨**：破損標本が多い。臼部で割れる。骨体の保存は1例、両端がかじられていた。

**大腿骨**：近、遠位骨端とも未骨化であり、破損標本が多い。骨体最小径18.9が最大。大形の大股骨では骨体中央で割られていた。

**脛骨**：多く残されていた。

## ウシ

大形の家畜としてはもっと多くの骨を残していた。当時おそらくもっと重要な家畜であったと思われる。サ



イズにも大小あったのではないかと思われる。

**椎骨**：残されている標本のなかに頸椎はごく少なかった。

**頭骨**：角突起右2点があり、切断したものと思われるが、切痕などみられたのはもっとも大形になる角突起1点で、直線的な刃跡がみられた。角突起の先端は欠損している。右側頭骨頬骨突起1点があった。鼓室部岩骨が左3、右3はほぼ同じサイズであった。後頭頸幅102.6は日本在来牛といわれる中形牛のサイズであった。

下顎骨右2点があり、全長330.0、333.0（～下顎骨角）であったが、在来牛中もっとも小さいサイズの個体であったといえよう。

歯の検出は下顎歯が多く、M<sub>3</sub>右4、左3があり、なかに未萌出歯右2があった。M<sub>2</sub>は右15中の例にみると、未咬耗歯右2、2～3歳前後の個体は少なく、5～6歳前後とそれ以上の個体が主になるとみられる。ウシのような大形個体の家畜にあっては、その利用面においても充分生育した個体が重要視されるのは当然であろう。

#### 四肢骨

**肩甲骨**：肩甲頸部幅52.2は在来牛中もっとも小さい。

**上腕骨**：遠位骨端幅71.0、77.5、90.0±、の計測があり、70mm台は小形、90.0台で中形になる。骨体下部で打ち割られていた。

**橈骨**：近位骨端幅75.8、76.5、80.1、遠位骨端幅71.0は小形である。

**尺骨**：近位部を残す標本が多い（骨端欠損）。小形である。手根骨は少ない。

**中手骨**：全長200.0の標本があり、中形サイズになる。しかし、このサイズの標本は少ないのでないかと思われる。この標本の近位、遠位骨端には打ち叩かれた痕跡がある。

**寛骨**：大形の寛骨の解体は興味がもたれる。臼部を中心とした部位で腸骨体部、恥、座骨部の切断状況がよく看取された。骨体に対して横位の切断と共に、裂くような切り口がみられるのが特徴である。

**大腿骨**：骨体部の遺存の多いのが特徴である。しかしそれに比べ、近、遠位骨端を残す率も少なく、破損率も高いことになる。骨髓などの利用から壊されるのであろう。近位骨端幅117.2は小形である。骨体を上手に割った様子がわかる。

**脛骨**：遠位骨端幅67.5、69.0は小形。骨体を中央で割っている。幼、若体骨がある。足根骨は少ない。

**膝蓋骨**：3点があった。縦に割れているのは解体の時の傷であろう。

**中足骨**：この骨も中間で叩き折っている標本をみる。小形。

**距骨**：後肢骨の多い割に少なかった。前面の中央窩部周辺に解体痕がみられるのはこの骨によくみる。全長65.1、72.1、71.4は小形から中形である。

**踵骨**：距骨に比べてやや多く残されている。若い個体もあり、近位骨端はほとんど壊されている。踵骨近位骨端は腱が付着し、切ったり、囁る場所である。骨端はすべて欠損。

**指骨、基節骨、中節骨、末節骨**が残され、中、小形であった。検出は少ない。

#### ヤ ギ

上下の顎骨と四肢骨が出土している。出土量はブタ、ウシに比べてはるかに少ない。多くみても数個体分と思われる。

#### （4）総 括

**魚類**：獸骨の出土に比べると魚骨は少なかった。種類上ではサンゴ礁海域の環境を反映して多かったが、種名の確認できない標本が残された。大形のハマフエフキ類、ブダイ類、ハタ類とコブダイが特徴的であった。特にハマフエフキは大形であった。おそらく選別されて運ばれているのであろう。椎骨はわずかに4点があったのみであった。解体の場所が別のところにあったことを推測させる。

**爬虫類**：ウミガメ類の遺骸は少なかった。南海島嶼地域の環境としては意外の感がつよい。時代的な背景があるのでないかも知れない。

**鳥類**：ミズナギドリ、アホウドリなど海鳥がわずかにあり、解体しているので、利用しているのであろう。大部分はニワトリであった。食用としてひろく飼育されていたようである。すでに中形から大形の品種がいて、積極的に飼われていた。大形品種は諸事に使われたのではないかと思われる。

**獸類**：ブタ、ウシを主とした獸類がもっとも多く、特徴的な在り方を示していたことはこれまでにも指摘されていたことであったが、形質などがまとまった資料で明らかにされてきた。ネコはまだ少ないと、イヌは多くの遺骸をのこしていた。当時飼育されていた個体は本土の小形犬とほぼ変わらないサイズのイヌであったが、華奢

な体つきであったようだ。それに若い個体で、1歳程度ではなかつたかと思われる。埋葬例はSP-10が推定されるが、その他は散在する状態であった。下顎骨に切痕が残されているところからも食べられたのではないかと思われる。若い個体というのもそのためであろう。

ブタはもっと多かった。イノシシとは異なるブタの形質を確認できるが、小形であり、上腕骨の滑車上孔が開口するなど、現代のブタとは異なる点もある。このようなブタが中国などから輸入されていたのであろう。ブタはSK遺構において検出されたことが多かった。まとめて廃棄されたのであろう。日頃どの程度に食べられていたのか、遺骸のみからの推測は難しいが、大量に廃棄されるということはみられていないので、やはり日常的な食べ物ではなかつたと推定される。

ウシは日本の家牛在来品種のうちの中小形である。これは本土の中近世遺跡からの出土と同じである。このような在来牛が広く分布していた証拠である。量的にはブタよりはるかに少ないが、それだけに貴重な家畜であった。角が切断されているので、利用されているのであろう。なお肩甲骨のなかに、近位骨端の「棘下窓」にU字形の刻みをつけた1例があった。これは「ウスピラ」<sup>註1</sup>とよばれる脱穀具で、先島地方で、最近まで使われていた。

「ウスピラ」については、三島 格氏によって民具として研究されてきたが、考古資料として確認されたのは今回がはじめてであろう。残念ながら本品の出土が客土中であったために、使用年代などについての知見を得るまでに至らなかつたが、この地で古くから使われていたことを実証した貴重な資料といえる。「ウスピラ」については、三島 格氏の的確な考察と結論がある。すべてはそれに尽きると考えられる。この地域での考古資料調査に当たり、今後も注目したい。

ウマは日本の在来品種中の中小から小形系種であった。トカラ馬、宮古馬である。本土の古代から中近世のウマと比べて小形系が多くなるのは当然であろう。ウマの遺骸はさらに少ない。乗用を主としたウマの扱い方がウシとは違っていたからである。しかしウシと同様に四肢骨に解体痕がみられ、骨髓食のために打ち割られてもいた。また、中節骨後面に切痕があり、蹄をはずしていたことが推測された。東京都新宿区の江戸期の遺跡で調査されたウマの埋葬例で、埋葬馬の指骨に同じ切痕があり、蹄つまり末節骨が外されていたのである。蹄を削って装飾品の素材としたのではないかと思われる。

ジュゴンは椎骨と肋骨1点があつたのみである。今回の調査範囲の広さからすれば、やや少ない感じもする。しかし、一般には多く検出されるものではない。ウシ、ブタが肉資源と考えられていたから、偶然の機会以外に特に捕獲することはなかつたのではないか。

#### ＜註＞

註1. 民具「ウスピラ」についてご教示いただいた沖縄県立埋蔵文化財センターの資料整理の比嘉優子氏、宮古・平良市教育委員会の砂辺和正氏に御礼を申し上げる。

#### ＜参考文献＞

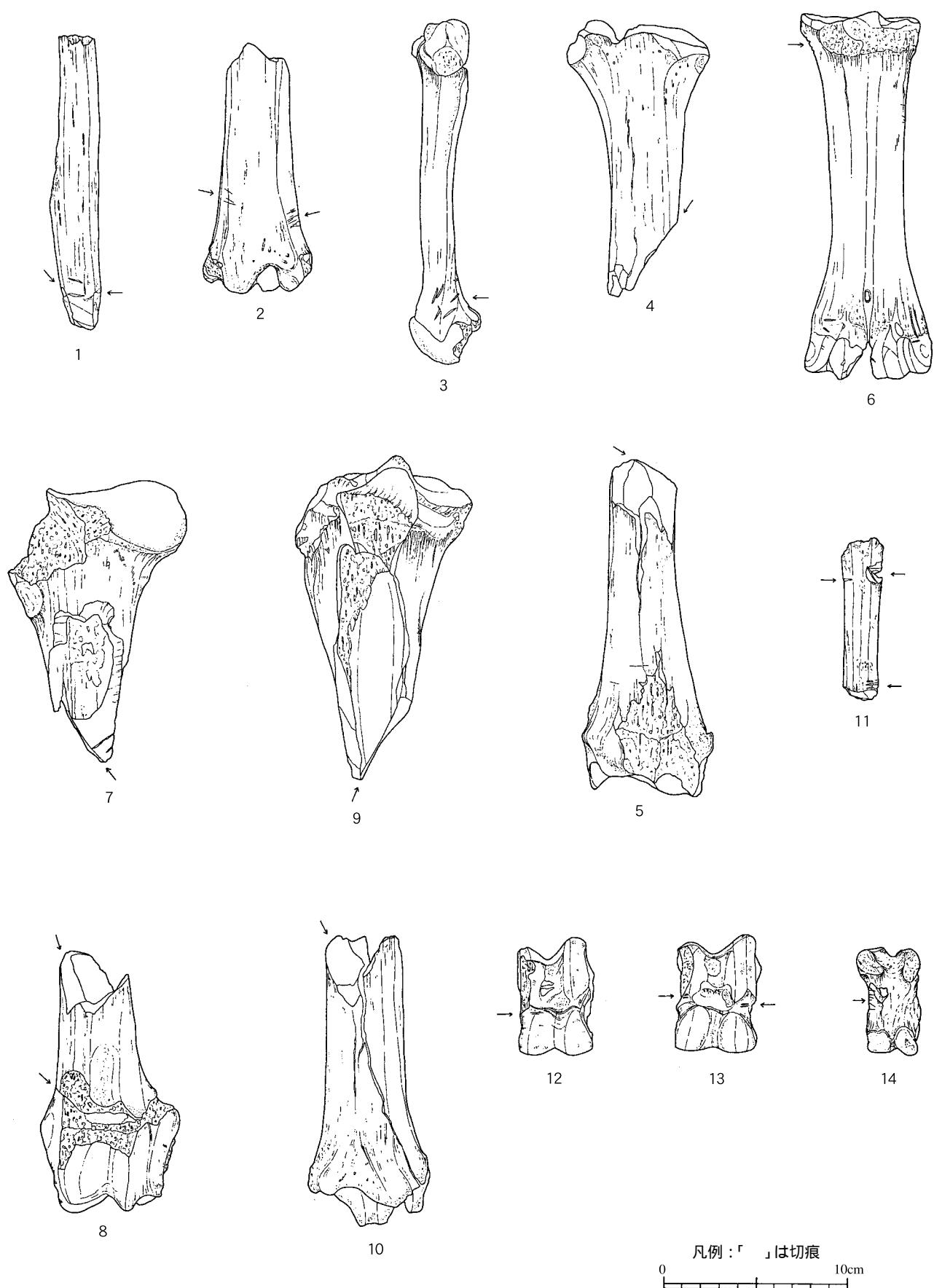
三島 格「ウスピラ考」児嶋隆人先生喜寿記念論集 「民具マンスリー」神奈川大学日本常民文化研究所 古文化論集抜粹1991.1.20











第62図 切痕をもつ骨

ジュゴン 1.肋骨 ウマ 2.右 脊骨 ブタ 3.左 大腿骨 ウシ 4.5右 桡骨 6.左 中手骨  
7.右 大腿骨 8.左 大腿骨 9.10左 脊骨 11.右 中足骨(幼) 12.13左 距骨 14.左 基節骨

## 第30節 人骨

### 【人骨の構成】

確認された全体の最小個体数を第63表に示す。年齢区分は第64表に従った。土坑墓1からは成年男性1体が埋葬された状態で出土した。土坑墓2からは幼児と思われる1個体が出土した。この幼児は保存状態が悪く、頭蓋骨片だけしか確認できなかったが、出土状況から考えて、こちらも埋葬と推定される。また「え-4 II層」から性別不明成人の右上顎第3大臼歯と思われる永久歯1本と、小児の右下顎第2乳臼歯1本が出土した。

第63表 出土人骨の構成

出土地点	男性	女性	性別不明				合計
			成人	小児	幼児	乳児	
土坑墓-1	1						1
土坑墓-2					1		1
え-4 II層			1	1			2
合 計	1	0	1	1	1	0	4

第64表 年齢区分

未成人	乳児	1ヶ月	～	1	才未満
	幼児	1	～	7	才未満
	小児	7	～	14	才未満
	若年	14	～	20	才未満
成人	成年	20	～	40	才未満
	熟年	40	～	60	才未満
	老年	～	60	才以上	

### 【人骨所見】

以下に人骨所見の概要を記す。比較に使用した日本人集団を第65表に示す。

第65表 比較集団

資 料	
西南日本	鎌鍋（1955）、平田（1957）、専頭（1957）、溝口（1957）
天福寺	中橋（1987）、九州大学解剖学講座編（1988）
与論島	大山（1957）、平田（1958）、広沢（1959）
ヤッチのガマ	譜久嶺 他（2001）
新里東元島	譜久嶺 他（2002）
宮古島	池田（1974）

### 土坑墓1（成年男性1）

保存状態が良く、今回出土した人骨の中で唯一ほぼ全身が確認できたが、顔面や右上肢の一部が欠損していた（第63図・図版58、59）。確認された部位を以下に記す。永久歯も第63図に示す。

頭蓋：前頭骨片、頭頂骨片、後頭骨片、右頸骨、左右側頭骨片、上顎骨片、下顎骨片

体肢：肋骨片、左右鎖骨片、左右肩甲骨片、椎骨片、左右寛骨片、仙骨片

上肢：左右上腕骨片、左右尺骨片、左右橈骨片

下肢：左右大腿骨片、左右脛骨片、左右腓骨片、左右距骨、左踵骨

確認された個体は全体的に骨のサイズが大きい。遺存する寛骨の大坐骨切痕が狭いことや、乳様突起や四肢骨の筋付着部が良く発達していることから男性と推定した。年齢は、永久歯の歯冠部がやや咬耗していて、腰椎の椎体に骨棘（荷重や運動などにより過度のストレスが加わったため起こる骨増殖）が見られないことから、30～40代程度と思われる。また、左右側頭骨の外耳道には外耳道骨腫が認められた（図版61）。下肢骨幹部の骨皮質には、外表面長軸に沿ったわずかな線状の隆起や小孔が認められた。これは骨膜炎による炎症痕と思われるが、その痕跡がわずかで他に病変が確認できないため、詳細は不明である。その他に上顎右中切歯に線状、上下犬歯と上顎第2大臼歯に小窩状のエナメル質減形成が認められた。

## 土坑墓2（幼児1）

保存不良で、破損した状態で出土していた（図版60）。遺存したもののはほとんどが頭蓋骨片で、その他は部位不明の骨細片が少量だけであった。確認された部位を以下に記す。

**頭蓋**：前頭骨片、頭頂骨片、左右側頭骨片、後頭骨片  
未成人の年齢推定に有効な乳歯や永久歯が遺存せず、また頭蓋骨片も遺存部位が少なく、ほとんどが破損していたため、復原された側頭骨の錐体や外耳道、乳様突起の大きさから、1～3歳程度の幼児と推定した。

## え-4 II層（性別不明成人1、小児1）

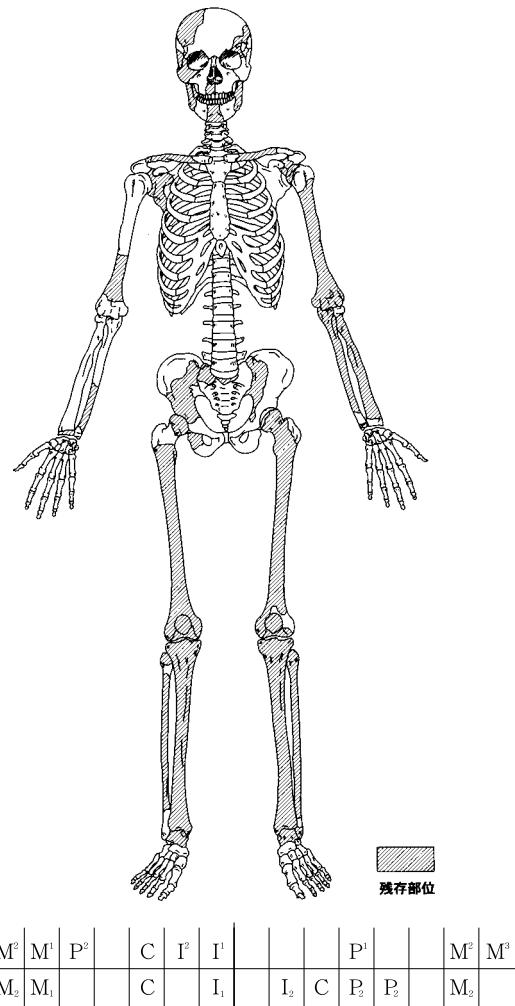
上顎右第3大臼歯と思われる永久歯と、比較的咬耗している下顎右第2乳臼歯のみ確認された。詳細は不明。

### 【観察と計測】

計測が行えたのは土坑墓1から出土した成年男性1体のみである。特徴を考察するために、第65表に示す日本列島集団と比較しながら分析を行った。一般的の計測法は Knussmann (1988) に従った。外耳道骨腫の判定基準は百々 (1972) に従った。

### 頭蓋骨

主要計測結果を比較群とともに第66表に示す。



M <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	C	I <sup>2</sup>	I <sup>1</sup>	I <sub>2</sub>	C	P <sup>1</sup>	P <sub>2</sub>	M <sup>3</sup>
M <sub>2</sub>	M <sub>1</sub>		C	I <sub>1</sub>			C	P <sub>2</sub>	P <sub>2</sub>	M <sub>2</sub>

第63図 遺存部位（全身・永久歯）

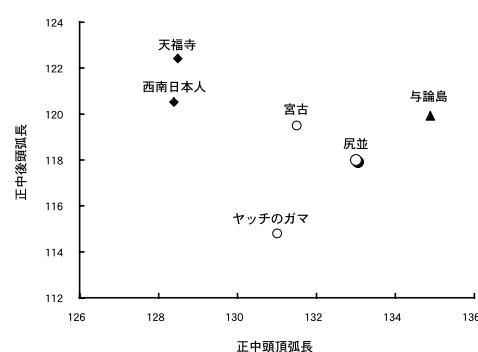
## 第66表 頭蓋骨計測値

脳頭蓋主要計測項目	尻並		新里東元島		ヤッチのガマ		宮古		与論島		天福寺		西南日本人	
	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
27 正中頭頂弧長	1	133	1	119	29	131.0	76	131.5	38	134.9	35	128.5	87	128.4
28 正中後頭弧長	1	118			20	114.8	51	119.5	34	119.9	30	122.4	87	120.5
30 正中頭頂弦長	1	118	1	104	28	116.5	76	115.9	38	119.2	35	114.8	87	114.3
31 正中後頭弦長	1	97			19	97.5	51	100.5	34	99.6	29	100.8	87	100.1
30/27 矢状頭頂彎曲示数	1	88.7	1	87.4	28	88.7	75	88.1	38	88.3	35	89.4	87	89.1

遺存する頭蓋骨片の筋付着部は良く発達していて、特に後頭骨の外後頭隆起は強く突出していた。乳様突起や下顎角も大きく突出しており、男性らしい特徴を示していた。また側頭骨では、両側に外耳道骨腫が認められた。

頭蓋は前頭部や顔面部が大部分欠損していたため、計測を行うことができたのが頭頂骨の弧長と弦長、後頭骨の弧長と弦長のみであった。頭頂弧長は133mmと比較集団内では与論島（134.9）に次いで大きいが、後頭弧長は118mmとやや小さい結果となった。また、時代的にも地理的にも近い新里東元島の頭頂弧長は119mmとかなり小さく、尻並と大きく異なっていた。

縦軸に後頭弧長、横軸に頭頂弧長をとった第64図では、



第64図 正中後頭弧長 / 正中頭頂弧長

尻並は頭頂弧長が大きく、後頭弧長が小さいため図の中央やや右下に位置している。それに対して天福寺や西南日本人は、頭頂弧長が小さく、後頭弧長が大きいため左下に位置していて、与論島を含む南西諸島集団と離れているのがわかる。頭頂弧長と後頭弧長に関してBENEVOLENSKA (1980) は、北東アジア集団で矢状頭頂後頭示数 (M28/M27) が大きく、東南アジアやヨーロッパ集団では示数値が小さくなる傾向を見いだしている。第64図では左上にいくほど示数値が大きくなり、右下では逆に小さくなる。今回使用した比較集団では、南西諸島集団は、本土集団と比較をして矢状頭頂後頭示数が小さい傾向が見られた。

## 四肢骨

### 1) 上肢骨

主要計測結果を比較群とともに第67表に示す。上肢骨は右側がかなり欠損していたため、ほとんど計測できなかつた。通常四肢骨の比較は右側を使用するが、今回は参考までに左側を使って観察を行つた。

第67表 上肢骨計測値

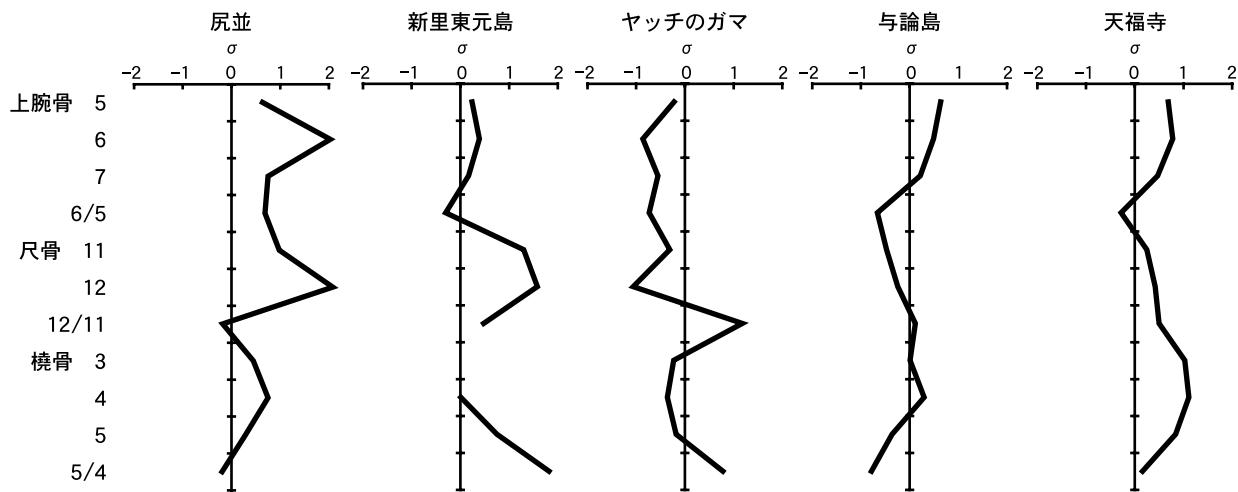
計測項目	(mm)												
	尻並		新里東元島		ヤッチのガマ		与論島		天福寺		西南日本人		
	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	
上腕骨 5 中央最大径	1	1	23	4	22.3	54	21.5	16	23.0	22	23.1	106	21.9
6 中央最小径	1	1	19	4	17.3	54	16.0	16	17.4	22	17.7	106	16.9
7 骨体最小周	1	1	65	4	62.5	52	59.4	16	62.7	22	63.8	106	61.8
6/5 骨体横断示数	1	1	82.6	4	77.5	54	75.3	16	75.7	22	77.6	106	79.1
尺骨 11 骨体矢状径	1	1	14	5	14.4	53	12.4	11	12.2	24	13.1	63	12.8
12 骨体横径	1	1	19	5	18.4	53	15.2	11	16.2	24	17.0	64	16.5
11/12 骨体横断示数	1	1	73.7	5	77.8	53	82.1	11	75.6	23	77.9	63	74.9
橈骨 3 骨体最小周	1	1	41	—	—	47	39.6	8	40.1	23	42.2	63	40.1
4 骨体横径	1	1	17	2	16.0	45	15.5	8	16.4	23	17.5	63	16.0
5 骨体矢状径	1	1	12	2	12.5	46	11.5	8	11.3	23	12.6	63	11.7
5/4 骨体断面示数	1	1	70.6	2	78.7	45	74.5	8	68.2	23	72.0	60	71.4

上腕骨は全体的にサイズが大きく骨幹部も太い。三角筋粗面や大・小結節稜などの筋付着部も良く発達していた。中央最大径は23mmと与論島 (23.0) や天福寺 (23.1) に近く、新里東元島 (22.3) とも大きな差は見られないが、中央最小径が19mm、骨体最小周が65mmと比較集団内でもっとも大きい結果となった。そのため横断示数が82.6とかなり大きな示数値になっている。

尺骨も骨幹部が太く、筋付着部が発達していた。遠位端が破損していたため最大長の計測ができなかつたが、長径は大きい印象を与えていた。骨体矢状径が14mmと新里東元島 (14.4) に近く、他の集団より大きい結果となった。骨体横径も19mmと新里東元島 (18.4) とともに大きい。横断示数は73.7と新里東元島 (77.8) やヤッチのガマ (82.1) と異なり、西南日本人の74.9に近い。

橈骨は骨体横径が17mm、最小周が41mmと天福寺と近似していてやや大きいが、矢状径は12mmと他の集団との差はあまり見られなかった。横断示数は70.6で、尺骨同様、西南日本人 (71.4) と近い値を示していた。

西南日本人を基準とした偏差折線 (第65図) をみると、示数値を除く項目のすべてがプラス側へ振れており、しかも他の集団より振れが大きいのがわかる。特に上腕骨中央横径 (M6) や尺骨骨体横径 (M12) の振れが大きいことがわかる。また、尻並と同じ宮古島から出土した新里東元島にも特徴的なのは、尺骨の矢状径 (M11) と横径 (M12) で、2集団とも大きくプラス側へ傾いていた。



第65図 西南日本人を基準とした偏差折線（上肢骨）

## 2) 下肢骨

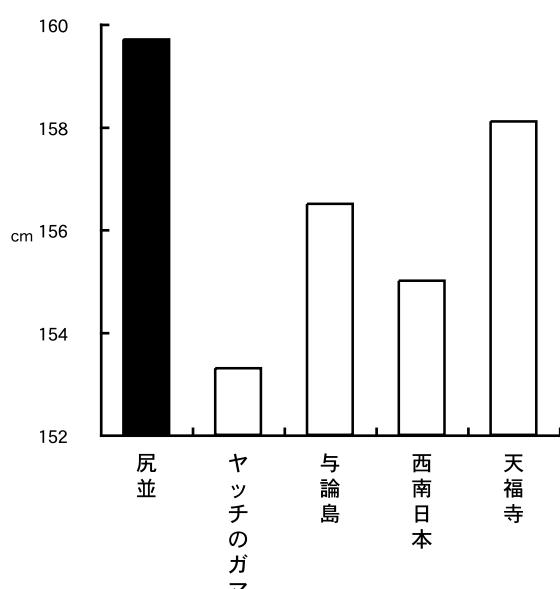
主要計測値を比較群とともに第68表に示す。下肢は上肢と比較して遺存部が多く、特に脛骨は左右ともほぼ完全に遺存していた。

第68表 下肢骨計測値

計測項目	(mm)											
	尻並		新里東元島		ヤッチのガマ		与論島		天福寺		西南日本人	
	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean	n	Mean
大腿骨 6 骨体中央矢状径	r 1	29	3	28.3	49	26.7	23	26.9	18	27.7	62	26.5
7 骨体中央横径	r 1	28	3	25.3	50	25.6	23	25.8	18	26.7	62	25.2
8 骨体中央周	r 1	89	3	86.3	48	83.2	23	84.0	17	85.2	61	82.1
9 骨体上横径	r 1	32	2	31.0	49	29.5	23	29.6	17	30.2	62	29.2
10 骨体上矢状径	r 1	25	2	24.5	49	23.4	23	24.4	17	26.2	62	24.2
6/7 骨体中央断面示数	r 1	103.6	3	111.8	49	104.5	23	104.2	17	103.4	61	105.8
10/9 骨体上断面示数	r 1	78.1	2	79.0	49	79.4	23	82.7	17	87.3	61	83.0
脛骨 1 全長	r 1	341	—	—	29	314.0	20	327.6	13	334.5	64	321.3
1a 最大長	r 1	344	—	—	38	319.1	23	333.9	17	336.5	64	328.5
8 中央最大矢状径	r 1	32	—	—	35	28.0	24	28.6	13	29.6	64	27.4
8a 栄養孔位最大径	r 1	36	3	34.3	48	31.6	24	33.8	17	33.1	60	30.5
9 中央横径	r 1	22	—	—	34	20.1	24	21.1	13	22.0	64	21.0
9a 栄養孔位横径	r 1	24	3	26.3	48	22.1	24	24.4	17	23.9	61	23.8
10 骨体中央周	r 1	85	—	—	34	76.0	24	78.8	13	79.5	61	78.0
10a 栄養孔位周	r 1	94	2	97.5	48	84.4	24	90.1	16	88.9	61	88.5
10b 骨体最小周	r 1	76	2	76.0	45	70.6	24	72.1	15	73.1	61	71.0
9/8 中央横断示数	r 1	68.8	—	—	34	72.4	24	74.0	13	74.5	64	77.1
9a/8a 脛示数	r 1	66.7	3	76.6	48	70.3	24	72.0	17	72.3	60	78.3
10b/1 長厚示数	r 1	22.3	—	—	26	22.3	20	21.7	11	22.3	61	22.2

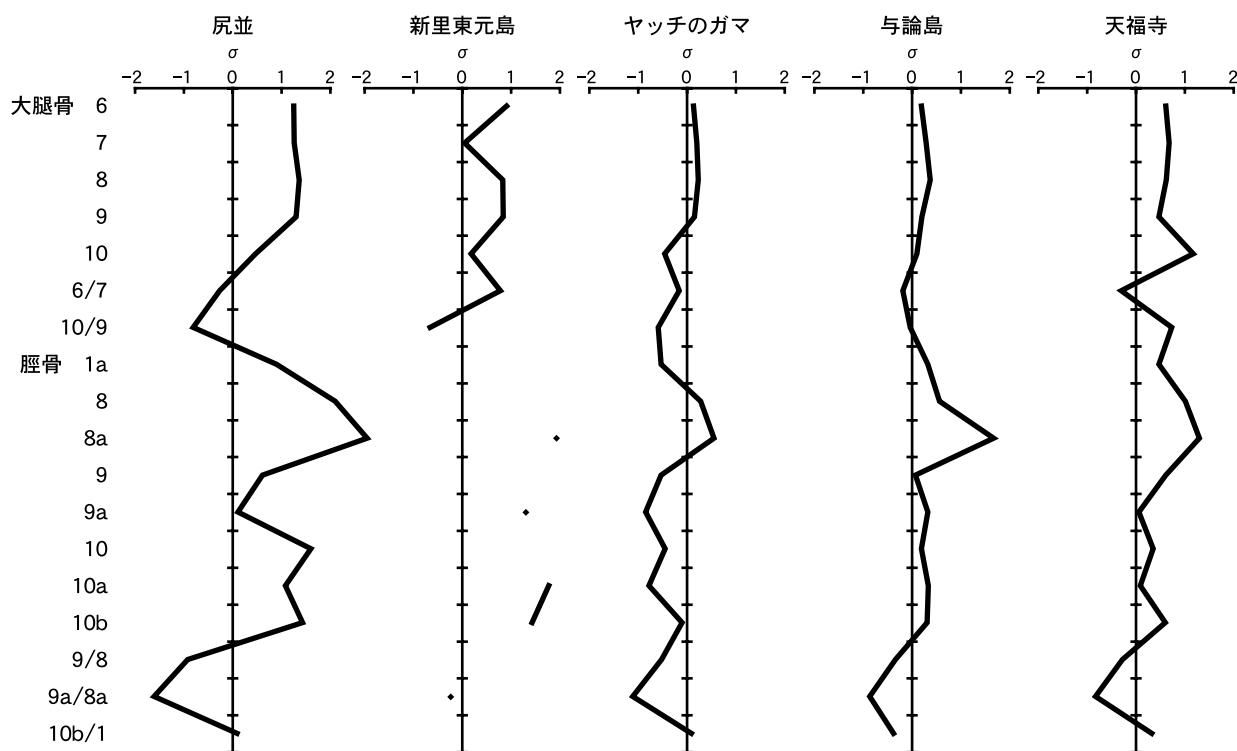
大腿骨は骨端部が破損しており、骨幹部のみ計測できた。中央矢状径は29mmと新里東元島（28.3）同様に大きな値をとるが、中央横径は28mmで新里東元島（25.3）と異なり、全体的にみてもかなり大きな値となった。中央横断示数は103.6と新里東元島（111.8）を除く他の集団と大きな差は見られなかった。骨体上横径（32）と矢状径（25）も大きい結果となり、新里東元島と近似した傾向が見られた。骨体上断面示数は78.1で新里東元島（79.0）やヤッチのガマ（79.4）と近い示数值となった。

脛骨は最大長が344mmと比較集団内でもっとも大きい。中央矢状径も32mmともっとも大きく、対して中央横径は22mmと他の集団と近い値をとる。栄養孔位の最大径と横径も同様に大きい。中央横断示数は、他の集団が70以上の広脛であるのに対し、尻並は68.8と中脛に分類された。参考までに、筆者らが報告したヤッチのガマでは中脛が26.3% (9/34) の割合でみられた。長厚示数は22.3と大きな差は認められなかった。また、Pearson (1899) の式をもとに、右脛骨を使って推定身長を算出すると159.7cmという結果になった。他の集団の平均値を利用した推定身長との比較では（第66図）、尻並の成年男性はどの集団よりも高く、かなりの高身長だったことが伺える。



第66図 推定身長の比較

西南日本人を基準とした偏差折線（第67図）では、他の比較集団は+1の範囲内で折線が振れているのに対し、尻並はほとんどが左右に大きく振れていて、全体的にサイズが大きいのがわかる。特に栄養孔位最大径は+2を超えて大きく振れている。



第67図 西南日本人を基準とした偏差折線（下肢骨）

#### 【外耳道骨腫】

土坑墓1から出土した成年男性人骨の左右側頭骨の外耳道に、外耳道骨腫が認められた。外耳動骨腫は、海水などの冷水が外耳道に入り鼓室板を刺激して骨腫を形成する「冷水刺激仮説」が現在有力視されている（百々 1972, 片山 1990, 1999, Katayama 1998）。また、水温の低い中緯度地域に多く見られ、暖かな低緯度地域ではほとん

どみられない」とされている（Kennedy 1986）。土肥の報告（土肥、他 2000）では、沖縄の現代人には全く認められなかつたが、沖縄先史時代人には男女とも10%を越す頻度で認められている。宮古島は北緯24度という低緯度地域に位置し、また尻並遺跡は17世紀頃の遺跡ということをふまると、興味深い事例である。今回は成人男性1だけの観察なので、今後さらに標本数が増えるのを期待したい。

### 【まとめ】

尻並遺跡から埋葬された状態で成年男性1体、幼児1体が出土した。また、歯のみではあるが、性別不明成人1体と小児1体が確認された。今回、土坑墓1より出土した成年男性1体を除いた人骨は欠損部が多く、観察が困難であった。唯一観察を行えた成年男性は、全体的に骨のサイズが大きかった。脛骨は中脛で、最大長による推定身長は159.7cmと近世人骨としてはかなり高身長で、筋肉が発達した体格の頑丈な男性だったと思われる。病変に関しては、永久歯にエナメル質減形成や、下肢骨幹部に弱い骨膜炎が観察された他には認められなかった。

### 引用文献

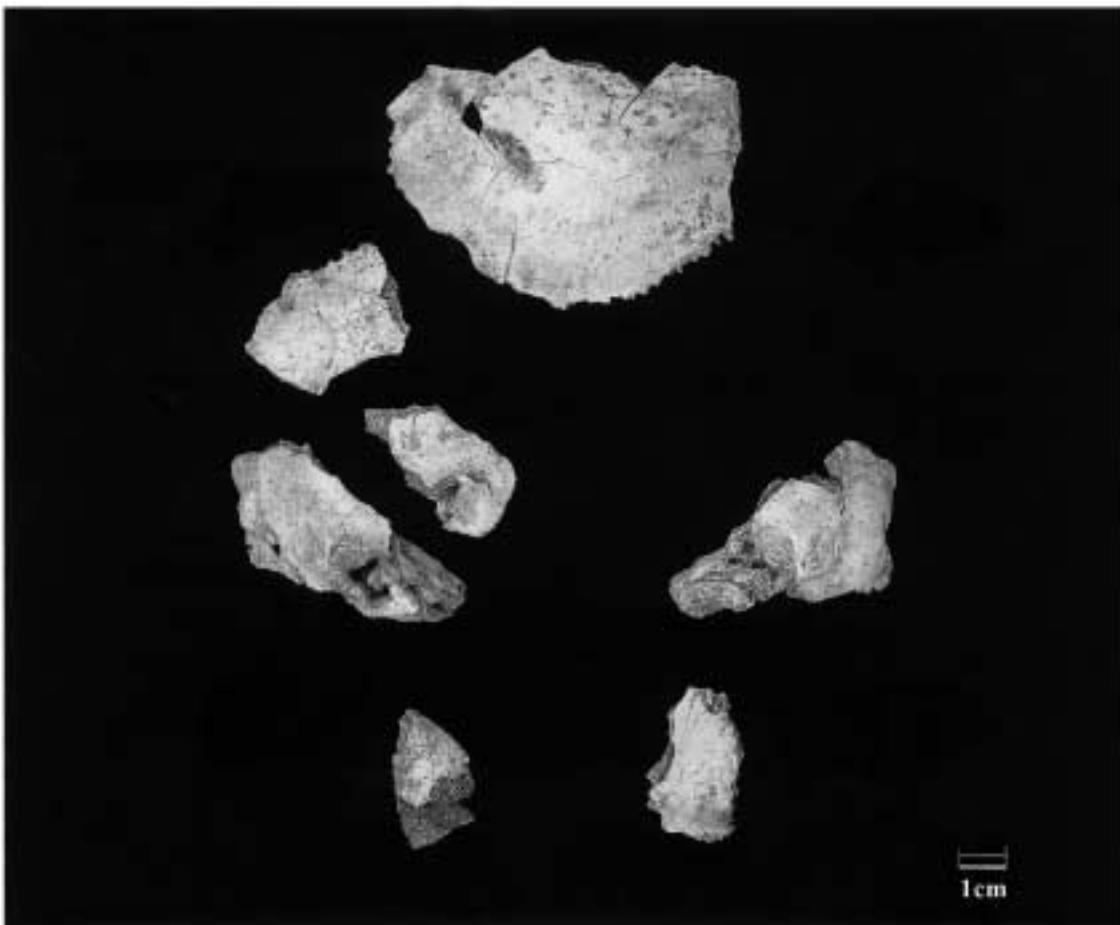
- 阿部英世. 現代九州人大腿骨の人類学的研究. 人類学研究 1955;2.
- 百々幸雄. 北海道の古人骨にみられる外耳道骨腫. 人類誌 1972;80(1):11-22.
- 土肥直美, 泉水奏, 瑞慶覧朝盛, 譜久嶺忠彦. 骨からみた沖縄先史時代人の生活, 高宮廣衛先生古希記念論集. 浦添: 尚生堂, 2000:431-48.
- 譜久嶺忠彦, 土肥直美, 石田肇, 瑞慶覧朝盛, 泉水奏, 佐宗亜衣子, 比嘉貴子. ヤッチのガマ・カンジン原古墓群出土の人骨. ヤッチのガマ・カンジン原古墓群, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書. 西原: 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2001;6:345-85.
- 譜久嶺忠彦. 新里東元島遺跡近世古墓出土人骨の構成, 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書. 西原: 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2002;7:161-78.
- 平田和生. 鹿児島県大島郡与論島島民の下肢骨の研究. 人類学研究 1958;5(1-4):263-315.
- 平田直行. 頭蓋骨の性差に関する研究. 人類学研究 1957;4(1-4):142-79.
- 広沢正彦. 奄美郡島与論島住民上肢骨の人類学的研究. 人類学研究 1959;6(2):71-107.
- 池田次郎. 沖縄・宮古島現代人頭骨の計測. 人類学雑誌 1974;82(2):150-60.
- 鉢巣勝登. 現代九州日本人下肢骨の人類学的研究. 人類学研究 1955;2(1):1-41.
- KNUSSMANN R. MALTIN/KNUSSMANN - Anthropologie, Handbuch der Vergleichenden Biologie des Menschen Bd. I. Stuttgart: Gustav Fischer Verlag, 1988.
- 菊池順正. 奄美郡島与論島住民頭骨の人類学的研究. 人類学研究 1959;6(2):196-228.
- 九州大学解剖学第2講座, 編. 日本民族・文化の生成2, 九州大学解剖学第2講座所蔵古人骨資料集成. 福岡: 六興出版, 1988.
- 溝口静男. 現代九州人前腕骨の人類学的研究. 人類学研究 1957;4(1-4):237-72.
- 中橋孝博. 福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨. 人類誌 1987;95(1):89-106.
- 大山秀高. 鹿児島県大島郡与論島島民頭骨の研究. 人類学研究 1956;3(3-4):92-130.
- Pearson K. On the reconstruction of the stature of prehistoric races. Phil. Trans. Roy. Soc. London, Ser. A. 192, 1899.
- 専頭時義. 現代九州人上腕骨の人類学的研究. 人類学研究. 1957;4(1-4):273-301.
- 山本美代子. 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成. J Anthropol Soc Nippon 1988;96(4):417-33.
- 和田仁. 現代日本人の脊柱における椎体の加齢的変化に関する研究. 札幌医誌 1975;44(2):139-52.



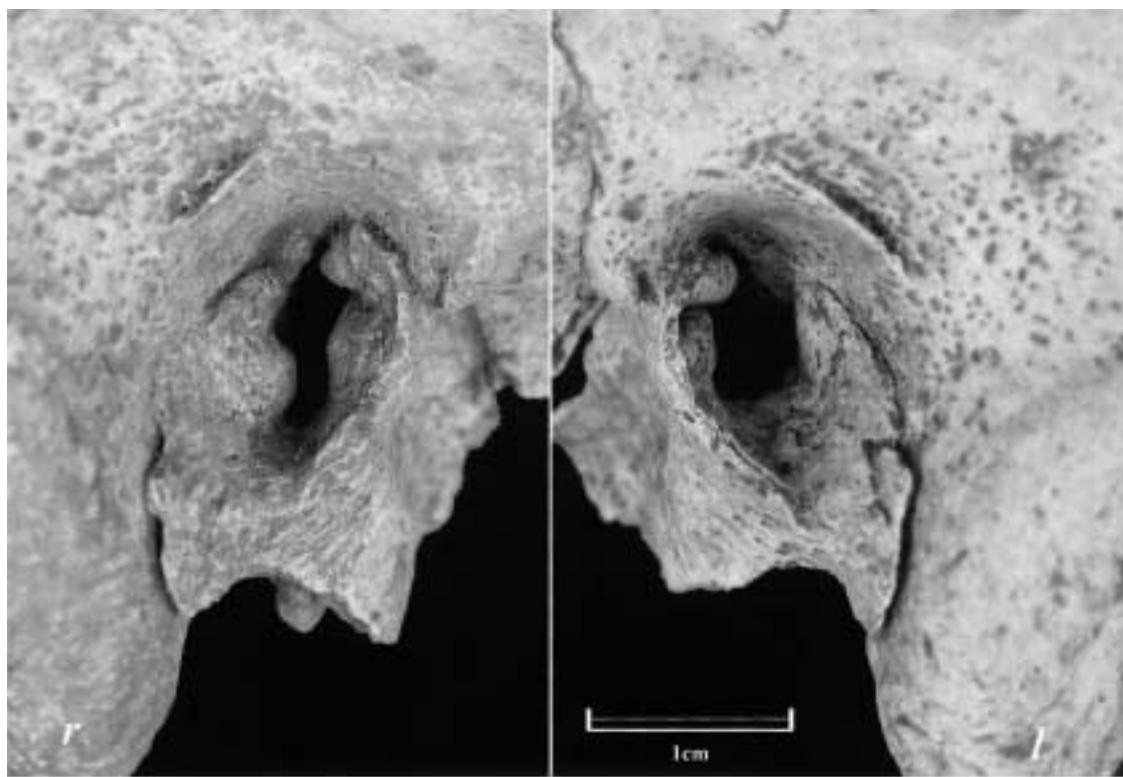
図版58 土坑墓1 成年男性（頭蓋）



図版59 土坑墓1 成年男性（体肢）



図版60 土坑墓2 幼児



図版61 外耳道骨腫

## 第VI章 結語

今回、那覇地方裁判所平良支部の建て替えに伴って行った、尻並遺跡の発掘調査成果の総括を行う。

尻並遺跡は、平良港から南東に約500m、標高約20mの台地上にある。周辺には住居遺跡をはじめ中世以降の遺跡がいくつもある。

尻並遺跡の上層からは、明治32年に建てられた初代那覇地方裁判所平良支部の建物跡、下層からは16～19世紀頃の集落跡が見つかった。

集落跡からは、柱穴と考えられる穴がいくつか見つかっているが、建物の規模・範囲を示すように規則的に並んでいる状況は確認できなかった。

SK-2・4を中心とした遺構や包含層からは、大量の獸骨（主にウシ・ブタ）や貝殻・陶磁器類が出土していることから、当時の人々が生活する中で出たゴミ等が長年堆積した結果と考えられる。

また炉跡と考えられる穴が見つかっており、穴の壁面は熱を受け赤く焼け、底には炭がたまっていた。炉には色々な用途があると考えられるが、今回は鉄滓（鉄を熔かしたときに発生するくず）やフイゴ（送風器）の羽口（フイゴから送られてきた風を炉内に導く送風管の先端部）が出土していることから、鍛冶炉として使われたと考えられる。また炭が付着した鉄鍋等の破片が出土していることから、鉄鍋の破片を炭といっしょに炉内に入れ、鉄鍋を熔かして新たな鉄素材を得ていたようである。

尻並遺跡のように鉄鍋が出土した遺跡は県内に20遺跡以上ある。出土した鉄鍋は全て小破片である。これらの破片資料から全形を推定すると、つる鍋のように、吊り金具を通す穴が開けられた耳を2か所に持った形が考えられる。また底部外面には湯口の跡を持っている。このような鍋は、煮炊きや揚げ物に使われた。土鍋に比べ頑丈で熱効率が良い鉄鍋は、調理用具として貴重であったと考えられる。

頑丈な鉄鍋も使い込んでいくうちに、さび、ひび割れなどで最後には使えなくなってしまう。ただし鉄素材としての価値は失われないので、使えなくなった鉄鍋を高温で熔かし新たな鉄製品として利用したと考えられる。使わなくなった鉄鍋にただ熱を加えるだけでは、熔かすときに効率が悪いので、10cm内外の破片にばらして、木炭と一緒に炉内で加熱した。高温を維持し、炉内の鉄鍋を熔かすことは技術的に難しいことである。ほとんど熔けずに原形を保ち、木炭が付着したまま出土する鉄鍋の破片は、残念ながら炉内で熔けきれなかった破片である。しかしこのような破片があったからこそ、鉄鍋がリサイクルされたことを知ることができたのであり、我々にとってむしろ運がよかつたといえる。

鉄鍋を熔かした鍛冶炉については、円形で、壁面が赤く焼けた浅い穴が考えられるが、これはあくまで炉の一部であり、本来はこの穴を覆うような施設があったと考えられる。その施設の一部として候補に挙げられるのが、大小様々な焼土である。穴の上を、スサを混ぜた粘土で覆い、そこに羽口を取り付け、フイゴから送られてきた空気を取り込んだと考えられるが、このような鍛冶炉の施設が完全な形で出土した例は沖縄県内ではなく、推測の域をでない。

今回の調査で土坑墓が二基見つかっているが、埋葬時期を判断する資料が乏しい。土坑墓2からは土器・褐釉陶器・沖縄産陶器が少量出土しており、17世紀以降に造られた可能性がある。ただし土坑墓2は明確な堀り方は確認できず、人骨を含めた大半の部分が破壊されていたので問題も残る。土坑墓1からは染付の破片が1点出土したが、この1点のみで時期を判別することは困難である。結局のところ、集落跡と土坑墓の関係は不明といわざるを得ない。

参考までに、直線距離で北西に約100mの所にある住居遺跡で検出された3基の土坑墓を見る。これらの土坑墓は、平面形は長径1m程度の不正楕円形である。また埋葬頭位は北西で、屈葬されている。これらの特徴は尻並遺跡の土坑墓1と同様である。住居遺跡の土坑墓は、遺構の切り合いや出土遺物から15世紀頃に造られたとされている。現在のところ宮古島での土坑墓例は住居遺跡・尻並遺跡合わせて5例なので、類例の増加を待って検討する必要がある。

尻並遺跡に隣接する住居遺跡は在藩仮屋が置かれた所であり、遺跡名こそ違うが、同様な遺構・遺物が発見されているようである。住居遺跡からは住居跡が見つかっており、遺跡の時期も尻並遺跡よりやや古い。尻並遺跡は住居遺跡の集落が拡大していく上で形成された集落跡、もしくは住居遺跡の縁辺部にあたる集落跡といえるのではないか。



2代目裁判所（南西から）



2代目裁判所（南から）



調査区遠景（東から）



第2トレンチ（東から）



第1トレンチ（南から）



初代裁判所正面（南西から）



初代裁判所 玄関部分（南東から）



初代裁判所 柱跡（北東から）

図版1 裁判所、調査区遠景、遺構検出状況



初代裁判所 柱跡（北東から）



初代裁判所 柱跡（真上から）



調査区全体図（南西から）



調査区全景（南東から）



土坑墓 1人骨頭部（真上から）



土坑墓 1人骨取り上げ後状況（北東から）



土坑墓 1 の実測作業



土坑墓 2（真上から）

図版 2 遺構検出状況（1）



SK-1（東から）



SK-2（南西から）



SK-2 獣骨検出状況（西から）



SK-4・5（南西から）



SK-4 土層堆積状況（南西から）



SK-4（南西から）



SK-4・5 手前がSK-4（南東から）



SK-15・16 左がSK-16（南から）

図版3 遺構検出状況（2）



SK-17 完掘状況（南西から）



SP-11（南西から）



SP-14・18 左がSP-14（北から）



SP-16・17 左がSP-16（南東から）



SP-21（南東から）



SW-1（南西から）

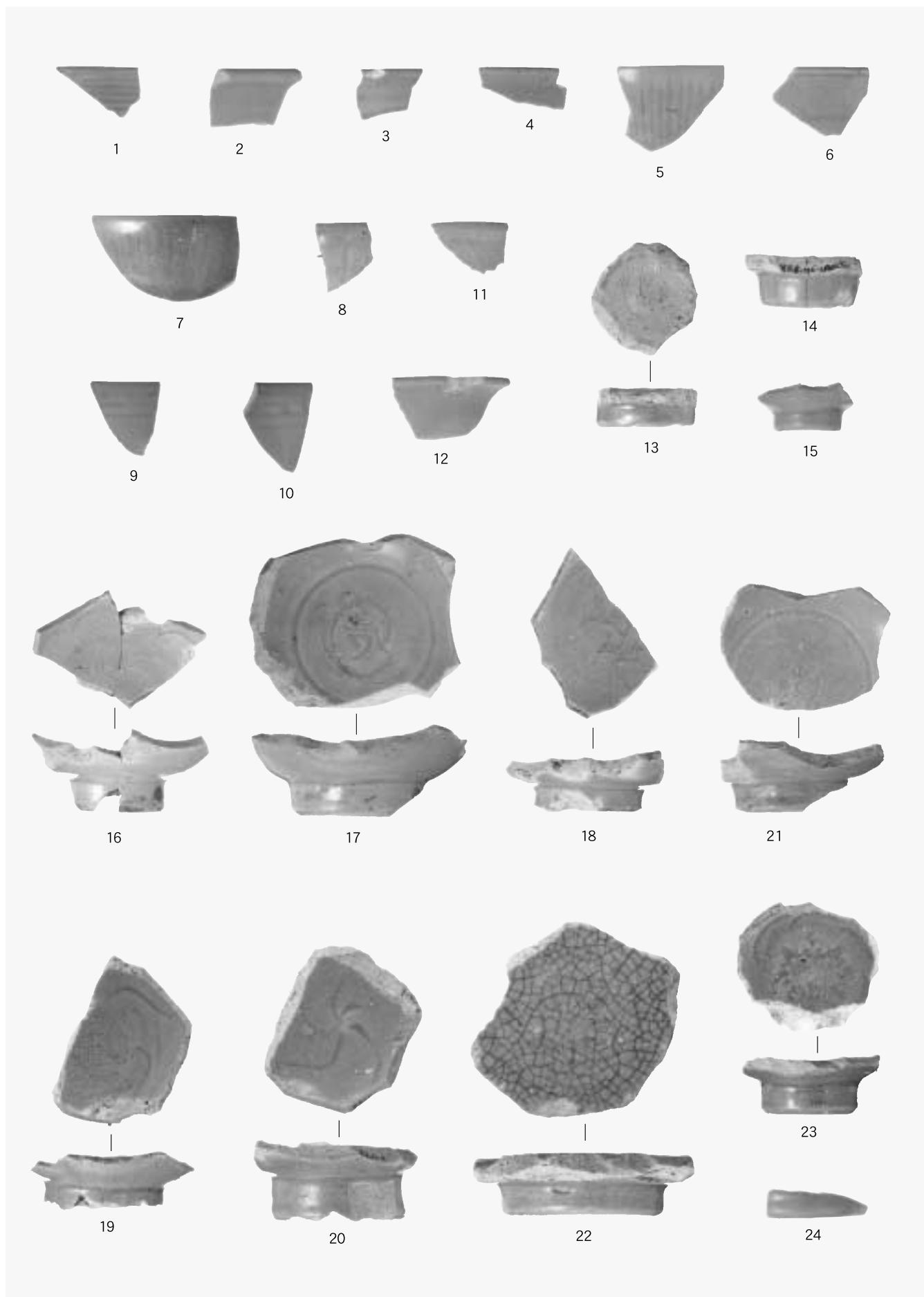


尻並御嶽遠景（北東から）

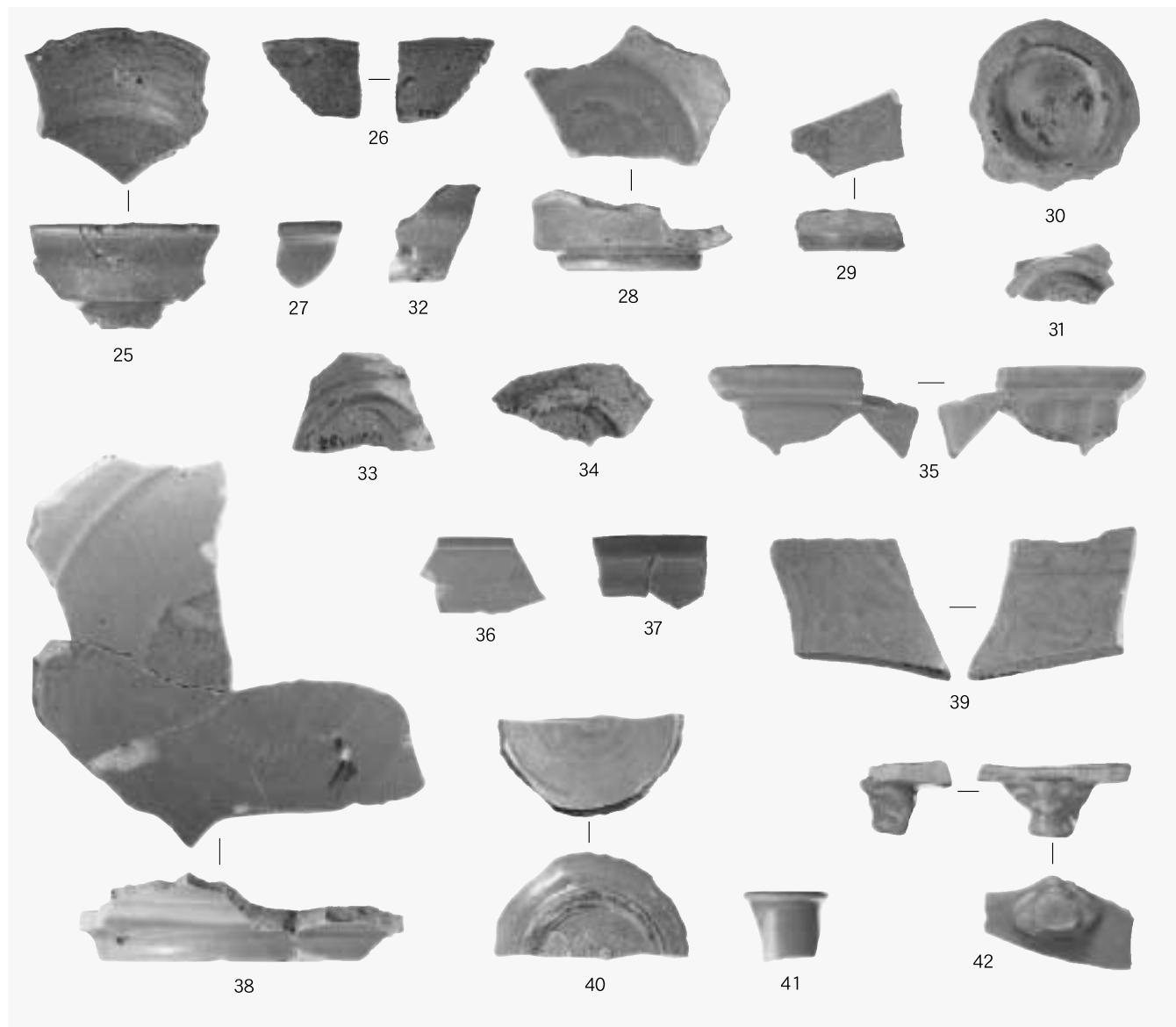
図版4 遺構検出状況（3）



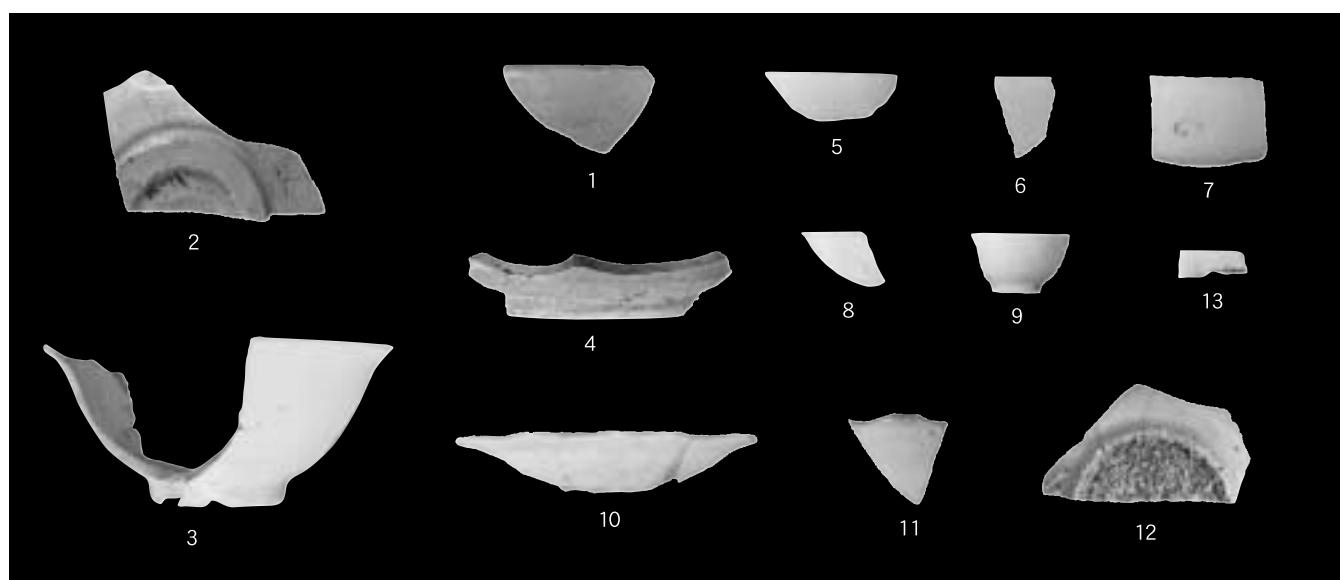
SW-1（北西から）



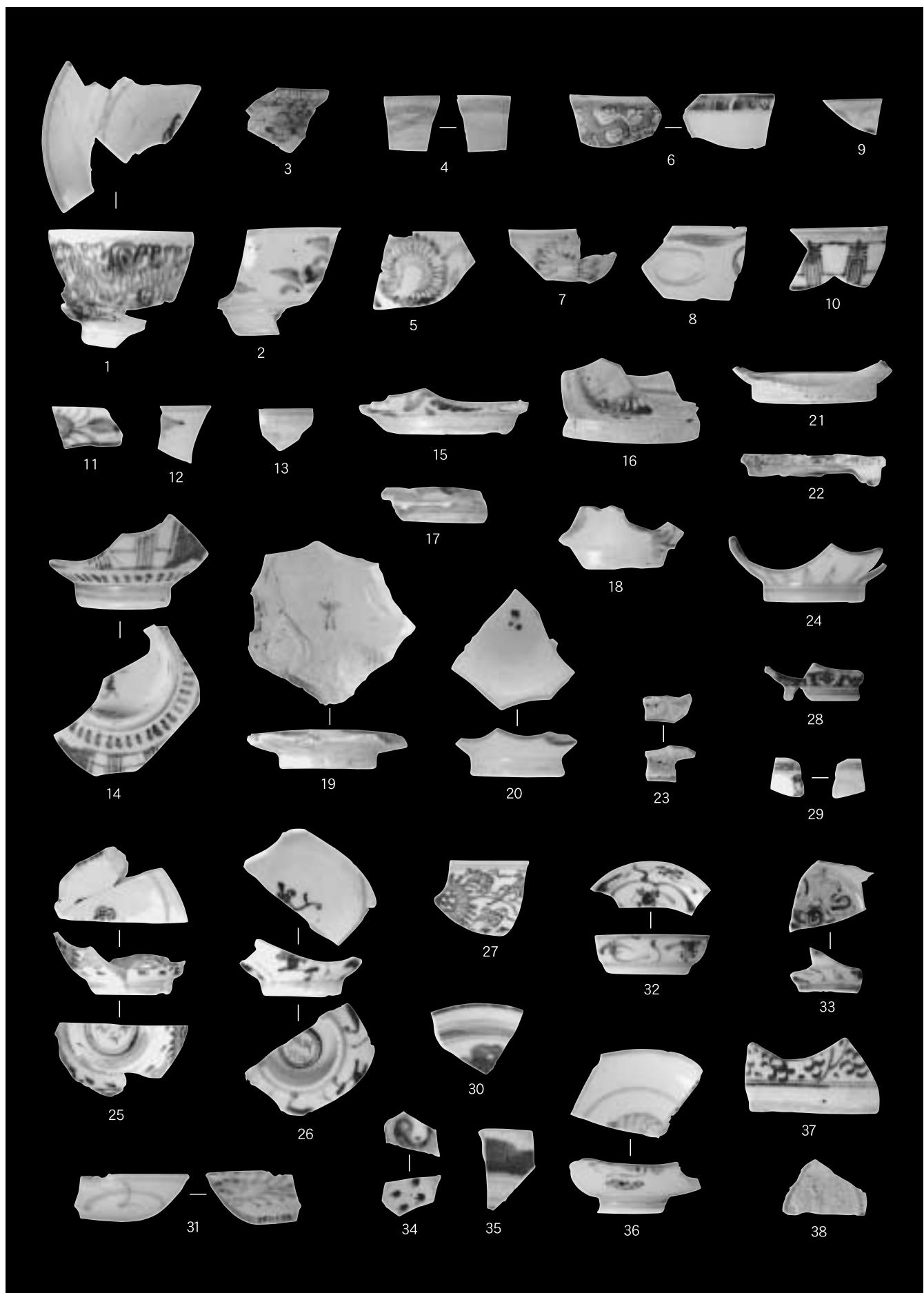
図版5 青磁(1)



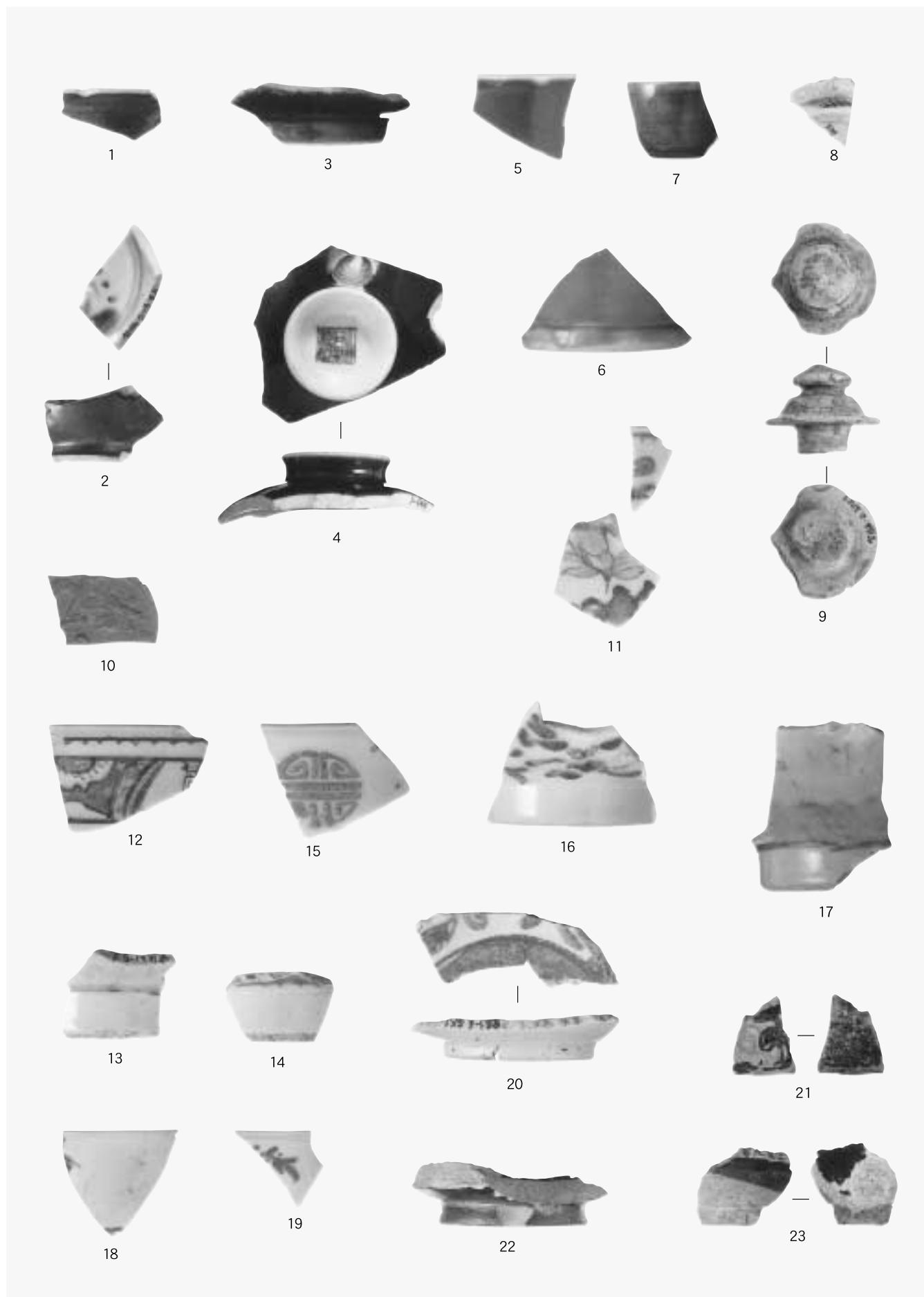
図版6 青磁(2)



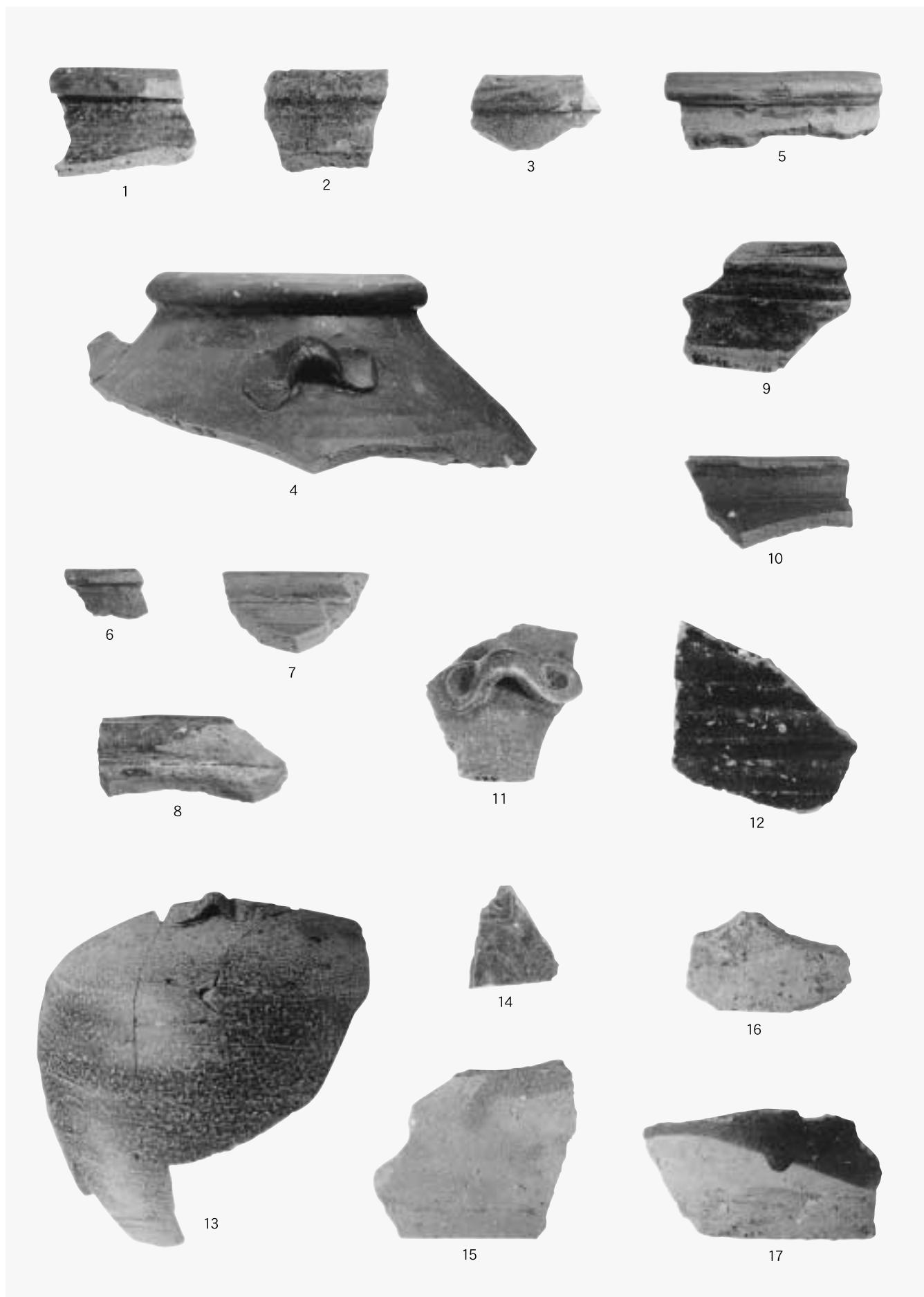
図版7 白磁



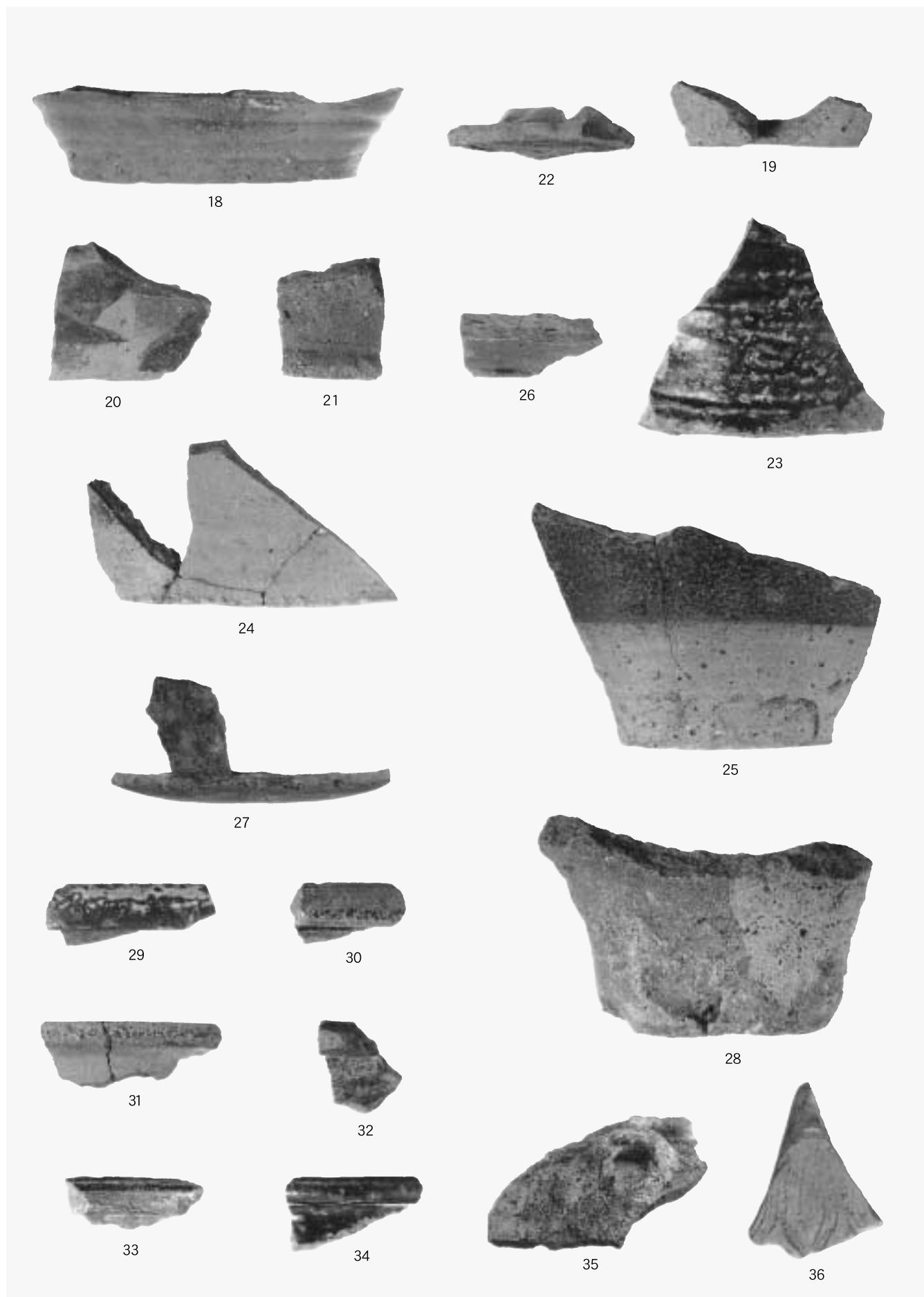
図版 8 染付



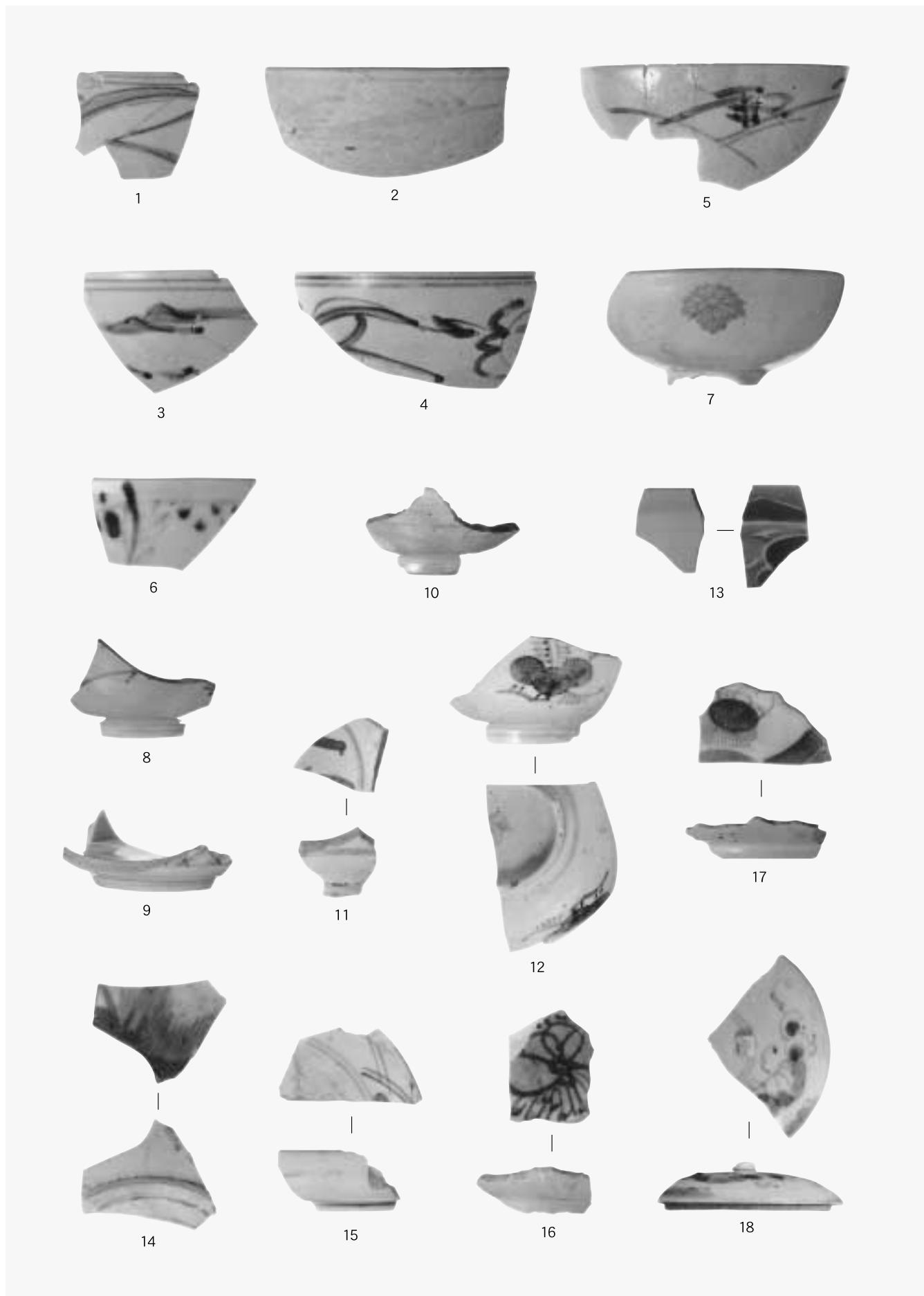
図版9 鉄釉染付・瑠璃釉・翡翠釉・三彩・宜興窯・色絵・黒釉陶器



図版10 褐釉陶器 1 (中国産)



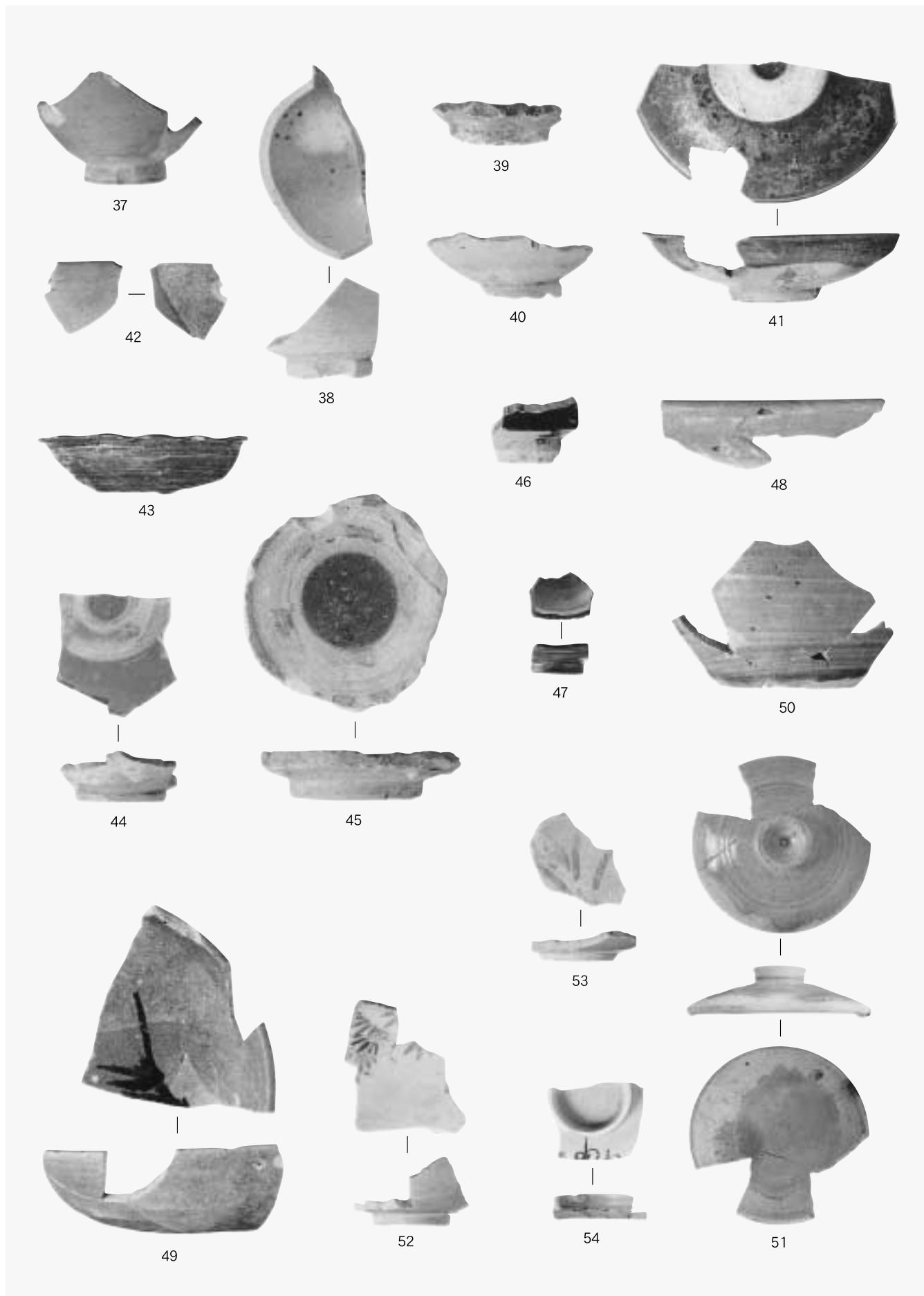
図版11 褐釉陶器2(中国・タイ・ミャンマー産)・タイ産炻器



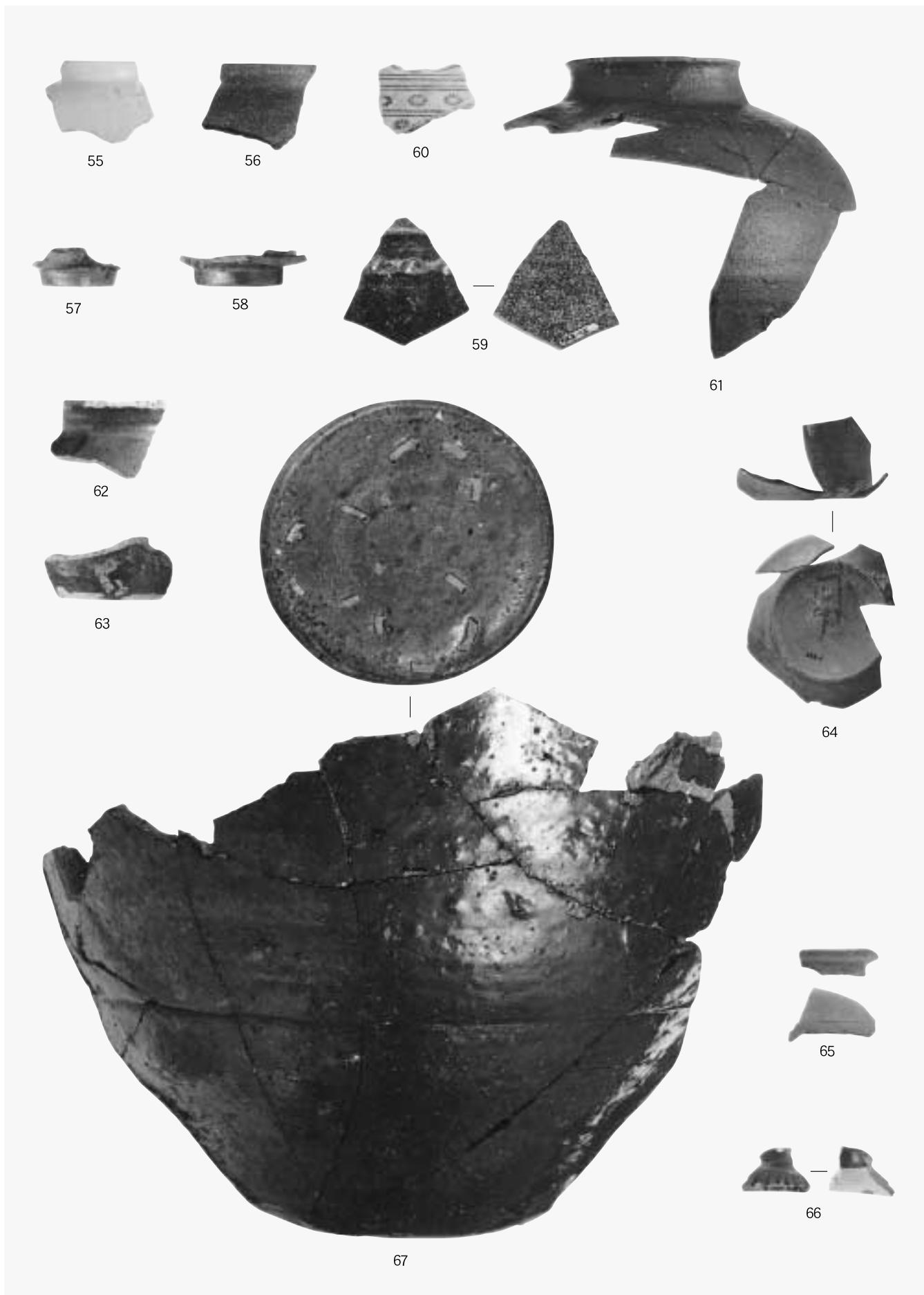
図版12 本土産陶磁器（1）



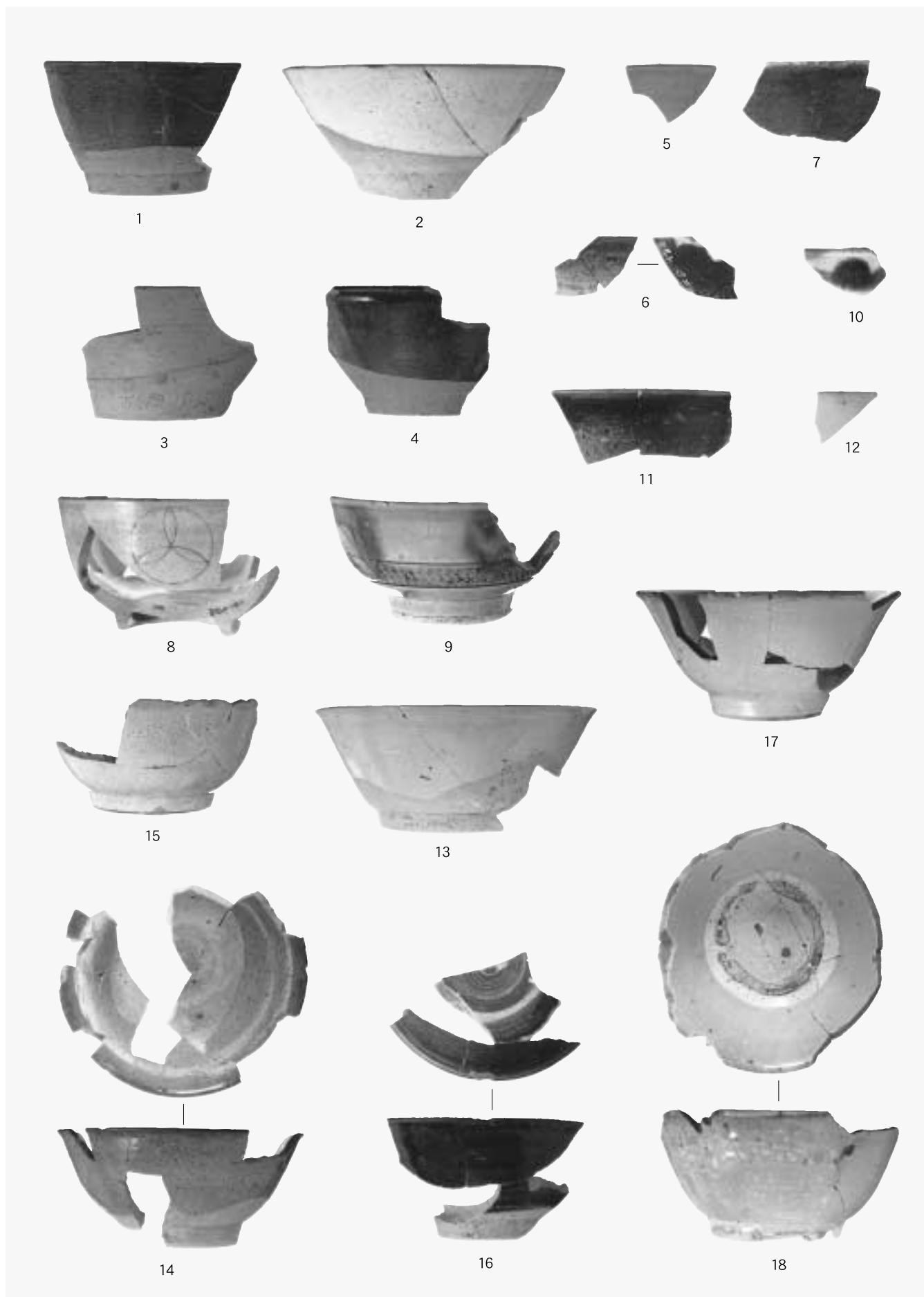
図版13 本土産陶磁器（2）



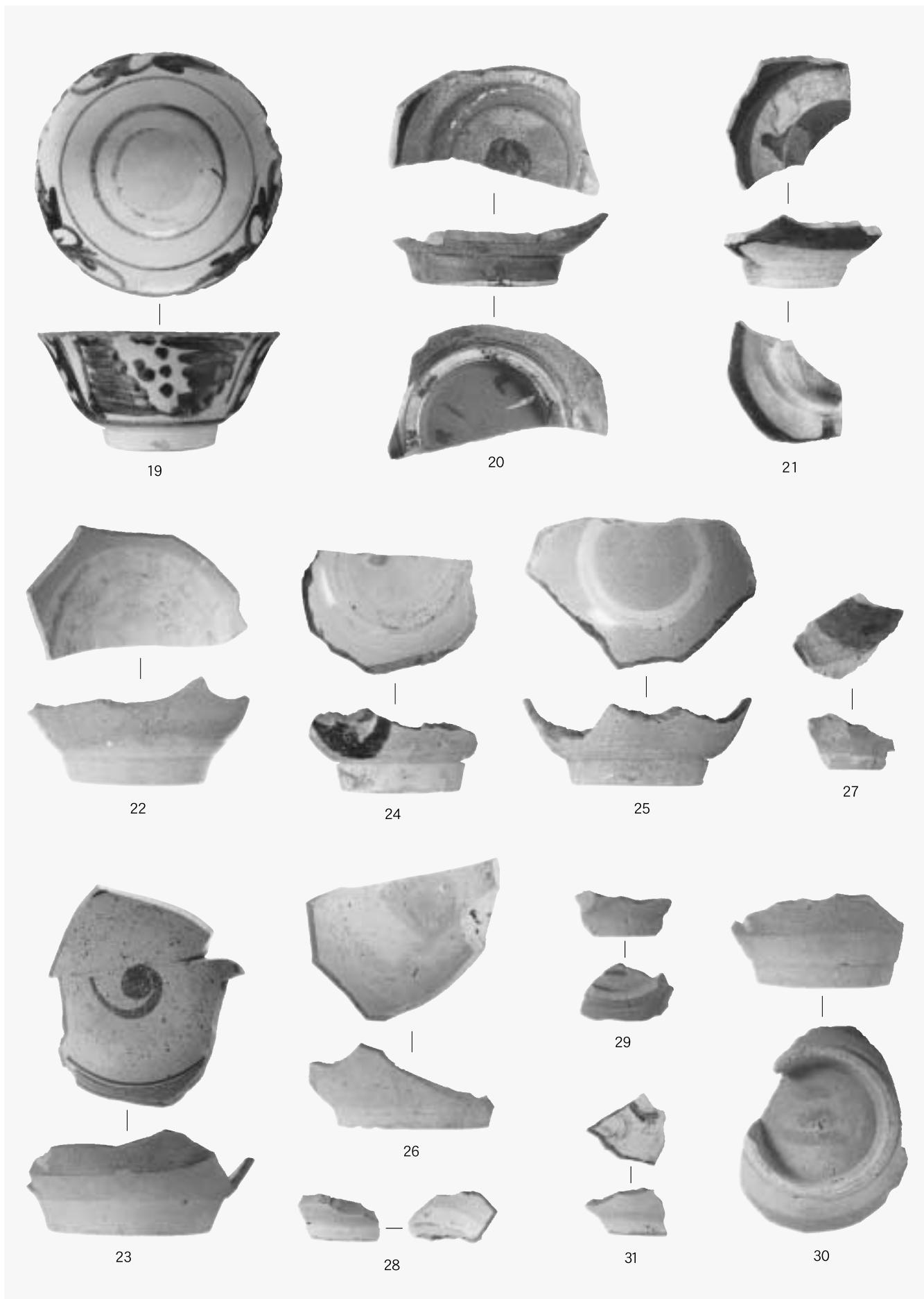
図版14 本土産陶磁器（3）



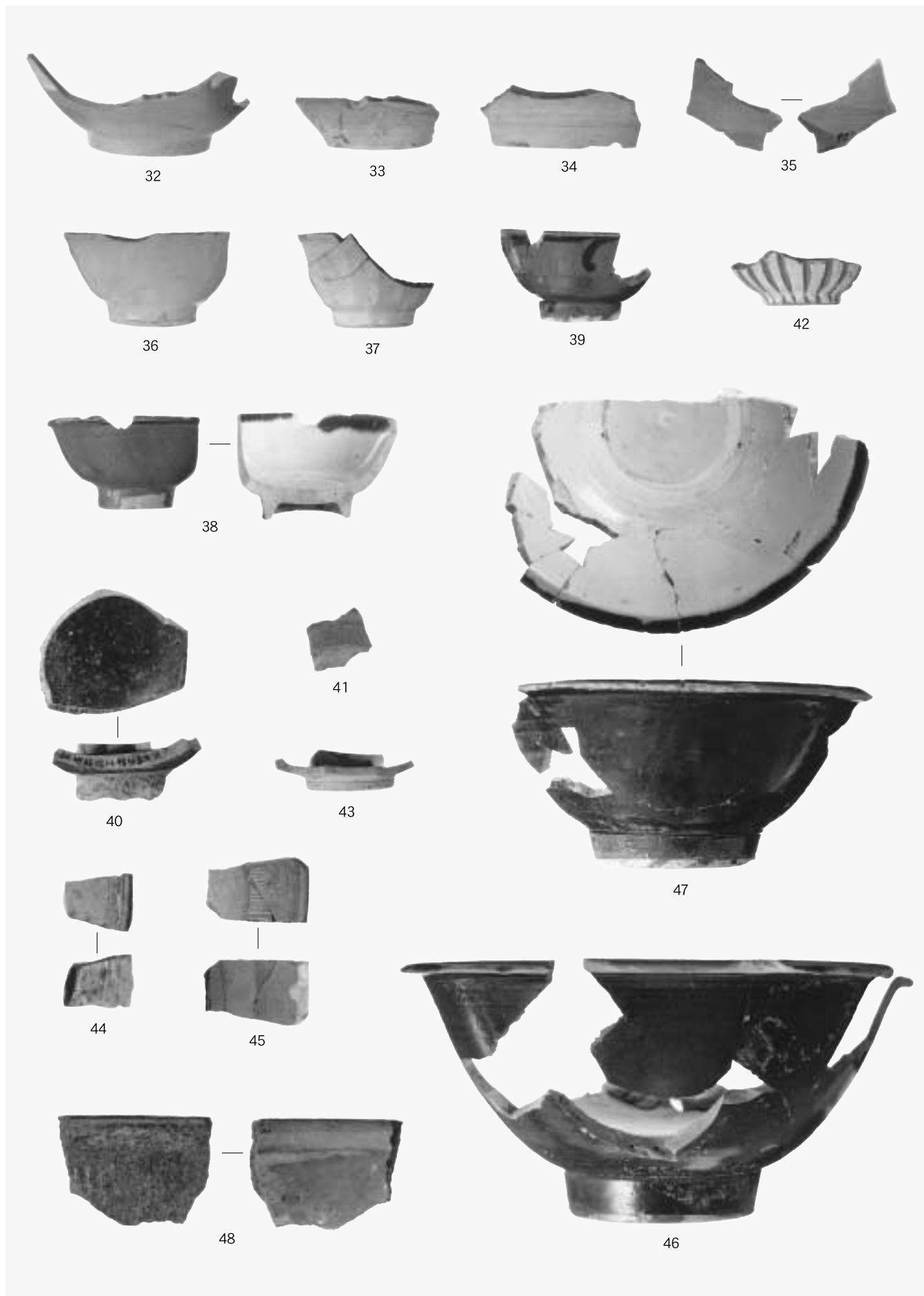
図版15 本土産陶磁器（4）



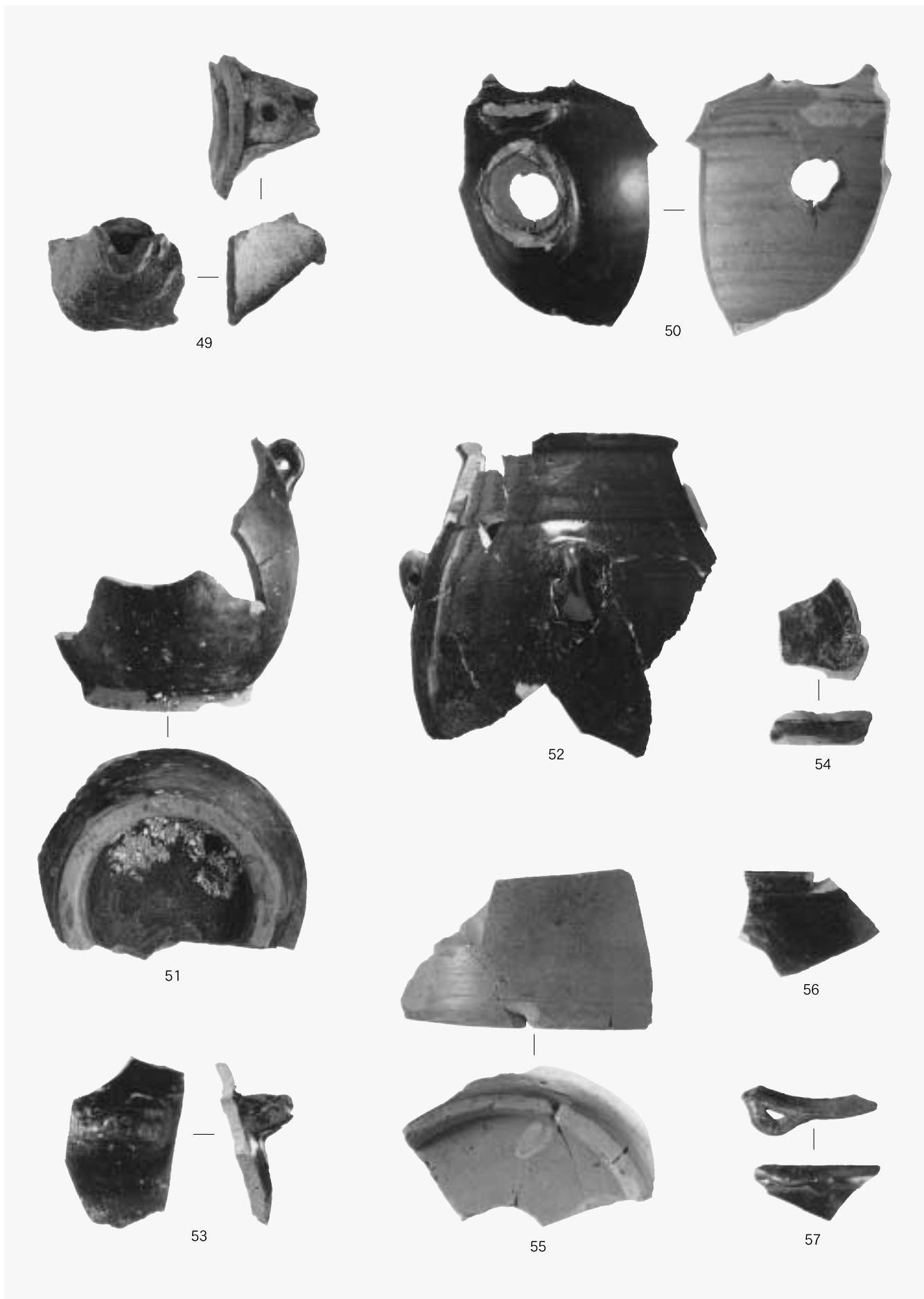
図版16 沖縄産施釉陶器（1）



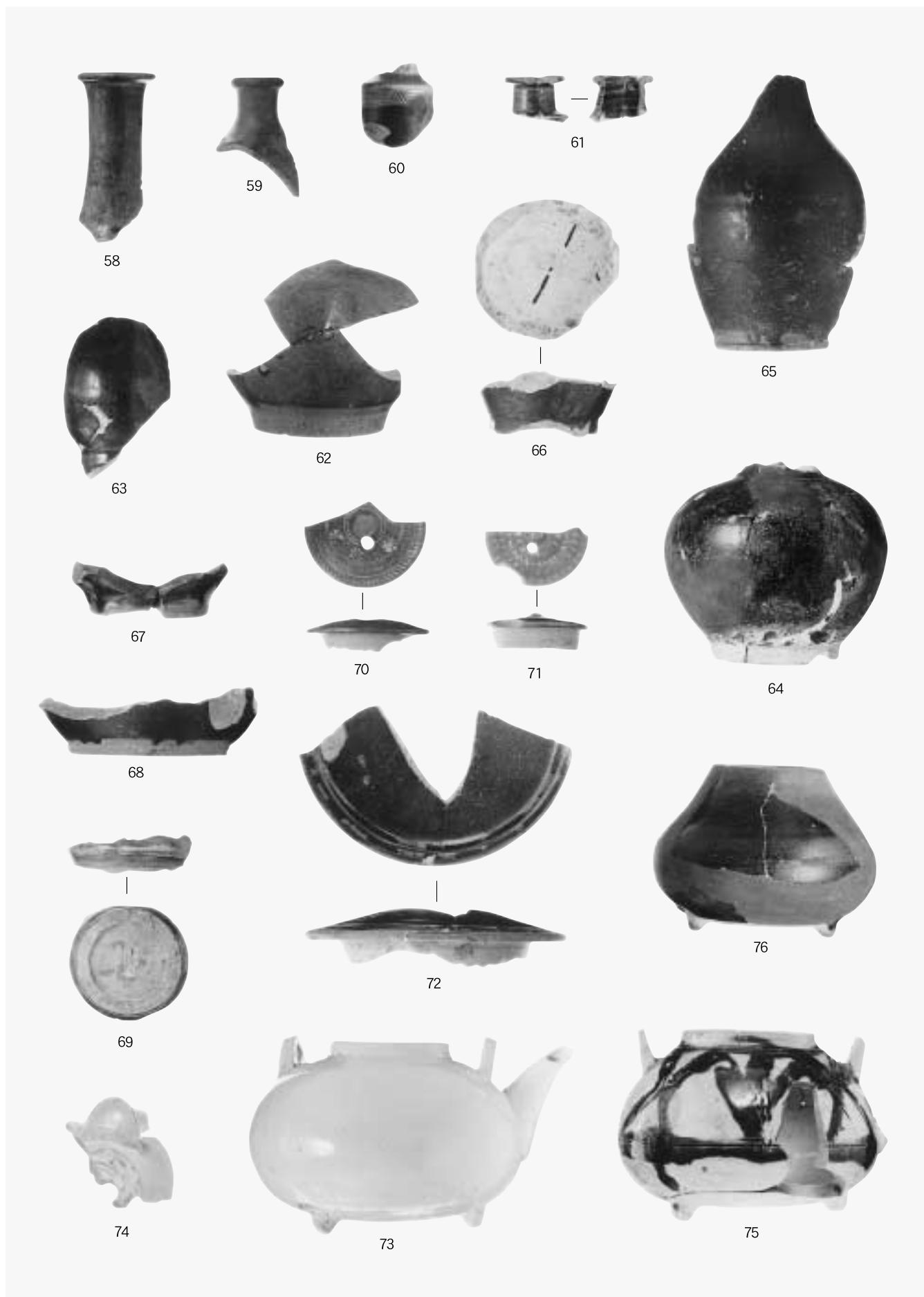
図版17 沖縄産施釉陶器（2）



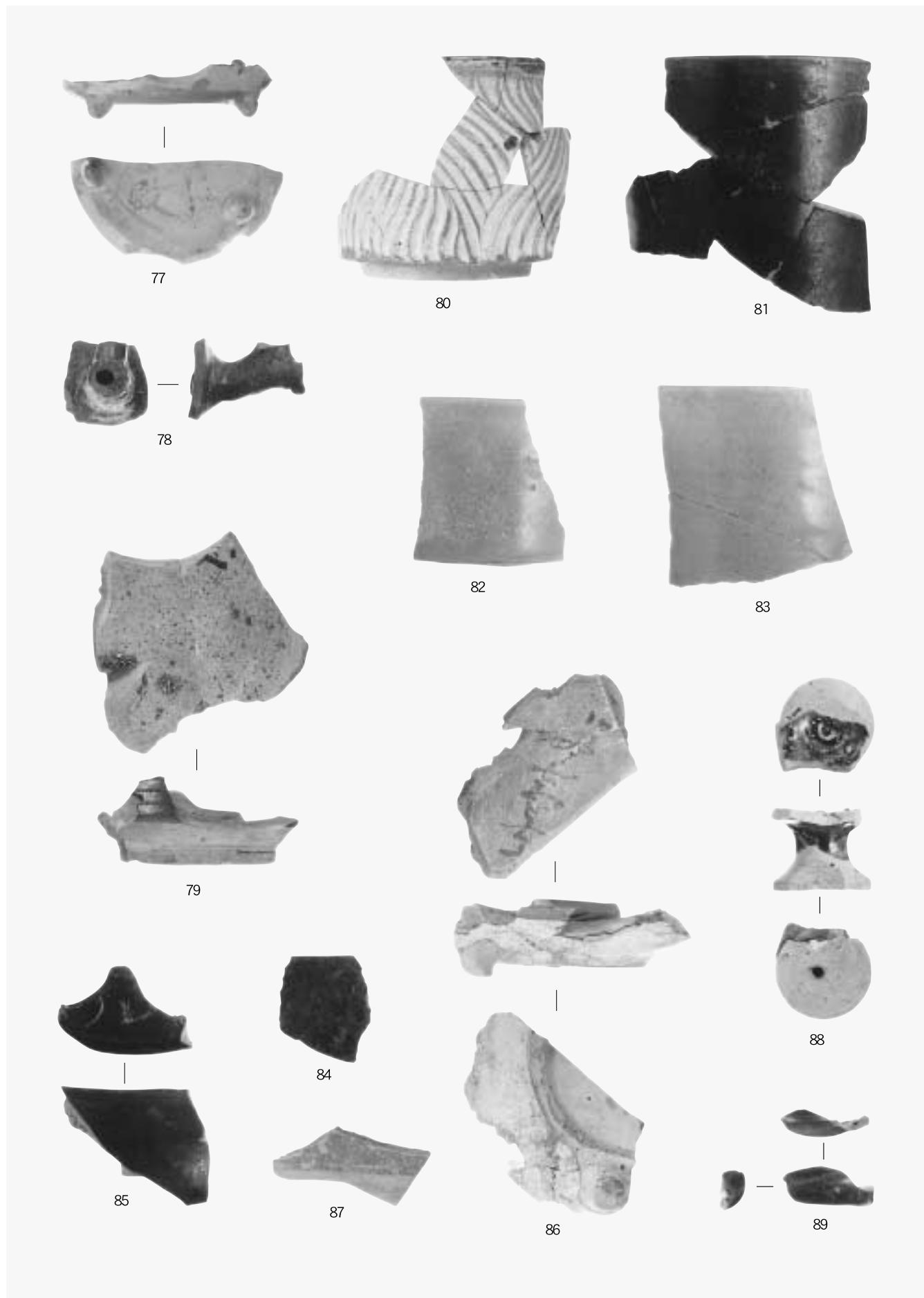
図版18 沖縄産施釉陶器（3）



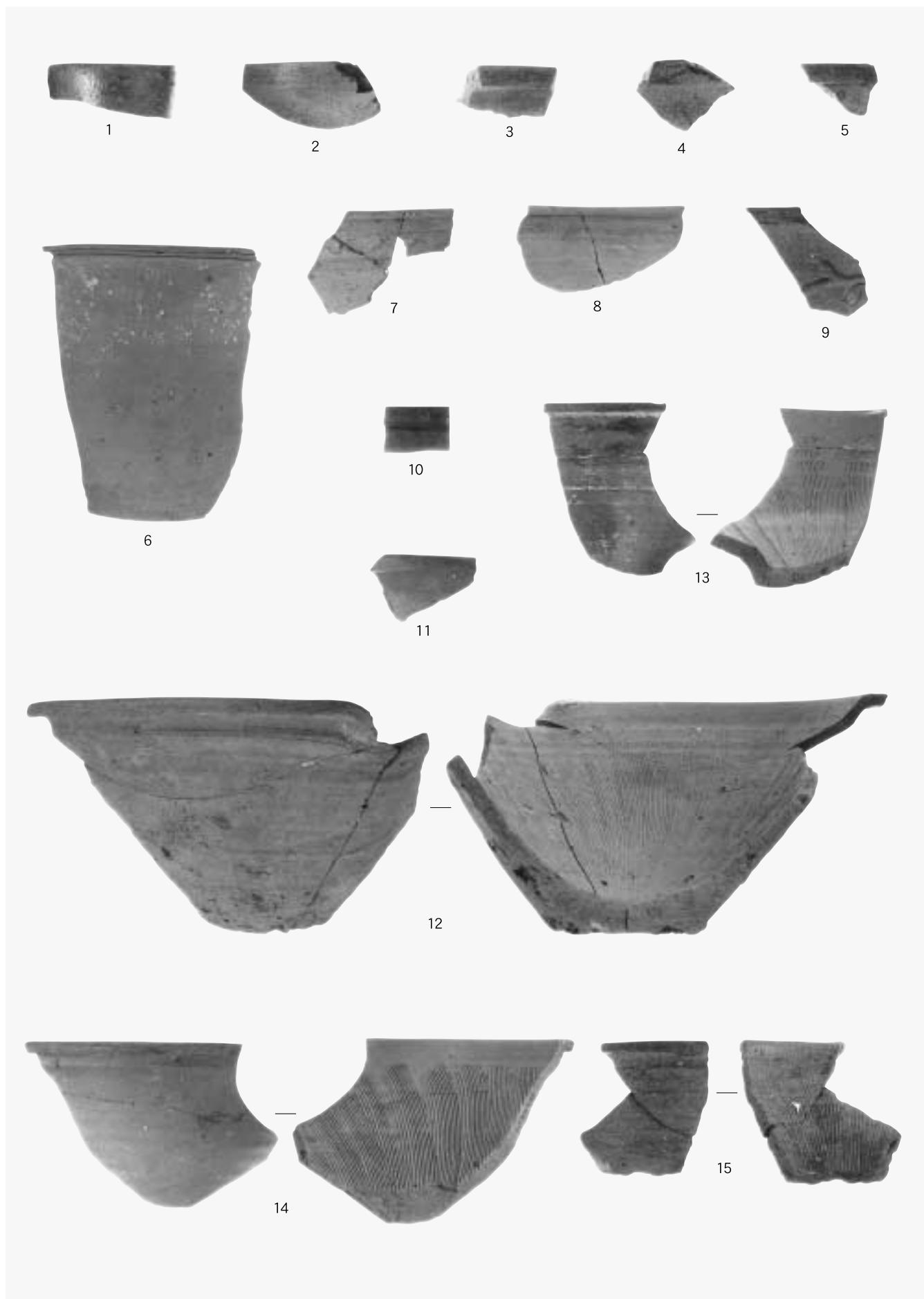
図版19 沖縄産施釉陶器（4）



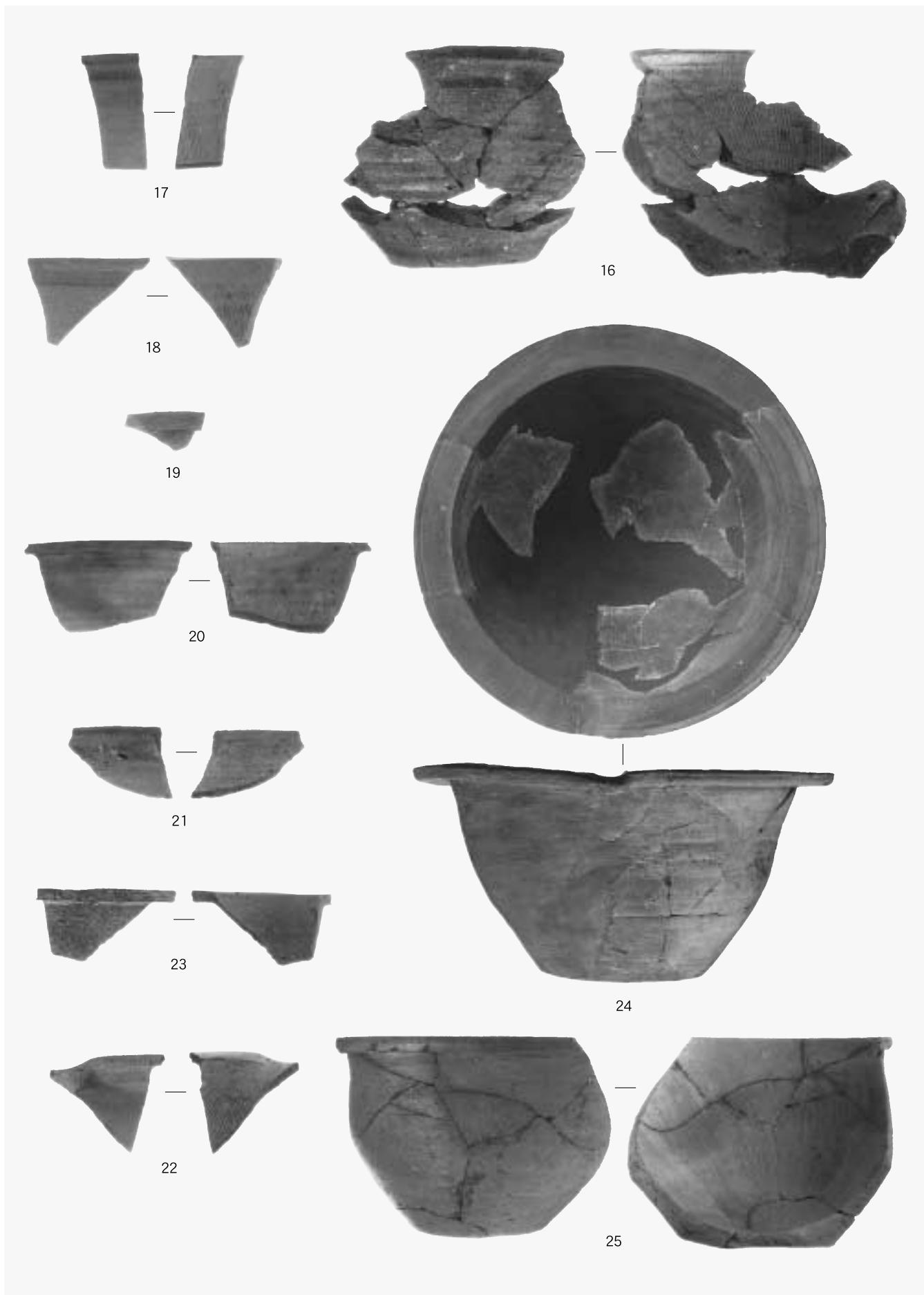
図版20 沖縄産施釉陶器（5）



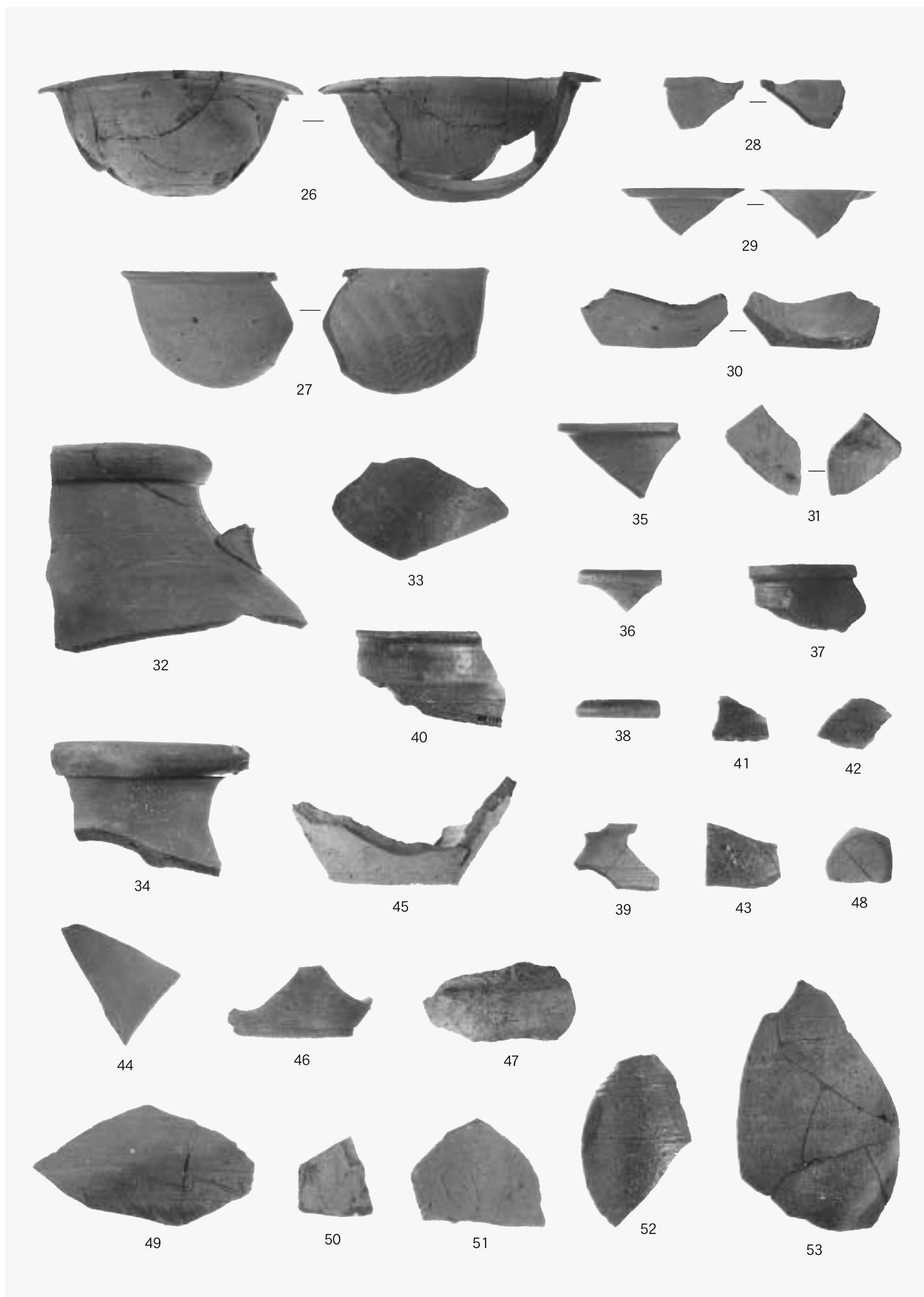
図版21 沖縄産施釉陶器（6）



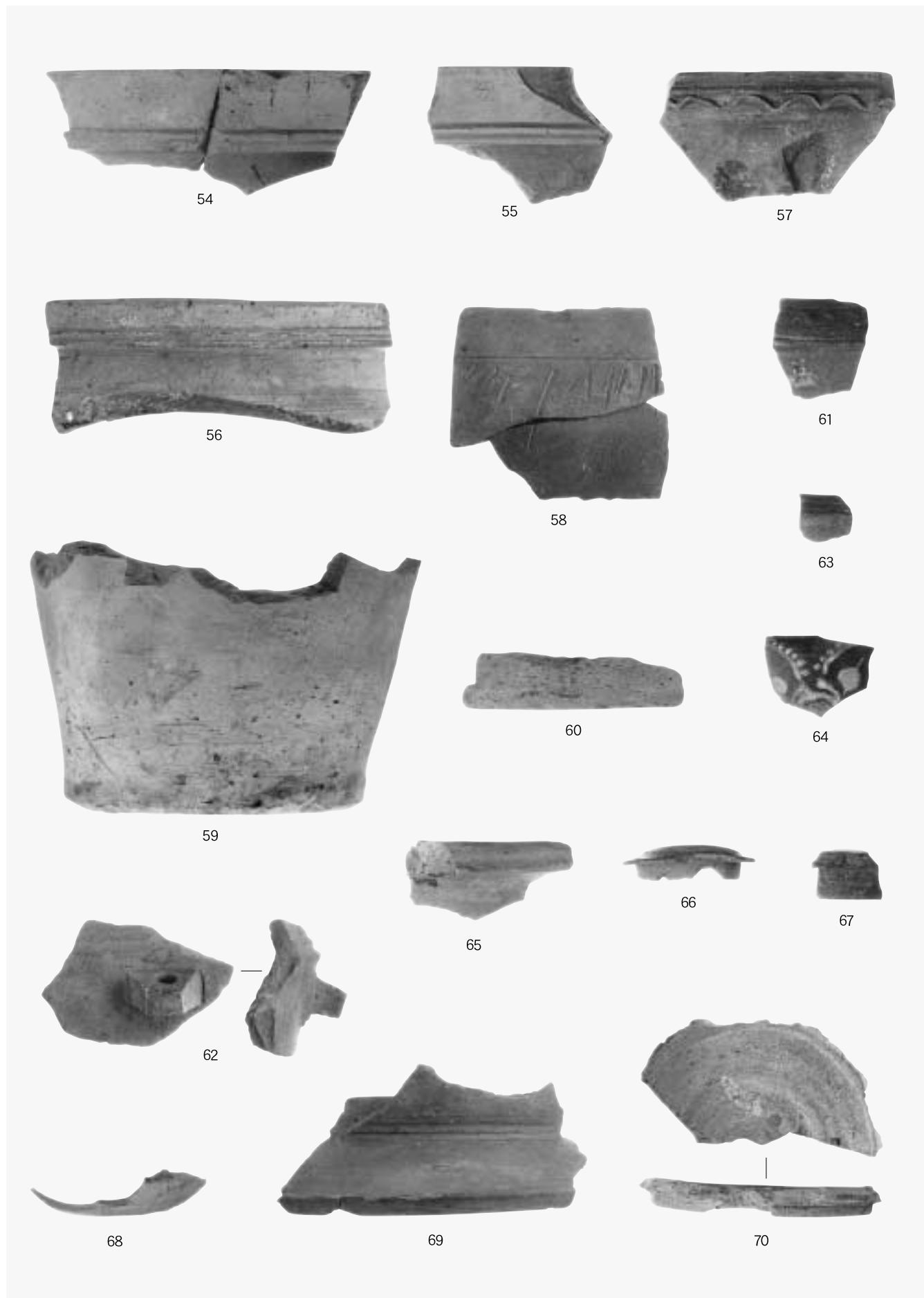
図版22 沖縄産無釉陶器（1）



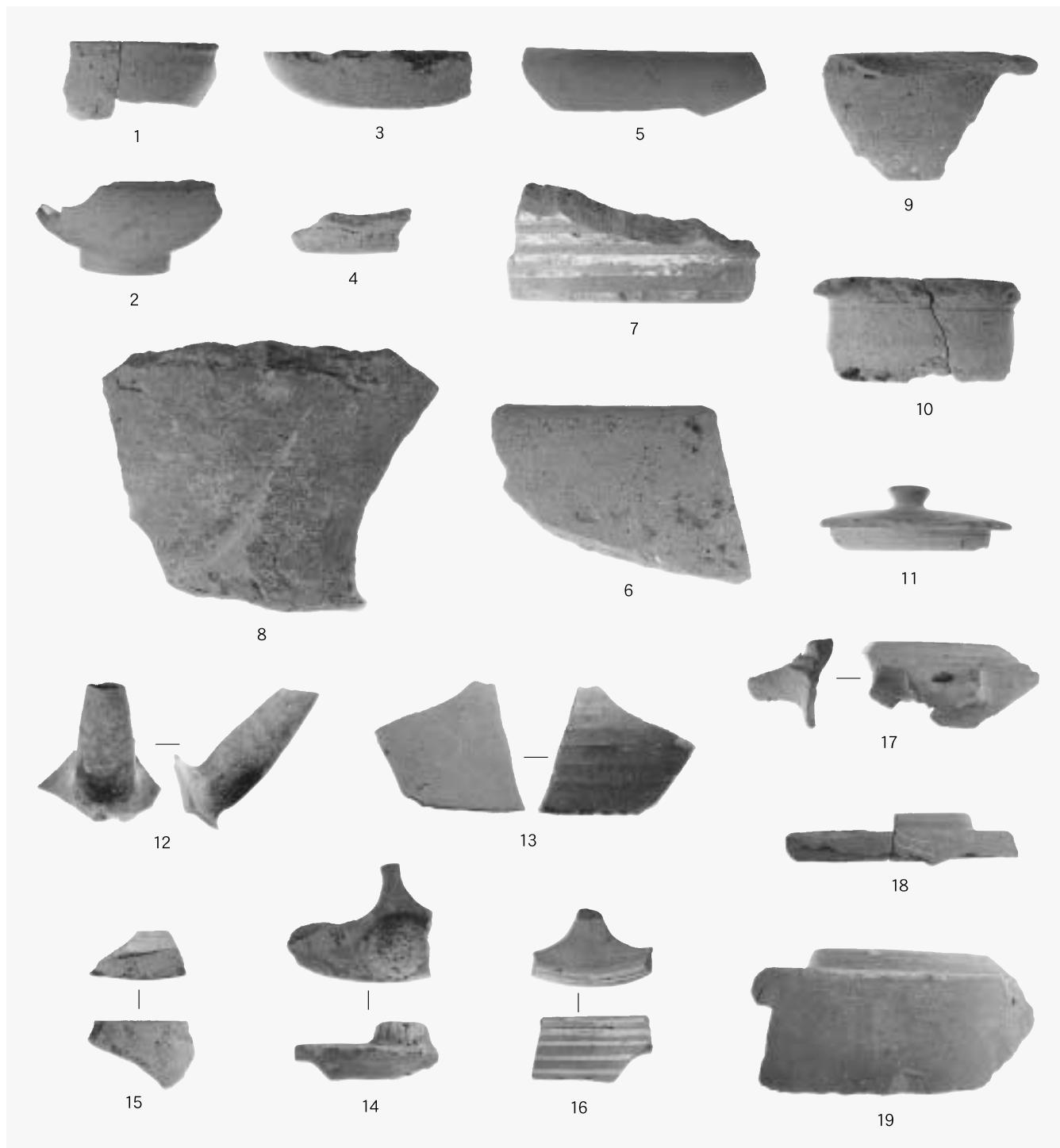
図版23 沖縄産無釉陶器（2）



図版24 沖縄産無釉陶器（3）



図版25 沖縄産無釉陶器（4）



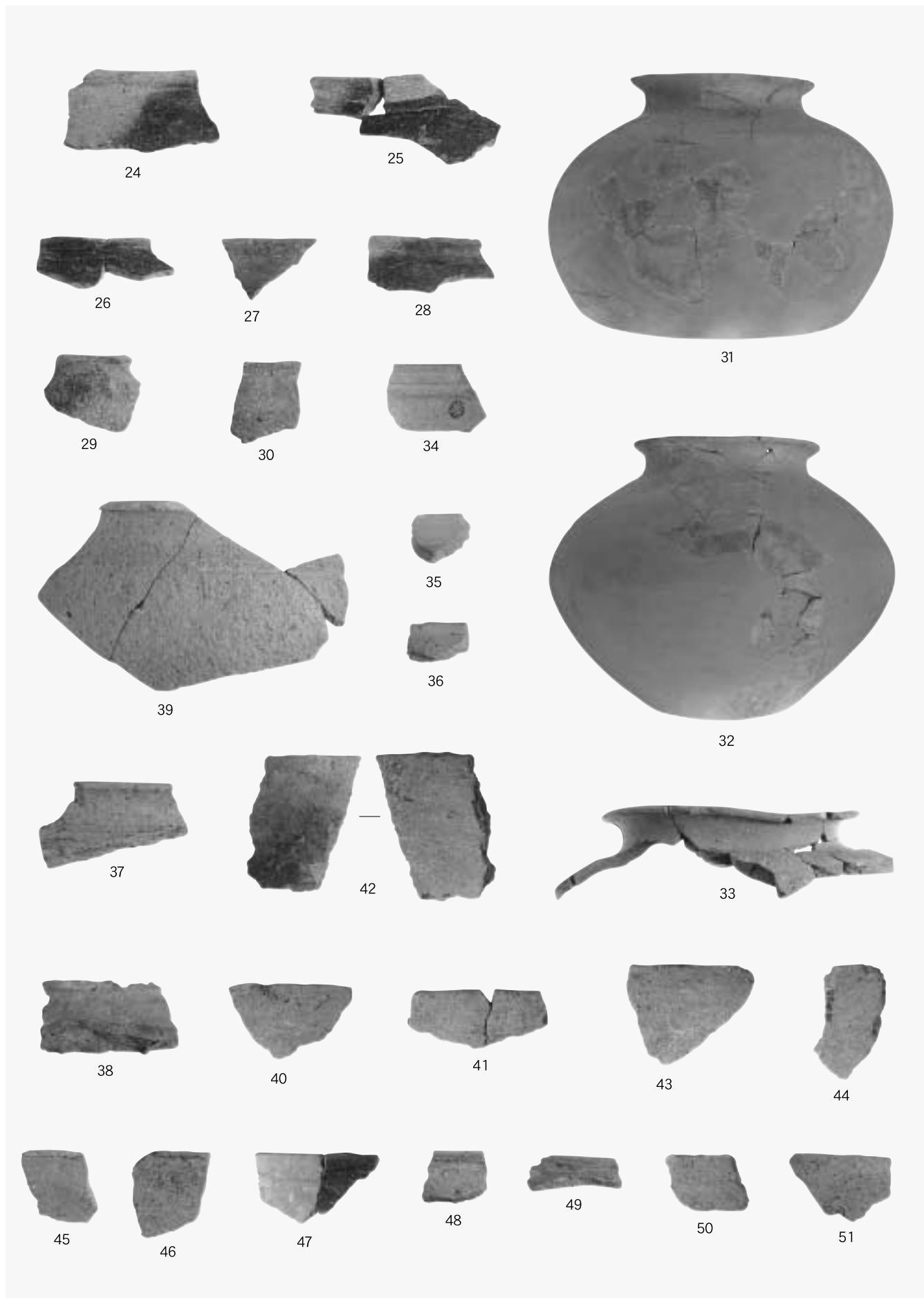
図版26 陶質土器



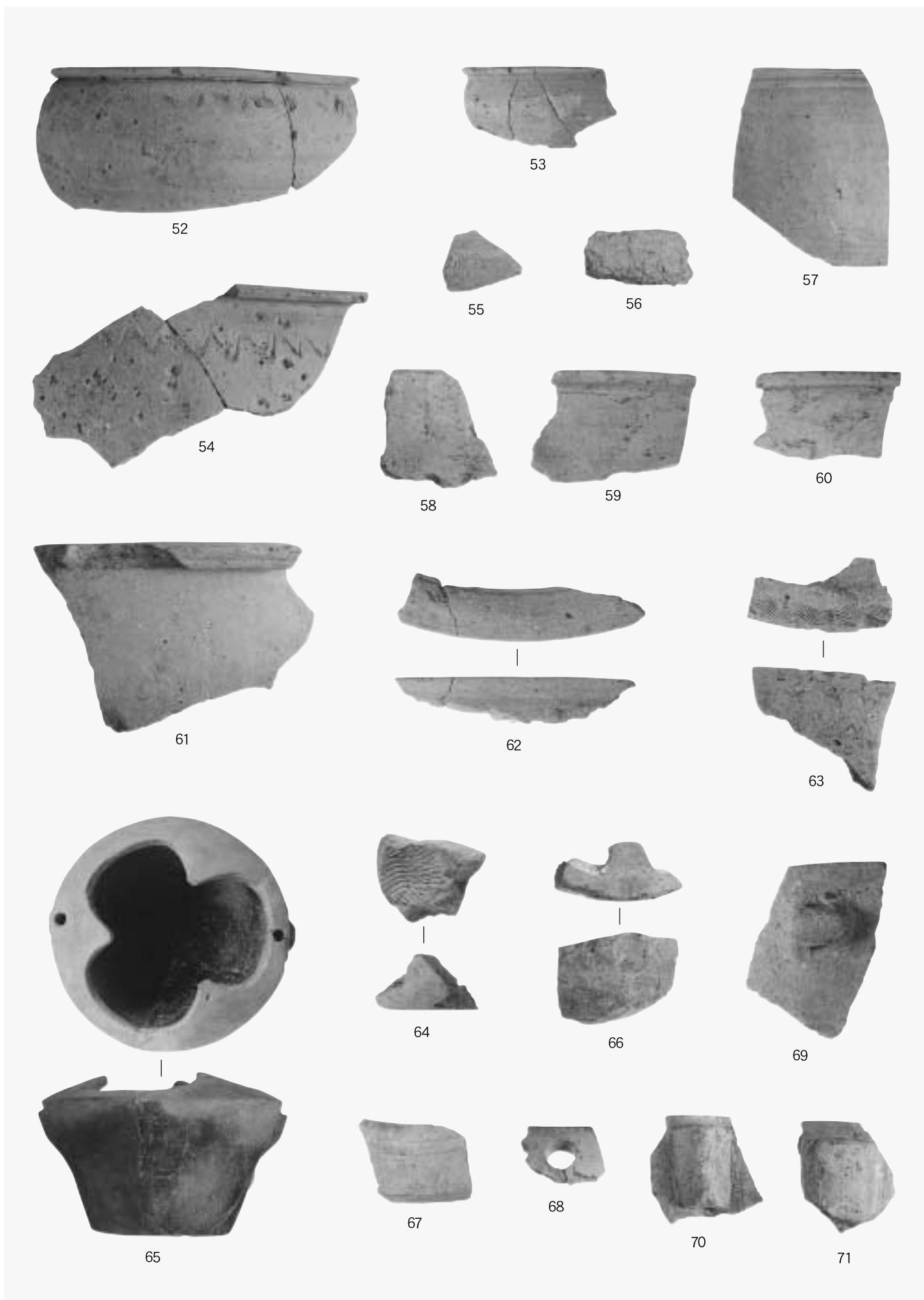
図版27 瓦質土器



図版28 土器(1)



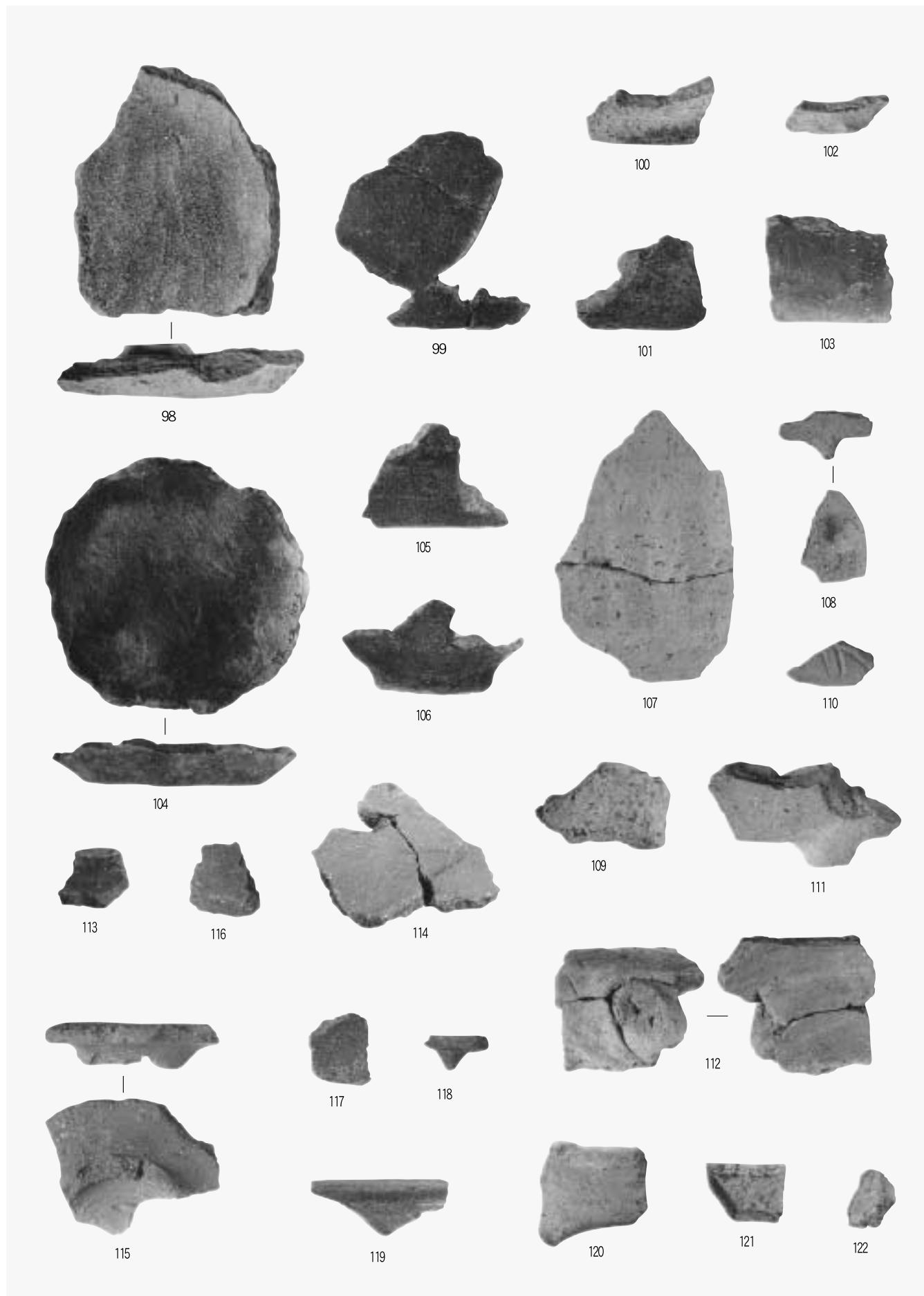
図版29 土器(2)



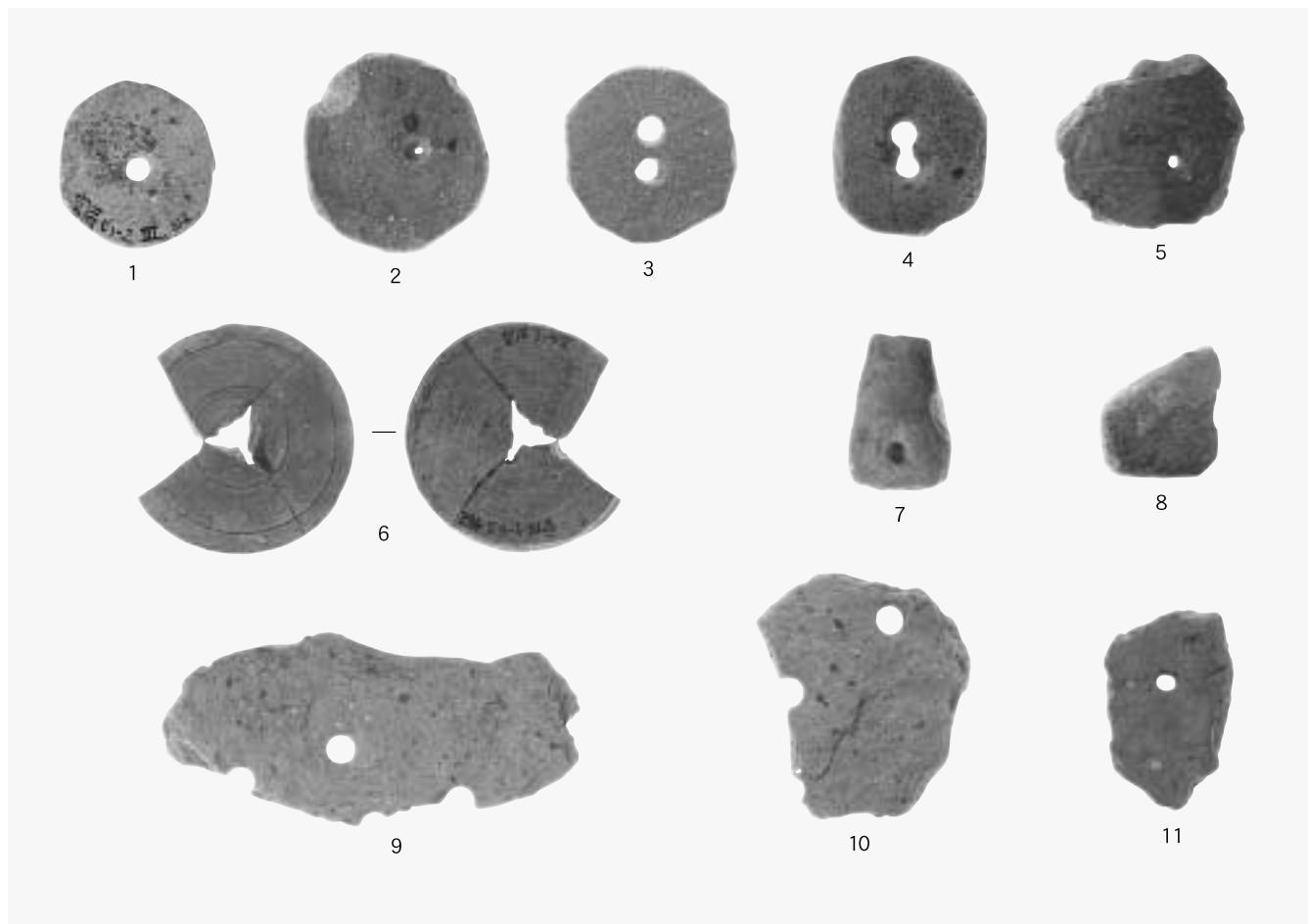
図版30 土器(3)



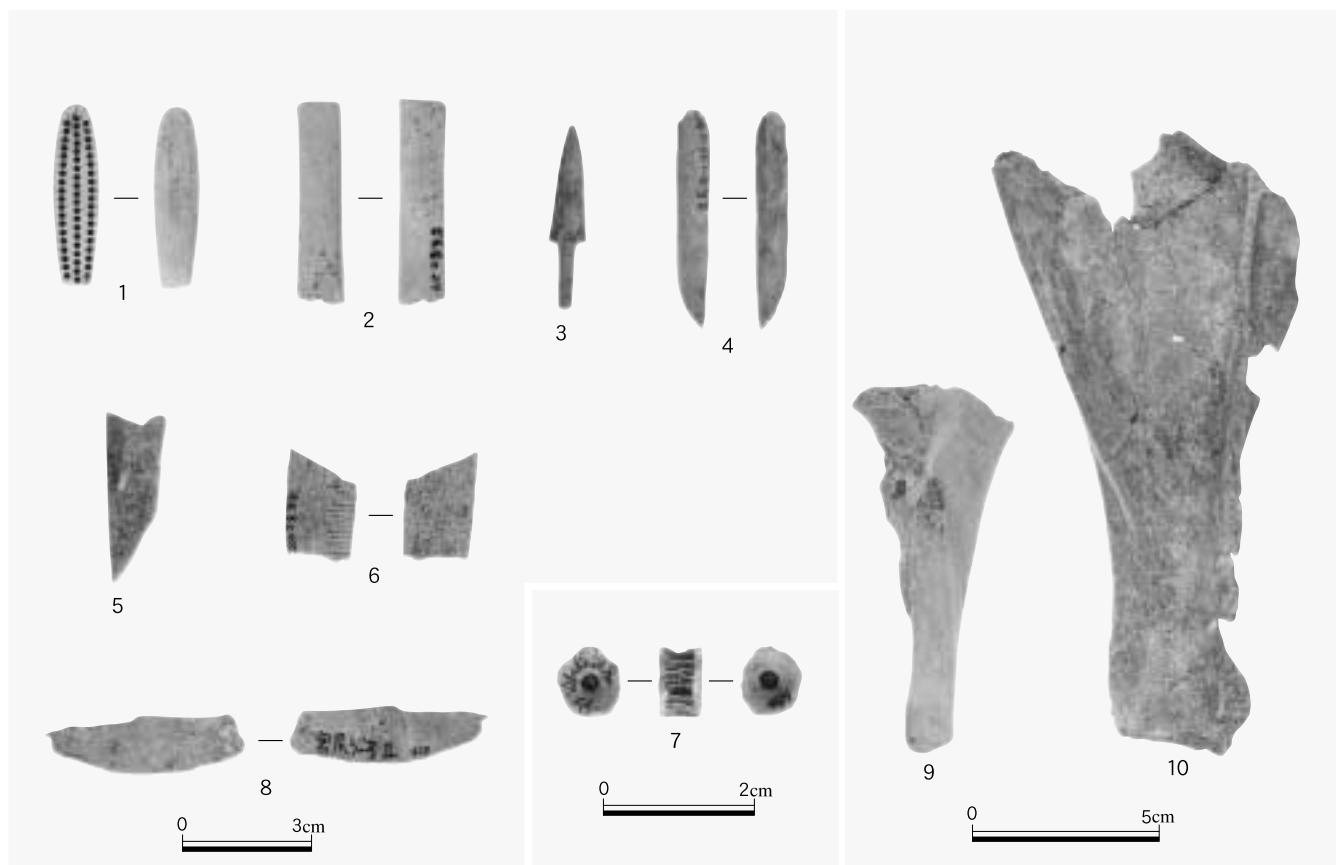
図版31 土器(4)



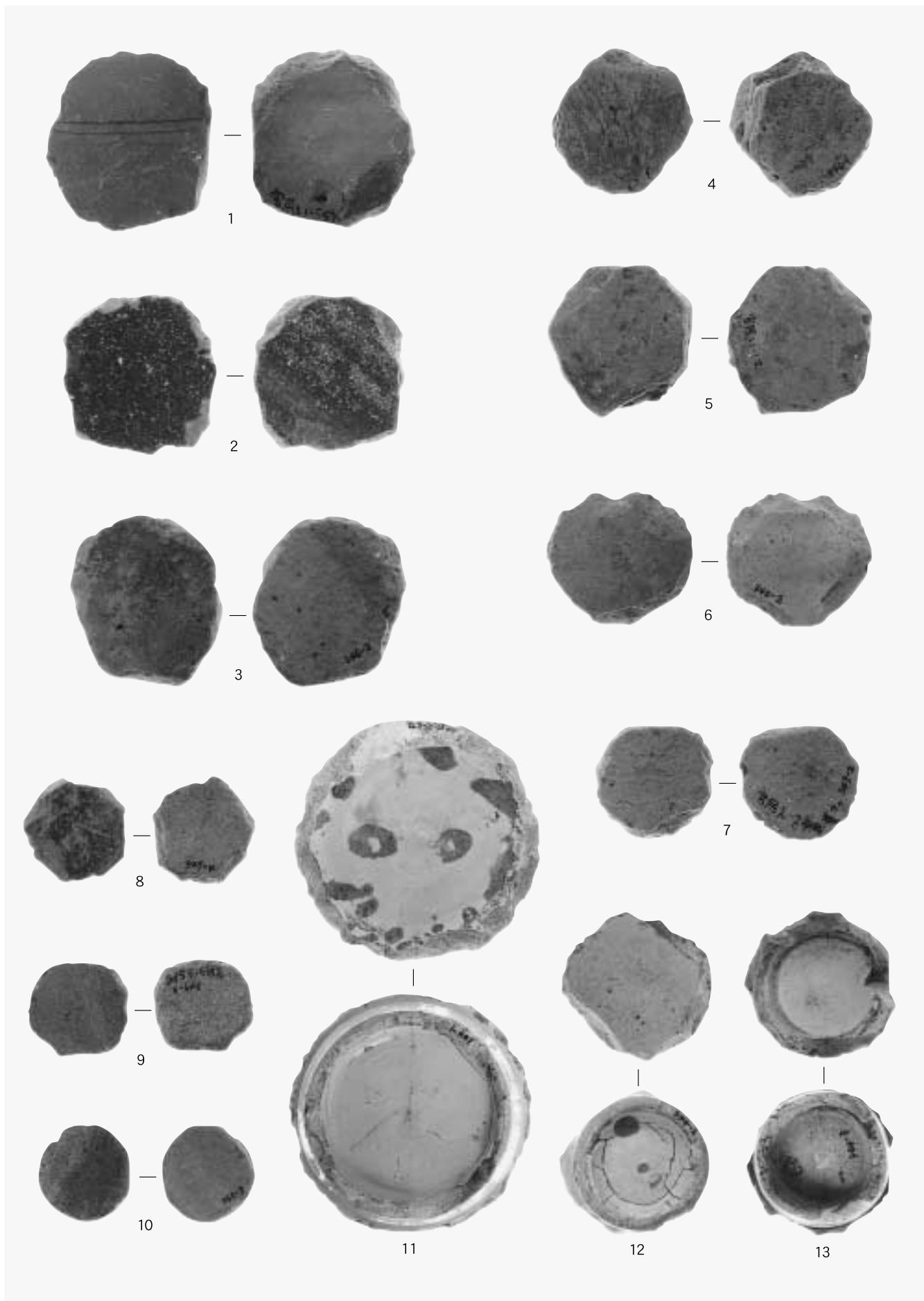
図版32 土器(5)



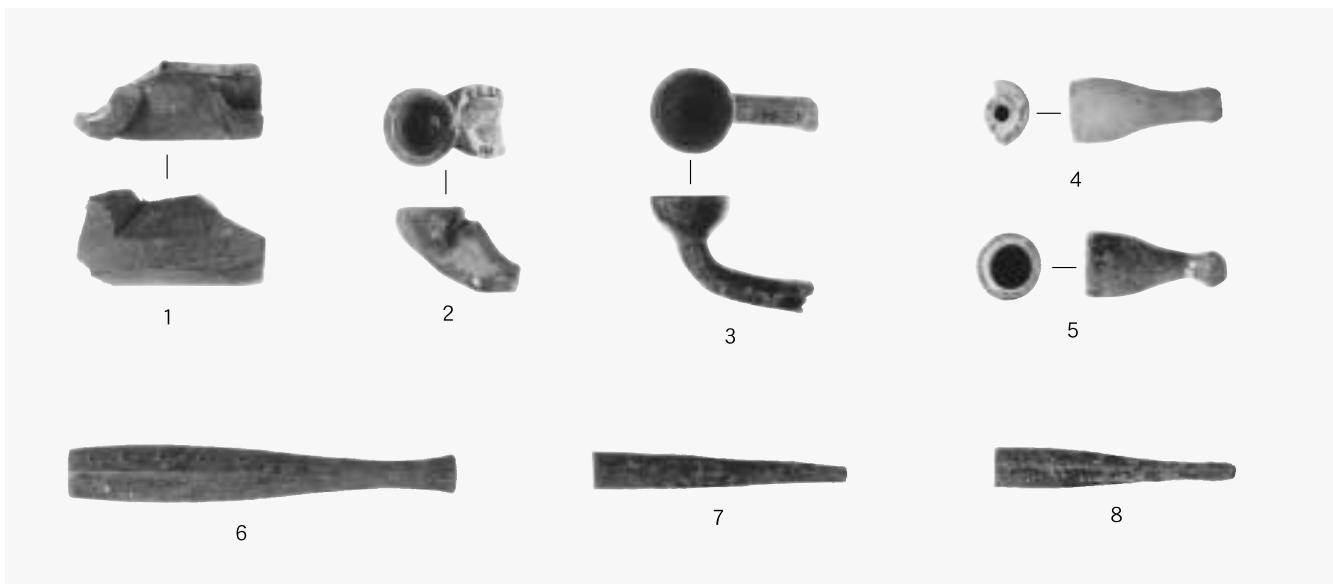
図版33 土製品



図版34 骨製品



図版35 円盤状製品



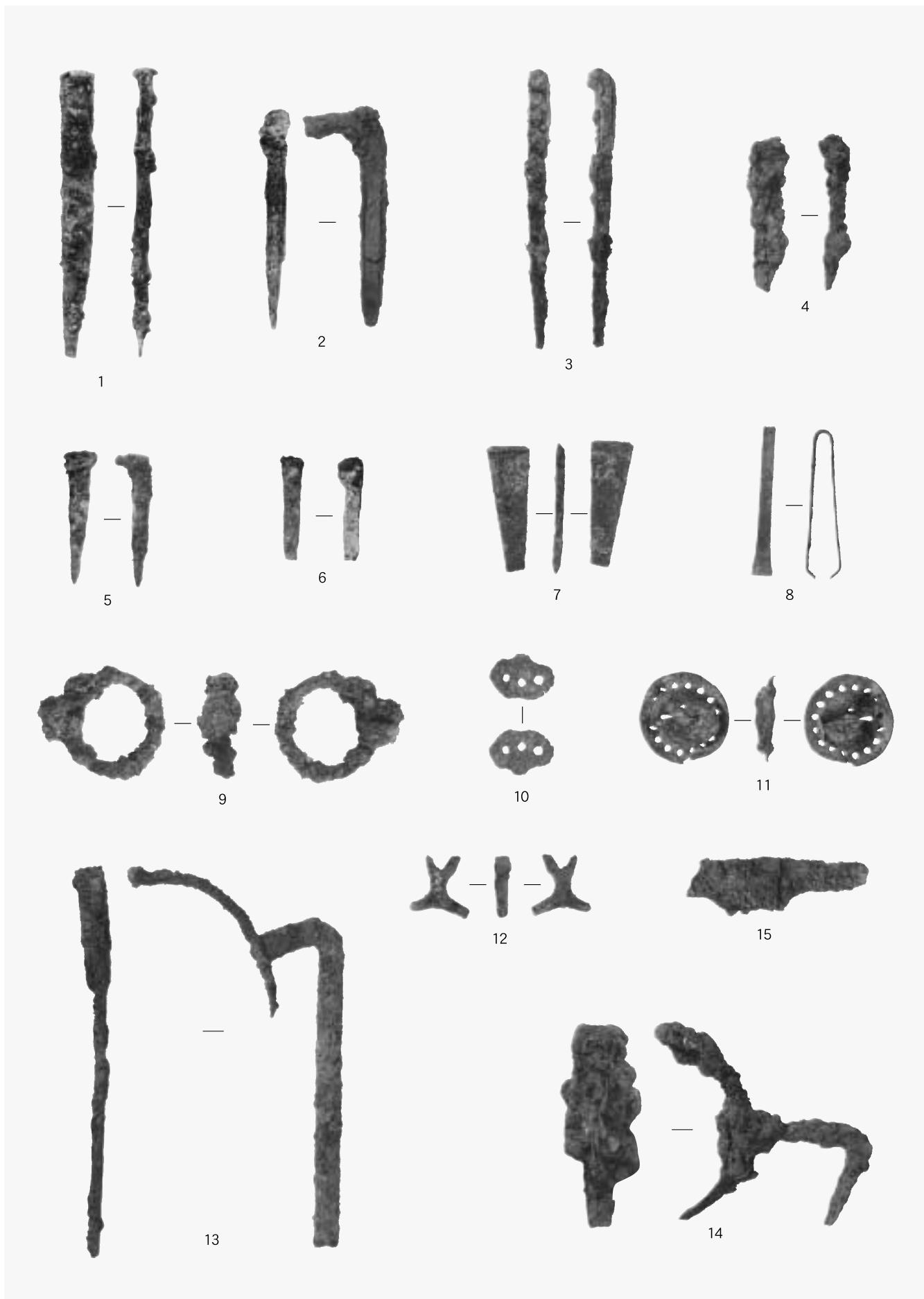
図版36 煙管



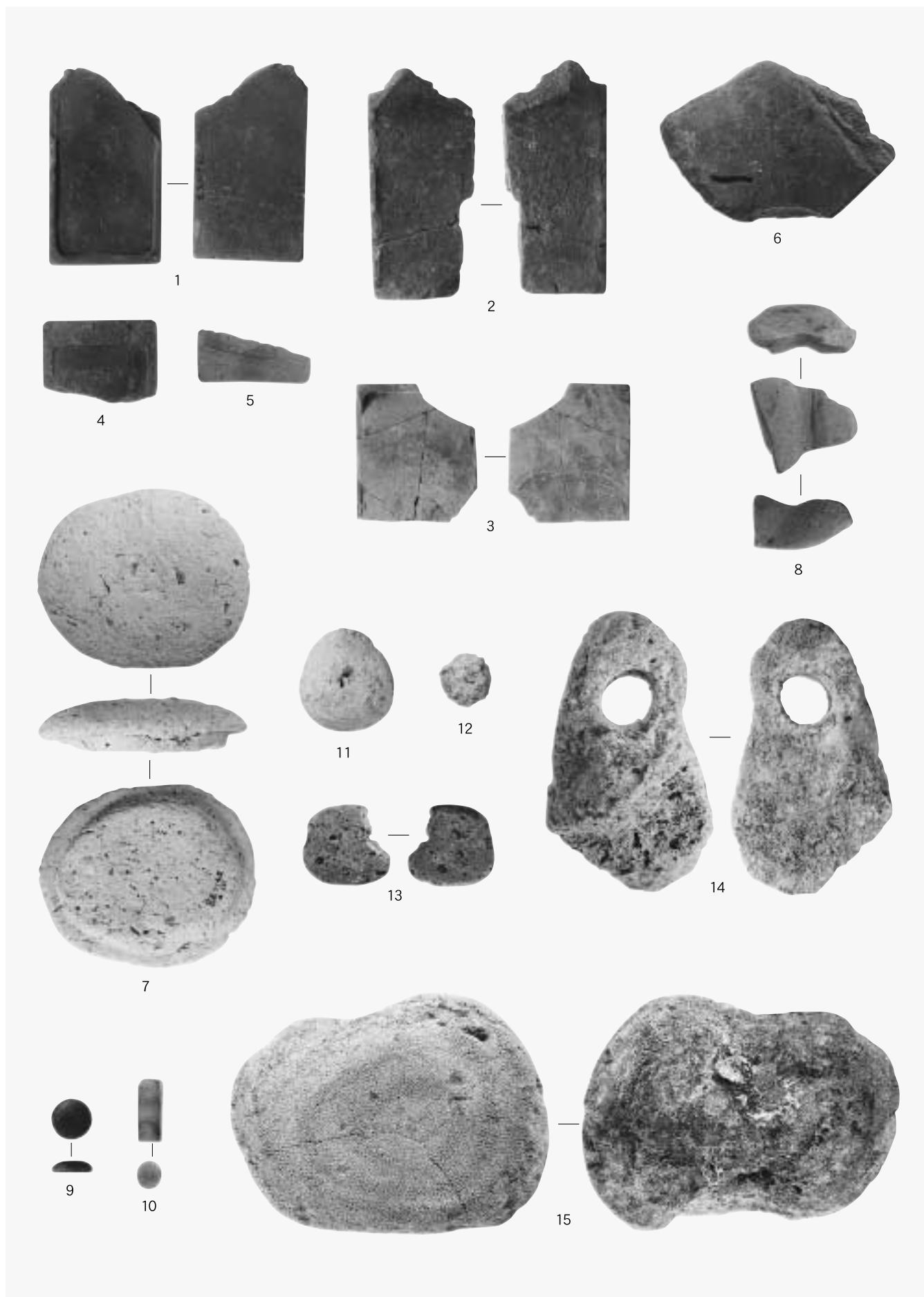
図版37 カムイヤキ



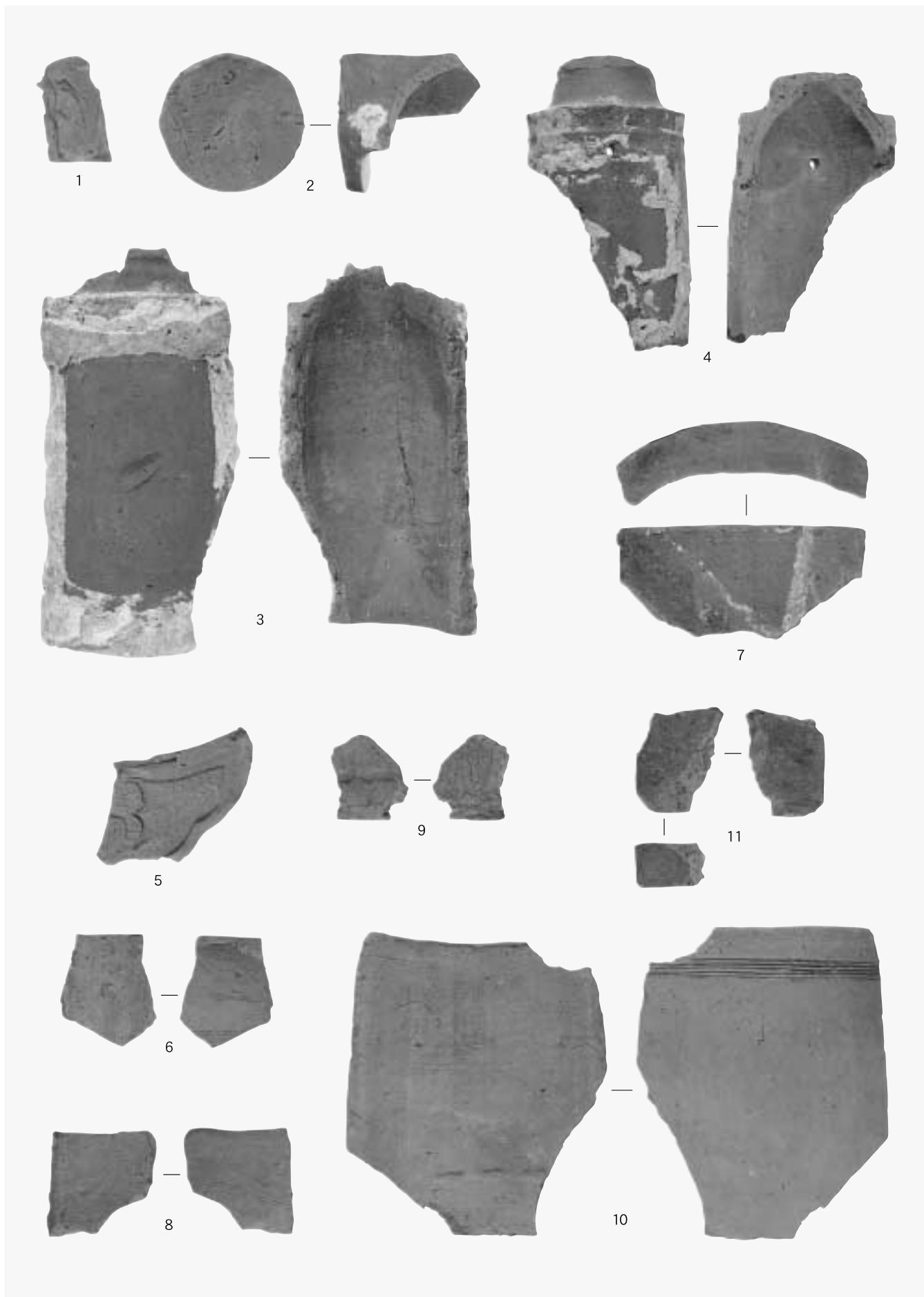
図版38 簪



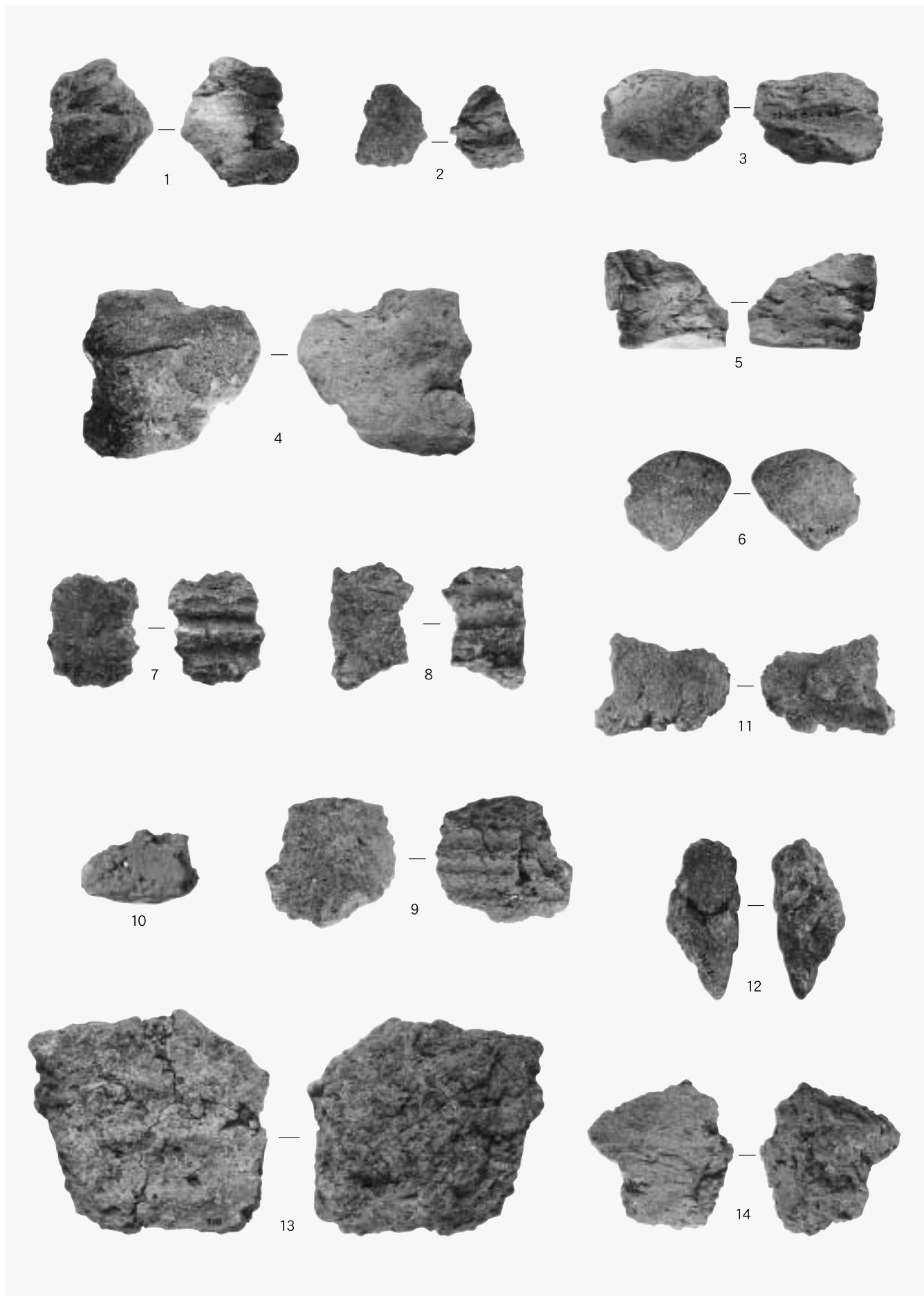
図版39 金属製品



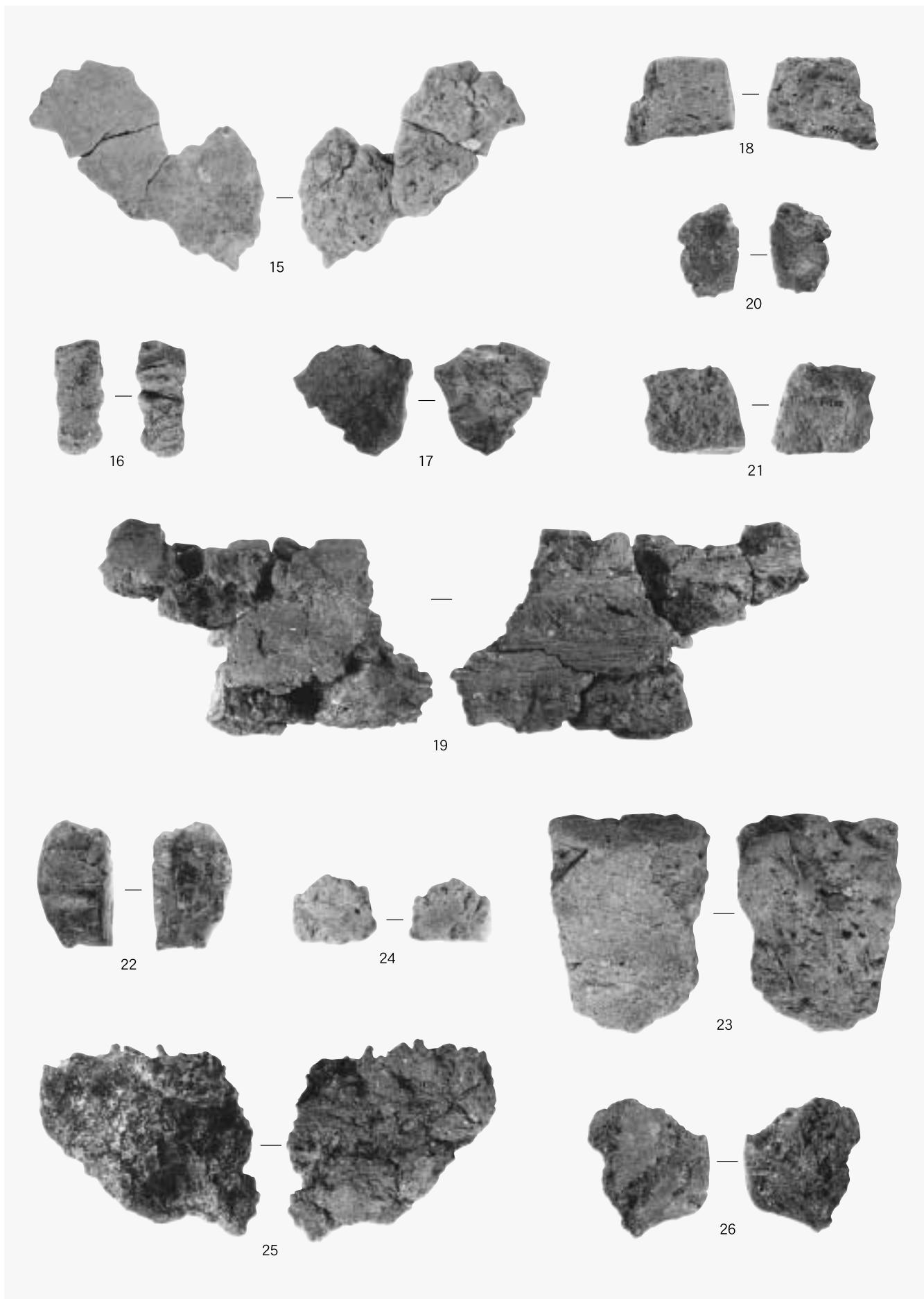
図版40 石器・石製品



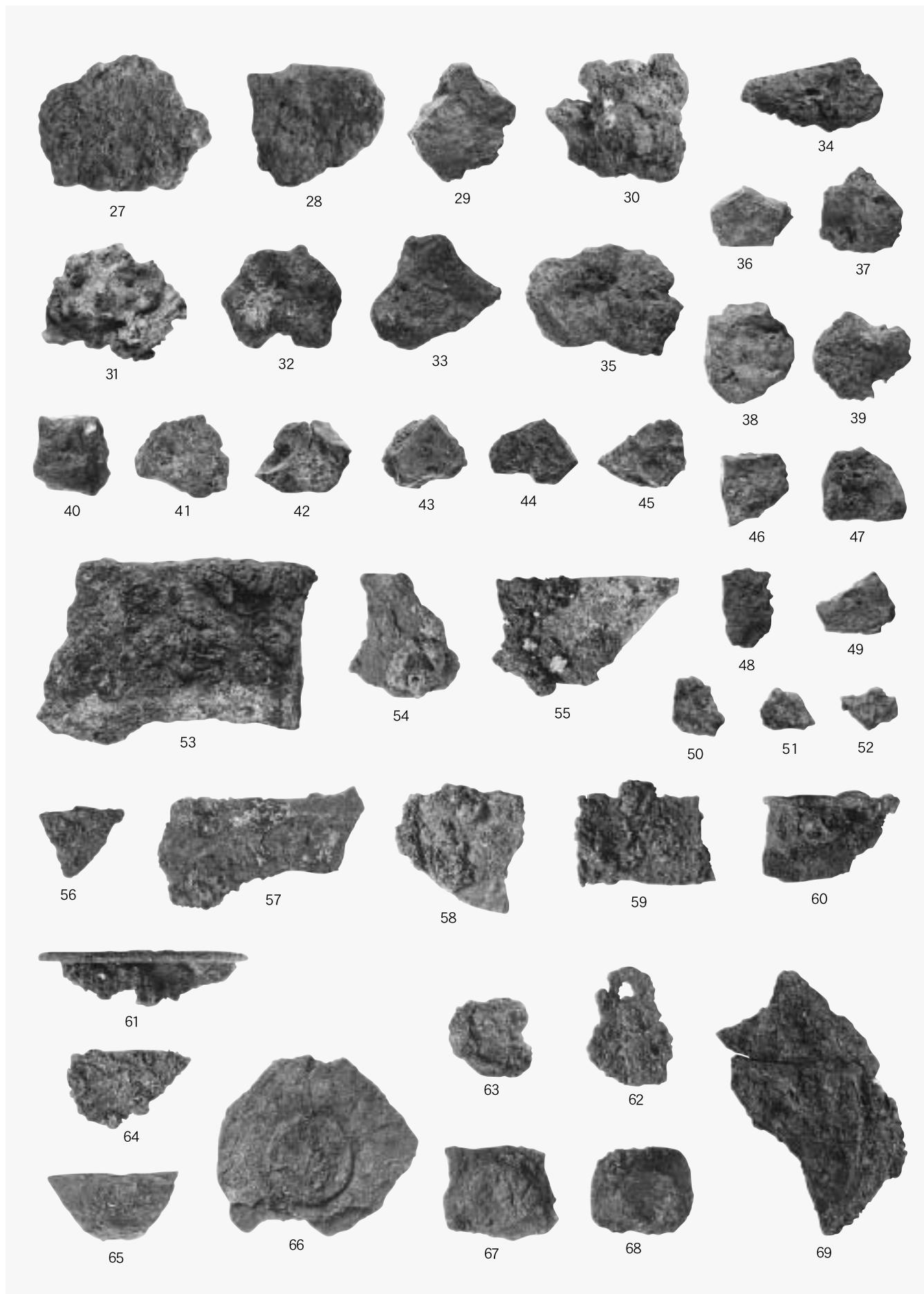
図版41 瓦・埠



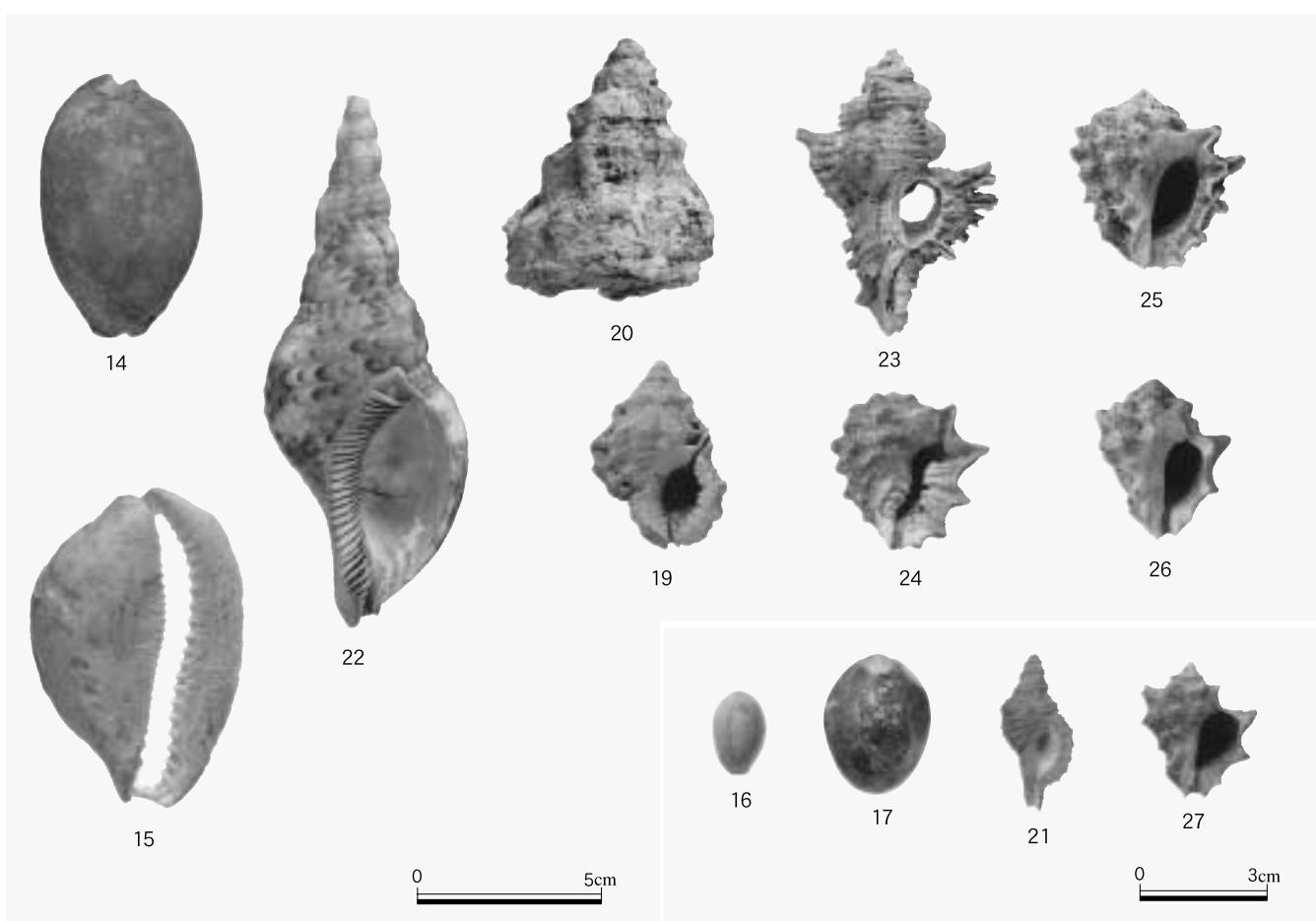
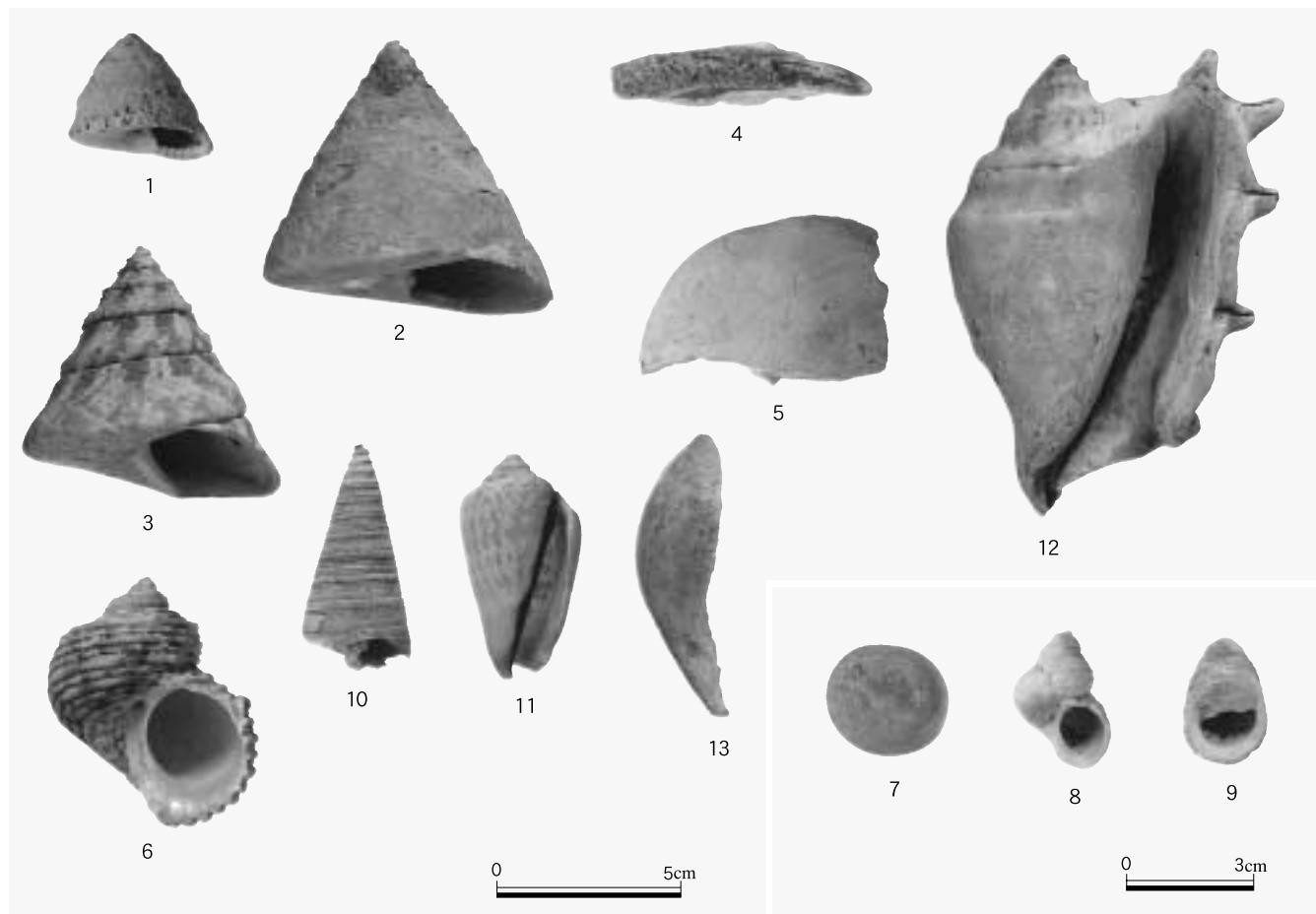
図版42 鍛冶関連遺物 1 (羽口・坩堝・焼土)



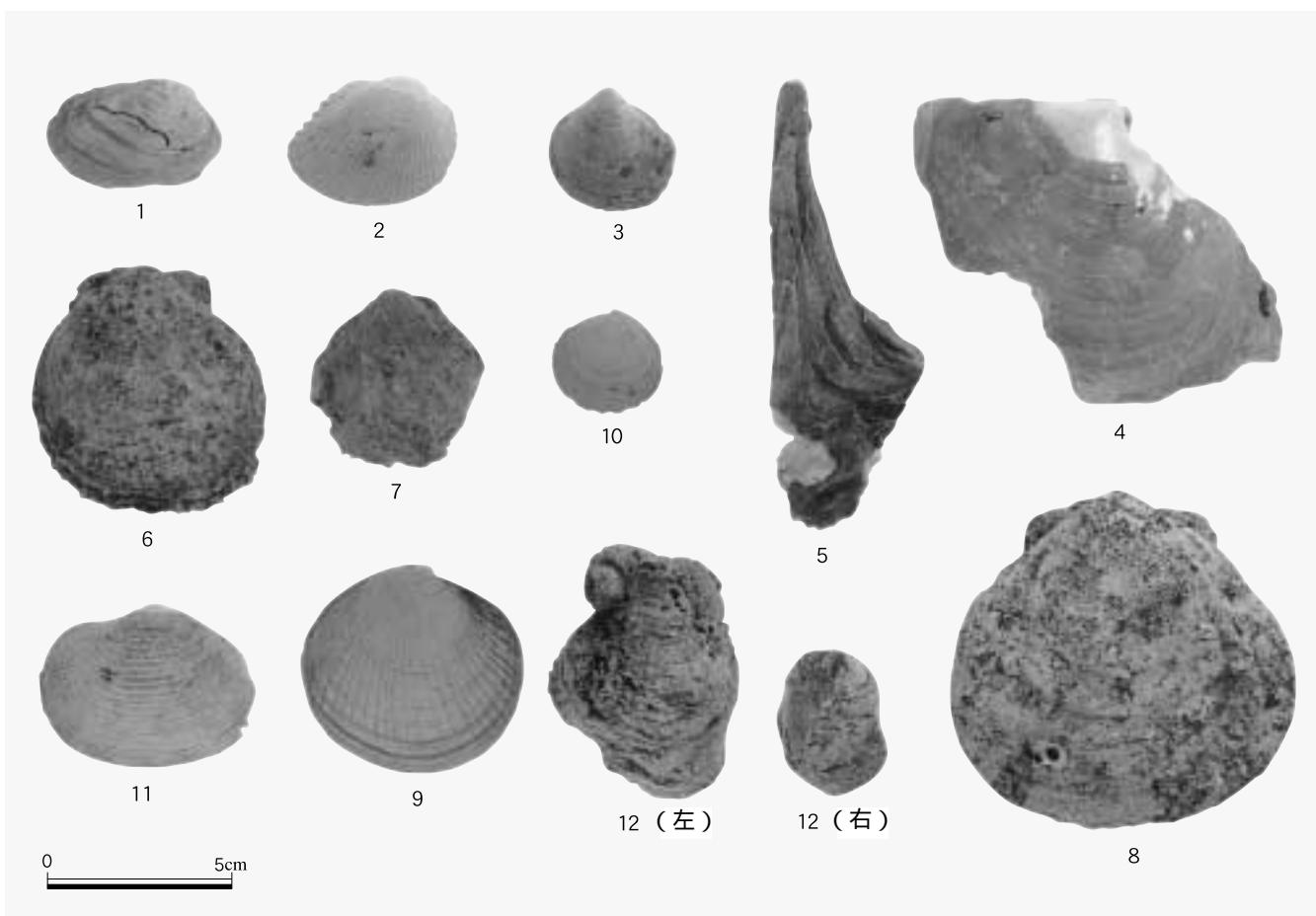
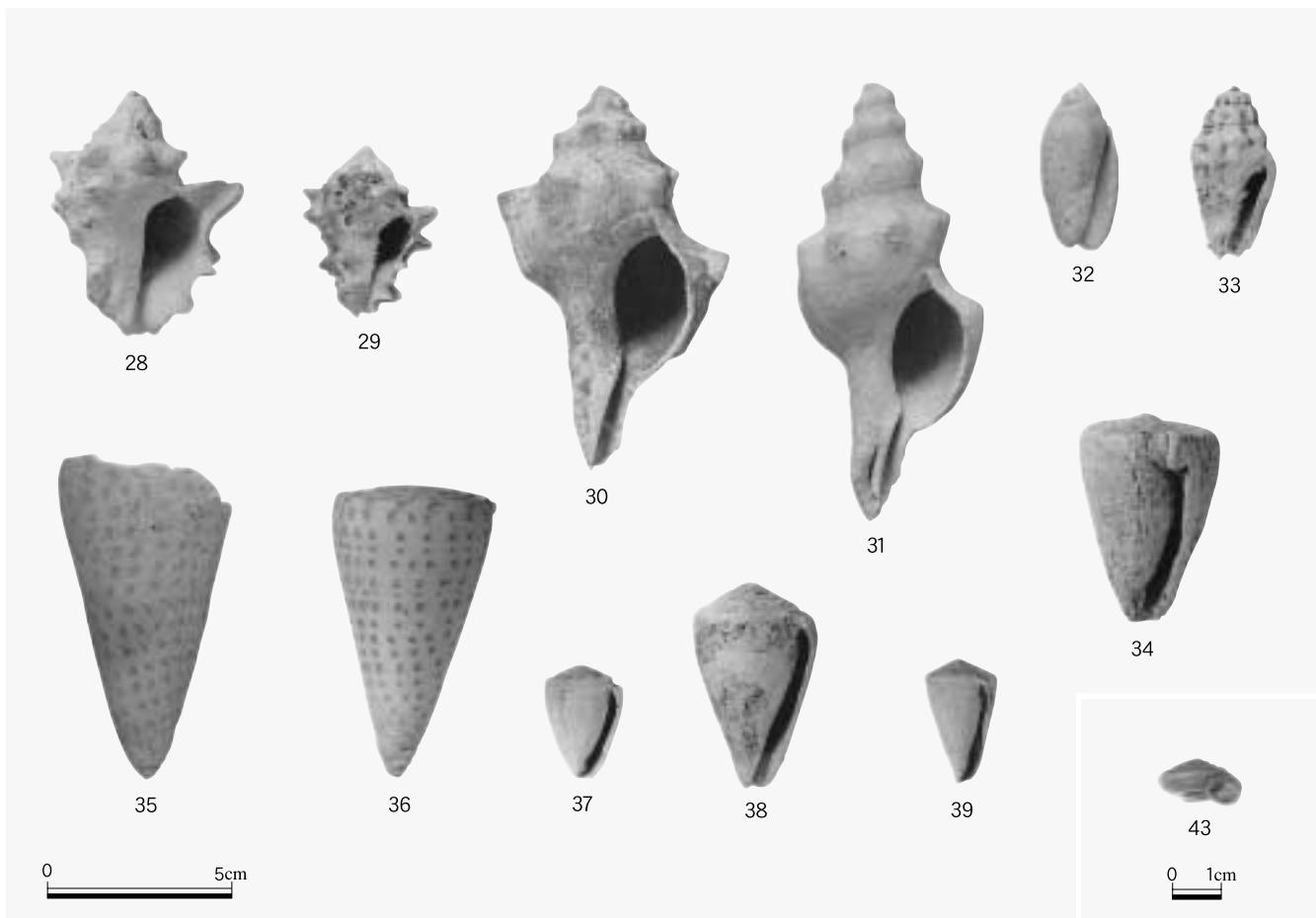
図版43 鍛冶関連遺物 2 (焼土・用途不明)



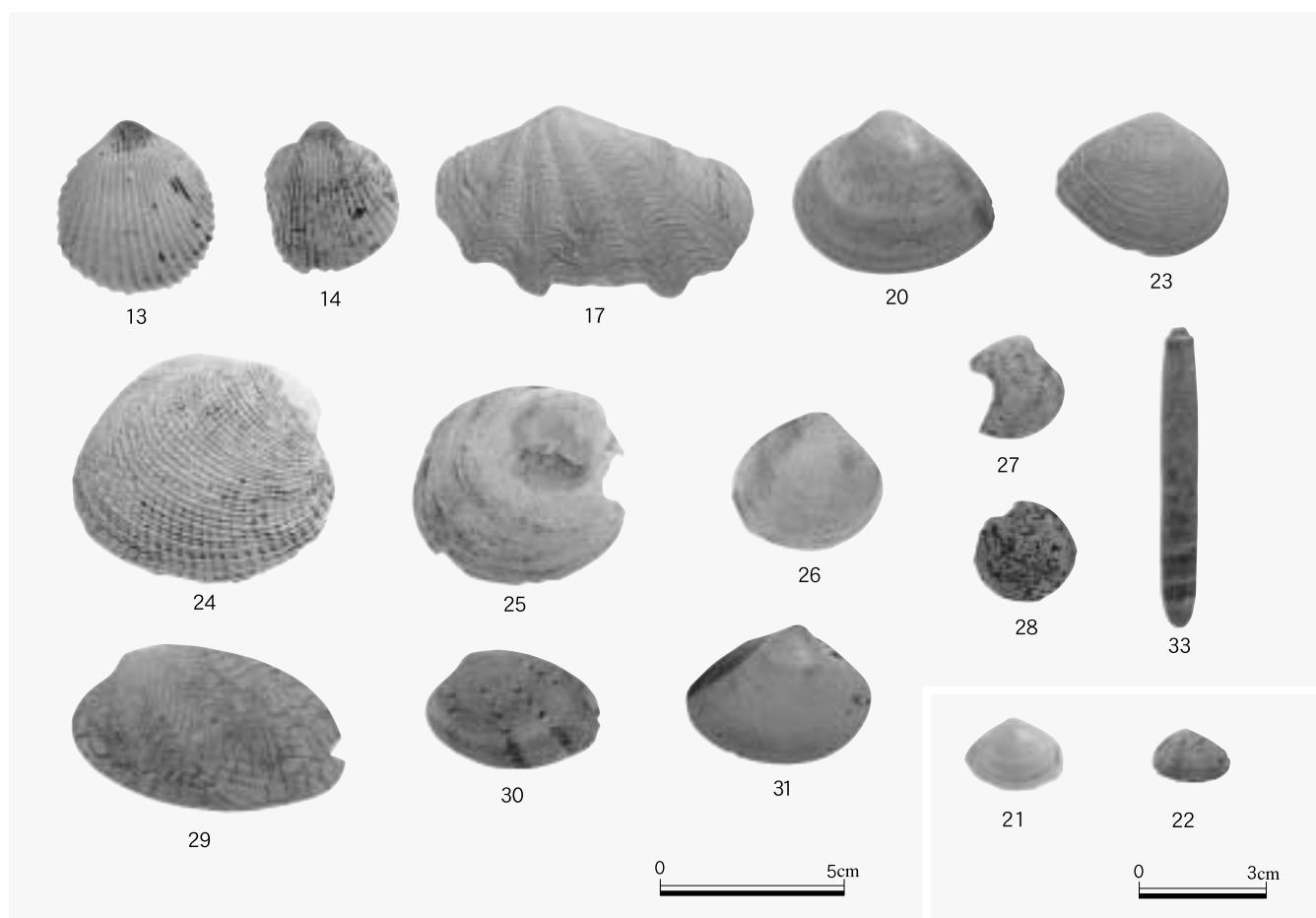
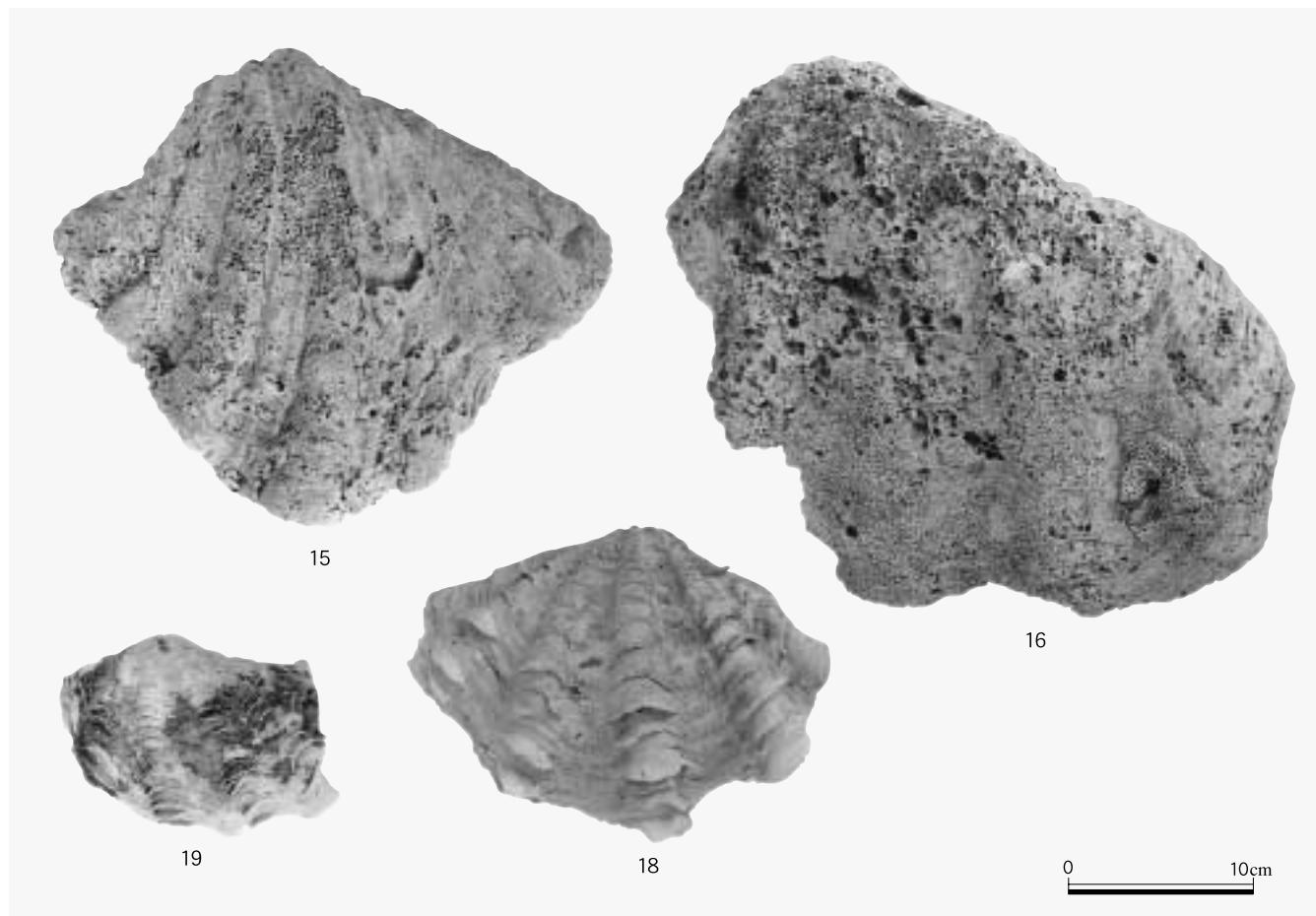
図版44 鍛冶関連遺物 3 (鉄滓・鉄鍋等)



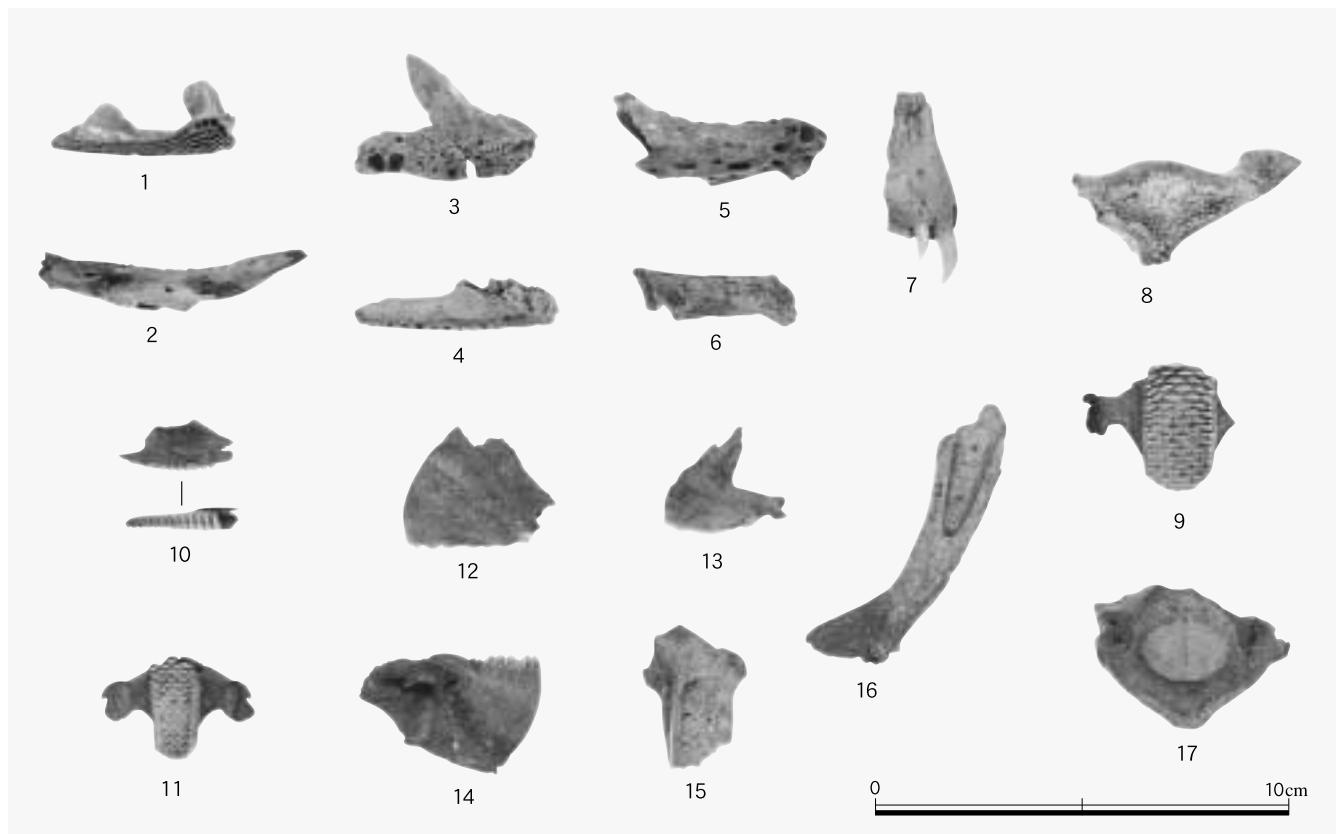
図版45 貝(1)巻貝(番号は表と一致)



図版46 貝(2)上:巻貝 下:二枚貝(番号は表と一致)



図版47 貝(3)二枚貝(番号は表と一致)



図版48 骨(1)

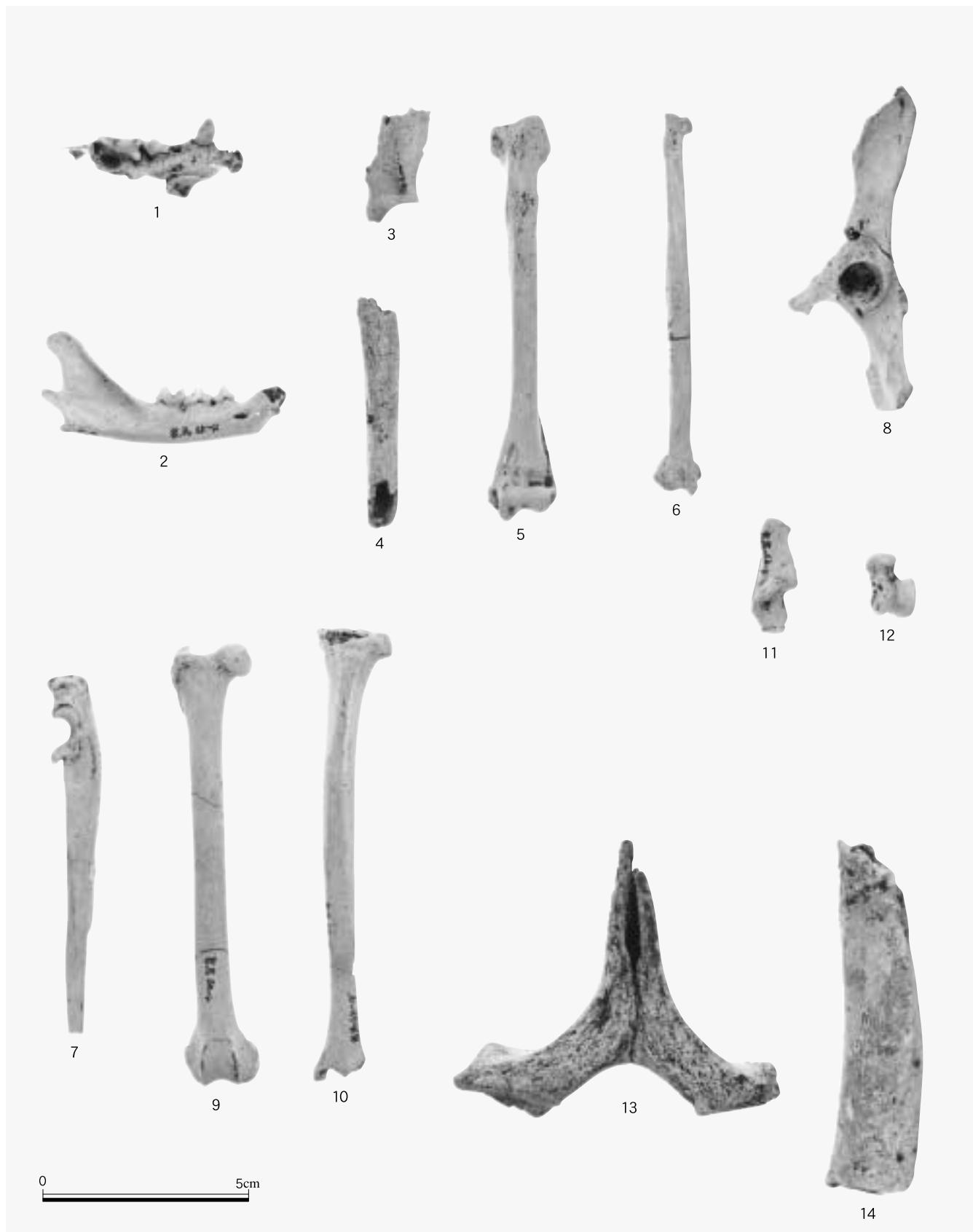
上 サカナ:ハタ科 1.左 前上顎骨 2.左 歯骨 3.ハマフエフキ A 左 前上顎骨 4.ハマフエフキ B 左 前上顎骨 ハマフエフキ 5.右 歯骨 6.右 主上顎骨 コブダイ 7.右 前上顎骨 8.下咽頭骨 9.ナガブダイ 下咽頭骨 ナンヨウブダイ 10.右 上咽頭骨 11.下咽頭骨 ブダイ科 12.左 前上顎骨 13.左 前上顎骨 14.右 歯骨 カワハギ類 15.右 舌顎骨 16.腰体 17.ハリセンボン科 上顎骨  
下 ウミガメ:1.腹甲板 2.縁骨板 ミズナギドリ類:3.左 尺骨 アホウドリ:4.左 脛骨 ニワトリ:5.左 烏口骨 6.左 肩甲骨 7.左 上腕骨 8.左 尺骨 9.右 中手骨 10.左 大腿骨 11.右 大腿骨 12.左 脛骨 13.左 中足骨



図版49 骨(2)

イヌ

- 1.右 前頭骨 2.左 上顎骨 I<sup>3</sup> 3.右 上顎骨 I<sup>3</sup> 4.左 上顎骨 犬歯 5.右 上顎骨 犬歯 6.左 上顎骨 P<sup>4</sup>M<sup>1,2</sup>
- 7.右 上顎骨 P<sup>4</sup>M<sup>1,2</sup> 8.左 下顎骨 C P<sub>4</sub>M<sub>1</sub> 右下顎骨 C P<sub>4</sub>M<sub>1,2</sub> 9.右 肩甲骨 10.右 上腕骨 11.左 桡骨 12.右 尺骨
- 13.左 寛骨 14.右 大腿骨 15.左 胫骨 16.左 跡骨 17.左 距骨



図版50 骨(3)

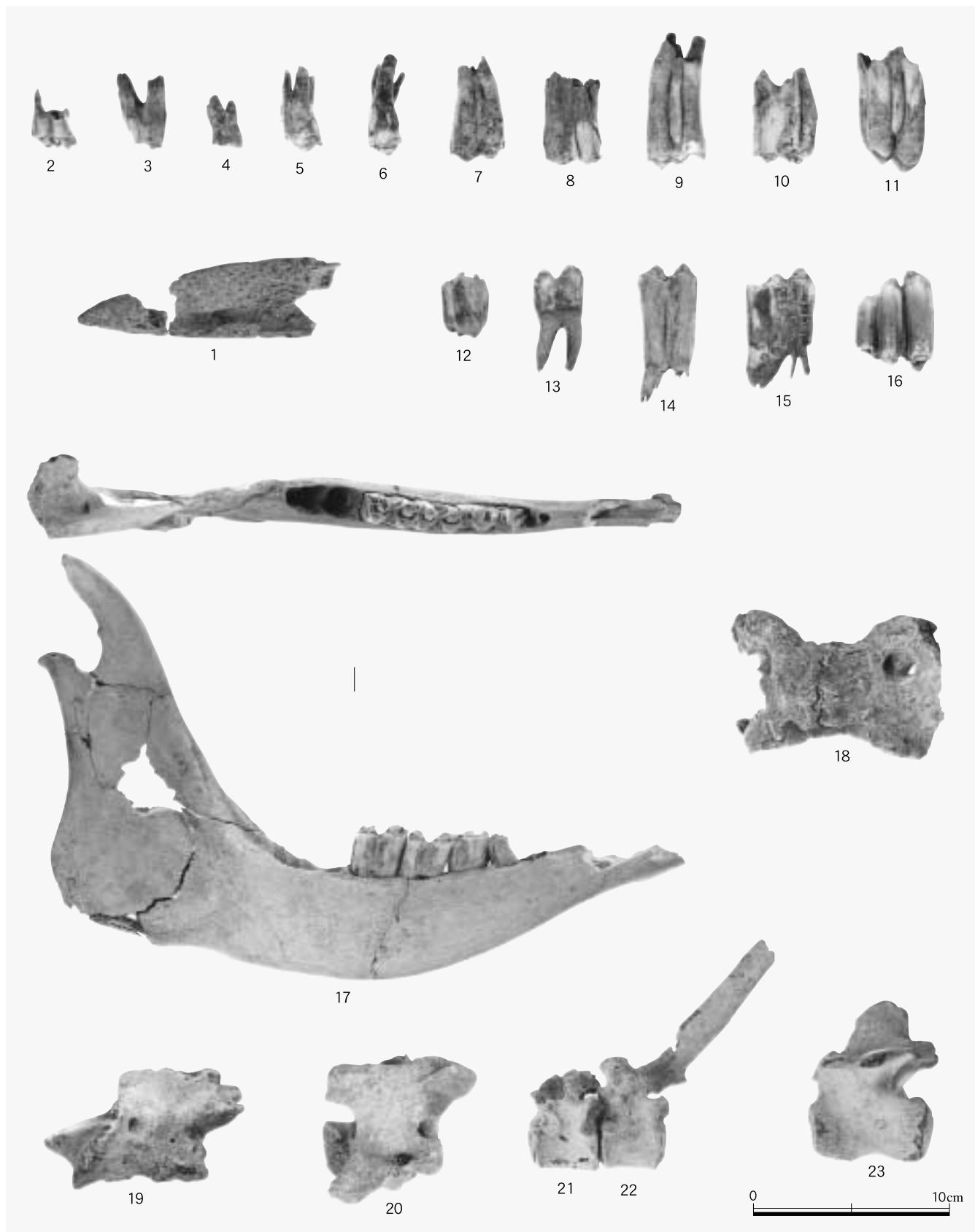
ネコ: 1.右 上顎骨  $CP^{3,4}$  2.右 下顎骨  $P_{3,4}M_1$  3.左 肩甲骨 4.左 上腕骨 5.右 上腕骨 6.右 槌骨 7.左 尺骨 8.左 寛骨  
9.右 大腿骨 10.左 脛骨 11.左 跖骨 12.右 跖骨 ジュゴン: 13.棘突起 14.部位不明



図版51 骨(4)

ウマ

- 1.左 上顎骨 P<sup>2</sup>
- 2.左 上顎骨 P<sup>4</sup>M<sup>1,2,3</sup>
- 3.左 上顎骨 M<sup>1</sup>
- 4.左 上顎骨 M<sup>2</sup>
- 5.左 上顎骨 M<sup>3</sup>
- 6.左 下顎骨 P<sub>2</sub>
- 7.右 下顎骨 P<sub>2</sub>
- 8.左 下顎骨 P<sub>3</sub>
- 9.右 下顎骨 M<sub>3</sub>
- 10.右 肩甲骨
- 11.左 上腕骨
- 12.右 桡骨
- 13.左 桡骨
- 14.左 尺骨
- 15.右 中手骨
- 16.左 中手骨
- 17.右 寬骨
- 18.左 腰骨
- 19.左 距骨
- 20.中足骨
- 21.基節骨
- 22.中節骨



図版52 骨(5)

ウシ

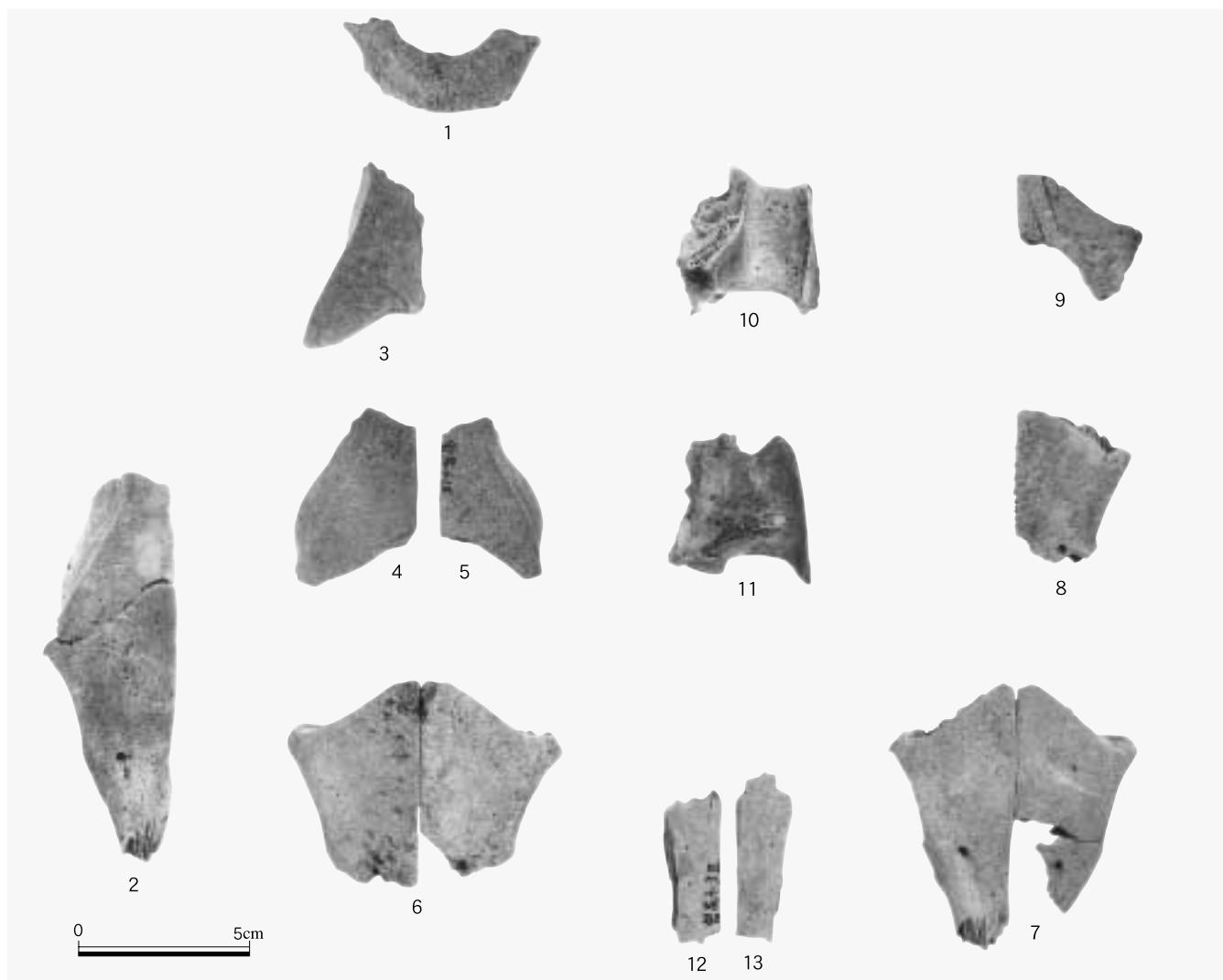
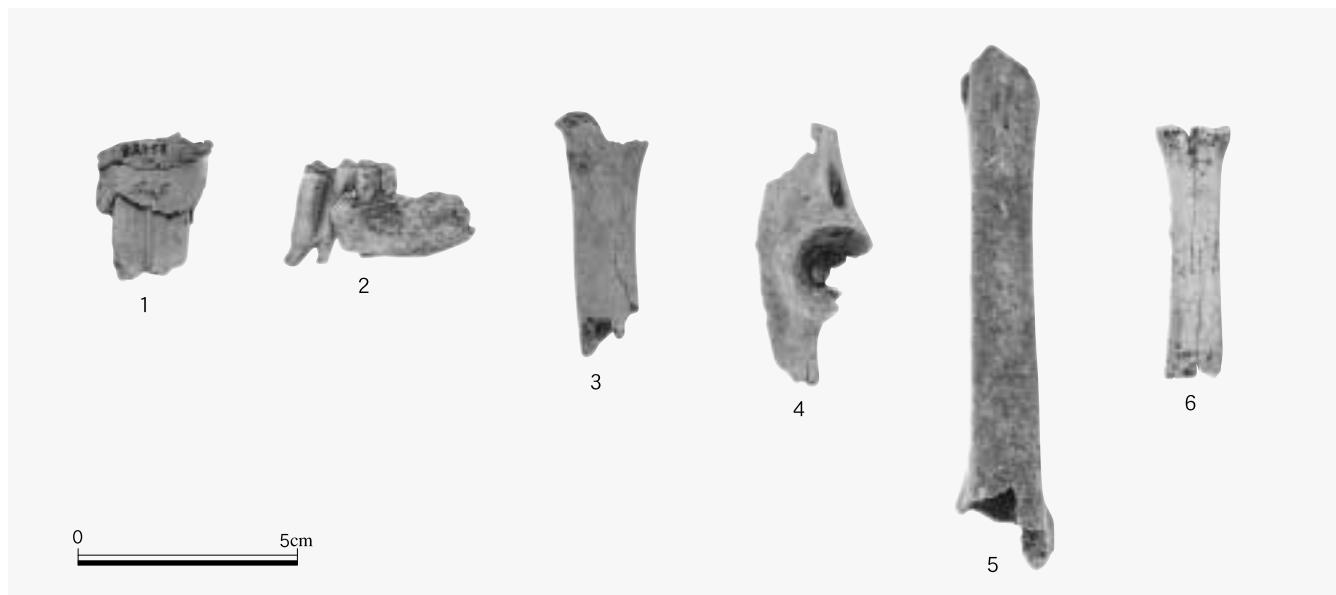
- 1.右 角突起 2.右 上顎骨 dm<sup>3</sup> 3.右 上顎骨 dm<sup>4</sup> 4.右 上顎骨 P<sup>2</sup> 5.右 上顎骨 P<sup>3</sup> 6.右 上顎骨 P<sup>4</sup> 7.左 上顎骨 M<sup>1</sup>
- 8.右 上顎骨 M<sup>2</sup> 9.右 上顎骨 M<sup>2</sup> 10.左 上顎骨 M<sup>3</sup> 11.左 上顎骨 M<sup>3</sup> 12.右 下顎骨 P<sub>4</sub> 13.右 下顎骨 M<sub>1</sub>
- 14.右 下顎骨 M<sub>2</sub> 15.右 下顎骨 M<sub>3</sub> 16.右 下顎骨 M<sub>3</sub> 17.右 下顎骨 P<sub>3,4</sub>M<sub>1,2</sub> 18.環椎 19.軸椎 20.頸椎 21.胸椎 22.胸椎 23.腰椎



図版53 骨(6)

ウシ

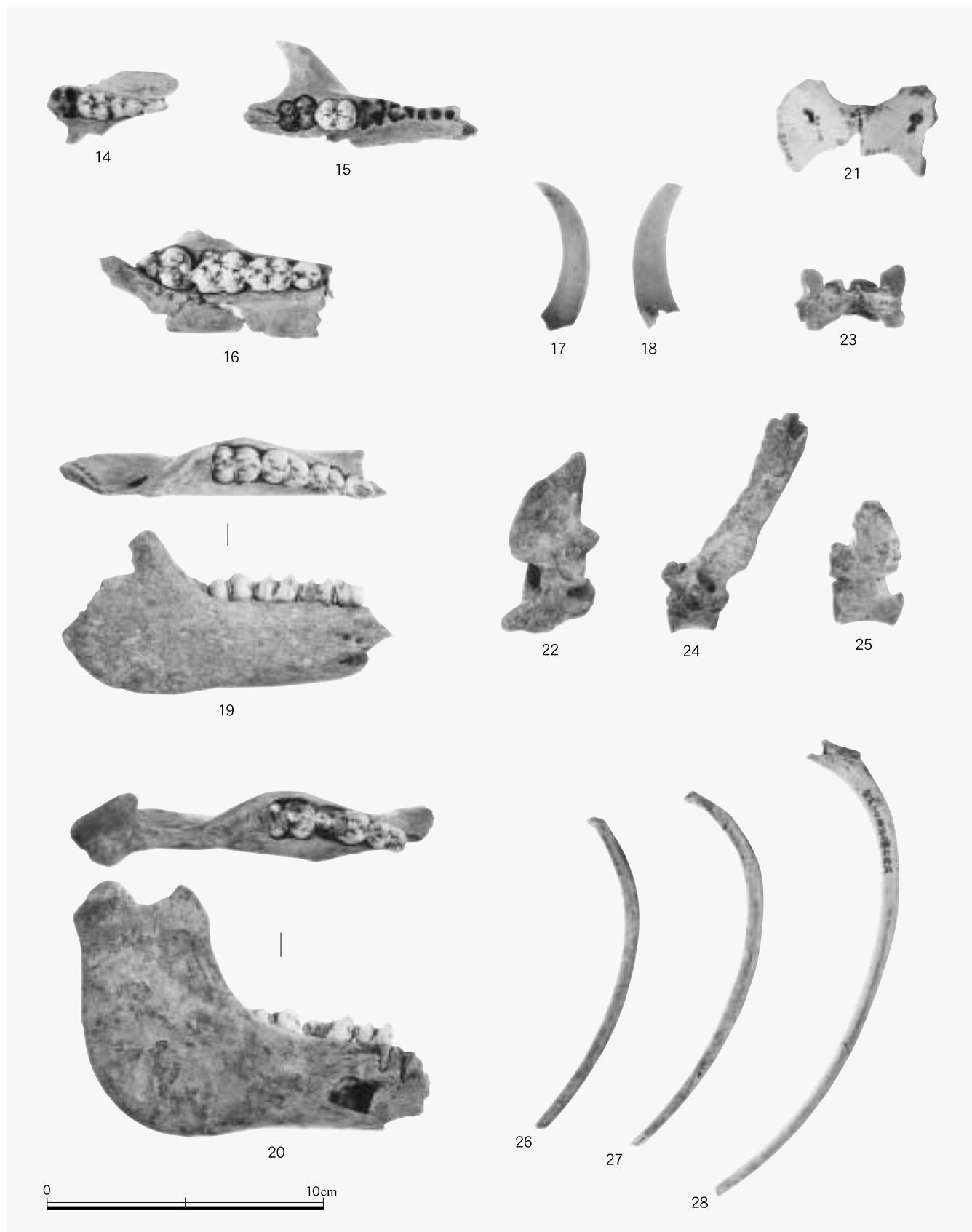
- 24.左 肩甲骨 25.右 肩甲骨 26.右 上腕骨 27.左 上腕骨 28.右 尺骨 29.右 尺骨 30.左 2+3手根骨  
 31.左 第4手根骨 32.左 中間手根骨 33.左 中手骨 34.左 中手骨 35.左 寬骨 36.右 寬骨 37.右 膝蓋骨 38.左 脛骨 39.右 脂骨  
 40.左 2+3足根骨 41.右 第4中心足根骨 42.右 中足骨 43.左 跗骨 44.左 距骨 45.左 基節骨 46.左 中節骨 47.左 末節骨



図版54 骨(7)

上 ヤギ: 1.左 上顎骨  $M^3$  2.右 下顎骨  $M_{1,2}$  3.左 橫骨 4.右 寬骨 5.右 大腿骨 6.左右不明 中足骨

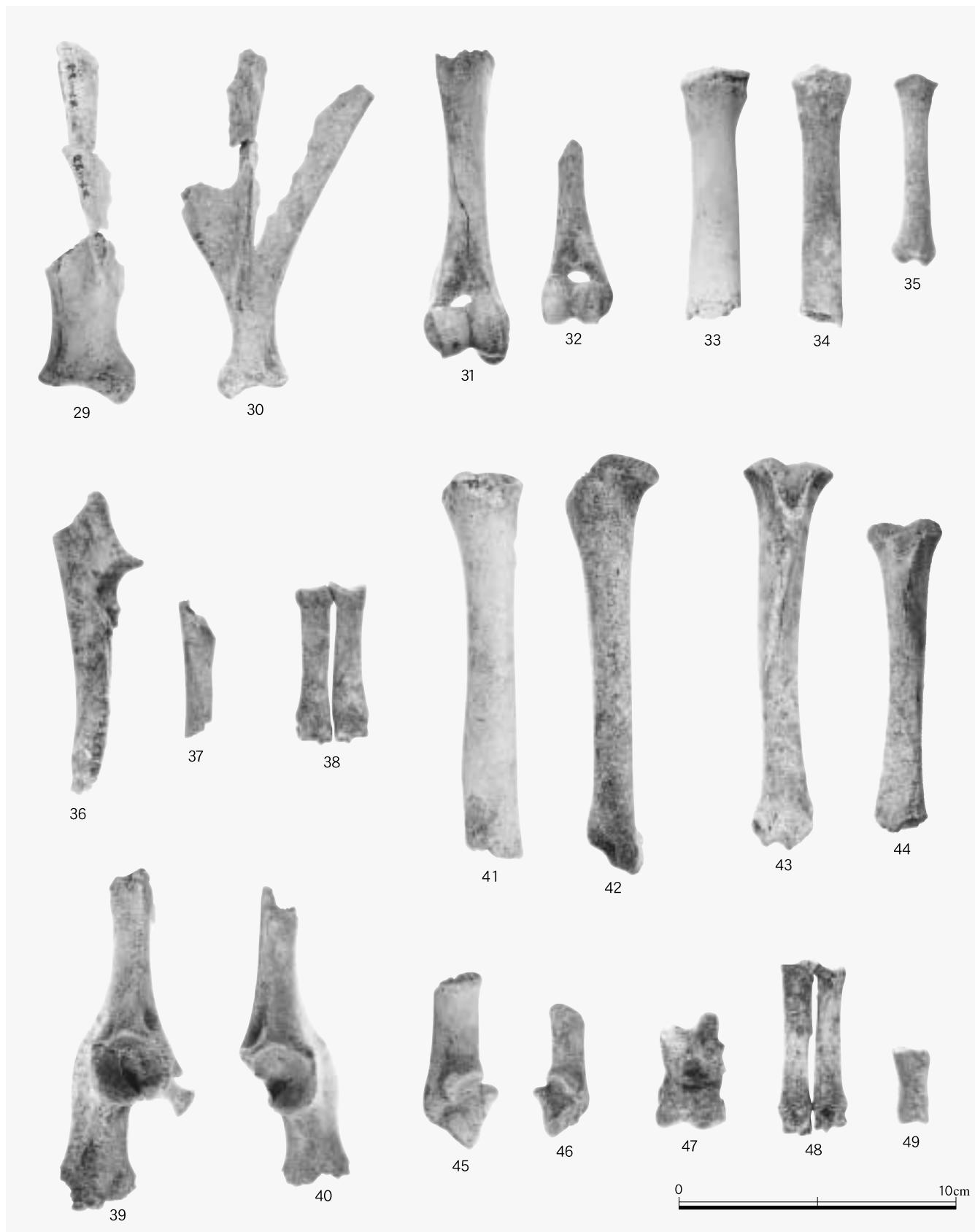
下 ブタ: 1.左右 項稜 2.右 前頭骨～頭頂骨 3.右 頭頂骨 4.右 頭頂骨 5.左 頭頂骨 6.左右 前頭骨 7.左右 前頭骨  
8.左 前頭骨 9.左 前頭骨 10.左 側頭骨頸骨突起 11.左 側頭骨頸骨突起 12.右 鼻骨 13.左 鼻骨



図版55 骨(8)

ブタ

- 14.左 上顎骨  $dm^{2,3,4}$  15.右 上顎骨  $P^{3,4} M^{1,2}$  16.右 上顎骨  $P^4 M^{1,2,3}$  17.左 下顎骨 犬歯 18.右 下顎骨 犬歯  
19.右 下顎骨  $P_4 M_{1,2,3}$  20.右 下顎骨  $M_{1,2,3}$  21.環椎 22.軸椎 23.頸椎 24.胸椎 25.腰椎 26.右 肋骨 27.右 肋骨 28.右 肋骨



図版56 骨(9)

ブタ

- 29.右 肩甲骨 30.左 肩甲骨 31.右 上腕骨 32.左 上腕骨 33.左 桡骨 34.左 桡骨 35.右 桡骨 36.右 尺骨 37.右 尺骨  
 38.右 中手骨 39.右 寛骨 40.左 寛骨 41.右 大腿骨 42.右 大腿骨 43.左 胫骨 44.右 胫骨 45.左 跗骨  
 46.右 跗骨 47.左 跗骨 48.右 中足骨 49.右 基節骨



図版57 切痕をもつ骨

ジユゴン：1.肋骨 ウマ：2.右 脛骨 ブタ：3.左 大腿骨 ウシ：4.右 橫骨 5.右 橫骨 6.左 中手骨 7.右 大腿骨  
8.左 大腿骨 9.左 脛骨 10.左 脛骨 11.右 中足骨(幼) 12.左 距骨 13.左 距骨 14.左 基節骨

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第15集

# 尻並遺跡

－那覇地方裁判所平良支部建て替えに伴う発掘調査－

発行年 2003年(平成15) 3月25日

発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL 098(835)8751～8752

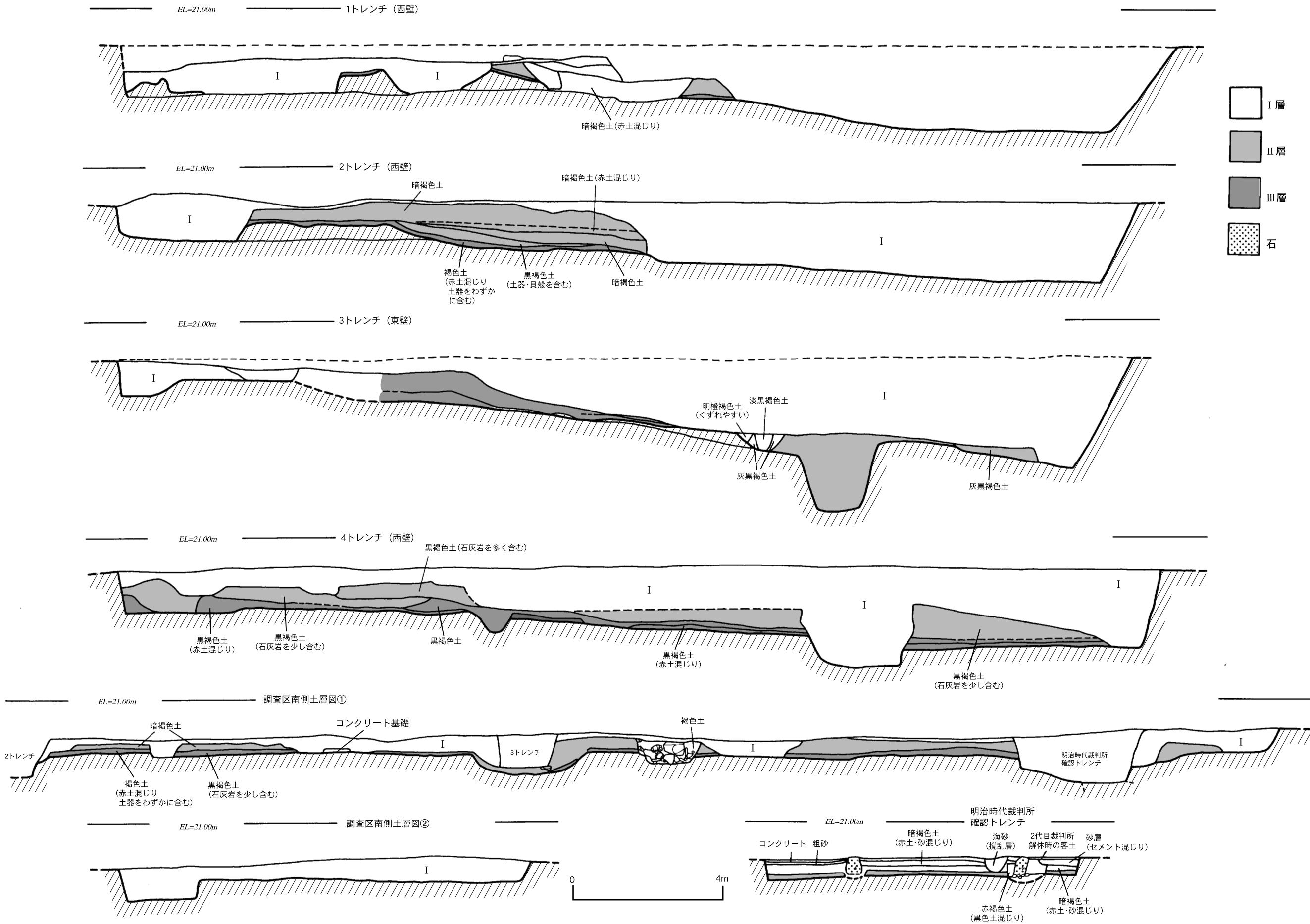
印 刷 沖縄コロニー印刷

〒901-2126 沖縄県浦添市宮城4-9-17

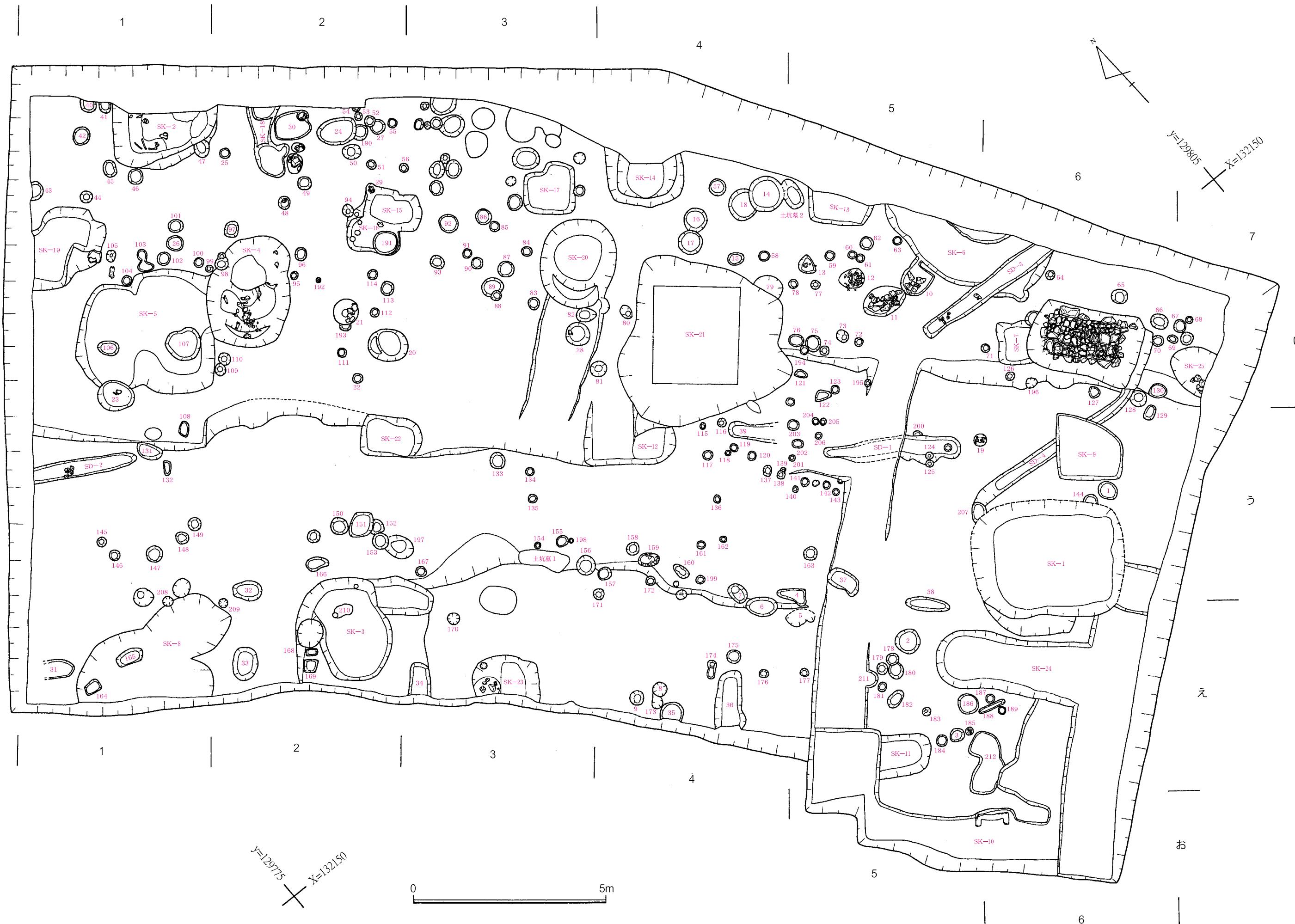
TEL 098(877)2093

© 沖縄県立埋蔵文化財センター 2003 Printed in Japan

許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。



第3図 土層図



第4図 平面図(番号は第1表と対応する)